

081.6  
23  
⑦

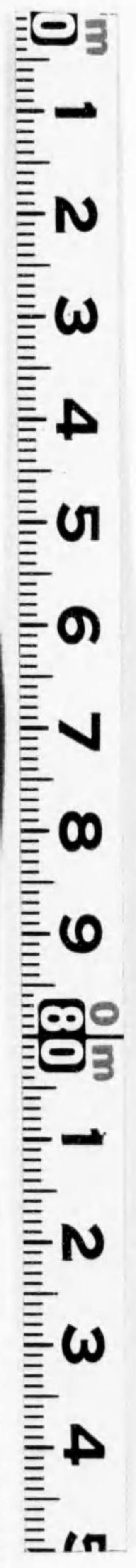
081.6-A93ㄣ



1200500724786

黎明  
麻生久著

海口書店



始







081.6

A93



黎

明

麻

生

久

著





1927  
288

はしがき

私は一つの時代の空気を描いた。一つの時代とは大正七年頃から八年にかけて日本を訪れて来たところの社会運動の黎明期の事である。そして私が此一巻に描いたのは、主として一番最初の知識階級の黎明期の事である。日本に於ける労働者階級の黎明は、大正八年の後半期に至り知識階級のそれに引續いて現れ、更に社会主義運動の復活的黎明期は労働運動の勃興に相ついで現はれた。それに就ては又筆を改めて描きたいと思つてゐる。

こゝに描かれた中には事實に根據した事が多く、現はれて来る人物も實在の人が多いのであるが、それかと云つて必しも事實ばかりでもなく假想の人物も無いではない。私は主として、其時代の空気と勢とを描き出す事を目的としたので、現はれて来る人物は、その空気と勢とを描き出すために點出したに過ぎない。事件に就ても同じ事である。

五ヶ年の長きに互る陰惨な世界戦争は、歐羅巴の社会生活を殆ど破滅的な混亂に陥れたのであるが、其混亂の渦巻きの中からは一つの新しい世界的現象が生れ出た。その新しい世界的現象とは、社会問題の勃興と云ふ事であつた。換言すれば社会運動の勃興と云ふ事であつた。大正六年早々に露西亞の舊社会が破滅し、續いて七年の秋には獨逸に革命が起り、其餘波は諸國に及んで、全歐羅巴を擧げて社会革命の巷と化せんとする情勢を示したのである。

此世界的大勢は、東洋の一角に國をなす日本の社会にも其波動を及ぼさずには置かなかつた。これよりさき、特殊な地位に置かれた日本は、世界戦争に依つて、陰惨なる社会的破滅を蒙る代りに、未曾有の好景氣時代を現出して資本主義の發達は急速度を以て進行した。併しながら其反面には又これが當然の結果として、勃興せる工場鑛山には多數の労働者階級を生み出し、物價の騰貴は、是等の労働者階級並に一般社会をして生活の不安を惹起せしめたのであ



る。

大正七・八年頃には既に、日本の社會にはさきに述べた世界的大勢たる社會運動の勃興の影響を受容すべき下地が、立派に出来上つてゐたのである。大正七・八年に於て日本に社會運動の黎明期を現出したのは決して偶然ではない。米騒動の勃發したのは大正七年の夏であつた。

それは恰も夢の様な時代であつた。新しい世界思潮にめざめた若者達は、其激しい潮の流に掉さして、止まるところも知らぬやうに進んで行つた。其勢は堰を決した水流が、滔々として流れ出る様なものであつた。先驅して其流れに掉された青年達は、聲高らかに叫んだ。

自由平等の理想社會！

彼等は、其言葉に酔ひ、其文字に熱狂した。

さうした時代は彼等の夢みる理想の社會が容易く明日にも實現し得るやうに信ぜられてゐた時代であつた。恰も春の曙に美しく咲き匂ふ櫻の一枚でも手折る事であるかの様に、彼等は彼等の進みつゝある行く手に、彼等の幻影を微塵に打碎く、現實のどす黒い鐵壁が横はつてゐるやう等とは夢にも思ひ設けなかつたのである。

彼等は、たゞまつしぐらに、高くもかき鳴らされる世界思潮の浮き立つやうな行進曲に誘はれて、進行して行つたのである。

そこには、反省もなければ、思慮もない。只だ進行する事のみがあつた。

社會問題に關するあらゆる思想が、また、きをする暇もない程、翻譯された。青年達は取残されるのを惧れるかの様に又渴せる者が水を求めるかのやうに新しきを追うて駆けつゝけた。デモクラシー——社會主義——無政府主義——曰ク何——曰ク何——そしてそれはたゞ新しくさへあれば、然りたゞ新しくさへあれば無條件に讚美せられたのである。

私はこの一巻で、三つの黎明期——一般知識階級の社會運動に對する黎明期、勞働運動の黎明期、社會主義運動の復活的黎明期——の中の一番最初の黎明時代を描いた。そしてその中で大正七年の夏に終る第一篇は、纏て開けて來やうとする黎明期の伏線時代とでも云ふべきであらう。

ほんとに黎明期らしい時代はそれ以後に始まると私は考へる。

今はもう、その頃から六・七年の歳月が流れ去つた。此六・七年の間に日本の社會運動は目まぐるしい變轉を遂げて行つた。僅かに六・七年であるけれ共、其内容は實に複雑であり豊富であつた。そして今はもう總ての黎明期は過ぎ去り、運動は早くもどす黒い現實に當面して夢幻の憧憬時代は無残に破壊された。けれ共そこには残るべきものが當然に残つて黎明期の果實は巖然として其實を結んでゐる。

日本は變つた！そしてこれからも變つて行くであらう。又變つて行かなければならない。何故なら人類の生活は刻々に進化して行きつゝあるからである。

日本よ！愛する日本よ！お前は決して惧るゝ事なく勇敢にその遂ぐべき進化を遂げよ。それがお前の最もよく生きることであるではないか。





第

一

編



大正七年の四月も、最早終りに近づいた或る日の日暮方の事であつた。上野廣小路の方から勢ひよく走つて来た、とある電車が、公園前で止まると、後ろの車掌臺から、眞先きに元氣よく飛降りた二人連れの青年があつた。二人は電車から飛降りると、夕方の人ごみの中を掻き分けて、廣場の方に出て行つた。廣場に出ると二人は仲よく肩を並べて、何か熱心に話合ひ乍ら、石段下の廣場を横きつて、左側のあの廣い道を、公園の方に歩き始めた。

一人は、どちらかと云へば少し瘠せがたの方、その洋服を着た恰好の中には、何處かに日本人離れのしたコスモポリタンと云つた様な風があつた。彼は折襟のワイシヤツを着てカラーもつけてゐなかつた。(今でこそ、カラーなしで、ジャケツ等を着て、平氣で歩いてゐる日本人も澤山あるが、當時の日本人は未だ、洋服を着れば必ずあの固いカラーを首に巻きつけねばならぬものと思ひ込んでゐたのであつた) よく見ると、頭にのつけてゐる黒

の中折帽も、最早被り古して、シミだらけらしく、恰好も崩れ、ツバもへらくになつてゐた。帽子と同じ色の脊廣の洋服も、随分垢にまみれて、すれて光つてゐる様であつた。それでも、彼のワキの下に抱へられてゐる草のカバンだけは立派なもので、而も馬鹿氣で大きなものであつた。その中には、何か滅茶苦茶に詰込まれてゐると見えて、その胸ははり切れる様にふくらがつてゐた。その重い馬鹿氣で大きなカバンを左に抱へてゐるせい、彼の腰から上の胸は右に傾き、従つて物理的に平均をとる必要がある爲めであらう、首から上は又左に傾いてゐた。まあ、てつとり早く云へば、彼の恰好は、平假名の『く』の字の、一番上の棒を一本切取つた様な形だ。全くの處、彼の風采には一種説明しがたい處があつた。輕快で、無頓着な様な中にも何處か垢ぬけのしたところがあつて、さきにも云つた様に、所謂日本人離れのした處があつた。まあ、新しいインテリゲンチアの型とでも云ふのであらう。彼はその妙な様子を乍ら、小股で早足に歩く癖があつた。

も一人の方は、全くそれとは反對で、若し共通點を見

出すなら、その無頓着らしい、餘りなりふりにかまはない様な點でも似通つてゐるとも云はうか。彼は丈は餘り高い方ではないが、身體はがつしりと肥つて大きかつた。それに又、彼の着てゐる洋服なるものが、頗る頓珍漢で、彼の身體の恰好などには全く無頓着にダブ／＼してゐるので、何だか袋が歩いてゐる様にも思はれた。彼も黒の中折帽に同じ色の脊廣を着てゐたが、帽子のツバは最早幾度も雨にさらされたと思えて、額の上にはだらりと垂下り脊廣の襟もよれ／＼になつて、もとの恰好はくづれて仕舞つてゐた。ことに依ると、あの柳原あたりの店先に、ぶらりと釣るされてゐた代物かも知れない。まあ、彼の全體の様子は、肥つてゐるだけに、何處か、土方の親分と云つた風なところがあつた。彼はその太い身體を、少し前かゞみにして、大股に、のそ／＼と歩いて行くのが特徴であつた。

そこで二人が肩を並べて歩いて行く對照は、實に奇々妙々であつた。併し、二人は又外面の相違に拘らず、内面的には何か餘程共通點があると見えて、如何にも親し氣に見えた。

それにしてもまあ、今宵は何と云ふ甘い暖かさであらう。それもその筈だ、四月も早、將に暮れやうとしてゐるのだもの。一時、上野の山を雪と埋めた櫻の花も最早殆ど散盡くして、今はもう、極く遅咲きの幾本か、あちこちに、それも散残つた白い花瓣を、ちらほらと枝に残してゐるばかりだ。花の散つた跡から、むく／＼と伸びて来た葉櫻の若芽が、纏て来るべき五月の日を思はせる様に、その柔らかな掌を攢りかけてゐる。その葉櫻のあひま／＼には、これも何時の間に伸びたのか、楓の燃ゆる様な眞紅な若芽が早くもそのギザ／＼のついた掌を攢りかけて、青々と芽生えて来た芝草の上に、夢の様な姿を浮かしてゐる。木の間がくれに見ゆる、遙か下方の不忍の池の水も何となくぬるんで見える。

次第に濃さを増して来た黄昏は、その薄闇の中に、闌な春をふつ／＼と包んで、ありとあらゆる物を、その甘い、そ／＼り立てる様な、夢の誘惑の中にとろかし込んで行くのだ。

青白いアーク燈の光が、木の間に、すつきりと呼吸づいてゐる。今とぼつたばかりの電氣の光が、明るく夢見



る様にまた、いてゐる。春の夜の露が罩めてゐるのであらう。夕闇にまたたくその電氣の光は、菊の花の様にほけて、明るく輝いてゐる。

あ、春だ！ 春だ！ そして又、何と云ふ甘い春の夕暮であらう！

青年の群が、幾組もく、聲高に笑ひさゝめき乍ら散歩してゐる。若い女達が、何が可笑しいか、黄色いはいしやいだ笑ひ聲を立て、過ぎて行く。こ暗くなつた森の下を若い男と女の二人連れが、何か小聲で囁き乍ら夢でも見てゐる様にそつと歩いてゐる。屹度彼等の手と手は、薄闇の中で觸れ合つてゐるのだらう。遠慮は御無用！

春ぢやないか！ 元氣のい、子供の一群が、高らかに口笛を吹鳴らし、美しい聲で唱歌を唄ひ乍ら馳けつて行く。そうかと思ふと、只一人で、如何にも春をたのしむと云つた様に、ぶらり／＼と歩いてゐる者もある。丸髻に結つて、子供の手をひき乍ら、樂し氣に歩いてゐる奥さん。

あ、春だ！ 春だ！ 何と云ふ長閑さと、甘つたるさと、歡樂さとであらう！ すべてのもが、其誘惑の中

にとろけ込んでゐるのだ。

だが、電車から降りた、さつきの二人連れの青年は、まあどうした事であらう！ 彼等はその閑な春にも、散残つた櫻の花にも、萌え出た樹々の若葉にも、さては、春の夜の歡樂に酔つ拂つて、そこいらを歩き廻つてゐる人々の群にも、いつさい氣付きもしない様に、何か熱心に語り合ひ乍ら、さつさと公園の奥深く歩いて行くのだ。勿論、歩き乍らの話であり、四邊がざわついてゐるので話す事も何の事だか、よくは聞きとれない。だが時々、高い、熱のこもつた、感激に満ちた聲で叫ぶのが聞こえる。

その切れ／＼に聞こえる話の中には、次の様な言葉が、幾度となく繰返される。そして其言葉は、一ときはめだつて強く響く。

……露西亞：レーニン：革命：ボルセヴィキー：プロレタリア：共産主義：神祕的現實主義：露西亞人：露西亞の國民性：西比利亞：モスコ：ペトログラード：ソビエト：露西亞文學：ゴロリ：トルストイ：ツルゲネフ：虛無主義：ヘルチエン：クロボトキン：バクニ

ン：ゴールキー……あ、何と云ふ偉大な謎だ……人類……戦争……

二人は、春の夜には酔つ拂つてはゐなかつたが、二人の口から迸しり出る、是等の言葉には、全くの處酔つ拂はされてゐる様だつた。彼等は恐らく、今自分が何處をどんなにして歩いてゐるのかも分らなかつたらう。只、習慣的にその道を通つてゐるに過ぎないのだ。

二人は臆て、博物館の前に出ると、左に曲つて圖書館の前をもつと奥深く歩いて行つた。その邊はもう淋しく、春をたづねる者の人影も見えなかつた。二人は、そんな事には無頓着に、暗い森の中を、相變らず熱心に話し續け乍ら、なほ奥深く入つて行つた。臆て二人は、鶯谷の方に通ずる新しく出来た廣い道に出て、それを又暫くの間、鶯谷の方に歩いて行つた。そして、道がもう坂にならうとする少し手前に建てられた、これも未だ建つて間もない様な西洋館の門の前に来ると、瘠せた方の青年は、

『君、こ、だよ。一寸待つてくれ給へ』  
と云ひ乍ら、ポケットから鍵を出して、門の前に立止

つた。その西洋館は、木造で甚だ殺風景な建物であつた。庭には樹木も何もなく、大きな石ころで、いつぱいに埋められてゐた。彼は鍵を外し乍ら、

『随分殺風景な家だらう。併し日本建より増しだよ。今日は誰もゐないんだ。呑氣なもんさ』

『全くだねえ、君が住み相な家だ。併し随分殺風景ぢやないか、こ、いらだつたら、祕密な相談でも大丈夫だねえ。先づさしあたり、「革命黨本部」にでもしたらどうだいハ、ハ、ハ、ハ』

と、肥つた方が、燈火もなく、窓は閉ざされて、淋し氣に薄闇の中にあつてゐる家を見上げ乍ら磊落な聲で云つた。

『全く日本の家ぢや、危くつて祕密な相談なんか出来やしないよ。祕密結社つて奴にや地下室がつきもんだからなあ。日本では祕密結社の運動は不可能だよ。』

『この家にも地下室があるのかい』  
『こんなバラックにそんな氣の利いたものがあるもんか』

『それでも僕の家よりも増しぢやないか』



『さうさなあ、併し、君の家の二階もあれで一才気づかれない、い、ところだよ』

『ただど餘り町の中過ぎるさ。まあ隣り近所に二階家がなくて割合に廣いだけがとりえだらう』

聽て、二人の姿は門の中に吸ひ込まれた。そして門は二人をその中に吸ひ込むと、又もとの通りにびたりと閉ぢられた。

## 二

低い石段を上つた玄關のところ、たゞ一つとぼつてゐる電氣が薄暗く四邊を照らしてゐるだけで、閉された窓からは光も漏れて來ないので、もうとつぷりと暮れた夜の中に、此家は全く淋し氣に立つてゐた。二人が玄關に立つた時に、瘁せた方は又ポケットから鍵をさがして、閉された鍵穴の中にそれをつき込み乍ら云つた。

『今日は先生の歸りが遅い事が分つてるもんだから、女の先生どこかに出掛けちやつたんだ。二人はしよつちゆうつかみ合ひの喧嘩をしてゐるんだ。毛唐は君随分やきもちやささ……今直ぐあけるよ……』

扉はあいたが、中はまつ暗だつた。瘁せた方は、

『一寸待つて呉れ給へ、今直ぐ電氣をつけるから』

と、云ひ乍ら、その暗い廊下の中に入つて行つた。聽て、バツと電氣がついた。今まで闇に閉されてゐた廊下は、急に光を得て明るく輝いた。太つた方は中に入り乍ら、如何にもめづらし氣に、又興味あり氣に、快活な聲で云つた。

『西比利亚か何處かの淋しい家にも行つた様だねえ。だがこんなところにて淋しくないかい』

『なあに、淋しい事なんかあるもんか。自由で吞氣でいいよ』

彼はさう云ひ乍ら、又ポケットから別な鍵を取出して、玄關をあがると、すぐ右側にある室の扉の鍵穴にそれを突込んだ。太つた方は彼の後ろに突立つて珍らし氣にそれを眺め乍ら、

『そんなに一々鍵をかけてあるんかい』  
と云つた。

『毛唐つて奴あ何でも鍵をかける事が好きなんさ。併し日本の家ときたら餘り明けつ放して、あれぢやあ君、室

の中で祕密な事なんぞ何も出來やしないし第一物騒だよ』

『全くだ』

肥つた方は異議なく感心した様に合礎を打つた。

室の中は相變らず眞暗だつた。が直ぐに電氣のネチがひねられたので晝の様に明るくなつた。

肥つた方は、電氣がつくと突立つた儘、頬に微笑をただよはせ乍ら、急に彼の眼の前に現れた變つた室の光景を物珍らし氣に眺め廻した。

室の大きさは八疊位。その片側にはベッドがあつた。長い寢椅子があつた。丸いテーブルが室の眞中にあつた。そのテーブルには氣の利いた、配合のよくとれたテーブル掛がか、つてゐた。そして細長い面白い恰好をしたグラス製の花立には美しい西洋花が投げ込まれてゐた。壁には本棚が造りつけられてゐて、その中にはぎつしりと洋書がつめ込まれ、その餘りは一つの窓の下にある勉強机の上に山の様につままれてゐた。その机の上には又、書きかけの原稿用紙や蓋のとれた儘のインキ壺や、ペンや、その他様々なものが、いつばい散らばつて、如

何に此の机が現在活動しつゝあるかを示してゐた。本棚の上の壁には、あの有名なボル河の曳船の畫を入れた額ぶちがか、つてゐた。も一つの方には雑誌から切抜いたらしい、小さなレーニンの寫眞がか、つてゐた。そして長椅子の上にはマンドリンが轉がつてゐた。

微笑し乍ら、此狭い室の物珍らしい光景を一つ／＼喰ひ入る様に熱心に眺めてゐた肥つた方の青年の眼は、聽て、ベッドの傍で着物を着かへてゐる此室の主人公の上に落ちた。彼は此時身早く、その黒い汚い服を脱ぎ棄ててだぶ／＼したネルのツボンを穿き、妙な恰好をしたこぼりとかふる處だつた。それを見ると肥つた方の青年は叫んだ。

『おい、君の着てゐるその妙なシャツの様なものは、いつたい何だい』

『ルバトシカ……』

此室の主人公は、未だすつかり入り切り切らぬその袋の様なルバトシカの中から叫んだ。

『何だルバトシカつてそんなもんかい』



『さうだ。ルバーシカつてこれさ。露西亞の奴は皆原始的だよ、併し何て着心がい、んだらう』

今度はもうすつかり首を出して、胸のボタンをとめ乍ら如何にも氣持よげに、此室の主人公が云つた。

『まあ掛け給へ』

『うんありがたう。だが君は随分變つてるとは豫々思つてゐたが、これまでとは思はなかつた』

『ハ、そんな事はないさ。併し疊の上なんぞにゐて、袖のついた着物なんぞ着てべら／＼してゐるよりや、この方が餘程簡單で自由に氣持がい、よ』

『全くだ。こりや實際い、』

と、肥つた方の青年は、やつと此時椅子に腰掛け乍ら、心の底からさう云つて、も一度室の中を見廻した。此室の主人公はすつかり、身仕度が出来る上と、

『君、一寸待つて呉れ、今日はコツクの女もゐないから、今僕が飯をつくつて来るよ。面白いものを食はせるぞ』

『飯をつくる？ 君がかい？』

『なんでもないんだ、ヂヤガ芋のうまい奴があるんだ。』

僕はもうすつかり米を食ふ事は止めたんだ』

『米を食ふ事を止めた？ 何時から？ 何故？』

『もう半年位にはなるよ。何故つて、米を餘り食ふと、腹ばかりふくれて眠くなつて頭が悪くなるよ。日本人が電車で居眠りばかりやるのは、ありや君、米をうんと食つて、味噌汁をたらふく飲んで、澤庵をぼり／＼やるからさ。それに米の通用するのは、世界中でほんの僅かばかりだからなあ。我々コスモポリタンは米から超越する事が必要さハ、』

『おや／＼コスモポリタンたる又難い哉だねえ。餘り飯をうんと食ふと、胃が悪くなつて眠くなるのは事實だ。まあそれちや今晚は君の所謂コスモポリタンの食ふ物を食はして呉れよ、僕も手傳はうか』

『なあに大丈夫だ。直ぐ出来る。そこいらのものを何でも見てゐて呉給へ。其椅子よりや寝椅子の方が樂だよ。ベッドに寝ころんでゐてもい、よ』

『ありがたう』

そこで、一人は室から出て臺所の方に行つた。そして一人は、棚から何か氣に入つたらしい本を探し出す

と、室の片隅のベッドの方に行つて、珍らし氣にそれを一寸眺めた後、臆て、其肥つた重い身體をどつかりと白いベッドの上のつけた。パネつきのベッドは乗せつけない重い身體をいきなり其上につけられたので、吃驚した様に、二三度はね上つたが、臆て、それも止まつて、彼の身體はふつ／＼とその中に埋まつた。彼は手にした本を擡げて頁をめくり始めた。

臺所の方で、がたごとと微かな音がするばかり、二人は離れ／＼になつて、室は全く靜かになつた。

そこで、私もあのツルゲネフの例になつて、二人が離れ／＼になつて、家の中も靜かになつたのを幸ひ、その間に少しばかり、此二人の青年の素性を讀者に紹介して置く事にしよう。それでないと臆て、彼等所謂コスモポリタンのうまい料理がテーブルの上に並べられたら、それこそ又それに就ての盛な話が二人の間に始まるだらうし、それでなくとも、道々の様子から察しても、今夜は二人の間に盛な議論や談話がおつ始まるのは知れ切つてゐる。さうなると私は二人の素性を讀者諸君にお知らせする第一の機會を失つて、第二の機會を見つける迄

は、何時までも／＼、肥つた青年だの、瘠せた青年だの、此室の主人公だのと、長々しい文句を原稿用紙の上に書きつけねばならぬ事になる。それでは、讀者諸君にもお氣の毒だし、私自身にとつても不便此上なしだ。

### 三

さて、も一度使はせて貰ふが、瘠せた方の青年は其名を岡上と云ふのだ。そして、彼の住所が、此殺風景なバラック式西洋建築物の一室である事は、既に讀者諸君も知られる通りだ。彼は或る獨逸人の借りてゐる此家の、今の一室を間借りして、彼の所謂コスモポリタン生活の練習をやつてゐるわけだ。も一人の肥つた方の青年は其名を麻生と云ふのだ。彼の住所に就ては、他日詳しく紹介する機會があらうから、こゝには略する事にしよう。彼の住居が何處か町の中にあつて、西洋館でない事だけはさつきからの二人の會話の模様で想像がつくわけだ。此二人は同じ帝國大學の出身ではあるが、高等學校も、大學を卒業した年度も、學んだ學科も異つてゐた。岡上は一高の出身で、政治科を大正五年に卒業したので



あるが、麻生の方は三高で法科を大正六年に卒業したのであつた。彼等が始めて知りあつたのは未だ二人共高等學校に居る時で、一高と三高の第一回聯合演説會が一高で開かれた時だつた。けれ共、それから後は、同じ大學に居ても、クラスが異つてゐるので、特に二人が會ふ機會もなく、學校を卒業してからは全く、音信不通になつてゐた。ところが、二人は又偶然な事から舊交を暖める機會が與へられた。その偶然の機會と云ふのは、少し話が大き過ぎるがそれは露西亞の大革命だ。と云ふのは、一九一七年即ち大正六年の三月、露西亞に第一次の革命が起り、續いて、その十一月にはレーニン等の所謂ボルシェヴィキ革命が起つて、露西亞は世界の人間が、夢か幻の様に考へてゐた共產主義の社會をいきなり地上のものにして仕舞つた。世界中の人間は殆ど悉くボルシェヴィキ革命の無謀を痛罵し、其長續きせずして早晩の間に倒れ去る事を豫言し、果てはボルシェヴィキ革命の慘虐を呪咀するの聲は世界に充滿した。

その時麻生は、都下の日日新聞紙上で、『ピーターよりレーニンまで』と云ふ題で、次の様な意味の續物を書いた。

進むべき方向に眞直ぐに向いてゐるに於てをや』  
と云ふのであつた。  
彼が、この續きもの、論文を日日紙に載せてゐる或る日の事であつた。當時其日日紙の記者をしてゐた彼は、何かの記事を書くために、或る知名の若い政治家を訪問した。ところが、話が露西亞革命の事に及んで、しまひには彼の書いてゐるそのピーターよりレーニンの事にまで移つて行つた。すると、その若い政治家は突然彼に、『君は岡上と云ふ男を知つてゐるかね』

と訊ねた。彼は、  
『知つてゐる。高等學校の時に知りあつたが、その後はあはない』と答へた。

『岡上が、君のピーターよりレーニンまでを読んで非常に同感して、是非君にあひたいと云つてゐたよ』

『さうですか、岡上は今何處にゐるのですかね。もう随分長くあはないから僕も一度あつて見たい』

『あの滿鐵を知つてゐるだらう。あそここの調査部にゐる』

『さうですか、それちや早速訪ねて見よう』

た。  
『ボルシェヴィキ革命は、露西亞の國民性に最も適合するものであつて、決して倒れるものではない。ケレンスキ等の革命は畢竟西歐かぶれの革命で、露西亞の國民性と合致しない。其革命の内容こそ異れ、ピーター大帝がなした、突飛な大膽な大改革が成功したのは、それが露西亞の空想的な、神祕的な、それでゐて、その空想と神祕とを現實にせざれば止まない偉大な現實性を有する國民性と合一したからだ。露西亞に一度帝國主義が輸入せらるゝと、それは實に徹底的に行はれた。革命運動が起ると、それは極端な血を以て染められた。露西亞には英吉利的な常識と中庸とはない。其代りに空想と神祕と、それを地上のものとする不可解な現實性がある。従つて、露西亞の革命が西歐かぶれのケレンスキに満足せずして、眞實の露西亞人にして神祕的現實主義者たるレーニンのボルシェヴィキ革命に行くのは極めて自然である。ボルシェヴィキの革命は深く露西亞の國民性に根底してゐるからして、決して倒れるものではない。而も、その革命の性質は、人類の次ぎの時代が當然

『是非さうし給へ。岡上君は露西亞語も出来るし、餘程露西亞に興味があると見えて、なかく詳しく調べてゐる様だ』

そこで、麻生はその次の日、早速丸ノ内に滿鐵の調査部を訪ねた。そして、門衛に教へられた通りに、こつこつと階段を上つて、三階に行つた。そして、彼は數年前にあつた岡上の顔がどんな顔だつたらうと、好奇心を抱き乍ら、壁についてゐる呼鈴のボタンを押した。すると、直ぐボーイが出て來た。彼は自分の名刺をボーイに渡し乍ら、

『岡上さんに』と云つた。  
『一寸お待ち下さい』

と、云ひ乍ら、ボーイはその名刺を持つて室の中に姿を消した。すると間もなく、足早な靴の音が室の中から聞えて來た。そして閉された扉が開くと、そこから、色の淺黒い、顔のやゝ長い、頭の毛の薄い、それでゐて、眼が甚だしく知識の光に輝いてゐる、一人の青年が姿を現した。彼の様子はもう既に讀者諸君の知られる通りだ。彼は麻生の姿を見ると、さも懐かし氣に、扉の中か



ら飛出して、いきなり、麻生の手を握ると、それを二三度強く握りしめた。そして、

『久し振りだつたなあ』

と、感に堪へない様に叫んだ。

『全く久し振りだつた』

と、麻生も懐かし氣に答へた。かうして會つて見れば、二人共その顔には何處かに見覚えがあるやうであつた。

『もう何年になるだらう。君は随分肥つたねえ。そして何んて變りやうだらう』

『君だつて随分變つたぢやないか。そして君がこんなに近くにあるなんて夢にも知らなかつた。僕は日日新聞にゐるんだ』

『あ、それでだな。君のピーターよりレーニンを讀んでゐるよ、でも僕がこゝにゐる事がどうして分つた？』

『うん、昨日ある友人に聞いたんだ。それで早速今日やつて来たわけさ』

『よく来て呉れた。だがどうだ、時代がすっかり變つたぢやないか』

『全くねえ』

『あ、僕は餘りうれしかつたもんだから、すっかり忘れちやつた。さあ僕の室に行かう』

そこで二人は、その扉から入つて二つ三つの室を通り抜けて、とある廣い室に入つて行つた。そして二人は、その室のストープの前の椅子に腰を下した。その室には、外國の雑誌や日本の雑誌が、ところ狭いまでに保存されてゐた。そして机の上には澤山の本が積重ねられてゐた。麻生は珍らし氣に室を見廻して、

『此室には君一人かい』と訊いた。

『うむ僕一人だ。靜かで勉強にはもつて來いだ。だから』

まあ安い月給で辛抱してゐるのさ』

『さうか、新聞社とは大違ひだねえ。こゝなら勉強が出來でい、だらう』

『まあ自由だけがねえ』

それから、長くあはなかつた二人の舊友は、もう十年もつゞいて交際してゐた親友の様に、親し氣に語り始めた。露西亞の事、レーニンの事、世界大戰の事、それから、又二人の人生觀に就て。そして、二人は十一時頃か

ら、日が暮れるまで、次ぎから次へと話を續けた。二人は全く時間の經つのを忘れてゐた。二人は新時代に就て、新時代の哲學に就て、新時代の文學に就て、昂奮し乍ら、熱狂し乍ら、聲を高めて叫び乍ら、聲をひそめて囁き乍ら、語り續けた。到頭小使がやつて來て、室の入口から首を出し乍ら、

『未だお歸りになりませんか』

と、不平氣な聲で呶鳴つた。二人は其聲に驚かされて夢からさめた様にあたりを見廻した。何時の間にか、室の中には電氣がとぼつて、窓の外はもうとつぷりと暮れてゐた。

『おや何時の間にか日が暮れちやつた』

と、岡上が叫んだ。二人がその室から出た時には、此廣い建物の中には、小使の外にはもう誰もゐなかつた。

二人が舊交を暖めるに至つたのは、まあざつとこんな事情からであつた。

岡上の生れは土佐だつた。彼は自分の素性を餘り誰にも話さなかつたが、彼は學生時代にも餘り有福ではないらしく、學校を卒業するまでには相當苦勞があつた様で

あつた。彼の何處かに世間馴れたところのある伶俐さは其苦勞の中から生れたのであらう。それと同時に、彼のコスモポリタンの思想も等しく其苦勞の中から生れたらしい。彼は何時か友人に、

『僕はコスモポリタンさ。何故なら僕は生れて以來、曾て、日本に於ける何處の家庭からも、日本人らしい生活の暖かさを感じなかつたもの。僕にはとくに日本に執着せねばならぬ、又せずにはゐられない生活が少しもないんだもの。まあ僕には故郷がない譯さ、若しありとすれば、それは此地球そのものだ』

と云つた事がある。彼は語學には天稟の才能を有してゐた。英佛獨露は勿論、伊太利や支那やマレイ語も少しづつ、は知つてゐた。彼は非常に理智的で學究的であつたが、それでゐて又藝術家肌の處も多分にもつてゐた。まあ彼は、新時代が生んだ日本の典型的のインテリゲンチアの一人と云ふべきであらう。そして、彼も亦新時代の改革的思想を抱くインテリゲンチアに共通な、資本主義文明に對する憎惡と反逆性を多量に持つてゐて、勞働者階級に對しては無限の同情と同感とを抱いてゐるので



あつた。

麻生は九州人によくあるタイプで、何處かに親分肌の匂ひのある青年であつた。彼は學校を卒業するまでに、これと云つて別に苦勞した事もなかつたが、その複雑な性格が長い彼の學生生活の間に、彼を種々なところに突き落した。彼の顔は一見すると非常に温順に見えるのであるが、又よく觀察するとその温順の如く見ゆる中に、極めて狂熱的な、過激性が隠れてゐるのであつた。一方に理智的なところがあるかと思へば、他方には情熱に燃ゆるところもあつた。非常に空想的な處があるかと思へば、又極端に現實的なところもあつた。非常にセンチメンタルなところがあるかと思へば、非常に強い大膽粗奔なところがあつた。彼の性格の中には常に相反する極端な二つのものが戦ひ乍ら進んでゐる様であつた。たゞ彼の強い生命力が、不斷に彼を前の方に押進めた。彼には學究的なところは餘りなくて、藝術的な性格と實行的な性格とが勝つてゐた。そして、其態度の中には開けつ放しのあた、かさがあつた。彼も亦新時代の生み出した日本のインテリゲンチアの一典型に相違はなかつた。彼は

學校を卒業すると、二三の親友と一緒に直ぐに労働者の中にもぐつて、労働運動を始めようと思ひ立つたが、未だ時機が來なかつたので暫くの間、日日新聞社に入つて其時機を待つてゐるのであつた。それでも、彼はもうその頃、日本の最大の労働團體である友愛會と云ふ労働組合に關係してゐた。彼の家には、思想を同じくし目的を等しうする青年達が、一週間に一度宛會合を開いては盛んに研究し論議しあつてゐた。だがその事に就ては今書くまい。何れその事に就てはこれからさきに詳しく書く時が來るであらうから。

まあ、こんな工合で、二人共、當時帝國大學の出身としては、著しく毛色の變つた方で、自分の屬する階級に對しては激しい反逆者であつた。

凡そ、如何なる時代でも、如何なる國にでも、特權階級の非人道的な社會がクライマックスに達して、民衆が其暴逆に倒れやうとする時には、いつでも、此特權階級それ自身の中から、之れに反逆して、時代を民衆それ自身のものにせよと叫ぶ者が先駆して生れるものだ。人類の歴史が示す社會史は明かに此事實を物語つてゐる。

それはさうと、さつきの二人、岡上と麻生とはどうなつたらう。二人の所謂素性を長々と紹介してゐる間にもう大分時間が経つた様だ。

ベッドの上では相變らず麻生が心地よげに寝ころんで、熱心に本に読みふけてゐた。臺所の方では、岡上が忙がし氣に働いてゐた。もう彼の手料理が出来上つたと見えて、彼は、大きなお盆の上に西洋皿や手製の料理やコーヒー沸しやをいづばい載つけてゐた。そして、それをお盆の上に載つけ終ると、兩手で抱へて、彼の室の前にやつて來た。そして大きな聲で叫んだ。

『おい、一寸開けて呉れないか』

麻生はその聲をきくと、

『よし來た』と叫び乍ら、がぼとはね起きて、扉をあけた。纏て、手料理がまんなかのテーブルの上に擴げられた。

#### 四

皿の上には、四品ばかりの料理が並べられた。その中には、岡上の所謂特別にうまいと云ふジャガ芋の焼いた

のがあつた。彼は、

『僕は米の代りに大抵ジャガ芋をやつてゐるんだが、こ奴は實際滋養分に富んでゐて、腹にこくい、んだよ』

と、云つて皮をむきくうまさうに食つた。麻生も此變つた友の手料理に舌鼓を打つた。

『これや君、何だね』

と、一つの皿の上に盛られた。コロツケーとも何ともつかぬ様なものを、フォークに突刺し乍ら、麻生が訊ねた。

『そりや魚の骨のた、いた奴さ、日本人は馬鹿だよ。魚の骨の中には非常に多くの滋養分があるんだし、それに骨が又一番味がいいんだ。殊に頭に魚のい、味は皆集まつてるんだ。それなのに、皆それを棄てるんだもの。つまり物の價值と利用法を知らないんだ。そして一番うまくない切身なんかを、高い金を出して上品な顔をして食つてる。馬鹿な話さ。僕等は實際、もつと、實際に徹底する必要があるよ』

『全くだ。君の云ふ通りほんとにうまいね』

麻生は、その所謂、魚の骨を叩いて、パン粉と一緒に



フライパンで揚げた實質的料理を頬張り乍ら、岡上の議論に無條件に賛成した。實際、此得體の知らない魚の骨料理は味がよかつたからである。

『日本の料理、殊に會席料理なんて奴と來たら全く馬鹿氣でるぢやないか。まるで形式ばかりさ。そして入れ物を食つてる様なものだ。壘の上に坐つて、どんな病氣を持つてるか分りもしない奴と盃のやり取りをして、しまひには、へ、れけに酔つ拂つて、その儘寝ころぶんだ。文明人のやるこつちやないさ。無性で、ぶざまで、なつてないよ』

『全くだ』

と、麻生は無條件で賛成した。彼はやつと魚の骨の料理を平げて、次の皿に移るところだつた。その皿の上には又、得體の知れぬ妙な赤黒いハラワタの様なものが入つてゐた。

『これは君何だい』

と、麻生は少し無氣味相にそれを眺め乍ら岡上に訊いた。

『豚のハラワタさ』

岡上は微笑し乍ら、麻生の顔を眺めて面白氣に云つた。

『え、豚のハラワタ、随分變つてるねえ』

『まあ食つて見給へ。い、味だから。淺草に行くと、屋臺店に「焼鳥」と書いた奴があるだらう。ありや君、殆ど豚のハラワタだよ。僕は時々食ひに行くんだがね。安くて馬鹿に滋養があつて、おまけにうまい事此上なしだ』

『へえ、さうかね。實は僕も一度「焼鳥」と書いてあるから、鳥だとばかり思つて、あいつをたらふく食つたんだが、食つてから、ありや犬のハラワタだつて聞いたもんだから、急に胸が悪くなつて來ちやつて閉口したよ。尤も鳥にしちや一本五厘（今は一本二錢だがその當時は未だ五厘だつた）だなんて馬鹿に安過ぎると思つたんだがねハ、ハ、ハ』

『そりや君、あいつはあぶらが強いんだから餘り餘計に食つちや胸が悪くなるさ。けれ共今夜のはあれより上等だ。まあ食つて見給へ、うまいから。胸なんぞ悪くならないよ』

そこで麻生は又、此珍しい豚のハラワタ料理を、フォークに突刺して、口の中に運んだ。

『うまい、全くうまい。君は見かけによらず料理がうまいんだねえ。それに、こんな材料を何處から仕入れて來るんだ』

『そりや君又自ら道ありさ。今に君も一緒に仕入れに連れてくよハ、ハ、ハ』

『君も全く變つてるねえ』

『コスモポリタンだものハ、ハ、ハ』

『コスモポリタンたる又難い哉だねえ。先づ料理から覚えなけりやならんあハ、ハ、ハ』

『僕のコスモポリタンは少し毛色の變つてる方だよハ、ハ、ハ』

二人はやつと、所謂コスモポリタン料理を平げて仕舞つた。それから、今度は二人で空になつた皿を再びお盆にのつけて臺所に行つて、それを洗ひ上げた。そして清々した氣持で又室に歸つて來た。彼等は、ゆつくりした氣持でコーヒーをのみ、麻生は巻煙草に火をつけ

そこで勢、二人の話は、彼等が道々昂奮し乍ら話し合つて來た、問題に歸らざるを得ないわけだ。

麻生はその大きな鼻の穴から元氣よく煙草の煙を二本吐き出し乍ら、

『さあ、もう飯も食つたから、君の奴を讀んできかして貰はう』

と、催促した。岡上は、

『よし』

と、云ひ乍ら立上つて、本棚の下の方の抽出しの鍵を外して、その中から非常に量のある原稿用紙を取出した。取出し乍ら、

『これは君、大切なものなんだから祕密にしまつてゐるんだよ』

と云つた。麻生はそれを見ると、

『ほ、う随分澤山書いてあるんだねえ』と云つた。

『未だ皆ぢやないんだ、情報の來ることに書き足してるんだがね。なか／＼よく分らないんで閉口だ』

綺麗な文字で書かれてある數百枚の原稿がテーブルの上に持出された。それは、今進行しつゝある露西亞革命



の詳細な記録であつた。岡上は満鐵の調査部に入つて來る書籍や雜誌を利用して、熱心に露西亞革命の進行を研究し、其記録を作り上げてゐたのであつた。

『こりや大變だ。随分澤山ぢやないか、骨が折れるだらう。未だ日本の何處にもこんなはないだらう』

『うむ、まあ、本や何かの來るのは僕の方が一番早いんだ』

『さうだらう、こいつあい、併し、餘り大部だから、一寸位見たつて、何處に何があるんだか分らない。君の面白いと思ふところを讀んで呉れないか』

『よし、それぢや、レーニンが露西亞に歸つて來た頃と、レーニンの演説を讀もう』

『たのむ』

岡上は、六七十枚宛をひとまとめにしてある幾つかの中から一つを取出して、それを繰擲げ乍らそれを讀み出した。そして、それを讀み出すと、彼の眼は異様な歡喜に輝き始めた。麻生は、其豊かな雙頬に心地のい、微笑を漂はせ、其黒い大きな眼を興味に輝かせ乍ら、岡上の一語をも聞きもらすまいと云ふ様に、熱心に聞き入つ

た。岡上の明瞭な而も熱のこもつた聲が靜かな室の中に響いた。

『ケレンスキー法相の主張に成れる政治犯人大赦と、出版言論、集會及び結社の自由は、動もすれば極端より極端に奔らんとする露西亞人の思想に驚く可き効果を齎した。之に依つて過激新聞紙の發刊は雨後の筍の如く相續いて起り、政治演説は夜を日に繼いで流行し、何々代表者會と名付くる集會は、至る處に發見せられた。其結果前に述べた如く兵卒勞働者の勢力は極端に擡頭し、賃銀の増額勞働時間の短縮等の要求は至る處に起り、爲に生産組織は破壊されんとし、さなきだに不秩序なる露國の上下社會は益々紛糾するに至つた。是等の紛糾の原因の主要なる一つが社會主義者の煽動にあるは言を俟たぬ。アンフキテアトロフやブレシコ・ブレシコフスカヤ等の

西比利亞流調地からの歸朝は既に述べた。更に四月の中旬に於て、露國社會主義者中の二大巨擘が、相次で露都フキンランツカヤ停車場に飄然其姿を現した事は、露國革命史上特筆すべき現象であつた。抑も二大巨擘とは誰

ぞ？ 一つはブレハーノフであつて他はレーニン其人である。

彼等の抱懐せる社會主義的理論及び其系統に就ては前述の如くであつて、茲に再び贅言するの要を見ない。蓋し、ブレハーノフは露國社會主義思想の發達には没却する事の出来ない博學の鴻儒であつて、前世紀末には、ウエラ・サスリツチやアクセルロードやデイチと共に露國社會民主黨を結び、由來三十年間或は瑞西に或は佛蘭西に、放浪と漂泊の旅を重ね乍らも、絶えずマルクス流の社會主義を記述し、經濟學、社會學の記述著作を續け、今日では世界の學界に其名を知られてゐる人である事は既に縷々述べて置いた。彼は四月の十三日佛國より久振りで慕かしき北歐の故郷に歸るや、直ちに露都に於て、新聞「エヂンスツウオ」を發刊し、社會民主黨の一致團結を説き、革命政府を謳歌して穩健なる自由主義の標榜を續けた。

ブレハーノフは流石に、「露國社會主義の父」と呼ばれた碩學だけあつて、露國の上下から尊敬せられ、中には彼を外相に擬しようとする者さへあつた。然しブレハー

ノフが實際政治界に活躍すべき時は既に過ぎ去つて居た。一九〇六年ストックホルムの社會黨大會に、多數の者はボルシエヴィキーとしてレーニンの傘下に參じ、その僅かに残れるメンシエヴィキーの多數からも離れられ、以來彼の實際的活躍の元氣は失はれてゐた。「革命の祖母さん」を擔ぎ廻つたのが一種のお祭騒ぎ以上の何ものでもなかつた様に、又老翁クロボトキンが恰かも日本で云ふなら、板垣伯とでも言ふ様に名前許りの「革命の父」として實際上からは忘れられてゐる様に、ブレハーノフの名も「エヂンスツウオ」の社説を通して、痛ましくも其十九世紀末の偉大な論客の末路が窺はれる様な氣がしたに過ぎなかつた。

之に反して彼のレーニンの歸朝は實際上に於て、殆ど露國革命史上に一轉期を聳すべき大事件であつた。彼が其長髯を撫して傲然たる雙肩と爛々の眼とをフキンランツカヤ停車場に現した時には、誰一人として此亡命客を歡迎する者とはなかつた。否、彼が恐るべき獨探であるとの風評等も遙かに其後に至つて起つた事實で、此恐るべき未來の資本主義國家の大破壊者に對して、一顧の注



目を拂ふものとはなかつたのであつた。

レーニンの社會主義に於ける思想と系統とに就ては既に論述した通りであるから茲には贅言しない。只茲に露國大革命の事件の進展を解剖する前に其重大な役割を演じた彼の略歴と革命後の政界に對する彼の在來の思想の適用即ちレーニズムなるものに就ては聊か記述して置く必要がある。

レーニン其の本名は、ウラヂミル・イリウイツチ・ウリヤノフと云ふ。彼は一八七〇年シンピリスクに生れた。其祖先は猶太人であるとの評があるが實際はさうではないらしい。彼の父イリヤ・ニコライエウイツチは同地國民學校の校長をして居たと云はれる。然るにウラヂミルの兄はアレキサンドル三世の時、先帝弑虐の下手人の一人であつたがため、一八八七年絞罪に處せられた。彼は遺傳的に革命と反抗の血潮を受嗣いだ男と稱せられてゐるが、其兄の死刑の當時は、僅かに十七歳の少年であり、而して既に立派に革命の思想を抱懐してゐたが、それが兄の悲惨な最後に遇うて、烈しい專制に對する復讐心に變化した。それがため同年彼は「社會主義の青年」

として當時入學した許りのカザン大學から退校の處分を受けた。

一八九二年此薄命にして然も頭腦明晰なる反抗兒は二十五歳にして露都に漂泊し來り、直ちに「労働者階級解放同盟」なる結社を作り、盛に中産階級に挑戦した。彼は一般の革命的な知識階級が、ロマノフ朝に對する自由を絶叫せるに對して彼の眼中には既に第四階級の敵たる資本的中産階級が映じて居たのである。然し斯様な危険な思想が自由の制限された當時の露國に容れる、筈がない。彼は一八九五年捕へられて二年間東部西比利亞へ追放の刑罪を受けた。然し彼が四ヶ年間ベトログラードで蒔いた「ソリダリテート」の思想は遂に「社會民主労働黨」なる一黨を生むに至つた。刑滿ちて後、彼は西歐に漂泊し、盛に社會主義の思想を鼓吹し、其間諸種の社會主義經濟の書物を著した。「露國に於ける資本主義發達史」「露國労働黨の農政改革」「人は何をなすべきや」等は稀に見る浩瀚にして内容に富める代表的著作であり、何れも彼の深淵にして理論的なる思想を探り得るものである。一九〇五年、露國に歸り來り例の日露戦争後の革命

運動に参加し大いに成す處あらんとしたが、偶々運動の失敗に會し、所々に隠匿してゐたが遂に本國に身の置き處なきを知り、一九〇七年瑞西に亡命し、其地の「萬國社會黨本部」に身を投じた。その明晰なる頭腦と他人を統御操縦する才幹と、堪能なる佛獨等の外國語の知識とは認められて、直に同本部の主要なる役員の一人となつた。彼は瑞西亡命中にも露國の新聞「ブラウダ」に寄書し、又時々「ブライズヴェスチエニエ紙」に投書し、所謂レーニズムの宣傳に努めてゐたのである。今回革命が始まるや、彼は好機逸すべからずとなし、瑞典を経由して歸國しようとしたが、英佛兩國政府は之を危険視して有らゆる妨害を加へた爲め目的を達し得ず、漸く四月に入つて瑞西の社會主義者ブラツテンの取扱ひで過激なる社會主義思想を抱く同志卅二名と露國に歸る事となつた。即ち彼は戦争以來しばらく塊太利に於て監禁せられ俘虜たるの取扱ひを受けてゐた關係から、獨逸を通過して露國に入る事になつたのであるが、彼の歸國が英佛に取つて極端に不利なものである事を知つてゐた獨帝ウイルヘルム二世と其宰相とは、彼及び其同志二名の爲めに特に

各國大使と同様に特別列車を仕立て、やつて無事國境を通過させてやつたと云はれてゐる。それがため彼が四月の中旬露都に入つてからも彼は久しく獨探の嫌疑を受けたのであつた。彼は勿論獨逸の恩恵を蒙つた者である。大枚の金を獨逸から貰つたか、怎うか假令貰つたとしてもそれが爲めにカイゼルにその報酬として忠義立てする様な人間ぢやない。彼は英佛を憎むと同様の意味で獨逸の軍國主義をも蛇蝎の如く嫌ふものである。

扱てレーニンは露西亞に歸つてからも自分の理想實行の爲め席温まる暇なき程の活動を續けた。彼は直に其部下たるジノヴィエフ、カメニエフ、リヤザノフ及びコロantai女史及び自分の妻たるレーニン夫人等と各々手分けして、極端な社會共產主義的な非戰論を基礎とするレーニズムの宣傳に着手した。彼は此時、米國から歸り來つたトロツキー及びルナチャルスキー等と志を併せ、益々其勢力を張る事が出來た。

彼が當時の實際政局に對する主張は次の如きものであつた。

#### 一、講和の即決



## 二、勞農政府の確立

## 三、社會主義制度の實行

## 四、土地の分配

是等の主張は、假令當時の露國の狀態から觀察しても、正に空想であり、「ユートピア」である。然しレーニンの特色、否露西亞人の特色も亦茲にあるのである。即ち此「ユートピア」をも尙實行し得べしとの直徑實踐の態度がレーニンのレーニンたる所以である。彼は一個の「偉大なロマンチスト」である「夢見る空想家」である。けれ共それには傲頑不屈な意思の力と冷酷なる現實味とを帯びた不思議な性格を有する人間である。神祕的唯物論者である。而して此神祕的唯物論の思想程、露國人の性格に適合するものは無いであらう。調和の出來ぬ様な兩極端な生活を平氣でやつてのけるのはスラブ人の特長である。神の前に十字を切る生活と、悪魔と酒宴する生活とを、一日の内に幾回となく繰返し得る様な事は、露國人ならではの出來ないところである。果して、此神祕的唯物論者の思想は至る處に歡迎せられた。未だ歡迎せられずして反對せらる、時に於ても、一種の強い響と意義

とを民衆の胸に投じたのである……』

一氣に、こゝまで読んで來た岡上は其眼を輝かし乍ら、『どうだ、僕の觀察と君の「ピーター」よりレーニンまで』との觀察は全く一致するだらう』と力強い響で云つた。

『全くだ』  
と、殆ど何ものをも打忘れて、岡上の聲に聞きほれて酔つた様になつてゐた麻生は、彼の異様に輝く瞳をあげ乍ら、唸る様に云つた。そして又續けた。

『露西亞人て奴あ、まあ何て偉大な馬鹿なんだらう。それに、レーニンの性格の素ばらしさつたらどうだ。レーニンは君、長い間の陰惨な露西亞の革命運動が築き上げて來た露西亞特有の偉大な人格だ！あのツルゲネフに現れて來るインテリゲンチアの無数の失敗が遂にレーニンの性格を生んだんぢやないか』

『さうだ。レーニンは露西亞の土と血に染められた長い革命の歴史が生み出した一人格だ』

と、岡上は壁の方を見つめ乍ら感慨深か相に云つた。

『神祕的唯物論！ 神祕的現實主義！ 何て、不可思議な言葉だらう』

『もつと先を読んで呉れ』

『よし、今度は、痛快なレーニンの演説のところを讀まふ。それは實に突飛だよ』

岡上は、又原稿用紙の一つを選び出して讀み始めた。

『明くれば五月二日の早朝から議事堂たるタウリーチエスキー宮殿内で、勞働者兵卒の代表者會議が開かれた。そして主として自由公債應募の可否に就て討議が始められた。會場は蓬頭粗服の下層階級民を以て充された。四月十日の宣言があつた以上、既に侵略的戰爭の爲めの軍資たる公債は無用なりと論ずる者、否防衛のため兎に角現在の財政を整理したる中より相當の軍備に充つる必要があると叫ぶ者、國民擧つて自由公債に應募せねばならぬと主張する者、甲論乙駁、會議はなか／＼結末が着き相にも思はれない。此時彼のレーニンが長髯を撫して飄然として議事堂の中に現れた。會衆は互に目配せして、あれこそ有名な過激派の頭目よと囁きあつた。中にレー

ニンに迫り過激派を代表して戰爭に對する意見を述べよと罵るものがあつた。レーニンは請はる、が儘に壇上に立ち、長時間に亙つて自己の所信を忌憚なく披瀝したが其論據は矢張り、何時もの通りで、全然社會主義の理論から割出した奇想天外的なもので、之には勿論非常な反對もあつたが、兎に角一般に對して、一種の印象と、多大の反響とを與へたのである。彼の説く所は斯うである。

『我輩を目して單純なる單獨講和論者と云ふ。それは飛んでもない誣言である。我輩は唯絶對に國民間の戰爭其ものに反對するのである。惟へ、現今世界各國の資本家と、暗愚なるニコライ・ロマノフとが企圖した殺戮的戰爭は、今もなほ多數資本家階級の政府に依つて繼承されてゐるではないか。而して彼等の目的はベルシヤ、トルコを分割し支那の利權をさへ極端に奪はうと目論であるのである。而して彼等は、これ等の目的と全くあづかり知らざる無産階級を駆つて慘虐なる戰場に相殺戮せしめてゐるのである。』

我輩は決して獨逸を推稱する者ではない。彼の軍國主



義の如き、資本家の採る一態度であつて、殆ど盜賊の行爲と等しく我輩の唾棄する處である。我輩は敵味方の區別なく、總て一國の資本家的國家を不倶戴天の仇と考へ、決して妥協を敢てしない積りである。我輩は日頃の持論として、戦争を即時中止すべしとなすのは、無意味に一切の戦争を止めよと云ふのではない。我輩の中止せよと叫ぶのは資本家階級の企圖する國家間の戦争の事である。我輩は各國に労働者及兵卒代表者會の出来る迄、戦争を繼續せよと説く者である。唯其戦争なる觀念は、現時の言葉の用法と全然齟齬を異にせるものである。資本家的國家に挑戦すべしと言ふのであつて、國際的戦争とは意味が違ふ。労働者をして資本家を征服せしめんとする戦争である。だから敵は國の外にもあるが、又手近な國の中にもある。此點に於て我輩は先づ階級闘争を宣言しなければならぬ。同時に目下の國際的戦争に對しては、無條件的講和即ち、些の強制的條件のない講和を締結しなければならぬ。然らば如何にして戦争を終結せしめるか。其實際的方法如何？ 曰く、戦線に於ける露獨兵の交驩即ち之である。我輩は、今朝も戦線に於ける

露獨兵の交驩に關する或る報道を得た。之世界平和に對する一大痛快事であつて、我國の慶事これに過ぐるものがない」

冷靜死灰の如きレーニンの口を衝いて出づる一語は一語より權威を加へ、其着想は意想外より落ちて、聴衆の肺腑の正面に鉛の如く重く響いた。靜まり返つた聴衆の顔は熱し、流石の過激な労働會の連中も殆ど茫然として呆氣に取られてゐる。最後に露獨兵交驩の一齣を聞くに及んで、彼方此方に囁語噂々の波が打ち始めた。聽て一人の労働者代表者が自席に立上つて、

「それは獨逸流の思想だ」

と叫んだ。冷やかなレーニンは言葉を次いで、

「左様、獨逸流の思想である。立派な獨逸人リーブクネヒト氏の思想である。予輩の崇拜する眞正の社會主義者リーブクネヒト氏の思想そのものに相違ない。然し予輩の思想の根據たるリーブクネヒト氏は目下同國資本主義的政府の爲に牢獄に呻吟してゐるではないか。氏と政府とは互に仇敵同志である。而して一個の精神しか持たな

い予輩レーニンが雙方の思想を一時にとり入れる事は不可能事ではないか」

此時又聴衆中に大聲をあげて嘔罵る者があつた。

「君は曾てクアランドの奪還を目して不法の併合なりと論じた事があつた。同地は昔から我國の領地ではないか。我々と雖も併合は賛成しない。併し正當な奪還と併合とを混同してはいけない」

するとレーニンは冷笑を浮べて、

「それは單純なる言葉の争ひに過ぎない。民族は其欲する處に従へとの予の原則を適用すればそれで宜いではないか。露國と共にするも、獨逸と共にするも、畢竟民族主義を基礎として彼等自身に處決せしむるを以て最良の方法とするのである。一度領地だつたから又奪還しなくちやならぬとか、併合しなくちやならぬとか、そんな事を論ずるから、愚劣な戦争が何時までも止まないのだ」此言葉を聞くと、群集中に、激昂して叫ぶ者があつた。

「君の言や宜し矣。唯何故に君は此事を露西亞人に迫り、而も之を獨逸人に宣言しないのか」

又他の者が叫んだ。

「併し、英佛が講和を欲しなかつたらどうなるのだ。露西亞ばかりがそんな事をするわけがない。それは亡國だ」

すると、今迄冷靜なりしレーニンの眼は、爛々たる烟光を放ち、其聲さへも激越の口調となつて、

「咄、其は資本家の言であらう。思へ資本家なるものは貪慾なものだ。だから何處の國だつて講和を望まない。而して理が非でも勝ちたがるのだ。併し英佛にも其様な無意味な貪慾と感情との狂人以外に第四階級が控へてゐる。彼等は講和を厭がる様な非文明な階級ではない。而して眞理は勇氣と大膽とを以て斷行しなければならぬ。さうすれば、世界は其に従ふものだ」

レーニンは演説し終ると、悠然として壇上を去つた。聴衆の頭は狂つて唯醉へるが如くなつた。レーニンに次で労働會執行委員の一人たるリーベルが壇上に現れた。彼は叫んだ。

「諸君朋輩レーニンの思想は極端である。彼は世界各國



の資本主義が倒れるまで、國際戦争ならざる戦争を續けよう」と主張する。我勞兵會は一個の政黨政派ではないが、今日の政權に對しては主要なる監督權を有する民意聯合の基礎である。萬人思ふが儘の事を一致させるのは困難であり、彼のユートピアを其の儘政綱として實行する事は更に不可能な事ではなければならぬ。併し、勞兵會は其成立の性質上、古い思想に沈滞して居る譯に行かぬから進まれる點まで突進してやらう。けれ共、互に或る點までは忍んで譲歩もしなければならぬ」

勞働者の面々は次第に我に返つた様に何れもリーベルの説に賛成した。即ち勞兵會は未だ一致してレーニズムに對抗する事になつた。併し、彼等の頭腦と心の中とはレーニンの言々句々が染み渡り、リーベルに賛成する言葉の裏には、追へども拂へども消え失せない靈の如き朦朧たる強い力が巧みに打込まれてゐるのであつた。

實際或る人の評した如く、レーニンは智者であつた。而も決して普通平凡な智者でなくて、馬鹿な智者であつた。彼の思想は不可能な夢を語るに過ぎないが、彼はス

ラブ民族の愚直な性質を餘りよく熟知してゐた。戦争の即時終結、民族の自決、農民土地の要求、露獨兵の交驩の如きは、當時未だ裏面的な事實であつて、口に出して云ひ得る程の具體的な色彩を現してはゐなかつた。偶々之を説く者があつても、それは極めて婉曲な言葉と修辭とによつて包まれてゐた。レーニンは、之に對して、修辭もなく、粗雑に直徑的に而も唯驚くべき眞摯さを以て民衆の前に語り得たのである。馬鹿な智者でなければ出來ない事だ。そして露西亞はそれを求め、露西亞の國民性はそれに適合してゐたのである。レーニンはよくそれを洞察してゐた。

レーニンの演説を聞いた時、民衆の心は、未來派の畫面に依つて受けた印象の様に痲痺してゐた。口では悪罵と嘲笑とを浴びせかけ乍ら、心の中には、その口を裏切つて、臆て生るべき或るもの、芽が植ゑつけられて行つたのである」

其夜、麻生が帽子を持つて立上つたのはもう十時過ぎだつた。二人が岡上の室から出ると、此家の主人公も歸つて來たと見えて二階にはピアノの音がしてゐた。二人

は玄關の露臺に出た。甘い春の夜の空氣が、熱した二人の青年の心を誘惑する様に、そつとその魅する様な生ぬるい手で、頬や手を撫でさすつた。併し乍ら、二人の昂奮はそんな事ではさめなかつた。麻生が、

『少し歩かないか』

と感激した聲で云つた。

『うむ歩かう』

と、岡上が卽座に答へた。二人は連立つて暗い春の夜の闇の中を歩き出した。森が一きわ黒く闇の中に浮んで見える。空には星が降る様に散らばつてゐる。

『おい今夜は馬鹿に暗いぢやないか』と、岡上が云つた。

『うむ、馬鹿に暗い。丁度資本主義の世界が行きつまつて、世界中の人間が、殺したり奪ひ合つてゐる時の人類の世界の様ぢやないか。併し一番眞暗だつた露西亞が、眞先に徹底的に暗い世界の闇を破つたぢやないか。而も暗闇のどん底から一舉にして、眞びるまに出ちやつたんだ』

『ハ、ハ、ハ、そりや偉大な馬鹿だから出來たのさ。世界は今が夜明けた。黎明だ。獨逸が倒れるのは長くはない

よ。資本主義の世界が將に倒れかけてゐるのさ。今度の戦争が、資本主義の崩壞の第一歩だ。兎に角、人間の世界にプロレタリアの國が一つ出來たんだ』

『さうさなあ、だが日本には何時黎明が來るだらう。近頃は君色んな事に就ての壓迫がひどいよ。』「社會」なんて云ふ字を使つても發賣禁止だ。吉野博士達がデモクラシイを民主主義と譯しても危険視されるんだ。それで民主主義だなんて云つてらあ。この間ね、あの社會評論と云ふ雜誌ねえ、あれを、デモクラシイと云ふ名に代へようぢやないかつて、主張したんだが、そんな名をつけたら一度に發賣禁止だと云ふわけでおぢやんさ』

『全く馬鹿氣てるねえ。併し、世界の新しい潮の波はそんなに何時までも日本だけ残しちや置かないよ。もう直ぐ黎明が來る。明治維新の時だつて同じ事だつた。そんな時代は僕等が來させなくぢやならん。これからは若い者のうんと仕事をすべき時だ。』

岡上は力強い聲で確信あるらしく云つた。

『もう別れよう。今晚はほんとうに愉快だつた』

『それぢや今夜は失敬しよう。今度の水曜には行くよ』



『是非、近頃又一人同志が出来たよ。若い元氣のい、學生だ』

『そりやい、』

『ちや失敬』

『ちや失敬』

そこで二人は別れて、岡上はもと来た道の方に引返した。纏て闇が二人をのんで、其姿も分らなくなつた。

## 五

讀者諸君の中には氣付いてゐる人も多いかも知れぬ。

又氣付いて居なくも、私がこゝに書くのを讀まれたら、『あゝあれか』と合點する人は多いであらう。上野の三橋から池の端に出て、いつもお粗末な出来合ひの博覽會が開かれる、外観だけは馬鹿に偉大で堂々たる……其實中は、そこで開かれる博覽會と同じ様にお粗末で、出来合ひで、まやかし物だが……パラツク式建物の方に眞直ぐに歩いて行くと、『東照宮前』と云ふ電車の停留所の直ぐ右側に、これも極くお粗末な洋式の古い三階の建物があつた。此建物も甚だ不得要領な建物で、舊式のハイカラ

と云つた様な匂ひがある。洋食屋かと思つて看板をよく見ると、牛鳥すき焼、親子丼もありと書いてある。公園附近の料理店が、今はもう、すつかり綺麗に新築して、東京見物の田舎者や、日曜散歩の腰辨階級を吸ひ寄せてゐるのに、此洋食店とも、すき焼店とも見分けのつかない建物は、別に新築を計畫してゐる様子もなく、それかと云つてペンキを塗立て、化粧をしかへるでもなく、舊態依然たるもので全く時代に超然たる姿である。今はどうか知らんが、大正七年頃には、店さきのシヨウウキンDには剝製の鷲や小鳥が、ほこりだらけになつて放り込まれてゐた。そして又その店さきには偉大な風貌を有する土佐犬が頭張り、その上では軒につるされた籠の中で、身體が眞黒で、嘴だけが馬鹿に眞赤な九官鳥が、時時『今日は』だとか、『有がたう』だとか、『まあしみつたれねえ』だとかと、甚だ人を馬鹿にした様なとん狂な聲を振立てて通りすがりの者を吃驚させてゐた。

だが、私の用のあるのは、九官鳥と土佐犬と、鷲の剝製の頭張つてゐる此古ぼけた不可思議な洋食店ではないのだ。實は、其お隣りに立つてゐる、これも一見何だ配も少いし、至極安價で輕便なので、幾十かの室も大抵満員の有様であつた。そして、何となく、その中には一風變つた自由なハイカラな特異な匂ひがあつた。此建物は非常に澤山な窓を持つてゐるので、夜になると、その窓々には赤い電燈の光や、青白い瓦斯の光がとぼつて、なか／＼の美觀である。

扱て、もういゝ加減に建物の紹介は止めて話を進める事にしよう。大正七年の四月ももう終りに近づいた或る夜の十時過ぎた頃、一人の肥つた青年が、ひよつこりとその建物の池の端に向いた方の窓の下に現れた。

もう大分夜も更けてゐるので、春の夜の甘い空氣に浮かれ氣な散歩の人々も大抵は退却したと見えて、四邊は極めてひつそりしてゐる。夜の霧に包まれた不忍の池は、ふんわりと闇の中に沈んで、池畔にだけか、つた柳の青葉は、なよやかな細い枝に、アーク燈の光を受けて、心地よげに息づき乍ら、春の夜の甘つたるい空氣を四邊に漾はせてゐる。

例の四階建の窓の明りは、もう大分消されて、硝子窓は黒くなつて見えるが、未だ寝もやらぬ幾つかの窓の窓

か、得體の知れない様な四角な四階建ての建物なのだ。その四階建は、博覽會の建物と同じ様に、外観は馬鹿に堂々として一見すると堅牢無比な洋館に見えるが、も一度見直すと、もう長い間風雨にさらされて、古色蒼然たるものがあつて明治初年のハイカラ建築の遺物と云つた匂ひがある。實際、一度中に入つて見ると粗末な古ぼけた木骨が至る所に露出してゐて、ひどい地震や、暴風の時などは、餘程念入りに揺れるらしい。けれ共、時代に超然たると云はうか、或ひは時代に取殘されたと云はうか、此二つの建物は妙に同病相憐れんで、くつ、き合ひ乍ら、地震につけても、風につけても、共に抱きあつて其生命を續けてゐる。建物の入口は二ヶ所あつて、標札には、『不忍アパートメント』と書いてあつた。恐らく、日本に於ける最も古いそして又最も大きなアパートメントの一つに數へられるべきであらう。その頃、そこに室を借りてゐる人達は、何となく、一風變つた風があつた。中にも頭髮を長くのばした美術學校の生徒だの、自由戀愛の共同生活者だの、若いハイカラな夫婦だの、自炊も出来るし、おそろひで散歩に出掛けても泥棒の心



には明りが輝いてゐる。ひよつこりと現れた青年は、その高い建物の下に立止まつて、一寸高い窓の方を見上げてゐたが、纏て、太い力のある聲で叫んだ。

『おい、野坂君、野坂君』

けれども、どの窓からも何の返事もなかつた。そこで彼は一度更に聲を張上げて叫んだ。

『おい野坂君、もう寝たのか』

すると、今度は、三階の真中頃の、未だ明かくと瓦斯の明りのしてゐた室の硝子窓が開いて、夜目にはしかと分らないが、矢張り青年らしい黒い半身がその窓から現れた。下の青年はそれを見ると、直ぐに叫んだ。

『未だ起きてるのかい』

すると黒い影は身體を更に窓の外に突出し乍ら下の方を向いて、極めて沈着なとなししい聲でそれに應へた。

『未だ起きてる、誰かね』

『僕だ、麻生だ』

『あ、君か、上り給へよ』

『ちや今行くよ』

そこで、下の青年は急いで、恰もその中に吸ひ込まれ

でもする様に、四角な建物の中に姿を消した。此青年は窓の下で名乗つた通り麻生であつた。彼はさつき上野の山奥で岡上に別れるとその足で此建物の下に現れて、大きな聲で『野坂君、野坂君』と叫んだのであつた。彼は岡上に別れた後も、何となく心が昂奮してその儘自分の家に歸る氣にはなれなかつた。彼の頭の中には、露西亞の事、それから今夜岡上の家で知つた、あの大膽な素直なレーニンの演説、はては彼の胸の奥深くに巢食つてゐる彼の理想、そんな事が、ぐるぐると止め度もなく渦巻いてゐた。そして考へが日本の事に及ぶと、もう一刻も猶豫してゐられぬ様な氣がして、即刻に行動を始めねばならぬ様に心がせかれた。彼の足はひとりでに池の端の四階建の方に向いた。そこには既に行動しつゝ、ある同志野坂が住んでゐるのだ。彼はどうしても今夜野坂にあつて何かの相談をせねばならぬ様な氣がした。彼の所謂同志野坂の風貌に就ては、麻生が彼の室の中に入つて行けば厭が應でも讀者諸君に紹介せねばならぬのだから、それよりさきに一寸茲で彼の素性と現在の生活とを簡単に紹介して置く事にしよう。

野坂は關西の生れで、家は相當に富有らしく彼は二年ばかり前に慶應義塾を卒業したのであつた。彼は、所謂資本家の玉子を養成する慶應に學んだに似合はず、早くから社會主義的な思想を抱く青年であつた。彼は學校を卒業すると直ぐに、鈴木氏の創立にかゝる日本最大の労働團體友愛會に身を投じて熱心に彼の思想の宣傳に従つた。當時、創立者の鈴木氏を除いて此友愛會に身を投じてゐる所謂知識階級出身者は、彼の外に早稻田出身の久留と云ふ青年と、今一人酒井と云ふ青年があるのみであつた。當時の友愛會は労働團體として未だ極めて幼稚なものではあつたが、纏て大いに發達すべき素質はその中に十分含まれてゐた。野坂は研究的な學者肌の青年であつたが、それかと云つて、決して、單なる學者肌の青年ではなかつた。彼は他の一面には極めて實際的な又實際的な性格を有してゐた。それは彼が學校を卒業して直ぐに友愛會に身を投じたのにも首肯される事だ。彼の學者的な性格の反面には燃ゆる様な實行的情熱が隠れてゐた。彼は分り安い文章で、友愛會の機關紙を通じて、熱心に而も徐々に、彼の思想の宣傳に努めてゐた。彼は

極めて優しい併し正確な思想と固い信念と情熱とを有する青年であつた。彼は、獨り立てられた焰の様に、ぼつと燃え上つて直ぐに煙の如く消え去る所謂知識階級出身の社會運動者とは異つた性格を有してゐた。只だ併し、彼は、以上の様な彼の性格からして、自ら演壇に立つて咆吼すると云つた様な事には餘り適しなかつた。彼も亦それを餘り好まぬ如く思はれた。彼はもう其頃、一度歐羅巴の方に行つて、先進國の運動の實際を見て來たいと云ふ強い慾望を抱いて、其計畫を進めてゐたのであつた。

扱、野坂の事はこれ位にして置いて話しを進めよう。さつき吸ひ込まれる様に建物の中に入つて行つた麻生は、古い汚い階段を飛ぶ様にして駆け上つて行つた。そして長い階段を、一二三と三つ數へると、狭い廊下を右の方に一つ折れ曲つて、角から三つ目にある室の扉の前に立止つた。そして、

『おい野坂君』

と呼び乍ら、早くも扉を押して室の中に入つた。中からは、



「入り給へ」

と云ふ相變らず沈着な優しい聲が聞えて來た。麻生が最初に入つた室は二疊で眞暗であつた。彼は又次の室の扉を開いた。するとそこには、女にしても見まほしい様な、色の白い小作りな二人の青年が、彼の身體に不似合な馬鹿氣で大きな、併し極めて粗末なテーブルに向つて、何か一生懸命にペンを走らしてゐた。その馬鹿氣で大きなテーブルの上には洋書がうづ高く積まれ、その本の幾冊かは亂雑に頁がめくられて、側には眞黒に手垢のついた厚い英和辭書が、如何にも我物顔にのさばつてゐた。机の上の壁には、よくあるマルクスの寫眞が、その儘無造作にピンで壁にとめられてゐた。その反對の壁には、ゴーガンか誰かを眞似た下手な油繪の女の裸體畫が、これもほこりだらけになつてか、つてゐた。室は六疊位、此室の主人公の容貌には似てもつかず、極めて殺風景な有様であつた。

野坂は麻生が入つて來ると、やつと走らせてゐたペンを放り投げて、その聲の通りに優しい美しい顔を麻生の方に振向けて、相變らず沈着な聲で云つた。

「ボルシエヴィキーの憲法？」

沈着な野坂も思はず聲をはりあげて、其眼を好奇心に輝かせ乍ら叫んだ。

「うむボルシエヴィキーの憲法さ。それが手に入つたらすばらしいものだぜ」

二人は思はず顔を見合はせて悦し氣に微笑した。

「さうか、そりやい、。だが、あそこは全く重寶だね。」

我々は出來得る限り慎重に露西亞を研究する必要があるよ。あそこは世界の社會革命の試金石だからねえ」

「全くだ。だがレーニン等は大丈夫だらうねえ。英吉利や佛蘭西は躍氣になつてゐるぢやないか、反動派の連中だつて大した事はないだらう」

「なあに大丈夫さ。歐羅巴にはボルシエヴィキーを倒す力はないよ」

「露西亞の事を考へると何だか不可解な謎が眼の前にぶら下つてゐる様な氣がする。君の方の奴はどうだ。もう大分研究が進んだのかい」

「うむ今一生懸命やつてゐるんだ。今もやつてゐたのさ。今度の會合までには出來上るだらう。英吉利と露西

「今夜は馬鹿に遅いぢやないか」

彼はさう云ひ乍ら今まで腰掛けてゐた椅子から立上つて、それを麻生の方に押しやると、自分は、室の片隅にころがしてあつたビールの空箱を持出してそれに腰かけた。彼の兩眼は長い勉強に充血してゐる様に思はれた。

「うむ馬鹿に遅くやつて來て失敬しちやつた。今まで岡上のところに居たんだ、君は又馬鹿に御勉強だねえ」

「なあに、晝の間は騒々しくつて何事も出來ないんだ。岡上のところでは何かい、報告があつたのかい」

「うむ、い、報告があつたんだ。岡上の手で調査してゐる例のあれねえ。あれが君、もう大分完成しか、つてゐるよ。今晚は、レーニンの歸つて來た當時の事情や、レーニンがミリユーコフやケレンスキー等の自由派と戦つた當時の事を研究したんだがね、レーニンの演説と來たら實際大膽不敵だねえ。ボルシエヴィキーの戦術はつまり、佛蘭西革命に於けるチャコベン黨の戦術そっくりさ。あれがもつと意識的になつて來たんだね。それから君、最近、ボルシエヴィキーの憲法が我々の手に入り相なんだ。」

「亜はい、對照だねえ。社會運動の二つの方向だよ。だけど、外國の事を考へてゐる間は何か自分がそれをやつた様な氣がして、……………」

「今も岡上と話したのさ日本の黎明は何時來るだらうつて。解放された労働者の黎明がさ。その黎明はつて未だ何時の事だか分りやしないぜ。ツルゲネフの所謂、労働者は工場に眠り、農夫はその耕せる土の底深く眠れり。あ、何時の日か彼等は、その深き眠りよりめざめて、つて奴さ。僕あもう新聞記者なれてやつてゐるのは厭になつちやつた。今晚は又つくつくさう思はれるんだ。併し又よく考へると、氣ばかり焦つて、パージンソイルの所謂ネツダーノフになつたつて何にもならないからね。……足は地に、理想は高く……と云ふ奴が僕等には大切さ。だけど、いくら足は地にと云つたつて、じつとして居ちや現實は進みはしない。兎に角、如何なる意味でも僕等は、もつと深く所謂人民の中に早く入らなくちやいけない。組合に對して積極的に、はつきりした思想を植ゑ付けなくちや駄目だ。どうだ君の方の形勢は、どうかうまく改革が出來さうかい」



『その事にすると全く頭が暗くなつちまふんだ。外國の事を考へてゐる時には好い氣持だが、自分自身の事になると、どうして、んだか分りやしない。組合員の多數は未だ君、澁澤男爵が顧問だなんて云へば、有頂天になつて悦んでゐるんだし、近頃は財政も滅茶苦茶に苦しいんだ。處が、それを改革すると云ふ事になれば、そりや君大變さ。中で大喧嘩が始まるよ。酒井もこれではとても會計はやつて行けないつて近頃は絶望してゐるよ。此儘進んで行つたら何より財政的に破滅しなけりやい、がと思つてゐるんだ。運動も君、外で空想的に考へてゐる時は大いに美しいが、現實に入つて見ると全く幻滅の悲哀を感じざるよ。人事關係つて奴は實にうるさいもんだ』

『さうだらう。僕等は未だ入つてないから分らないけれど、君等は随分苦勞だらう。併し、こゝまでやつて來たんだから、何とかして改革して眞直に生かして行かなくちや、労働者を欺く事になるし、そりや何よりいけないことだ。僕等はどんなにしても友愛會を改革して、あれを生かして行かなくちやならんよ』

『そりやさうだね。久留はどうしてもそれが絶望なら、

僕等は僕等の手で新しく始めたらどうだと云つてゐるんだ』

『勿論それも一方法さ。併し君、それは容易な事ぢやないよ。さうなれば折角あれまでにやつて來た友愛會は破壊されるか横道に外れるかして仕舞ふだらう。それでは將來のために非常に悪い』

『そりや勿論、友愛會が改革が出来ればそれが第一さ』

『どんなに厭な事があつても、じつと眼をつぶつて、君等は辛抱してそれをやらなくちやいけない。君等の決心が決まれば鈴木氏はそれを厭とは云はないよ。』

『さうだ。どうしてもねえ、それが僕等の責任だし運動に對する忠實な道だらう。』

『だが、それに就ちや何れ、久留と酒井と棚橋と君と僕とで一度根本的に冷靜に相談しようぢやないか。それは運動の上にも最も重大な事だ。君等で具體的な改革案を作つて見給へな』

『さうしよう。だけど棚橋君は君どうだね、もう檢事をやめて、友愛會に入る決心がついたのかね。……所謂人民の中にさ。』

でやつた相だよハ、ハ、ハ、

『ハ、ハ、ハ、そいつあ痛快だ。棚橋君のやり相なこつたねえ』

『全くあいつらしいやり方さハ、ハ、ハ、』

初めは馬鹿に元氣で、中頃は馬鹿にしめつぽかつた二人の話も、これまで來ると又快活になつて、二人は元氣よく大きな聲で笑ひ合つた。木の上にチクタクやつてゐた置時計の針がもう十五分で明日に入る處であつた。麻生は、その針を見ると驚いた様に立上つた。

『遅く來て失敬しやつた』

『もう歸るのか』

『もう失敬しよう、十二時だ』

『ほうもうそんなになるかね』

野坂もビール箱から立上ると、閉ざれてゐた硝子窓を開けた。すると、晩春の夜更けの生暖いそゝる様な空氣が、そこから流れ込んで來た。

『こゝは君夜は全くいよ。一寸來て見給へい、景色だ』

野坂は窓に立つて外を眺め乍ら夢見る様に云つた。麻

『うむあの男は決心して仕舞へば猛進するんだがね、決心するまでには可成手間がとれるんだ。只時の問題さ。何しろ國におふくろがあるんでね、先生少々弱つてゐるらしいんだ。併しもう裁判所もよく厭になつたと見えて、やつて來ては、こぼしたり、憤慨したり、罵倒したり昂奮したりしてゐるよ。そしてあんなところでも長く居る間には、段々生活も安全になつて來るし、その空氣がくされついて來て、厭々ながらも棄てるのが惜しくなるから、早く足を洗はないと危険だと白狀して居たつて。先生のところによつて來る奴は事情に依つて大抵不起訴にしてゐるらしいが、去年の暮に先生の手ひつか、つた高利貸はこつぴどくやられたらしいぜ』

『ハ、ハ、ハ、そいつあ痛快だねえ。先生のこつたから随分こつぴどくやつけたらう』

『その高利貸の奴が又君徹底的な奴でね、貸金を取立てねばならんから、暮の幾日かを繩をかけた儘でい、から出して呉れつて、手を合はして棚橋を拜んだ相だ。そいつを見ると棚橋の先生烈火の様に怒つて、そ奴の頬ぺたをびしやりと一つやつつけると、その儘未決にぶち込ん



生も彼の後ろに立つて、そこから、窓の下に広がる不忍の池の方を見やつた。池の周囲にとぼつてゐる無数の電氣が夜の闇に包まれて、菊の花の様に輝いてゐる。遙か彼方に聳え立つた廣告塔の赤や青の電氣が忙し氣に明滅して夢の様に闇に浮き出てゐる。

『君、岡上は全くのコスモポリタンだね。今夜は君、岡上の手料理のコスモポリタン料理を食はせられた。なかなかうまいよ。先生此頃はもう米を食はないんだ』

『へーさうかね、岡上君は全く變つてるよ』

『先生頻りにカウカサスやヴォルガの邊に行つて一緒に暮さうぢやないかつて云つてるんだ。ヴォルガの河岸の春は全く堪らなく、らしいね。僕も露西亞は世界中で一番好きな國なんだから、行つて暮したいんだがね、併しいざ實行となるとねえ……君の洋行はどうだ。家の方との相談はもうついたのかい。それにしても友愛會の方が何とかうまく行かなければ行くわけにもゆくまい』

『さあそれさ、家の方は大體話をついたんだがね、友愛會の方を何とか改革して、棚橋君が入つて呉れなければどうする事も出来ないわけさ』

『さうするとまあ秋頃になるね。君はロンドンに居るだらう』

『うむ、さしあたりロンドンに居る事になるだらう。兎に角英吉利の労働運動を徹底的に研究して見たいと思つてるんだ。出来るだけ中にもぐつてね、それから佛蘭西から獨逸、露西亞にも入れたら入つて来るつもりだ』

『實は僕にも新聞社の方で話がないでもないんだがね、併し、僕は、今日日本を離れたくない様な氣がするんだ。もう少しこつちで仕事をしてそれから行けたら行きたいと云ふ氣がするんだ。もう日本も何とかなるよ。又ならせなくぢやならない。近頃の様に物價が騰貴して来れば、ただでは濟まないだらう。ストライキも此頃はちよいちよい起り始めた様だし、兎に角、君が行つたら僕は後に残つて一生懸命にやらう。友愛會の方の事は何とかなるよ。君もむかうに行つたら、あつちの事情を出来る得る限り知らして呉れ給へ』

『うむ、それは出来るだけやるよ。だがね、近頃、少し警察の方がうるさくなつたんだ。刑事が時々やつて来るよ。旅行免狀は大丈夫だと思つてるがね』

窓に腰かけて外を眺めてゐた。下の方から、麻生の聲が

『さよなら』

と、云つた。窓の上から野坂の聲がそれに應へた。麻生の姿は闇の中に呑まれ、野坂の姿は窓の中に隠れ、暫くすると、只一つ明るく残されてゐた野坂の窓の明りも消え失せた。

## 六

『そりや大丈夫だらう。全く日本は馬鹿氣てるさ。例の社會評論ね、あれをデモクラシイと云ふ表題にして大いにやらうぢやないかつて、此間から主張したんだがね、皆、デモクラシイなんて危険な表題をつけたら一度に發賣禁止だつて、あの計畫はおぢやんさ』

『何とかして僕等の手で新しい雑誌が出したいもんだねえ。(今でこそ社會主義の雑誌や著書は棄てる程あるが、大正七年當時は、社會主義の著書も、雑誌も殆ど皆無であつた)』

『今に出るよ』

『今にねえハ、ハ、ハ』

『やあもう一時だ。又話し込んぢやつた。それぢや失敬する。今度の水曜には……』

『よし、それまでには僕の仕事も仕上げて行くよ。我々の會合も出来るだけ有効に組織的にやらう』

『よからう』

『ぢや失敬』

『失敬』

纏て、麻生の姿は又もとの廣場に現れた。野坂は未だ

私はいきなり、此物語の眞先に、上野の山奥にある文明から忘れられた様な不可思議な西洋館や、コスモポリタン料理や、ルバートシカや、レーニンの演説や、池の端のバラック式アパートメントや、さては、何とも得體の知れない三人の青年を連れ出して、甚だ突拍子もない世間とかけ離れた事を喋らせて仕舞つたが、これは決して、ありもしない事をこしらへて讀者諸君を煙に捲いた譯では毛頭ない。大正七年……その頃は日本の大小資本家共が、戰爭が惹起した好景氣に有頂天になつて、金だ金だ金だ、と狂氣の様に金の尻を追つ掛け廻し、その掠奪したあぶく錢を湯水の様に使ひ棄て、金持萬能の夢に酔ひ



しれてみた……その頃の東京の眞中で現在にあつた事なのだ。私の今書いてゐる事は物語とは云つても、小説と云ふ譯ではない。日本に於ける大正七年から八年にかけての社會運動の黎明期を、出来る限り、事實に立脚して記録して行きたいと云ふのが希望なのである。けれ共、單なる記録では、事實は正確であつても、その頃の生き生きとした時代の氣持が現れない。私の希望は、單に記録に止まらず、その時代に生きてゐて、少くとも黎明期の運動に首を出した人々の氣持も現したのである。それであらう、上野の西洋館やコスモポリタン料理やバラック式アパートメントも出て來た譯なのだ。

私は此物語を二編に分けて、第一編に、日本に於ける黎明期の扉を破つた、大正七年八月前後の状態を描き、第二編を、浪人會對吉野博士の立合演説に其端を發した、所謂インテリゲンチアの勃興時代即ち學者が奮起して創つた黎明會、それに續いて、續々として蜂起した諸大學の學生の運動状態を描きたいと考へてゐるのである。それで勢ひ、此物語の中に出て來る人物も非常に澤山な數にのぼるであらうし、そして又その人々は、現在

如何なる方面かに活動されてゐる人々なので、その人々を筆の上のほせるのは甚だ心苦しい次第であるが、私はたゞ自分の心に出來得る限りの正直と公平とを誓つて筆を進めて行くつもりである。そして又、私自身の幾分心強く思ふのは、過去に於て、私の知つて來た是等の人々に對して、今はもう何等の悪意も持つてゐないと云ふ事である。

扱て、此物語を進めて行く上に、……勿論私がくだくだしく書き立てなくとも、未だ遠い過去と云ふわけでもないから、讀者諸君は十分御記憶の事とは思ふが……私は此あたりでこくかいつまんだ、その當時の世界並に日本の形勢と云つた様なものを簡単に述べて置いた方が便利だと思ふ。

世界大戦は一九一四年の六月二十八日、ボスニアの首都サラエボに於て、オーストリア帝國の皇太子が一青年のために暗殺せられた事に端を發した。オーストリアは其煽動者をセルビアであるとなして、同年七月二十八日同國に向つて宣戰したのである。ロシアは七月三日勅

員令を下し、八月一日、ドイツはロシアに對して宣戰した。そして其翌日にはドイツ軍はフランス並にベルギーに侵入した。更に續いて英吉利も亦八月四日には獨逸に對して宣戰を布告した。戰爭の進展するに従つて歐羅巴の殆どあらゆる國は、聯合軍側か獨逸側かにくつついて戰爭に参加した。亞米利加が戰爭に参加したのは、一九一七年の四月であつた。その年の三月には、露西亞に革命が起り、其年の秋には更にボルシェヴィキ革命が起つて露西亞は全く戰爭から脱却した。そしてその次の年の秋には獨逸に革命が起り、五ヶ年に互る所謂世界大戦は、十一月十一日の休戰條約が成るに及んで、全く終結したのである。

此未曾有の殺戮的戰爭の責任や原因に就ては、種々な議論がなされた。併し乍ら其の因を最も根本的に又最も赤裸々に論ずるならば、それは要するに、人間の慾の皮が突張り過ぎて、お互同志が残酷な喧嘩をやつたに過ぎない、と云ふのが至當であらう。只人間の世界では、他の動物の世界等と異つて、慾の皮の現れ方も簡單でない。慾の皮の上には最らしい理窟がつけられてゐる。そ

の理窟の最大なるものは帝國主義と呼ばれ國家主義と稱へられるものである。近代に於ける慾の皮は此國家主義或は帝國主義と云ふ文字の上に人間の良心を誤魔化して來た。皆に誤魔化して來たばかりでなく、それは崇高な人間の理想或は道徳であるかの如くに云ひなされた。個人個人に於ては利己主義と云ふ言葉は嫌はれてゐても、それが一度國家の利己主義と云ふ事になると、無批判に無條件に崇拜される有様であつた。然し乍ら、所謂國家的利己主義なる言葉の内容は極めて複雑であり曖昧である。國家的利己主義なる言葉が、果して全國民の利己主義であるか、其利己主義の報酬は全國民に平等に分たれるかと云ふ事になると大なる疑問である。

社會主義者の或る者は、今日の國家を以て資本家の國家であるとなし、又今日の國家間の戰爭を以て、資本家が利益を獲得せんがために企圖する處の戰爭であるとなし、既に、世界大戦の勃發せんとする時、國際社會主義者の一團は、ブルツセル市に集合して、國際社會黨臨時大會を開き、戰爭反對の決議をなしたのである。大戦の勃發と共に所謂愛國者のために暗殺せられたチヤン・ジ



ヨールスが雄辯を揮つて、戦争反対を絶叫したのも此時であつた。此論法を以てすれば、今日の國家を代表し戦争に依つて最も其利益を受くる者は資本家階級と云ふ事になり、資本家と反対の側に立つ處の労働者は全然之と反対の立場に立つ事になる譯である。私は社會主義者の此議論の當否を論じようとは思はないが、只、世界大戦の結果として生れ出した結果を見る時に、此議論の事實である事を承認せざるを得ないのである。戦争が始まつた。物價は騰貴した。資本家は莫大な金を獲得した。労働者は生活難に追はれて來た。ストライキが起つた。暴動が起つた。そして遂に革命が成就された。而も、その革命に依つて資本家は倒れたからずんば、非常に其勢力を失墜するかした。そして其代りにむくくと擡頭し來つたのは労働者階級である。昔、國王や貴族が、封建制度と云ふ形で國家を代表し、所謂國家の利己主義を彼等の一身にあつめてゐた時、所謂人民は恰も今日の労働者階級と同じ立場に立つてゐた。そして、國王等の利己主義が極端に達した時、彼等は人民のために倒された。今日の形勢は、其國王や貴族の代りに資本家が其位置に

立ち、人民の代りに労働者階級が其位置に立つたわけである。只今日の資本家等は、自己の慾望を満たす戰略に於て、昔の國王や貴族よりも二倍も三倍も巧妙である。昔の國王や貴族等は、國家の外に立つて露骨に専制ぶりを發揮したが、今日の資本家等は、深く國家の内部に隠れて、自己の慾望を満たすためには極力國家を利用するのである。一例をあぐれば自分等が富を蓄積する場合でもその名目は國富を増すためだと稱するのである。處が如何に國富が増されても労働者階級の富は少しも増されないのでから可怪しい。そして、彼等は又自分の正體を見現さない様な宣傳を、あらゆる國家の機關を通じてなしつ、あるのである。戦前に於ける國際社會主義の運動が破綻したのは、要するに、各國に於ける此巧妙なガンヂガラミの資本家の宣傳が、一般國民の間に又労働者階級の間にさへ効を奏してゐたからである。

戦前に於ける、資本主義の慾望は、帝國主義と云ふ名目の下に世界各國を風靡してゐた。實際今にして考へれば、滑稽の極みであるが、其頃人類の世界には『武裝的平和』と云ふ言葉が流行してゐた。……私は此言葉を思

ひ出すたびに如何に人間が虚偽と偽善に執着する動物であるかと云ふ事を痛切に感せずにはゐられない……帝國主義と、武裝的平和實に意味深長な言葉であり、又絶好な組合せである。帝國主義と云ふ言葉の中には大なる矛盾のある事はさきにも述べた通りである。一國の内部には、労働者階級と云ふ、帝國主義に依つて徹底的な不利益をこそ受くれ、毫も利益を受けない一階級が存在してゐるのである。其利益と立場の全然相反する二つの階級をひつくるめて帝國主義と云ふもの、中にぶち込まうとするのだから全くの虚偽である。併し乍ら戦前に於ては、未だ國家の支配者の殆ど悉くは此虚偽と矛盾とが破綻せずに甘く誤魔化されて行くと考へてゐたし、労働者階級も亦彼等の巧みな宣傳に誤魔化されて、帝國主義の渦の中に巻き込まれてゐたのである。さてこそ戦前の世界は、帝國主義の全盛を來し、武裝的平和と云ふ、愚にもつかぬ矛盾極まる言葉が流行してゐたのである。戦争の責任は獨逸にありとする者が多い。併し乍らそれは極めて皮相な見解であつて、毫も眞實をうがつものではない。我々は最早現象の原因をそんな表面的な形式

的な事に求めて満足する事は出来ない。戦争の原因は戦争に加はつた全部の國に存したのである。武裝的平和と云ふ矛盾した言の中に存したのである。而して、帝國主義だとか、武裝的平和だとか云ふ現象は何處から生れたかと云へばそれは要するに資本主義の中から生れ出した現象に過ぎない。そして又資本主義なるものは其強大なると弱小なるとの差はあるにしても、當時に於ける世界各國の何れにも存在し、其國を支配してゐたのである。若し獨逸に責任があるとすれば、それは當時に於ける人類がかつてゐた處の資本的帝國主義と云ふ列國共通の疾患を、最も有力な形に於て代表して居り、従つて其行動が最も積極的であつたと云ふ事に過ぎない。獨逸は科學の國と稱せられ、戦前に於ては學問的には全く群を抜いてゐた。獨逸は理論的な國であると私共がよく耳にしたところである。併し乍ら、其科學的知識を誇り、眞理の探求に自慢する獨逸が、何故に今日の様な有様になつたのであらうか。私は、眞理を探求すると稱し、科學に仕ふると稱する學者等が、甚だ鹿爪らしい尤らしい顔をしてゐるのを知つてゐるが、私は其人々の顔



を見る度毎に何となく滑稽な感じを起さずにはゐられな  
い。何故なら、あんなに眞理だ科擧だと云つて大騒ぎを  
して、學問は妥協を許さず等と云つて威張つてゐたその  
獨逸の學者の誰もが、あの大戰前に於て、今日ある事を  
豫言した者は一人もないではないか、私は、此頃、非常  
に尤らしい顔をした學者や何かの顔を見ると、人間の愚  
さと云ふ事を痛切に感じて、一種の皮肉な悲哀を感じる  
のであるが、實際人間は、人間同志の關係の事になると  
全く盲目である。『慾に目がくらむ』と云ふ諺があるが、  
慾と自惚に眼のくらまぬ人間は殆どないであらう。一度  
慾と自惚に眼がくらめばお先は眞暗である。

世界戦争を通じて皮肉な事が三つある。その一つは、  
國際社會主義者が非戰論を稱へた事である。その二は、  
獨逸の政府がリーブクネヒトを監獄に投じた事である。  
その三はカイゼルが自國を通してレーニンを露西亞に歸  
した事である。

國際社會主義者の主張が通つて、あの世界戦争が起ら  
なかつたとしたらどうだらう。今頃ボルシェヴィキの  
露西亞が出来てゐるであらうか。獨逸が今の様になつて

とつて譲らなかつたからである。だが、リーブクネヒト  
を所謂非愛國者として牢獄に投じた結果はどうなつた  
か。獨逸は敗れた。革命が起つた。カイゼルは逃げ出し  
た。當時の愛國者等は影をひそめざるを得なくなつた。  
そして今は自分の國に脊負はせられた賠償金が支拂へず  
に、佛蘭西から踏み込まれて、借金の代りにルール地方  
を占領されて文句も云へない始末である。かうなると、  
どつちが愛國者で、どつちが賣國奴であつたか全く分ら  
なくなつて來ざるを得ない。カイゼルもあの當時、愛國  
者面をするヒンデンブルグだとかランゲンドルフだとか  
變に物騒な名のついた連中の云ふ事なぞきかずに、彼の  
所謂非愛國者たるリーブクネヒトの云ふ事をきいて戦争  
など始めずにあたら、あの天井を向いた鬘をひねり上げ  
ながら、今頃は未だ地獄の上を威張つてのそくと歩き  
廻つて、多くの人間に頭を下げさせてゐる事が出来たか  
も知れない。

カイゼルはたゞにリーブクネヒトを監獄に投じたばか  
りではない。御丁寧にもレーニンをわざ／＼列車を仕立  
て、露西亞に入れてやつた。彼は彼の所謂バイキン繁殖

あるであらうか。その他の國に於ても今日の如く勞働者  
階級の勢力が擡頭してゐるであらうか。これは大なる疑  
問である。……勿論、國際社會主義者の人々が自己の意  
見の通らない事を承知の上で、ただ宣傳や策謀のために  
やつたのなら別であるが。併し恐らくそればかりではな  
かつたらう……あの世界戦争は前から述べて來た通り資  
本主義の疾患の結晶である。慾と自惚が極度に達した結  
果があそこに達したのである。達して破裂したのであ  
る。大抵物は、極に達する時、其中に毒を含んで居れば  
毒を吐き出して、自分の手で自分の咽喉をしめるもので  
ある。今度の世界戦争が丁度それであつた。そして自分  
で毒を出して自分を傷けたのである。革命を欲しない者  
は自ら別である。あの當時國際社會主義者の意見が通つ  
て、戦争が始まらなかつたとしたら、それは資本主義に  
突張りをかかつてわざ／＼倒れない様に立て、置くと同じ  
結果を産んだかも知れない。自然は極めて皮肉である。  
結果は以外な邊に生れる。

獨逸の皇帝やその政府はリーブクネヒトを非愛國者と  
して牢獄に投じた。彼は社會主義の理論に基く非戰論を  
力と危険性と傳染力とに就て、彼の御川學者の研究を聽  
取してゐなかつたと見える。プレストリトウスクで滅茶  
苦茶な講和條件をボルシェヴィキの脊にかつがせて有  
頂天になつたのはほんの東の間の事で、その次の年の秋  
には早くもそのバイキンが自國に傳染して、革命を起し  
て仕舞つた。

世界大戰の間には随分意外な事が起つた。普通の意味  
で云ふ國家を單位にした所謂敵にも味方にも、又勞資の  
階級を單位とする敵にも味方にも、其當時の意思や豫想  
に反する結果が随分澤山生れた。併し乍ら其意思や豫想  
に反して惹起された結果も、其は其意思や豫想が淺薄で  
あつたから反對な結果が生れた丈であつて、今になつて  
考へて見れば、其生れた結果は極めて當然な合理的な原  
因に依つて裏づけられ、結果に外ならぬのである。

我々は今度の戦争に依つて痛切に次の様な事を感じ  
る。

人類は全體として生きて行かねばならぬ。そして又自  
然は人類を全體として生きて行く様に生れつかせたの  
だ。けれ共悲しい事には自然は人類を全體として生きて



行く様に生れつかせたのだ。けれ共悲しい事には自然は人類に全體と云ふ絶對性を與へ乍ら、其反面には個人に利己性を與へて生存競争をなさしめる。其結果は、人類の世界に階級が生れ、それが極端になつて來れば、人類の全體としての生活は破壊に導かれるに至るのである。人類は、生きて行かねばならぬ。破壊しては堪らない。そこで自然は人類に其破壊を免れて、よりよく生きて行ける様な二つのものを與へてゐる。其一つは全體としての生活を奪はれたる階級、即ち虐げられたる階級の自覺と奮起とである。其二つは全體としての生活を奪ひたる階級の自己破壊作用とである。此二つは、必然的であつて、如何ともする事は出来ない。そして此二つが時を得て、うまく拘合つた時そこに所謂革命が生れ、人類の世界は躍進するのである。革命はそれ自身の性質上、平等を生命としてゐる。即ち人類が全體として生きて行ける様になつた時、今日の所謂革命は地上から姿を消すであらう。然らざれば、如何に嫌悪しても革命は地上から其姿を消さない。

戦前に於て、資本主義は人類の平等、即ち全體として

の生活を極端に破壊し、人類の生存を危機に瀕せしめた。虐ぐる者と虐げらるゝ者とは極端な懸隔を生じて、不安が人類を蔽うた。社會運動は次第に勢を得て來た。それと同時に資本主義は、帝國主義の名に於て、其自壊作用を始めた。それが世界大戰となつて現れ、そのきほどの舞臺の上で、二つが抱き合つて、ここに革命を生んだのである。資本家階級は極度な痛手を負ひ、労働者階級は擡頭した。

これを要するに、世界戦争は、人類の全體としての生活を極度におびやかしたる資本主義が倒壊する第一の階段であつたのである。併し乍ら、資本家は勿論、之を倒さんとする社會主義者それ自身さへも、その當初に於ては、此冷やかな、併し人類に對しては涙のにじむ程あたかな自然の意思を知るものとはなかつた。そして、彼等はそれ々の立場に於て、血眼になつて騒ぎ立て、ゐたのである。けれ共、世界大戰は、人類の世界に、平等に近づくかんとする、社會主義の黎明を、極めて大膽に極めて率直にめぐみ與へて呉れたのである。

## 七

大正七年の四月、即ち此物語の始まつてゐる頃の日本はどうであつたらうか。露西亞に革命の起つたのはその前年の三月であつた。ケレンスキーに依つて代表せらるる第一革命は、非常な刺戟を我國にも與へたけれ共、未だそれ程ではなかつた。其年の秋に起つたレーニンに依つて代表せらるゝボルシェヴィキ革命は、官僚的國家主義者や資本家階級には露露の如き驚愕と恐怖とを與へた。併し乍ら、未だ日本の労働者階級の上にはさしたる表面的影響はない如く思はれた。日本の最大の労働團體たる友愛會の如きも澁澤男爵を顧問として、其廣大な邸宅の園遊會に招かれて雀躍してゐる有様であつた。全國の新聞は擧げてボルシェヴィキを過激派と稱し、露西亞を嘲けるに亡國を以てし、悪罵と嘲笑とは至らざるなき有様であつた。私は其當時或る新聞紙に、レーニンの宛字に『冷忍』と書いてあるのを見た事がある。そして過激派に特に悪感情を有せぬ者と雖も過激派政府の壽命の短命なるべきを豫言せぬものとはなかつた。

併し乍ら、殆ど國を擧げて、ボルシェヴィキに反對しつゝ、ある如く見えた日本の何處か片隅の方では、早くもボルシェヴィキの革命を理解し、それに同情し、共鳴する青年が生れつつあつた事は、讀者諸君の既に知られる通りである。上野の山奥や、バラック式アパートメントや、そこに現れた青年等は只一つの私の知つてゐる例であるが、恐らく、未だ日本の他の場所に於ても、幾つか、これに似寄つた光景が展開されつゝ、あつた事であらうと思はれる。

日本に於ける露西亞革命の影響如何と云ふ試験問題が出たとするならば、其答案の中に書き洩らせない面白い事がある。私は或る時、或る資本家から次の様な言葉を聞いた事がある。

『君、大正六年度に學校を出た奴は、どうも危険思想を帯びてゐて、上役の云ふ事をきかなくて困るよ』

此言葉が、果して露西亞革命と如何なる因果關係があるかは知らないが、帝國大學を調べて見ても、社會運動に首を突き込んだ者の數は大正六年度の卒業生が飛抜けて多いと云ふ事は疑ふ事の出来ない事實である。これが



事實である以上、資本家の愚痴も成程と首肯される譯である。

露西亞革命の影響は兎も角として、當時日本全國に互つて好景氣熱は旺盛を極め、大小成金は雨後の筍の如く輩出しつゝあつた。つまり我國の資本主義は、世界大戰を背景として、又舞臺として、猛烈な勢で發展しつゝあつた譯である。従つて、物價は非常な勢で騰貴し始め、大小成金の輩出と跋扈の蔭には生活難に苦しむ労働者階級が、漸く不満を感じ初めて居たのであつた。その頃の新聞を繰擧げて見ると、あちこちに労働者階級の、賃銀値上げのストライキが報ぜられてゐる。

成金の輩出や彼等の贅澤極まる生活振りと、物價騰貴が惹起した生活難に苦しむ労働者階級の貧窮とは、資本主義の社會に於ける極めて當然な對照である。併し乍ら、此當然な對照の間に所謂危險思想が生みつけられ、資本主義崩壞の芽がふき出されるのである。

此年の八月、我國の社會運動の黎明の膜を叩き破つたあの米騒動が起つたのであるが、此物語の始まつてゐる四月頃には、誰一人も、あの暴動が自分等の眼の前に

近く迫つてゐるのを感じてゐる者とはなかつた。併し乍ら、四月頃の日本の社會状態は極めて自然的に、極めて合理的に、而も急激な速力で、あの米騒動を惹起せしめるために進みつゝあつたのである。

あの露西亞の大革命が起る直ぐ前まで露都に駐在してゐた本野大使は、當時日本に歸つて来て、「露西亞には決して革命は起らない」と、確信ある態度で斷言し、その言葉が麗々しく新聞に載つてゐたのを私は今でも覚えてゐる。處がその舌の根の乾かぬうちに、あの革命が起つた。併し乍ら起つた後に事情を調査してみれば、そこには起るべき原因が十分に又極めて合理的に存してゐた事は、多くの學者等が、後になつて、尤もらしく報ずる通りである。

まあ、大正七年四月頃に於ける日本の社會状態は、八月の米騒動を惹起するために、全力を擧げ、全速力で突進しつゝあつたと云へば最も分り易いであらう。

戰爭の方面で云へば、七年の四月には亞米利加も聯合軍の方に参加し、獨逸は、佛蘭西方面に於ける攻撃もはかばかしからず、四年間の戰爭に、國內の物資を擧げて

消費し盡くし、國民は漸く、戰爭にうみ、労働者階級はそろ／＼不平を發して、ストライキを初めつゝあつた。併し乍ら世界の殆ど悉くは、此年の秋、獨逸に革命が起きて、あの頑強であつた獨逸があんなに脆く敗亡しやうなどとは誰も思ふ者はなかつたのである。只、聯合軍の地位が安固なるに連れて、日本等では、殆ど戰爭の事は忘れた様な形であつたのである。

八

本郷根津權現の前の坂をだら／＼と駈け下りて暫く行くくとあの廣い根津の電車通りに入る。その電車通りに側目もふらず、四本のレールを飛越して更に眞直ぐに進むと、今度は上野の高臺の方にのぼる廣い坂に出會す。すると、其坂の上り口の處に左右に開けた眞直ぐな通りがある。其の兩方に開けた通りの坂に向つて左側の通りは長さ二町位であるが、此通りは、汚穢な狭くしい貧民長屋の多い根津の町の中では、珍らしく清潔な靜かな通りであつた。此通りは例の大金持大地主である、渡邊治右衛門氏の大邸宅の崖下になつてゐた。全く其石垣は

廣大なもので、恐らく屋敷の周圍をぐるりと廻れば十數町はあるだらう。屋敷の中には芝生の美しい野原あり、鬱蒼たる森林あり池あり泉石あり、殊に其宏大な石垣の上の野原には、躑躅が密生してゐて、五月になると、その密生してゐる躑躅が紅白紫の花を咲かせて、庭はその爲に明るみ互り、すばらしい美觀を呈するのであつた。崖下の小さな家に住んでゐる者や道を通る者は、此偉大な石垣と其美しい庭とに暫くは見惚れて感嘆するが、さて暫く經つて我に歸ると、今迄の感嘆が今度は反動的に、いま／＼しさに變つて「チエツ」と舌打の種になるのであつた。

其通りの眞中頃の矢張り左側に、一寸した粗末な二階家があつた。その二階は例の偉大な石垣と相對して建てられてゐた。偉大な石垣と宏大な庭とは、此粗末な貧弱な二階家を上から威壓してゐるかの様に見えた。入口には戸の何時も外れてゐる門があり、その中は狭い路次になつてゐて、門の中には二軒長屋の建物が二つと、其二階家とがあつた。二軒長屋の方はどうでもよい。私の用のあるのはその二階家なのだ。此家は二階が六疊一間下



が六疊に三疊に二疊。處が不思議な事には二階の六疊も下の六疊も其天井には各二つ宛の電燈と瓦斯燈とを持つてゐた。此家に移つて來た人は最初、此不思議な天井を眺めて、しばらくは思案に暮れるのであるが、昔……と云つてもそんなに古くもない數年前、此家が淫賣屋であつたと云ふ事を聞いて、『成程』と首肯くと同時に、一寸厭な氣持になつて引越し氣分が湧き上るのである。つまり淫賣政策上廣い二つの室を狭く四つに利用した譯である。

だが、今は、もう瓦斯と電燈の一つ宛は廢物となつて昔の頽廢の名残りを止めてゐるばかり、壁には本棚が並べられ、床の間や柱にはマルクスやバクーニンやレーニンの寫眞が掲げられ、室の眞中には、室いつばいもあらうかと思はれる、大きな、併し極めて粗末なチャブ臺の様な机が置かれてあるのだ。此室を一人で占領してゐる様な不思議な机が果して何物であるか、何を意味するものであるかは臆て明かになるであらう。此家の玄關の柱には『麻生』と云ふ名刺がはつてあつた。つまりこれが麻生の住んでゐる借家なのだ。讀者諸君は多分記憶され

てゐるであらう。あの岡上の家で、岡上と麻生との間に話のあつたあの麻生の家なのだ。『水曜の晩は』と云つて別れた、その水曜の晩に彼等の同志が集まる家なのだ。『一寸氣付かれない家さ』と云ふその家なのだ。四邊には二階家がない。そして通りはひっそりしてゐる。少し引込んでゐるが、通りは見下ろされる。スパイを警戒するには持つて來いの家だ。毎週水曜日の夜になると時には十數人の青年が、何處からともなく姿を現して、此二階に集るのであつた。青年等が集つて何事を談じ何事を計畫し何事を密議するかは、此室を覗いて見ねば分らない。恰度今日は其水曜日だ。夕方から巧みに天井裏に忍び込んで、夜の來るのを待つ事にしよう。

## 九

七時頃には、もう四人の青年がその二階に集つて、大きな机を圍んで熱心に話合つてゐた。その中の一人は此家の主人公の麻生であつた。も一人は岡上であつた。彼は相變らず頭を半分傾け、コスモポリタンらしい恰好をし、好奇的な眼を輝かせてゐた。彼の大きなカバンは相

變らず、蛙を呑んだ蛇の胴の様に腹をふくらませて、机の上に放り上げられてゐた。そしてその古ぼけた、併し馬鹿氣て大きなカバンは知識そのもの、表現の様な暗示を與へてゐた。だが麻生と岡上とに就ては最早言葉を費す必要はない。讀者諸君は既にお馴染だ。

今一人は棒の様に眞直ぐな感じのする三十位な青年であつた。頭髮は短かく刈られ、頭は何處となく鋭くとんがり、其顔は瘦せて無愛相な粗朴な表情の中には、何處かに鋭い嘲笑的な笑みをふくんで、寸鐵人を刺す體の皮肉な警句が其うすい唇から突走つて出さうと思はれた。然し彼の全體の様子は何處までも眞正直で直線的で破壊的で、センチメンタルな要素等は何處にも見つからず飽くまで力強さを示してゐた。彼が着てゐる背廣の服……それも餘り似ついては居ないが……を脱ぎ棄て、労働服でも着たら、誰も彼を法學士だなどと思ふ者はなく、眞正銘の労働者だと云つても疑ふものは恐らくあるまい。處が彼は今檢事の玉子をしてゐるのだ。

彼はその名を棚橋と云つて信州の生れであつた。彼の家はどちらかと云へば貧困の方で、彼は學校を卒業する

までには幾多の苦勞を経て來た。彼は贅澤と云ふ事を全然知らなかつた。彼は京都の三高を出て東京の法科大學を卒業したのであるが、高等學校の最初には熱烈なる國家主義者であつた。それが何時の間にか思想的變化を遂げて、今では労働者階級の味方として社會主義の思想を奉じ立派な革命的青年となつてゐた。彼が麻生と知り合つたのは高等學校の一年の時であつた。彼等は知り合つてから最早十年近くになるが其長い歳月を、所謂苦しい時にも楽しい時にも、共に相抱いて暮して來たのであつた。そして今ではもう彼等の中は切つても切れぬ『くされ縁』になつてゐる。彼は大正六年學校を卒業すると直ぐに所謂『人民の中』に飛込まうとして種々計畫を立てたのであつたが、未だ秋に至らずして、その中繼の腰掛けを司法官に求めて檢事の見習をしてゐるのであつた。彼がそれを求めた理由は別にむづかしい譯があるのではなく、それなればなり易いのと、一つには、そこで法律と云ふもの、保守的階級防衛のからくりを研究する事が出来ることと云ふ點もあつた。併しながら彼の心は絶えず焦々として檢事の玉子の椅子に安定してはゐなかつた。そして



最近は早くも、労働運動の中に身を投ずる計畫を立て、  
ゐた。此點に就ては、あの上野の池の端のアパートメン  
トの三階で麻生と野坂との中に話があつた通りである。  
棚橋の紹介はまあこれ位にして置かう。これから此物語  
の中には、棚橋は主人公となつて始終出て来るのだが  
ら、讀者諸君は否が應でも棚橋とはお馴染になつて貰は  
なければならぬ。

今一人の青年はと云へば、未だ二十二三の所謂年少氣  
銳の若者であつた。顔は細長く、色は淺黒く眼は鋭く、  
そしてその槍の様に瘦せた身體は革命的昂奮を以てしや  
ちこぼつてゐた。彼は城北大學の學生で、此グループに  
入つて來てから餘り時日が経つてはあなかつた。彼は何  
時短劍を懷中に呑んでゐた。そして彼の口からは、革  
命や、暴動や、牢獄等の言葉が異常な熱を以て迸り出  
た。彼は笑ひさへしなかつた。笑ふ事さへ運動の前には  
墮落の様に思はれた。彼の兩眼は不自然にギョロ／＼と  
動きまはり、道を歩くにも『ハリ板』の様に堅く衝立つ  
て歩いた。

云はば彼は革命そのもの、様な恰好であつた。彼の眼

も、彼の聲も、彼の唇も、彼の手も、彼の足も、彼の肩  
も、寸分違はず、當時の社會主義者たり革命家たるの昂  
奮的法則に従つて動いた。そして其法則に従つて動かな  
ければ非常なる墮落の如く考へられたのだ。つまり彼は  
人間性を抹殺して革命家そのものになつたのだつたが、  
實際を云へば、知識階級から一夜潰に飛出して來る此種  
の昂奮的な過激革命家は眉唾ものだ。何故なら、彼等は  
學校を卒業し、結婚問題に逢着する頃になると、其懷中  
から短劍を取去り、其代りにハイカラな洋品店から買つ  
て來た美しいネクタイを胸に飾つて、爆弾を握る代りに  
ソロバン玉をはちくやうになるからである。そして此N  
君も亦、其水曜日晩から幾年かを経つた今日では、社  
會運動者の群の何處を探しても彼の名を探し當ることは  
不可能となつた。

けれども其夜は實際彼の懷中には短劍が呑まれて、彼  
の顔も骨も筋肉も革命的昂奮を以てしやちこぼつてゐ  
た。彼は棚橋の話すのを噛みつく様に聞いてゐた。

『裁判所なんて處あ保守思想の固りさ、元來法律で奴が  
何でも彼でも現状維持を目的として出來上つてゐるんだか

らなあ、そ奴に噛りついていりやあ……保守的になるな  
あ當然さ。そして法律神聖至上主義つて奴が、裁判官や  
檢事の頭を偉大な頭冥に作り上げて仕舞ふんだ。彼等は  
法律の爲めに人間が作られてる様に思つてゐるんだ。だか  
ら人間より法律の方が大切と思つてゐるよ。馬鹿々々しく  
つてお話にならんさ、ハ、ハ、ハ、ハ、

彼は突つ放す様にかう怒鳴つて更に矢繼早に、

『だから我々は先づ第一に保守的な官僚組織を破壊する  
必要があるんだ』

彼はさうまた怒鳴ると、彼の鋭い妙にすはつた眼を動  
かして、何をか思ひ見る様に沈思して疊の一點を見つめ  
た。

『裁判所は一方から云へば國家の權力を代表してゐるんだ  
から、保守的なのは當然さ。彼等は自ら反動の防壁とな  
つてブルジョアの法律が廢棄される其隙間まで正義の士  
を獄に投ずるのさ、彼等には理想もなければ生きた人間  
もない。たゞ形式があるのみさ』

岡上は冷やかに冷笑する様にさう云つた。

『勿論彼等は法律をブルジョア擁護の道具にしてゐる

さ、其法律を絶對的なものに祭り上げなきや自分達も危  
い譯だからね。だがおい棚橋、貴様も、もう檢事の玉子  
になつて追々一年になるんだが、唯物史觀に依つて裁判  
官たる事の甘味が出て來やしないかね。危険だぞ、嘴は  
黄色い雞つ子でも、變手古な古帽子を被つて、あの妙な  
ハツビ見たいなものを着て、高い處に腰かけて、人間を  
見下すやうになると、職業心理が出て來て、何とか理窟  
がつきやしないかね』

麻生は、にこ／＼笑ひながら磊落相にさう云つた。

『ふ、む何だか分らんぞ。俺も近頃少し可怪しいと思つ  
てゐるんだ。兎に角、檢事のコツも分つて來たし、此分で  
行けば先づ生活は安全と來てゐるし、それから、檢事を  
してゐても所謂知識階級の良心はやり様によつて満足出  
來るし、それからあの高い處から見下す時の氣持は一寸  
又格別だからなあハ、ハ、ハ、ハ』

『おい／＼何だか雲行が可怪しくなつて來たぞ、早く足  
を洗はせんと險呑だ。例の友愛會改革一件ね。此間の晩  
野坂と話し合つて近々君と一緒に相談する事になつてゐ  
るんだ。野坂はそれが片附けば暫く外國に行く心算らしい



が、君の檢事の生命も長くはないぜ。併し、飛出す前には考へる事は必要さ……」

「俺だつて飯を食はずには生きて居られんからなあ。それに、おふくろが困るのさ……」

「さうだらう。こいつは全く困りもんさ」

「學校を卒業したら、一度京都見物に連れて行くつて約束してあるんだがね。老人は君、俺の云ふ事でも本氣にしてるよ。可哀相なもんさ。それに學費を出してゐた奴が、何時の間にか、俺の近狀を聞き嘯つて、勞働運動なんかをやらせるために學費を出したんぢやないつて大見暮さ、ハ、ハ、ハ。そ奴におふくろが共鳴して親不幸、恩知らず呼ばはりさ。流石の俺も弱つてるんだ。貧乏と云ふ奴にはなりたくないもんだ……」

「おい／＼話が馬鹿にしめつぽくなつちやつたぢやないか。もう皆來さうなもんだ」

すると、其時、門の處に二三人の靴音がして、廳で玄關の格子の開く音がした。眞先に上つて來たのは野坂であつた、その後から又二人の青年が現れた。野坂は讀者諸君の知られる通りの優しい聲で、

「やあ遅くなつて濟まなかつたね」

と云つて室の中に入つた。あとの二人の中で先に入つて來た青年も亦同じやうな優しい聲で「やあ」と言つて一寸頭を下げ乍ら大きな机の前に胡坐をかいた。それから續いて入つて來た青年も同じやうに「やあ」と云つて一寸頭を下げると、机の前に胡坐をかいた。たゞ彼の「やあ」は前の二人とは著しく異つて、少し暖がれ聲の荒つぽい「やあ」であつた。

先きに入つて來た青年は其名を山名と云つた。彼は麻生とは同年生れで、山名と棚橋と麻生とは高等學校以來の友人で、彼等三人の仲は、謂はば切つても切れぬ「くされ縁」になつてゐた。彼は京都の生れで、名のある公卿華族の出であつたが、どう云ふわけだか彼の風貌の中にも性格の中にも思想の中にも、所謂由緒正しい華族の坊ちやんらしい處は微塵もなかつた。高等學校時代の彼は風采をかまはない豪放な様子をして演壇に立つてはどら聲を張上げてゐた。最初は棚橋と同じ様に幾分帝國主義的な思想を抱いてゐたが、彼も亦何時の間にか社會主義の思想を抱く様になつてゐた。彼は大學に來てからは

餘程性格の上にも變化を來した様であつた。相變らず汚い着物を着て、尻切の草履を穿いてそこいらを歩き廻つてゐたが、高等學校時代から見ると餘程無口になつて何時も何か考へ込んでゐると云つた風であつた。彼は無頓着の様でもあり又恐ろしく細心な様でもあつた。彼は決して自分の意見を先に云はぬ青年であつた。彼はどんな場合でも、自分の苦しい事を他人や友人に訴へる様な事はなかつた。彼は非常に強い人間なのか非常に弱い人間なのか一寸見當のつきにくい性格を持つてゐた。彼は何時も淋しい沈んだ不安氣な様子をしてゐたが、それかとて、今迄一度も庇古垂れる様な事はなかつた。そして何時の間にか浮き上つて彼のたゆみのない道を眞直ぐに歩いて行くのであつた。元來彼は温和な正直な温な性質を持つた青年であるのだが、彼の無口と其沈んだ思案深げな様子とは、彼を知らない者からは非常な策士で、もあるかの様に噂された。彼はいくらでも酒を飲んだ。そして人間でありさへすれば誰とでも飲んだ。棚橋や麻生やそれから其頃軍隊に入つてゐた岸井と云ふ所謂くされ縁の仲間、寄るとさはると、何時でも、このナマコの様

に不得要領な山名の事を心配したり罵倒したりして、今日こそはと、腕に擦を掛けて出掛けるのであつたが、山名の沈んだ顔を見ると、もう其意氣込も拔棄して、何の事はなく妥協せざるを得なくなるのであつた。柔よく剛を制すと云ふ言葉があるが、山名は其温和な無口な決して怒らない性格の中に無限の強さを持つてゐた。多くの者は彼の不得要領を罵り乍ら、彼の温和さに同情し乍ら、其實何時の間にか、彼の懐に抱かれて引張られて行つてゐるのであつた。棚橋とは全然反對な性格の所有者であつたが、二人共「あ奴には困つた」「あ奴には困つた」と云ひ乍ら、曳きすつたり曳きすられたりしてやつてゐた。流石に由緒正しい生れだけに、棚橋や麻生や岸井の平民振りとは異つて汚い着物を着てゐても、尻切草履をひきずつてゐても、何處かに争はれぬ、上品な迫らぬところがあつた。彼を生れるときから育て上げた彼の乳母は、何時も「うちの義鶴様は棚橋さんや麻生さんとはお生れが違ひますからねえ。あんな人達と交際してるとどうせ終ひにはろくな事はないですよ」と公言して友人連中を憤慨させてゐた。彼は、その頃は、學校を出て職にもつ



かず、下宿に寝ころんで夜になると、大學前の一高屋と云ふ『おでん屋』に出掛けて翌朝の二時頃まで、ちびり／＼と酒を飲んでゐた。その一高屋には其頃一人美しい娘さんが甲斐々々しく働いてゐた。だがその事に就ては何れゆつくり書く事にしよう。

今一人、荒つばい聲で『やあ』と云つた青年は、見るからに體格の頑丈な顔の野生味に満ちた青年で彼の鋭い併しどこかに馬鹿正直なところのある、あな／＼かな眼が顔の奥の方に輝いてゐた。彼は善を装うて紳士面をする底の青年ではなかつた。彼も大正六年に東京の法科大學を出て、今は辯護士をしてゐるのであるが、彼は多くの辯護士等が表面に錢の欲しくない様な顔をして裏面では悪癖に貪つてゐるのを唾棄して、彼は頭つから『俺は金が欲しいのだ』と宣言して、取るべき處からは辛辣に金を奪つてゐた。それで彼等の仲間では、半ば彼を怖れ半ば彼を嫌つて、彼奴は悪黨だと云つてゐたけれども、名も知らぬ憐れな犯罪者に對して彼がこぼしてゐる涙に就ては餘り知る者がなかつた。彼の性格は飽くまで負けぬ氣で反逆的で豪放で深刻であつた。たゞ、いくらか缺け

てゐる點は知識であつた。彼がこんなにして謂はば革命運動に参加してゐるのは、深い理論からと云ふよりも、彼の感情的な反逆的な性格からであつた。彼には東洋人的な血が多分に流れてゐた。彼は其頃、彼の家庭彼の親戚の猛烈な反對の中にどちらかと云へば身分の低い一人の娘を彼の腕に抱いてゐた。彼はその娘のために山の様な借金を背負ひ極端に貧乏してゐた。彼は心の底から其娘に戀してゐた。そして彼の周囲と貧乏とに對して猛烈に戰つてゐた。彼も亦世間普通な所謂ブルジョアの社會に同化され得ない青年の一人であつた。

それから間もなく、又二人の青年が引續いてやつて來た。その中の一人は、芋蟲の様な恰好をした青年で、其顔は快活そのものと云つた様な表情をしてゐた。彼は新聞記者をしてゐたが、中々の雄辯家で、皮肉や諧謔を弄する事に長じてゐた。彼は外務省の記者俱樂部で麻生と知合ひになつて此グループの中に入つて來たのであつた。それから今一人は此青年とは全然異つたタイプの青年で、ひどく生眞面目な嚴格な精神家であつた。彼も同じく新聞記者であつたが、彼には古い新聞記者によくある

型の、何處かに國士と云つた風のところがあつた。當時彼は大倫會と云ふ國粹的な會の會員であつたが彼も亦外務省の記者俱樂部で麻生と知り合になつて此グループに入つて來たのであつた。だが此二人に就ては茲に深く紹介する必要はあるまい。何處の革命戰の途上に於ても多くの例がある通りに、彼等も亦一時の昂奮から煙の如く現はれては煙の如く消え去る部類の人間であつたから、暫くは熱心に會合にも出て過激な議論に熱中して夢を見る。だが暫く經つと次第に會合に出る度數が減ずる。何時の間にか出なくなる。その姿が消える。そして、其昂奮と良心の名残りが幾度かの手紙になつて配達される。その結末は『虐げられたる者のために奮闘を祈る』と結んである。かくてその手紙も何時の間にか來なくなる。彼等は焰の如く現れて煙の如く消え去るのである。私はよく革命の老戰士達が若い青年の運動の中に飛込んで來るのを見て、『あの男はよい』とか『物になる』とか云つて心の底から囁目して悦んでゐるのを知つてゐる。社會から迫害されて味方の少い淋しい生活をしてゐる是等の人々はいちらしい程味方を求める。尤も千萬な事である。

けれども、一時の昂奮の潮に乗つて『明日の革命』を信じそれに酔ひ乍ら、雨後の筍の様に輩出して來る是等の革命兒の幾何が、幻影の消え去つた後に残るであらうか。『物になる』と思つた者、『立派だ』と思つた者、それも一時の夢、昂奮の暴風が過ぎ去つた後には、や、もすると、老戰士たちは自分の身のまはりにくつついてゐる者は相も變らず自分の影だけであることを發見して、無限の淋しさを感じるのである。

昂奮もさめ明日の革命も幻滅し、その生活の中に渦巻く苦しい事も厭な事も、或は苦しさにつけ込む誘惑も、はてはあの高い陰鬱な監獄の煉瓦塀も通り越して、尙且つ民衆と離れずに、鐵の様な意思と無限の忍耐とを以て其中に身を棄て得る様になつてこそ、眞實の革命家の列に加はり得ると云ふべきであらう。

それはさうと、狭い六疊の室にはもう九人の青年が集つて、大机を取巻いてゐる。机の上に置かれた置時計の針が八時を指さうとしてゐる。窓の外はもうとつぷり暮れた。あとはもう來さうにもない。賑かな雑談のとぎれを見て、麻生が口を切つた。



『今日は松任と赤松は来られないと云つて来てるし、もうこれ位だらう、そろく始めようぢやないか』

そこで、賑かな雑談は止んで、九人の青年は少しあらたまつた形で、大机を取り圍んで坐り直した。そこで又麻生が口を切つた。

『岡上君、君から始めて呉れ給へな』

岡上は、少しはにかんだ微笑を浮べ乍ら、彼の知識の袋を取り上げた。そしてそのふくれたカバンの中から、幾つかの厚く綴ぢられた原稿用紙を取出した。

## 十

岡上は原稿用紙を見詰め乍ら、熱のある、併し極めて批評的な口調で始めた。皆は、彼の方を見詰め乍ら熱心にそれを聴き始めた。

今夜は、僕の最近手に入れた露西亞革命に對する情報を綜合して、僕の作り上げた一つの觀察を述べようと思ふのであります。別に題を設ける必要もありませんが、その云はうとする骨子は、『革命は如何にして生れ、如何

にして成されるか』と云ふ問題と、『レーニンの人格は何を意味するか』と云ふ問題であります。最近所謂過激派はブレストリトウスクに於て獨逸から屈辱的條件を強ひられて講和を結ばんとし、トロツキーは之に對して、猛烈な抗議をやつて居た様でありましたが、レーニンの意見は自ら別個で、彼は獨逸が主張する條件の如きは殆ど意にかけてゐないのであります。彼は國民が何を眞に要求してゐるかを洞察してゐます。そして此戦争が社會主義革命に對して如何なる機會であるかを知つてゐます。彼は露西亞に烽火を擧げた勞働者革命が、世界の勞働者に如何なる響を與へるかを知つてゐます。彼は獨逸に於ても、英吉利に於てもそこには第四階級が控へてゐて、此機會に必ずや何事かを企圖するであらう事を固く信じて居ります。彼は今回の世界大戰を動機として烽火起すべき、世界的社會革命の必然を信じて疑はないのであります。だからして、カイゼルに依つて露西亞の上に課せられつゝある講和條件の如きは一時の架空事であつて、それは曠て夢の如く消え去る運命しか有してゐないと信じてゐるのであります。只最近聯合國は自己に不利

となつた露西亞の形勢を逆轉せしめんと欲して、反動革命派を極力援助しつゝ、ありますが、私の觀察を以てすれば、露西亞の特殊なる地勢と、露西亞の國民性とその國民の急迫してゐる欲求とを深く洞察して、大膽に率直に之が實現を期しつゝ、ある過激派は、決して倒される氣遣ひはないと思ふのであります。又今日の聯合國の實情は決して徹底的に反動革命派を援助すべき實力を有していません。反動革命派に至つては、レーニン一派の共產黨の如き、主義に對する眞の熱情と、鐵の如き意思と大膽とを有してゐず、民衆が何を要求してゐるかを知らぬ徒輩であつて、彼等は過去に於ける專制時代の榮華の夢を忘れ兼ねて、蠢動する連中でありますから、決してレーニン政府を倒す實力を有してゐないのであります。ケレンスキーは西歐にかぶれた腹のない一ハイカラに過ぎません。彼は露西亞人であり乍ら、露西亞の何ものたるかを忘れてゐる輕薄才子であります。コルニロフ・デニキン・ウランゲル・コルチャツク・セミヨノフ等は、專政時代の遺物に過ぎません。民衆は最早彼等に欺かれる程馬鹿ではありません。

露西亞の現勢に關する事はこれ位にして置いて、革命の事に移ります。

さて、我々が、我々の歴史に現れた革命と云ふ現象を觀察する時、其革命には三つの要素が必要であることを知るのであります。即ち其一つは、機會であつて、其二は、次の時代を指示す處の指導的思想であり、其三は其指導的思想を旗印として、生れたる機會を率直に大膽に巧妙に把握する生きた人間の力であります。第一の機會と云ふ事に就ては私がこゝに詳細に述べるまでもない事であります。彼の佛蘭西革命に於ける機會、今回の露西亞革命に於ける機會がこれを現實に物語つて居ります。或る社會が革命を必要とする社會であるならば、其機會は必然的に起つて來るのであります。又必然的に起つて來ない様な状態であるならば、未だ其社會は眞に革命の必要にまで切迫してゐないのであります。佛蘭西革命の機會は專制君主が必然的に到達すべき、人民に對する極度の租税の苛斂誅求、従つて人民の饑餓に迫つた事が其機會となつたのであります。今回の露西亞革命に於ては古い專制君主と資本主義とが合體して革命の機會を生み



出して居ります。過去百餘年の間、露西亞の官僚は革命の標的でありました。而して、今回の戦争に於て、其官僚は自ら包含してゐる弱點と醜惡とを國民の前に暴露して、革命を惹起すべき一つの機會を與へました。そして又、新しく露西亞内部に勃興しつゝ、あつた資本主義は早くから發達し來つた西歐の資本主義の道伴となつて、今回の戦争に加はり、資本主義の正體を暴露するに至つたのであります。專制君主にせよ、資本主義にせよ、其弊害の現はるゝ處は毫も異らないのであつて、等しく民衆に對する搾取であります。一方に於て宮廷や貴族や資本家の富有がある時、他方に一般人民や労働者階級の貧乏が之に相對するのであります。而して、宮廷や貴族や資本家の搾取が極度に達した時、人民や労働者の上には、饑餓が迫つて來るのであります。搾取の方法は種々あります。專制君主の場合に於ては主として租税の誅求であります。又、資本主義の場合に於ては其方法は極めて複雑であつて又極めて巧妙陰險であります。貸銀制度は其根本であります。或る場合には國家の名に依つて國際戦争を惹起せしめ、これを機會として其搾取を恣にする

は、今回の戦争が現實に立證してゐる處であります。資本主義の社會に於ては其對照である労働者は、極端な饑餓に瀕せしめられる場合が多いので、その通常の場合と雖も生活は極度に困難なのであります。殊に好景氣不景氣の場合には物價の騰貴失業等に依つて生活の窮迫は極度となり、ために社會的不安が惹起されて暴動となる可能性があるのであります。何れにせよ、人民や労働者の饑餓は、革命となる素質を有する暴動の母であつて、佛蘭西革命の場合にも今回の露西亞革命の場合に於ても先驅するものは食糧を要求する暴動であります。只食糧を要求する暴動を惹起せしめる迄の原因、徑路に就ては、極端なる租税の誅求に端を發する事もあるであらうし、物價騰貴や、失業に依つて起される事もあらうし、今回の如き戦争に依つて起される事もあるのであります。只我々の注意すべきは、斯くの如き暴動の惹起は、民衆が飢ゑざるを得ざるに至つた場合であります。即ち其原因が極めて唯物的であると云ふ點であります。而して斯くの如き動機が生れるのは極めて必然的であります。專制君主と云ふものがある以上、又資本主義と云

ふものがある以上、其動機は必然的に生れるのであつて、是等のものは其本質の中に必然的に其動機を生み出すべき性質を包含してゐるのであります。たゞ是れを抑壓する可能性を有するのは、彼等自身ではなくして、それは彼等と反對側に立つ人民或は労働者の力そのものであります。適當に組織された人民或は労働者の力が、專制君主なり、資本主義なりの本然に有する搾取性を牽制して居る場合であります。例へばデモクラシーの發達してゐる國に於ては、此機會を生ずべき可能性が少く、露西亞の如き專制國に於ては、斯くの如き機會を生ずる可能性が多く且つ其機會は深刻であります。

次に、若し、斯かる機會が來て暴動が起つたとしても、次の時代を代表すべき思想、即ち現在の不合理なる社會を左右して居る思想に取つて代るべき、適確な思想が確立されてゐない時には、暴動は單に暴動として終らざるを得ないのであつて、革命とはならぬのであります。例へば、古來から我國に屢々惹起された百姓一揆の如きは、それに對する指導的思想がなかつたからして、一揆は單に一揆として終らざるを得なかつたのであります。

す。之に反して佛蘭西革命の場合には、それに對する指導的思想が不完全乍ら確立されてゐて、革命以前に於て、既に廣く宣傳されて居りました。其モットーは自由平等であつて、モンテスキューの如き又ルソウの如きはその思想を代表する人物でありました。而して今回の露西亞革命、殊にレーニンに依つて代表される、ボルセヴィキー革命はマルクスに依つて代表される、共産的社會主義を其指導的思想としてなされたのであります。古來、此共産的社會主義の思想程、次の時代を明確に回答してゐるものはなく、そこには、人間の憧憬するユートピアの實現が約束されてゐるのであつて、而も其方法は、極めて科學的なのであります。此意味に於て、社會主義革命の指導的思想は、最も完全に近いものと云ふ事が出來ます。

第三に、革命に對して、殊に現在に代るべき次の社會を建設しようとする理想を抱いてゐる場合、重大なる要素となるべきはその機會を利用して社會革命にまで導き得る指導的思想を體得した偉大なる革命家であります。これがなければ、暴動は單に暴動として終るか、然らざ



れば不徹底な鶴的革命に終らざるを得ないのであります。其明確なる指導的思想と、その思想を率直大膽に實行しうる革命家とが存在しなければ、革命は、殊に社會主義革命は失敗に終らざるを得ないの事あります。換言すれば、其國に存在する社會運動の中に、明確なる思想と、それによつて大衆運動を展開させる革命家とが必要なのであります。此精神と意思と力がなければ與へられたる機會も亦革命の機會たるの性質を失ふのであります。

露西亞革命の例をとれば、ケレンスキーの第一次革命は、革命と云ふも其實革命と云ふ程の事はなく、況んや社會主義革命では斷じてないのであります。露西亞に於ては、時代と露西亞に於ける過去の革命的歴史が、特に力を加へなくとも、既に第一次革命にまでは、暴動それ自身が、民衆それ自身が成就する事が出来る状態にあつたのであります。只だ、第二次革命に至つて、初めて、革命となり、社會主義革命となつたのであります。

第一次革命は民衆それ自身が自然的に齎したものであつて、ケレンスキー等は易々としてこれを成就したの

であります。成就したと云ふよりも、只其潮流の上に乗つたのであります。然し乍らボルセヴィキーの第二次革命に至つては決して單に潮流に乗つたのではなくて、其潮流を捕へ導き、それを社會主義革命たらしめたのであります。

然らば與へられたる機會を捕へて、社會主義革命を正しい方向に導く革命家とは如何なるものであるかと云ふに、それはボルセヴィキーの代表者であるレーニンの人格を説明するのが一番分り易いと思ふのであります。

彼の第一の特徴は、彼が資本主義に對して、又マルクスに依つて代表さる、社會主義の原理に對して極めて明快なる知識を有し、且つ徹底的に純粹に之を信奉してゐたと云ふ點であります。換言すれば、彼は社會主義革命の何ものたるかをよく理解し且つ之を確信してゐたのであります。露西亞はさきにも述べた如く戦前に於ては資本主義と專制君主とを同時に有する國でありましたからして、其革命運動の如きも動もすれば、純粹な社會主義革命を離れて專制君主を倒壊せんとする憲政運動たらしとする傾向を有してゐたのであります。然し乍ら斯くの

如き場合に於てもレーニンは、斯くの如き革命運動には

目もくれず、一意第四階級たる労働者の革命に着眼して其友を之が中に求めてゐたのであります。そしてブレハノフ等が現實に眼がくれて、社會主義革命運動の中にブルジョアリベリズムを混入せしめ之と妥協せんとした如き場合には、彼は斷乎として反對して、飽くまで純正

な社會主義革命の精神を維持したのであります。ケレンスキー等の第一次革命は長く壓伏せられてゐた革命運動の成功を齎したので一般は唯革命成就の名に酔つてゐたのであります。ひとりレーニン等は此革命が決して眞の社會主義革命に非ざるを觀取して猛烈に突撃したのであります。而も彼はその策戦に於ても苟合妥協を排して、たゞ一直線に、資本主義の疾患に向つて、社會主義の理論が示す處の純粹な原理を武器として、大膽に率直に赤裸々に戦を開いたのであります。彼は現實の戦の上には一進一退、時に逃亡し、時に妥協しましたけれども、其用ふる武器に至つては些少の妥協もなさず、資本主義の有する弱點に向つて、まつしぐらに突進し、社會主義革命の本質を傷つけるが如き事に對しては寸毫の妥

協もしなかつたのであります。

彼の非妥協的な革命的精神は、彼の有する明確な理論の中に生れたのでありますが、此の理論を勇敢に實行し、社會主義革命を成就せしめたところの鐵の如き實行的意思に至つては、決して單なる理論の上からは生れて來ないのであります。

レーニンに依つて代表さる、ボルセヴィキーの最も異とする處は、其中に不撓不屈なる鐵の如き意思の存在してゐた事であります。此鐵の如き意思、臨機應變の策戦を立て大膽率直に突進し、機を見るに巧妙に、必勝を確信し乍ら而も身を棄て、ある如き、説明すべからざる意思を彼等は有してゐたのであります。ツルゲネフは彼の小説の中に露西亞の革命運動の失敗を、多くの革命家等が、現實から生れ上つた鐵の如き意思を有せざる事に歸してゐますが、露西亞は今までの革命運動の中に見出す事の出來なかつた、現實の上に生れた強力なる意思をレーニンに生み出したのであります。レーニンの人格、彼の冷やかな而も燃ゆるが如き、又現實の如何なるものであるかを適確に把握した其意思は、過去百年間の失敗に



失敗を重ねた、露西亞の猛烈な而も悲慘極まる革命運動の苦い經驗が凝つて生み出した結晶とも云ふべきでありませう。若しも其國に此革命的意欲が缺けてゐるならば折角の機會も直ちに逃げ去るでありませう。又所謂戰略と稱してブルジョアリベラリズムと絶えざる妥協を行ふ事は、遂に運動の上に革命的な精神を失つて、折角來た機會もむざ／＼逃がしてしまふ結果になるのであります。此點に就ては英吉利と露西亞との對照が極めて雄辯に物語つてゐるのでありますが、之に就ては、野坂君の英吉利に關する研究を聞いて後、更に研究を進めたいと思ひます。

その夜は、野坂が英吉利に關する運動を發表する筈であつたが、もう時間が遅かつたのでそれは此次の會合に延ばされた。纏て、賑やかな元氣のいゝ雜談が始められた。岡上は又彼の知識の袋の中から、讀者諸君は既に御承知の、例のレーニンの演説を取出して高らかに又得意氣に讀み上げた。それから又彼はレーニン等とミリユーコフ等とが日毎に大道で、集會で、宣傳戰を戦はせる、

と、民衆が、今日は所謂愛國者となり明日はレーニン黨に傾き、更に明後日はミリユーコフ黨となつて、日毎に動搖しつゝ、あつた時の光景の報道を讀み上げた。みんなはそれが現實に日本のことでもあるやうに興奮した。それを聞いてゐる間に例の短刀を懐中にしてゐた青年は『革命は近づけり……』と絶叫した。例の荒ツけつりな河井は、氣を焦々させ乍ら、

『僕等は何とかして、飛行機を手に入れる必要がある。愚圖々々したつて駄目だ』

と、いきなり嗚り出した。それから話してゐる人になつて皆はボルセヴィキの運命を矢鱈に心配したり、大丈夫だと一人で自分の事の様に受合つたり、英吉利や獨逸や佛蘭西の勞働者の意氣地のないのを罵つたり、果は日本の現状を悲觀したりして、散會したのは十一時頃であつた。棚橋と山名とは、あとに残つて、又暫く話合つた。皆が歸ると室の中は急に淋しく靜かになつた。三人はもう十年近くも突合せてゐる顔を又突合せた。彼等は彼等が三高の庭で初めて顔を突合せた時、こんな腐れ

縁を結んで、學校を出てからまでこんな生活にくされ合はうとは思はなかつた。三高で一つの會を作つて人生を談じ若い理想を語合つて將來を約束した者は随分數多くあつたが、扱て、今になつて見れば残されて結ばれてゐる者は、四五人に過ぎなかつた。そして今此三人は、彼等の思想が命ずる通りに、所謂社會主義の革命運動に身を投じようとしてゐるのである。三人になると彼等は他人交らずの温な氣安さを感じ乍ら、そこに寝ころんで顔をつき合せた。

麻生が何か深く考へる様な聲で云ひ出した。『おい、俺達は露西亞の事ばかり聞いて昂奮して居たつて仕方がないぜ、他人の國のふんどしばかり擔いでゐたつて始まらない。俺達は一體どうしたらいいんだい、岡上の所謂、革命の機會を與へらるゝとしても、それを掴む意思と力はどうして創つたらいいんだい。次の社會を創るべき所謂指導的思想たる社會主義の原理をどうして、勞働者階級に植ゑつけたらいいんだい。この間から話してゐたあの社會評論ね、あれを例の策戦通り、デモクラシイつて標題にしようぢやないかつて極力主張したんだ

がね、危険で發賣禁止になるつて折角の策戦も全くおちやんさ。社會主義の革命どころか、日本ぢや未だ、デモクラシイも國體破壊の危険思想なんだからねえ』

『そりやさうだらうよ。日本の政治だつて君未だ封建時代を抜切らずに官僚に左右されて寺内がやつてるんぢやないか。純粹にブルジョアの天下にだつてなつてやしないぜ。社會』だとか「勞働」だとか云ふ字だつて危険視されてるんだ。日本の勞働者の一般どころか、組合に入つてる者だつて社會主義は勞働者の敵だと思つてる者が大部分だらうぜ』

棚橋は、彼特有なブツキラ棒な調子で云つた。無口な山名は何か考へにふけてゐる様に寝ころんで、煙草の煙を吐き出してゐたが、

『そんなに憤慨したつて仕様がないうさ』と、慰める様に云つた。それを聞くと、

『ふむ、貴様は何時も氣長な事ばかり云つてるぜ』

と棚橋は山名の方を眺め乍ら罵る様に云つた。

『は、貴様見たいにやきもきしたつて仕様がないうぢやないか。それより、もう友愛會に入る決心はついたの



かい」

それを聞くと、棚橋は自分で自分を苦笑する様に、  
『ふ、む、心配するな』

と、半ば自信のある様なない様な聲で云つた。此率直な正直な青年は燃える様な志を持ち乍ら、今彼の安全な職業を棄て、生活の不安な運動の中に身を投ずると云ふ段になると、何となく氣後れがするのであつた。彼は暫く黙つてゐたが、吐き出す様に云つた。

『此夏休みに國に歸つて、おふくろにも因果を含めて決心して来るよ』

『それがいいだらう』

麻生はしんみりした聲で合槌を打つた。そして靜かな聲で又云つた。

『俺たちや上調子な事は止さうぢやないか。ちよいと飛込んで直ぐ厭になる様ぢや、却つて労働者を欺く様なもので罪悪だ。あのツルゲネフのインテリゲンチアの様に感激だけで飛込んだ奴あ、力にもなんにもならんよ。一度飛込んだら俺達も労働者になるつもりで、死ぬ迄やらなくちやあ。そして地の底をくづつて處女地を耕さなく

ちや駄目だ。棚橋も入るなら、よく考へて十分準備を整へて入つた方がいいよ。それに舞臺はあるんだからねえ。それにしても鈴木と云ふ男は、よく今までやつて来たもんさ。そりや缺點を云へば誰だつて缺點はあるさ。併し、これまでやつて来るにや、あんな態度も止むを得なかつたらうよ。兎に角、舞臺を創つて呉れただけは何と云つても運動の恩人だよ』

『そりやさうさ』

『運動の中に入つたら、俺達の今考へてる事とは大分違ふだらうぜ。幻滅の悲哀だなんて、くだらん事を云はずに、どんなに罵倒されても排斥されても厭な事があつても、へばり着いてやらうぜ。そんな時にはツルゲネフの處女地を讀み返す事だ』

『全く、俺達が、労働者の中に入つて其中にとけ込むのは容易な事ぢやないさ。』

と、今度は、山名が又沈着な聲でしみくと云つた。

『おい山名男爵、貴様の家はどうかい。ぶらくしてゐて何とも云はんのか』

棚橋は彼の友人を氣遣ふ様にさう云つて、笑ひ乍ら山

名の顔を覗き込んだ。

『うむ、八釜しくない事もないさ、何だか近頃は俺に監視をつけるつて云つてる様だぜ。俺の家ぢや貴様達が大變な悪友になつてるんだ。此おとなしい若様を引つ張り込んで危険人物にしようとするのは、てつきり貴様たちだつて譯さハ、、、』

『おい／＼冗談はよして呉れよ。若様がきいてあきれらあ、とんだ若様だハ、、、』

三人は氣持よく高らかに笑つた。

『おい、とんだ若様、貴様あ近頃、俺達に隠してる事があるだらう』

麻生は、その高い笑ひの中から磊落に冷かす様にさう云つて、山名の顔を覗き込んだ。

『何だ、隠してる事？ そんな事があるもんか』

『ない、馬鹿を云ふな』

『たつて無いんだから仕方がないさ』

それを聞くと棚橋も横槍を入れた。

『何だ、俺達に隠して何をしてるんだ。怪しからんぞ』

『貴様等何を云つてるんだい。さては俺を無實の罪に落

さうつてんだな』

『こ奴は、圖々しい奴だなあ、よしそれぢや俺がすつばぬいてやらう。貴様は此頃毎晩何處をふらつてゐるんだ』

『何處もふらつきやしないよ』

『おやく、まだ白狀しないんだな。よし、おい棚橋、

今から二人で秀ちやんのところに行かうぢやないか、山名の奴はずつと下宿に歸るんだ相だ。二人で「おでん」を食ひ乍ら二時頃店の仕舞ふまで一杯やらうぢやないか』

『ハ、、、分つたく。さては此奴、妙なところに力瘤を入れてるな』

『ハ、、、おい俺を馬鹿にするな。俺だつて「おでん」位食ふさ』

山名は、どきまぎし乍ら狼狽して、さう云ふと、彼の頬を眞赤に染めた。

『到頭白狀したな。まあい、さ。貴様がそれまで白狀したんなら後は追求しないよ。さあこれから、一緒に食ひに行かう』

『よからう』



棚橋が即座に合絛を打った。すると山名は、

『もう遅いぜ』

と、急に眞面目な顔をして云った。

『おい、てれかくしはよせよ。まだ一時にやらんぜ』

『こ奴め、しようのない奴だなあ』

山名は、はづかし氣にさう云つて舌打ちをした。三人は又愉快氣に高く笑つた。そして、立上ると仲良く冗談を云ひ交し乍ら、その『おでん屋』の所謂秀ちゃんのところに出掛けて行つた。

## 十一

本郷の帝國大學の赤門の前に、『一高屋』と云ふ『おでん屋』があつた。その一高屋は何とか云ふ寺の門前に風や大雨でない限り如何なる夜も日暮方から屋臺を出して、おでんの鍋からうまさうな湯氣と匂ひを立て、そこを通る學生等を誘惑し乍ら大いに繁昌してゐた。そして屋臺の前にぶら下つた暖簾の下には、古ぼけた洋服のズボンが幾本となく林立して、暖簾の中では賑やかな粗暴な笑ひ聲がきこえて居た。そして又その粗暴な嘖鳴り

聲の中には、極めて、はつきりした、きりつとした、そして又如何にも伶俐相な優しい若々しい女の聲が交つてゐた。恐らく、腰から上を隠す、この暖簾の下は、ひつきりなく幾本かの足が林立する原因の幾何かは、只に一高屋の『おでん』の味が、ばかりでなく、此如何にもうひくしい美しい聲の持主が、そこに隠れてゐたからかも知れない。

此のおでん屋の開店が何時からであつたかは實の處此著者も知らない。實を云へば著者も其頃既に此おでん屋とは五六年來の馴染であつた。つい一年ばかり前まではその店には如何にも眞面目らしい頭のよき相な、四十格好の、おかみさんが坐つてゐた。そして、そのおかみさんの側には、一人の、色は餘り白くはないが、瓜實顔の眼のぼつちりした、鼻筋のよく通つた唇の美しい娘さんがその手助けをしてゐた。そしてそのぼつちりした涼しい眼と如何にもはきくしい美しい聲とは、此娘を非常に伶俐に思はせた。そのおかみさんの側にはたゞに此娘さん一人だけではなかつた。未だ幼い三人の男の兒と、それから、まあ、どちらかと云へば餘り役に立たないば

かりでなく甚だ手の掛る酒飲の亭主がくつついてゐた。一年ばかり前から不意に、そのおかみさんの姿が屋臺の上から消え失せた。と云ふのは、此おかみさんは酒飲の亭主と、其時十七の例の娘さんを頭に四人の子供を残して、此世から姿を消して什舞つたのだ。此娘さんには世間普通の家の娘さんの様に母の死を長く悲しんでゐる暇などはなかつた。父と云つても父の役目をしない其父

と、三人の頭はない弟と、それから自分を加へて、一家五人の者の生活は直ぐに眼の前に迫つてゐる。母の葬式もすんだ頃には、今までは母の胸にかくれて未だ知らなかつた、『所謂世間』の前に自分の細腕で立たねばならなかつた。暫くの間に、うひくしい娘の氣持は消え失せて、幾つかの年を一度にとつた様に思はれた。その態度の中にも、其聲の中にも、しつかりした、沈着さが生れて來た。けれ共彼女の美しさは増しこそすれ少しも失はれる事はなかつた。此一年の間には限りない苦勞が其脊に負はされた。父は相變らず娘から金をせびつて喰ひ酔つた。弟を學校にもやらねばならなかつた。末の弟は長い病氣の床に就いた。勝氣な此娘さんは午前中は、大學

病院の手傳ひに出て、いくらかの金を貰ひ、それから歸ると商賣の買出しに出掛け、その間に、父と三人の弟の世話をした。それでも夜は二時過ぎまでも屋臺の上に坐つて、客を相手に晴れくした顔をして、元氣よく商賣を續けて行くのであつた。

棚橋や麻生の連中もよくそこに、『おでん』を食ひに出掛けた。そして此娘さんの心からな同情者であり尊敬者であつた。たゞその同情や尊敬の餘り、借金をしてまでおでんを食つたのは少し蟲風のひき倒したつたが。もしそれ、山名の同情と尊敬のしぶりに至つては、最近少々濃厚になつて來た事は、今夜の麻生の話に依つて讀者諸君の既に知られる通りである。

扱て、麻生の家を出た三人が、本郷通りに出て、赤門前の一高屋の暖簾に、物騒な三つの面を突込んだ時には、時間も最早十二時近くであつた。そして、珍らしく暖簾の中には誰の姿も見えなかつた。彼等が頭を突つ込むと、秀ちゃん、うれし氣な元氣な聲で、  
『いらつしやいます。まあ、棚橋さんも麻生さんもめづらしいんですね。何を差上げませうか』



と、如何にも商賣馴れた調子で、早くも長い箸で、鍋の中の物をひつくり返し乍ら愛想よく云つた。棚橋は笑ひ乍ら、

『秀ちゃん。馬鹿に商賣がうまくなつたなあ、ガンモドキを貰はう』と云つた。

『あら駄目ですわ、ちつとも巧くなんぞなりはしないわ。ほんとに妾駄目ですよ』

『駄目な事があるもんか。でも大變だねえ』

『秀ちゃんたつた一人ぢや』

『え、でもおかげ様でどうにかやつて行けますわ』

『そりや結構だ』

棚橋は秀ちゃんの近頃めつきり苦勞で老けた顔を見乍ら、何時になく、しんみりした調子でさう云つた。それを聞くと、麻生が冷かす様に云つた。

『おい、今晚は棚橋に似合はん事を云ふぢやないか。』

秀ちゃん用心しろよ。こ奴がこんな事を云ふ時には屹度錢がないんだぞハ、ハ、』

『おやく、麻生さんは相變らず口が悪いのねえ。何をあげませうか』

『僕かい。僕は豆腐を貰はう』

『山名さんは、お酒ですよ』

『おい、山名、見る貴様が毎晩飲んでるのは、これで證明が出来たぞ』

『馬鹿云へ、そんなに飲むものか。なあ秀ちゃん』

さう云つた山名の顔は、未だ飲まない前からぼつと赤くなつてゐた。

『あら、まあ随分な麻生さんねえ。それぢや山名さんがあんまり可哀さうだわ』

『おやく、こ奴は大變だ。二人で何時の間にか共同策戦をとつてるんだな。可怪しいぞハ、ハ、ハ、』

『あら厭な麻生さんねえ。そんな事があるもんですか』

今度は秀ちゃんが屋臺の上で頬を赤く染めた。棚橋と麻生が、ちびり／＼飲んでゐる山名を残して、二人連れ立ち乍らおでん屋を出たのはそれから大分時間が経つてからだつた。二人は廣い本郷の通りを歩き乍ら途々山名の事を噂し合つた。

『おい、山名の奴、近頃ちつと可怪しいぞ。あれに惚れてるんだらう』

棚橋が笑ひ乍らぶつきら棒に云ひ出した。

『うむ惚れてるさ。だけど山名の奴は自分が惚れてるつて事を自分の心に白狀するには三年位はかゝるよ』と、

麻生も笑ひ乍ら答へた。

『ハ、ハ、さうかも知れん。併しあ奴は案外突進するかも知れんぜ』

『うむ、だけど、あ奴には何とか伯爵の娘が許婚だつて云ふぢやないか』

『そ奴あ、貰ふ氣はないらしいぜ』

『さうか、そんなら惚れてるんなら頂度い、や、あ奴に貰はせて仕舞ふんさ。第一俺達やその方から背水の陣をひく必要があるぜ。べら／＼した女なんか鼻に貰つたら運動なんかやれやせんぞ』

『うむ、そりやさうだがね。山名の奴にやちつと重荷だぜ。そんな事をしたら、それこそあ奴の家が大騒ぎだらう。俺達や愈々悪黨になつちもせ』

『ハ、ハ、俺達の悪黨なんざあかまはんが、併し、變に中途半ばな結婚なんぞしたら、それこそ俺達や重荷だぜ。殊に山名なんざあさうだよ。それよりや、一擧に家

と絶縁的に斷行しちやつた方が、あとになつてあ奴の爲だぜ。それに君秀ちゃんならあ奴に上等過ぎるよ』

『貴様相變らず無鐵砲だハ、ハ、ハ、』

『なあに無鐵砲でなんかあるもんか』

『だつて貴様の云ふ通りにもいかんさ』

『おい貴様にも似合はん分別顔をするぢやないか。』

『ハ、ハ、まあさう云ふない。未だ當人の心持も分らんに俺達ばかり騒いだつて仕方がないさ』

『そりやさうだがね、ハ、ハ、それより貴様はどうするんだい』

『俺か、俺のは未だ分らんさ。第一運動の方に飛込むと食はせるのも心配だからなあ』

『そりや全くさうだねえ。その點は十分考へんといかんなあ。これから先、俺達はどうなるんだか、俺達やこれから極端な簡易生活に馴れる必要がある』

『うむさうだ』

棚橋は、眼の前に何ものか迫つてゐるのを見る様に、重い聲で、自分の胸に答へる様にさう云つて、又唸る様に云つた。



『俺達の一番氣を付けねばならんのはそれだよ。知識階級と云ふ奴は、勞働者ぢやないからなあ。初めは飛上つてやりかけるが、苦しくなると飛出す奴さ』

『全くだ。貴様はその點では俺より安全だ。俺は何だか怪しい氣がする』

『さうでもないさ。まあお互に氣をつける事さ』

二人の青年はしんみり話し合ひ乍ら聽て一高の角をまがつて暗い細い道の方に姿を消した。

十二

米騒動の次の日の晝頃、二人の青年が丸の内の満鐵の立派な應接室で痛快氣に話合つてゐた。其一人は麻生であつた。も一人は、所謂帝國主義の大川であつた。此青年は麻生よりも二つ三つ位も年上に見えた。廣い額、澄切つた瞳、ひきしまつた唇、それ等の中には何處かに此青年の人一倍聰明である事が現れてゐた。彼は麻生や山名や棚橋と一緒に三高の出身で、彼等よりも二級土であつた。

『僕は君達の事に就ては前つから考へてゐたんですが

ね、未だ時が來なかつたもんだから一緒になれなかつた。然し今其時が來たんだ。僕も君等の仲間に加へて貰ひたいんだ。僕は今日限りで、此會社を止めるよ……』

『今日限り、此會社を』

『さうだ。もうこんな會社に居る必要はない。今までだつて幾度か止めようと思つたんだが。君等の仲間に加はれるか知らん』

彼は冷靜な、併し何處かに昂奮した力のこもつた聲ではつきり云つた。

『勿論、何で僕等が君の仲間に入るのを拒む理由があるものか。僕等は同志の一人でもふえる事を希望してゐるんです。一緒にやらう。皆は屹度悦ぶ。』

麻生は微笑し乍ら悦し氣に云つた。

『僕等はこれまで資本家と云ふ奴のする事をすつかり見て來たんだ。殊に此満鐵と云ふ奴は實に卑劣で殘酷な利己主義で、奴等は口に國家なんて云つてゐるが、其實國家も冀もありはしない。自分一家のためなら國家の利益

なんかどしく犠牲にして仕舞ふ。内地は勿論、殖民地

る事は皆調べ上げてあるんだから、これからは機會のあることに其内情をすつばぬいてやるつもりだ』

『實際今の資本家なんて奴は自分の利益になる事ならどんな事だつてするんだ』

『併し民衆はど奴が自分の敵であるかはよく知つてゐるから痛快だ』

大川は確信のある力強い口調でさう云つて、麻生の顔を見乍ら満足氣に微笑した。

『勿論、民衆は行くべきは何處だかよく知つてゐる。こ

こもやられた相ぢやないですか』

二人は顔を見合せて笑つた。

『この裏通りの硝子窓は皆やられたんだ。今日は重役共が寄つて善後策を協議しやがるんだ。實に痛快さ。僕は辭職書に僕等の意味をはつきり書いてやらうと思つてゐるんだ』

『だが、奴等もまさか自分の建物の、而も應接室の中に敵が忍び込んで來て、こんな話をしてゐるとは想像もしてゐないだらう。全く痛快だ』

『全く痛快だ』

『ハ、ハ、ハ、』

二人は又顔を見合はして愉快氣に高い聲で笑つた。

『だが、此應接室も大したものぢやないですか。君も最早、こんな贅澤な室の中で、こんな心地のいい椅子に坐るのも今日限りですわね』

麻生は坐りつけないパネ仕掛の贅澤な椅子にもつと深く腰を入れて身體をゆすぶり乍ら云つた。

『もう未練は少しもない。吾々は自分の良心を欺いてこんな椅子に坐るより、かたい木の椅子に坐る方がどんなに居心地がいいか知れん。實際こんなところにある連中

も内心は皆不平で厭なんだが、勇氣と確信がなくて、ずる／＼べつたりになつて仕舞ふんだ。そして皆人間の生活

を失つて機械になつて仕舞ふんだ。實際恐しい事だよ。資本家の奴隷になつて何處に血の通つた人間の生活

があるもんか。だが勇氣がないんだ。僕も少しこれなりにしてゐたら、もう此泥土の中から出られなかつたらう』

大川はしんみりした口調でしん／＼云つた。

『全く學生の時には吾々は皆若い純な心で眞理と正義を

全く痛快だ』



愛して、人間として生きたいと考へてゐるんだけど、何時の間にかそれが心の中から消え失せて仕舞ふんだ。だが今度の米騒動は、眠りかけてゐた青年の心を甦らすだらう』

『全く僕にとつては自分が生きるか死ぬかの境目だつた。僕等の様な凡人には何か機會がないと生きられない。これからは君等の仲間に入れて貰つて一緒にやりませう』

『どうぞ、僕等は毎週水曜日に僕の家を集つてゐる。山名や棚橋も君にあひたがつてゐましたよ。今度来て下さい。皆に紹介させよう』

『ありがたう。僕も吾々の仲間に出來得る限り宣傳するよ』

『どうぞ。ちや僕は今日は失敬しませう』

『ちや僕はこれから辭職届を書かう。』

二人は愉快氣にさう云ひ合つて立上つた。そして連立つて扉をあけて廊下に出た。二人は其廊下に立止つてそこから城の様に聳え立つ棟瓦作りの大きな建物を見わたした。アスファルトで固めた廣場には幾十となき自動車

が並んでゐた。そしてその前には、東洋一を誇る東京驛の建物が山の様な姿をして建つてゐた。

『君あの正面が三菱で、向ふ側がMビルだ。群衆はあの三菱の建物を襲つたんだが、あの鐵の鎧戸ちや一寸手がつかん。あれが資本主義の鐵壁さ。併しもう内部が腐れか、つてる……』

『ハ、ハ、ハ、併し今日は實に痛快だ』

『實際、僕も今日は十年の重荷を下した様な氣持だ。人間は思ひ切つて因習をぶち破つて、自分の眞實の心の命ずる方に一步踏み出した時程、生き／＼した喜びを感じる事はない。僕は今日程愉快な事は生れて曾つて味つた事がない。今夜山名君や棚橋君と一緒に僕の家に来て呉れませんか。久し振りに愉快に祝盃を擧げよう。是非來て呉給へ』

『行きませう。ちや僕はこれから山名を誘ふ事にしよう。ちやこれで失敬』

『ちや、今夜又』

二人の青年は心の底から快活に、『さよなら』を云ひ合つた。

らう。

若しも其當時に於て一つの指導的な力が存在してゐたならばそれは革命に變じ得る程、猛烈な而も根強い暴動ではあつたけれ共、その力はある夏の日に突如として捲起る旋風の様に唯一時に地上を席捲して、其觸る、物を猛烈な力で破壊して行つた力に過ぎなかつた。

併し、此暴動は今まで眠つてゐた日本の土の上に唯一つの、而も其一つは社會の根底を土臺から揺がねば止まぬ處の一つの問題を突如として放り投げて行つた。その一つの問題とは何であるか。曰く『社會問題』!!

新しい思想が其暴動の跡から猛烈な勢で芽を生やして成長して行つた。デモクラシー、社會主義、曰く何、曰く何、大學の先覺者は、最早何の遠慮する處もなく、其講堂に於て教室に於て、新しい社會問題に關する學説を講義し始めた。若い血に燃ゆる學生等は渴したる者が水を求むる如くその新しい思想を吸収して躍り始めた。官吏となり資本家の手代となるを無上の光榮として立身出世を人生の哲學と考へてゐた知識階級の行手に濃い疑惑の雲が投げかけられた。彼等の人生觀や處世觀の上に大

大川は麻生の姿が見えなくなると勢よく辭職書を書くために自分の室に飛込んだ。麻生は心の中に無限の喜びを覺え乍ら、又彼の今日の喜びを友に分つたため、山名の家に向つて満鐵の前から勢よく電車に飛乗つた。

### 十三

さしにも猛烈を極めた米騒動も八月が終りに近づくと共に、次第に其姿を消して行つた。それは激しい暴風の様なものであつた。けれ共此暴風は未だ其根底に深い思想的な背景を持つてはゐなかつた。又それを指導しようとする如何なる力も事實上存在してゐなかつたのだ。そこには民衆の抑へつけられてゐた鬱憤に對する爆發はあつた。物價の騰貴が齎した極端な生活難に對する痛苦はあつた。成金に對する痛烈な反感はあつた。併し暴動の原因も進行も唯一それのみであつた。そしてその中には未だ些少の社會革命的な色彩も加味されてはゐなかつた。若しも暴動の進行に對して何等かの力が加はつてゐたとするならば、それは時の政府を破壊して自己の手に政權を掌握しようとする反對黨の煽動位なものであつた



きなヒ、が入つて来た。それよけもつと重大な事は、今まで虐げられ抑へつけられて深くも其工場に鑛山に埋められてゐた労働者階級がむくくと其力強い姿を社会の地平線上に現して来た事だ。あ、労働問題!! それはこれまで日本の何人も、然り、唯一部の先覚者を除いては、何人も聞くを得なかつた問題だ。それが突如として霹靂の如く社会の上に其物凄しい姿を現した。富豪は盛に寄附金を投げ出した。資本家は急に温情主義を唱へ出した。政府は頻りに社会政策の重要を説き出した。協調會が生れた。社会局が生れた。職業紹介所が生れた。そして又蛇足な事には幼稚な國粹保存の反動團體までも!! けれ共、何れにせよ、殆ど二旬に互つて日本全国を席捲した民衆の激烈な暴動……資本主義に對する猛烈な反逆の嵐のあとからは社会運動に對する黎明の蒼空が、ほのくと明け初めたのであつた!!

十四

九月に入つて間もない或る日、長く國に歸つてゐた棚橋が、突然根津の麻生の家にやつて来た。二人は久し振

りに例の二階で顔を合せた。  
麻生は棚橋の顔を見ると心の底から悦し氣に、  
『何時歸つて来た』  
と訊ねた。  
『うむ今朝なんだ』  
『今朝、ほうさうか、元氣だつたかい』  
『うむ元氣だつた、此通りさ』  
棚橋は日に焼けて赤黒くなつた顔に微笑を湛へて、これも心から悦し氣にさう云つた。そして、今度は少し昂奮した様な口調で云つた。  
『おい、おれあもう今日限り裁判所は止めたぞ』  
『え、今日限り止めた』  
麻生は餘り突然に棚橋が云ひ出したので吃驚した様に問ひ返した。  
『止めたつて、もう辭職の通告をしたんかい』  
『うむ、今朝來ると直ぐに裁判所に行つてやつて来たんだハ、、、』  
『え、こりや驚いた。そりや又馬鹿に手廻しが早いぢやないか、何で又そんなに狼狽て、やつたんだい』

『なあに下す奴は早く下さんと、尻に糞がつまつてる様で氣持が悪いからさ』

『ハ、、、相變らず棚橋流だね。併しそ奴あ痛快だつたねえ』

『ふむ、まあ痛快さ、今日上席檢事に會つていきなり、もう裁判所は厭になつたから止めると云つたんだ。そして何故止める、とききからね。いくら檢擧して裁判したつて、檢擧もし切れなければ裁判もし切れないから止める、と云つたら、先生大吃驚さ。君は何を云ふんだ、君の云ふ事は何の意味だと云ふ質問さ。ハ、、、』  
『ハ、、、そりや當然さ、先生等にそんな意味が分るもんか。それからどうしたい』

『ふむ、それからね、大した意味がある譯ぢやないが、私は裁判所の目的は裁判所の不必要になる事を目的としてゐると考へるから、それなら檢事や判事をしてゐるよりも、寧ろ裁判所の不必要な世の中をつくる方に努力した方が早手廻しだと思ふ。と云つたら、先生又目を白黒させて、それぢや君はこゝを止めて何をする積りだと云ふ譯さ。労働運動をやるんだ。と云つたら、先生黙つて

俺の顔を暫く見つめてゐたが、それから云ふ事がふるつてるさ。君はかぶれてゐるね。君は吃度將來後悔するよ、だとさハ、、、。俺も癪にさわつたから、化石の様な仕事はもう飽きくした。と云つてやつたら、先生到頭黙つて仕舞つたつけハ、、、』

『ハ、、、化石はよかつたね。それからどうした』  
『それで萬事終りさ。先生も到頭あきらめて、それでもをしまひには、まあ折角自愛して奮闘したまへ、と云つたよ』

『ハ、、、自愛して奮闘はよかつたね。』  
『だが裁判所の方はそれで片附いたとして、お袋は承知したのかい』  
『ふ、む承知もしないがね。そんな事は結局どうでもいゝんだ。それよりも米騒動はどうだ。随分やつたぢやないか』

『うんやつたよ。今迄虐げられ、抑へつけられて居た無産大衆の鬱憤爆發だ。俺達の立上る時が来たよ。』  
『全くだねえ、俺の方も随分ひどかつたぜ、田舎の方も此頃は随分動いて来たよ』



『さうだらう。俺ももう新聞社にあるのが厭になつた。君はそれちや早速友愛會に入るね、野坂ももう神戸の方に歸つたんで、君の入るのが待たれてるよ』

『さうだらう、俺もこれからしつかりしてやるさ』  
『所謂、露西亞のインテリゲンチアの民衆の中に入るんだねえ』

『うむ、ハ、ハ、ハ。だが俺達の様な人間はそこに行くより外に道はないぜ』

『全くだ、併し愉快ぢやないか。兎に角血の通つてゐる仕事をするんだからねえ。そりやさうとあの太川ね、そら俺達よりは二級上だつた、あの太川が、我々の仲間に入つて満鐵を辭めちやつたよ』

『へえ、そりや珍らしいね。どうしたんだ』

『なあにこれも米騒動の賜さ。兎に角、官吏になつてゐる奴や資本家の手代になつて、いゝ氣になつて立身出世を夢見てゐた奴等にも、もうヒビが入つて來たぜ』

『ハ、ハ、ハ。兎に角世の中が動いて來たんだ、愉快だなあ』

二人は晴れぐしした氣持ちになつて、顔を見合せ乍ら

高く笑ひ合つた。

『山名はどうしてる』

『うむ元氣さ。米騒動の時にや奴と一緒にぐるぐる廻つて歩いたぜ。先生相變らず、例のおでん屋でちびくやり乍ら三時頃まで立ち番をやつてるぜ。奴さんのラブも愈々ほんものらしいよ。併し此間吉野博士から、いゝ話があつたんだ。經濟の高野博士ねえ。あの人は内務省の労働調査かなんかをやつてるんだ相だが、今度労働者町の中に労働者の保健調査所を設けるんだと云ふんで、誰か労働者町の中に住んで其仕事をする者はないかといふんだ。俺は二つ返事で受合つて來たんだ。でね、山名はどうだらうと思ふんだ。君は友愛會に入る事になつてるんだし、今あ奴が遊んでゐるんだからいゝだらうと思ふんだ。どうだらう』

『うむ山名ならいゝだらう。兎に角何でも實際に入る事が必要だ。我々はもう躊躇してる時ぢやない。あらゆる機會を捕へて宣傳する事が必要だ。』

『でね、これは俺の考なんだが、どうせ入り込むなら其調査所を月島に置くといゝと思ふんだ、あれは日本のク

ロンスタツトさ。あそこには造船所や何か随分大きな工場があるんだから、運動するにはもつて來いだ』

『いゝだらう。併しそんなにうまく行くかね。それに月島つて俺はよく知らないんだが』

『實は俺もよく知らないんだがね。さうなれば三人で實地を見に行くさ。それより山名の奴には未だ話してないんだが大丈夫だらう。』

『それや大丈夫さ。』

『ちやこれから二人で山名のところに行つて、よく打合せをしよう』

『よからう』

『おいゝ何だか俺達の進む道が眞直ぐに開けて來た様ぢやないか。君は友愛會に入るし、山名は労働者の中に住む事になるし、今度俺の番だ、俺も今一仕事をしたら君等の中に飛込むよ。』

『うむ、併し愉快だなあ』

## 十五

その日の夜、山名と棚橋と麻生とは、築地の方に渡る

渡舟を待ち乍ら月島の三號地の岸邊に腰かけて話合つてゐた。三人は例の高野博士の保健調査の事に就て、それを此の月島に置きたいために、今月島を探検し終つた處であつた。そこには幾つもの工場があつた。石川島の大造船所があつた。又幾百棟とも知れぬ労働者の長屋があつた。その空氣は川一つ距て、全く所謂東京市とは異つてゐた。鐵の音、機械の轟々とどろく響、眞黒な工場の中に吸ひ込まれ吐き出される労働者の群、そして其労働者の群は油と鐵と汗とで眞黒によごれた職工服をつけ、其顔は印度人の様に黒い油で染まつてゐる。

三人は夕暮方、其工場の中からぞろ／＼と吐き出されるそれ等の労働者の姿を見ると、思はず胸が躍り立つて、其の群に對して早くも宣傳をおつ初めたい様な昂奮に駆られた。何かしら力強い生き／＼した力が彼等の胸に迫つて彼等の心臓をぐい／＼と擱んで行く様に思はれた。そして彼等は一刻も猶豫する事なく即刻に何事かを始めねばならぬ様に氣が焦々した。

あ、革命!! 革命!! それは此島から最初の鬨の聲を擧げるのぢやないか。此島にある工場から! 此島に働



く労働者の間から！ 棚橋は足の下を悠々として流れて行く廣い海の流れを見詰め乍ら心の底から云つた。

『おい、俺達の宣傳の根據を是非此島に置かうぢやないか、革命の烽火は島からあがるんだ。月島はベトログラードに對するクロナスタツトだ』

『全くだ。見ろ此島の中には労働者の力があふれてゐるぢやないか。そして此渡しが又何と云ふ神祕だらう。あの造船所の響をきけよ、何て底力のある響だ。あの光を見ろ、ほんとに物凄い光ぢやないか。』

麻生は遙か上流の方に無數に明滅する電氣の光を眺めやり乍ら、遠くから聞こえて来る底力のある機械の響を聞き入る様にして沈んだ力のある聲で云つた。

『おい山名、しつかりしろよ。此島の責任は貴様の雙肩にあるんだぞ』

棚橋は、うつとりと夜の川に見惚れてゐる山名の方を向いて、唸る様に云つた。

『うむ、俺の力の及ぶ限りねえ、だが此島は何てい、んだらう。俺は何とかして此島に住む様にするよ』

『うまく高野博士を口説くさ。何でも高野博士の話だと

本所か深川の方に持つて行きたい意向らしかつたがね。

併しそれはどんなにもなるだらうよ。それに高野博士の兄さんは古い労働運動者で、随分やつたと云ふ話ぢやないか。そして其ために身體をそこなつて若死したつて話だ。高野博士もなかく臆のすはつた硬骨漢で、労働問題には非常に同情を持つてる相だ。だから俺達の氣持も分つて呉れるだらうよ』

『分つて呉れるだらう、大丈夫だ』

山名は一人でのみ込んだ様に首肯して、も一度後ろを振り返つた。そこには、闇の中に工場の黒い壁が長く横はつてゐた。

『だがおい俺達の生活も變になつたものだねえ。京都で最初に顔を合せてからもう何年になるんだい。』

麻生は昔を想ひ出して懐かしさに堪へぬ様に云つた。

『さうさ。あれは一年の時だつたから、もうまる八年さ。あの時代の事を思ふと夢の様だねえ。あの時は、まさか、今頃三人こんなにして今頃月島あたりでうろくしようなんて夢にも考へなかつたが、ハ、ハ、ハ、人間の運命なんて分らんもんさ』

棚橋が微笑し乍ら、これも懐かしさに堪へ得ぬ様にしんみりした聲で云つた。

『おい山名、山名、貴様の家ぢや、月島で労働者と一緒に住むなんて云つたら吃驚りするだらうぜ』

『うむ、吃驚りするだらうよ。ハ、ハ、ハ、それより宮内省で吃驚りするだらうよ。あの連中と來たら、まるで頭の中をコンクリートで固めてるんだからねえ』

山名はさも痛快氣に云つた。

『おい、面白い話があるぜ。』

棚橋は何を思ひ出したか、ひとりでクス／＼笑ひ乍ら云ひ出した。

『何を一人で笑つてるんだい』

『ふ、む世の中つて奴實際うっかりしたもんだぜ。今度國に歸つたら、親族の先生達が檢事を止めて何をするかつて質問するから、友愛會に入るんだと云つたのさ、處が、其中の一人がさ、それも八字箒を生やして田舎の物議りを以て任じてゐる先生の云ふ事がふるつてるよ。時にその友愛會と云ふ會社は儲かりますかだつてさ。俺もこれにはぎやふんと參つたよハ、ハ、ハ。あんまり、い

まく／＼しいから、新設會社で株の配當は十割位はあるんだ、とおどかしてやつたら、先生吃驚りして、又そのあの言ひ草がふるつてるよ。それぢや棚橋家もこれから愈々大繁榮だ。先づ其御祝ひに一杯おこれつて譯だハ、ハ、ハ。だが俺はその時笑ふ氣にもなれなかつたよ。』

『ハ、ハ、ハ、流石は信州だねえ』

三人は顔を見合せて高く笑ひ合つた。

何かしら三人の前には新しい世界が開けて來た様であつた。その世界には若々しい純な青年の生命と血潮とが燃え立つてゐる様である。彼等の今歩みかけてゐるその道から、人生の行路に幾筋となく開けてゐる他の道を顧みれば、それは無意識な乾からびた生命のない道の様に思はれた。官吏、實業界、曰く何、曰く何、若い青年が、眞理を愛する其青年が、最初は其眞理に憧憬しながら同じ道を辿つてゐる様に見える。彼等は共に感激し共に悲憤し共に笑ひ共に泣き叫んだのであつた。併し、人生の歩みは、學校時代の同じ道を歩んでゐた青年の行く手を何時の間にか幾つかに分けて仕舞つた。そして今かうして、川ぶちに腰を掛けて話してゐる者は僅かに彼等三人



であつたのだ。

誇らしい勝利の心が彼等の前を悠々として流れて行く河の面に漾つてゐる様に思はれた。

『だがおい俺達も到頭三人になつちやつたぢやないか。岸井の奴は軍隊にゐるし、三高時代の所謂人道主義者や、基督信者の説教屋は何處に行つちやつたんだいハ、』

麻生は面白氣に又痛快氣に云つた。

『貴奴等は皆、世間なみの生活の前に頭を下げたのさ。知識階級なんて奴はから意氣地のない奴さ』

棚橋はぶつきら棒にさう云つて嘲笑する様な笑ひ方をした。

『俺達は生きて行くのさ、俺達の心の内にねえ。人間の生活は形式と因習の中にはないよ。貧乏しても苦勞しても、眞實に心の命する生活をした方が氣持がいいよ。俺達に與へられた生きる道は、勞働者の中に入る事だよ。資本主義の罪惡に満ちた社會を叩きつぶす運動を始める事だよ。それが俺達の生きて行く道さ、露西亞の青年の様にねえ。大自然が時に宇宙の塵芥を一掃するために暴

風を必要とする様に、人間の世界にもそれが必要なの

さ、人間の中にたまつた罪惡を一掃する爲にねえ。資本主義の腐敗し切つた塵芥を人間の世界から一掃するためにねえ。俺達にとつてはそれは一つの信仰だ。そして露西亞が眞先きに其暴風を巻き起したのさハ、』

麻生は熱にうかされた様に彼の所謂人生哲學を吐き出した。

『おい／＼又麻生の哲學が始まつたぜ。もう歸らう。さつきから渡舟は二三べんあつちこつちしたぜハ、』

そこで三人は岸邊から立上つて、今向岸からこつちに着いた渡舟の方に歩いて行つて、勢ひよく舟の中に飛乗つた。

もう渡しを渡つて歸る勞働者も、歸り盡したと見えて、渡舟の中には彼等三人とあと四五人の客があるばかりだつた。

赤銅色に焼けた頑丈な體格をした船頭が力をこめて水竿を突張つた。そして舟の縁をへの字になつて歩きながら其竿を押し行つた。舟は直ぐに岸を離れて流れの中に浮び出た。するとおやちは水竿を舟にをさめて、今度

は艫を押し出した。舟はゆるやかに動揺しながら間もなく中流に出た。

空には月はなく、初秋の夜の空は高く澄みわたつてゐた。黄金の粉をふりまいた様に星がちらばつてゐた。黒い大きな帯の様な川はその中に云ひ知れぬ神祕を宿して流れるともなく動いてゐる。其黒い大きな帯の上を、又更に黒い山の様な塊が動いてゐる。其塊の上には赤や青の燈火が高くまた、いてゐる。それは流れをさかのぼり又下る舟である。その黒い影は恐しい沈黙の中に蠢めてゐる様である。赤や青の光が長く、黒帯に映じて云ひがたい美しさを現す。彼等が今までそこに立つてゐた月島は次第に舟の後方に遠ざかつて、海岸にともされた燈火が一行に明滅し、遙か上流の造船所のあるあたりは空が明るく照り輝いてゐる。其黙々たる島には何かしら云ひがたい神祕な力が地の底深くかくれてゐる様に思はれた。

麻生は恍惚とその神祕の夜の自然に心を奪はれた様に川面を眺めてゐるが、到頭唸る様に沈黙を破つた。

『おい／＼どうだ今夜の渡しは。俺はこんな時には屹度、

ツルゲネフの「其前夜」を思ひ出すよ。革命家にも戀が

ほしいぢやないか。あのインサロフのエレナの様な女がねえ。でも日本にはまだあんな女はゐない。おい山名、

山名貴様も摺むべきものは勇敢に摺めやハ、』

『おや／＼今度はえらいロマンチックな話だね。勿論さ、摺むべきものは勇敢に摺むよ』

『おや／＼妙にしらばつくれるぜ』

『ハ、ハ、山名にそんな氣のきいた藝當が出来るものか』

棚橋が相變らずのぶつきら棒な調子で吐き出す様に云つた。

『おや、棚橋の奴め、あんな事を云つてるぜ、貴様こそ柄になく戀がほしいなんて云つてたぢやないか』

『こ奴あ大變だ。俺達はまるで、さかりのついた雄猫みたいだねえ。併し俺達だつて人間だからねえ、女もほしからうぢやないか。俺はエレナの様な女がほんとにほしいんだ。若し日本にあんな女があるんだつたら、俺はどんな山の奥にでも探しに行くがなあ』

『棚橋の奴め贅澤を云つてるぜ。こ奴はどこまで夢を見



たがる奴だか分りやしない。』

『夢？ 夢ほどこいゝものがあるかい。俺達の人生はどうせ夢ぢやないか。夢だからこそこんな仕事もやれるんぢやないか。社會運動なんて云ふ奴は、偉大な夢さ。労働者の中に入る。それは現實的でなくちやならん。運動は足を地にびつたりつけなくちやならん。併しそれにしても夢ぢやないか。偉大な空想ぢやないか。俺はラツサールの一生は面白いと思ふよ。勿論此俺はラツサールになりたいとは思はない。もつと強い意思の人間になりたいと思つてゐる。俺はレーニンを崇拜する。併しラツサールは只何となく好きなのさ』

麻生は情熱に迫られる様にさう云つて又、闇い川面を眺めやつた。

第 二 編



今はもうあの邊は今度の地震と火事の災厄に罹つて昔の面影は見られなくなつて仕舞つたが、以前未だ焼けない頃には、あの賑かだつた神田小川町の電車の停留場から駿河臺下の方に向つて足を運ぶと、恰度兩停留場の半ば頃の左側のや、引つ込んだところに、南明俱樂部と云ふ古い可成りに大きな貸席があつた。此貸席は、神田青年會館などの様に、大きくもなく又有名でもなかつたが、それでも場所柄だけに、ちよいと演説會なども催されて、南明俱樂部と云へば、あ、あれかと首肯される位には一般に知られてゐた。

大正七年の秋も暮れて、そろそろ木枯の近づかうとする十一月の半ばの或る日の事であつた。その日はもう暮れ前から南明俱樂部の前には夥た、しい群衆が詰めかけてゐた。そして多數の警官が物々しい顔付きをして其邊を警戒してゐた。中には、今夜何事か不穏な事でも起るのを豫想するかの様に、帽子の皮紐を頸に下し、腰に吊してた劍をがちやつかせながら、戦闘準備をと、のへて

ゐる者もあつた。さう云へば、今夜南明俱樂部に押しかけて来る人々の中にも、普通の演説會か何かが集まつて来る聴衆等とは一種異つた空氣が溢れてゐた。何處かに、不安と昂奮と一と通りならぬ緊張とがその中に漾つてゐた。彼等の或る者は深い沈黙に陥りながら、不安さうに然し好奇心に燃えてゐる様な顔付きをして足早やに會場の方に歩いて行つた。又或る群は、調子の高い聲で喧嘩でもしてゐるかの様に昂奮して、罵り合ひながら、入口の方に押しかけて行つた。それで、その附近は何かしら争ひがたい不安な様な昂奮し切つてゐる様な、一種穩かならぬ空氣が充滿して、話をする者達のちよつとした言葉の端にも包み切れぬ、むき出しの荒々しさがちらちらとその姿を現してゐた。

日足の短い晩秋の一日が早くも黄昏れて、街頭に電氣の明るい光がまた、き出す頃には、小川町の方から駿河臺下の方から、此南明俱樂部に押寄せて来る人々の群は愈々其數を増して、電車通りから俱樂部の方に行く狭い道路、それから俱樂部を取巻く空地等には、群衆が溢れて、恰も大きな海の波が岸に押寄せる様に、お互ひに押

合ひ攻合ひながら、どよめきわたつて入口の方に詰めかけてゐた。押寄せて来る人々の群は此時にも刻々に其數を増してゐた。

警官等は必死になつて、入口の處から、群衆の中から、聲を限りにそれを制してゐた。けれ共、その死に物狂ひの制止も、群衆のあぐる騒然たる怒號、叫喚に對しては、大海の怒濤に投ずる一石の如きものであつた。却つて其制止は至る處に群衆と警官との間に衝突を起さしめて其度ごとに物凄い喊聲が擧がるのであつた。

『おい、こら、こら』

『騒いぢやいかん。騒いぢやいかん』

『生意氣な、この馬鹿野郎』

『押すな、押すな』

『入れろ。ぶち壊せ』

『おい、こら、こら』

『騒いぢやいかん。騒いぢやいかん』

『あいた……押すな此馬鹿野郎』

鋭い、ときれくの怒聲が、騒然とした群衆の波の中から、引つきりなく湧き上がった。暫くすると、不意に

入口の方で非常に激しいどよめきが起つて、何者か、昂奮し切つた裂ける様な聲で叫んだ。

『入れろ、入れろ、官憲横暴だ！』

すると忽ちにして、其波則は群衆の間に電氣の如く傳はつて行つた。

『官憲横暴！ 官憲横暴！』

と、一人の警官が、突如として、入口の高い臺の上に飛上つて火の様な聲で怒鳴つた。

『もう満員だ。解散しろ、解散しろ』

彼は、左手に腰の劍を押へ、右手を前に突出して群衆を威嚇でもするかの様に睨みつけた。群衆はそれを見るに又忽ちにして怒りに燃えながら、怒聲罵聲叫喚で之に應じた。

『何を云つてやがるんだい、馬鹿野郎』

『満員も糞もあるか』

『あの野郎生意氣だ』

『曳摺り落ろせ。曳摺り落ろせ』

『戸をぶち破れ』

『二階は未だから空きた』



『官憲横暴だ！ 曳摺り落ろせ』

群衆は又しても一齊に鬨の聲を擧げて怒濤の如く入口の方に押し寄せた。人垣を作つて入口を守つて居る警官は群衆の波に押され乍ら、先頭の數名を撲り突飛ばした。佩劍が鳴つた。波の先が破れて群衆はドドツと押戻された。

こんなにして群衆の波のうねりは寄せては返し返しては寄せて、入口のところでは、恰も岸邊の波が、寄せては返し返しては寄せて、絶え間なく岩に碎けて飛散る様に、群衆と警官との間には衝突が繰返されてゐた。

日がとつぷりと暮れて、街頭にとぼされた電氣の光が愈々其明るさを増して来る頃には、群衆は最早あの廣い電車通りにまで溢れ出て、あの邊一帶は夥しい人間で埋められて、波をしながら押合つてゐた。電車は頻りに警戒の鈴を鳴らしながら、這ふ様にして群衆の中を分けて進んだ。それで、一方は小川町の方へ、一方は駿河臺下の方へ、電車の長い行列が続いて立往生してゐた。警官等はこゝでも必死になつて道路の整理に努めてゐなければ、その群衆の中を電車を通らせるのは容易なことでは

なかつた。

六時頃駿河臺下の方から一臺の自動車疾驅して來た。その自動車は最初は頻りにラツバを鳴らして、どうかして群衆を突破しようと努めたのであつたが、それは不可能な事であつた。忽ちに揉みに揉み返す群衆の中で立往生して仕舞つた。

すると何者か、不意に其自動車のそばで熱狂した聲で叫んだ。

『道を開けろ。吉野博士だ！』

その叫びが群衆の中に響きわたると、廣い電車通りに充滿してゐる眞黒な大群衆の中には忽ちにして一大動搖が起つた。

『吉野博士？ 吉野博士？ 吉野博士だ。道を開けろ』

『道を開けろ』

『道を開けろ吉野博士だ』

忽ちにして自動車の前には狭いながらも道が開かれた。自動車はその中を徐行しながら電車通りから俱樂部の方に入るところで止まつた。

纏て群衆に取巻かれた自動車の中から、どちらか云

へば瘡せがたに近い中背の一人の紳士が現れた。それに續いてがつしりした體格の青年が現れて、その紳士の身體をかばふ様にして傍につきそつた。それは麻生であつた。續いて又二人の青年がその中から飛出した。

瘡軀の紳士の蒼白な冷靜な、すつきりとした顔がその中に目立つた。その中の一人が叫んだ。

『諸君吉野博士だ！。道を開けて呉れ給へ』

すると群衆は又一齊に歡呼の聲を擧げてどよめいた。

『吉野博士だ！』

『吉野博士萬歳！』

『吉野博士萬歳！』

『デモクラシイ萬歳！』

『デモクラシイ萬歳！』

紳士の前には容易に道が開かれなかつた。そればかりでなく、熱狂した群衆の波は非常な勢で反對に自動車をめがけて押寄せて來た。そして引つ切りなく博士の萬歳を連呼して止まなかつた。それでも吉野博士の前の一團は必死になつて進むべき道を開くに努めた。纏て吉野博士等は一寸摺りに摺つて漸くに入口のところに達した。

此時群衆の叫ぶ歡呼の聲は、わつしよわつしよと云ふ一つの統一された底力のある掛け聲に變つてゐた。

吉野博士の姿が入口の一段高いところに現れて、畫の様に輝いてゐる電氣の光に照らし出された時には、もう一度天を揺がす様な歡呼の聲が群衆の中から湧き上つた。

『吉野博士萬歳！』

『デモクラシイ萬歳！』

『民衆の敵を倒せ！』

吉野博士の姿が會場の中に消えて、それから暫くすると、急激の如き拍手の音が起つて、その開放した窓から群がる屋外の群衆に恰も戦ひを挑むかの様に迸り出た。

その音が夜の闇を突いて屋外の群衆に響くと、又しても天地をどよめく様な歡呼の聲が擧がつた。

其夜は吉野博士を守らうとする群衆の叫喚と會場に押寄せるどよめきとでそこいらは充滿してゐた。そして押寄せて來る群衆は刻々に數を増し、其熱狂は其増して來る數に比例して、激しくなつて來た。警官等は其波の間に揉まれ揉まれて、丸で泥に酔つた魚の様に、たゞ人波



の間をあつぷくして泳ぎ廻つて居た。

暫くすると會場でも演説會が始まつたと見えて、ひつきりなく拍手の音が雷の様に響きわたつた。戸外の群衆は又其拍手の響きが窓外に流れ出る度ごとに物凄く歡聲を擧げて之に呼應し、それが次第に傳播して電車通りの大群衆に傳はると、そこでは又形容し難い偉大さを以て大きな鬨の聲に變つて行つた。群衆は絶えず、入口を破壊しようとして押寄せ口々に叫んだ。

『中に入れろ』

『戸をぶち破れ』

『中の様子を知らせろ』

すると突如として一人の肥大漢が入口の高い臺の上の姿を現して、突つ立上りながらどよめき騒ぐ群衆に向つて獅子の吼ゆる如くに怒鳴つた。

『諸君！ 諸君は本日は博士對浪人會の立合演説を聞かんがために、而して又民衆の味方であるところの吉野博士の身邊を守らんがためにこゝに集まられたのである。然るに狹隘なる會場は諸君を容るゝ事が出来ない。實に残念至極である。』

併しながら諸君！ 諸君は意を安んぜよ。會場内にも諸君と志を同じうするところの同志は充滿してゐる。そして吉野博士の身邊を生命にかけて護つてゐるのだ。諸君は窓外に迸り出づる狂熱的な拍手の音を聞かないか。あの拍手の音を聞かないか。あの拍手の音は場内の同志が吉野博士に聲援するところの叫喚である。今や博士の論鋒は次第に鋭く、敵の肺腑をえぐつて着々として其陣營に迫りつゝあるのだ。諸君の擧ぐる鬨の聲は場内に對する無限の示威である。

諸君！ 諸君は意を安んぜよ。場内の同志はこぞつて博士を生命にかけて護るであらう。そして私はこれから屢々姿を現して諸君に場内の光景を報告するであらう……』

錆びた太い吼える様な熱辯が、しばし靜まり返つた群衆の頭上を波濤の傳はるが如く傳はつて行くと、忽ちにして眞黒な偉大な人間の波はどよめき亘つて響の音に應づるが如くに歡呼の聲を擧げた。

肥大漢は、此潮の湧き立つ様な狂熱せる群衆に向つて、更に山の様に偉大な體軀を揺がせながら吼え續けた。

た。

『諸君よ！ 今や民衆の時代は來らんとしてゐる。時代は頑冥固陋にして人道の何ものたるかさへ解せざる特權階級の專制を許さざるに至つた。今日まで虐げられ、踏躪られてゐた民衆は一齊に立上つて、民衆それ自身が、民衆それ自身のために、民衆それ自身の生活をなすべき秋は來らんとしてゐるのだ。これはとりも直さず自由と平等と正義との戦ひである。今やデモクラシーの叫びは野に山に畑に、全國の民衆の口から擧げられるところの叫びである。』

我々は我々の正義を追求する運動をさまたげ、其行手を塞がんとする者は、その何者たるを問はず之と戦ひを開かねばならない。

我が同志よ！ 正義を愛する我が同志よ！ 諸君が擧ぐる歡呼の聲はとりも直さず勝利を告ぐる民衆の凱歌ではないか。我々は其の聲の一步毎に、敵を壓伏しつゝあるのである……』

肥大漢は滔々たる雄辯を奮つてこゝまで吼えて來ると、更に其山の様な體軀を揺り、雙手を高く擧げて満身

の勇を奮つて叫んだ。

『民衆萬歳！ デモクラシー萬歳！』

群衆の擧ぐる拍手の音と歡呼の聲とは忽ちにして黒い人間の海から湧き上つて窓外から場内の敵を壓倒するかの如く思はれた。纏て其歡聲が靜まつたので肥大漢が高い臺の上から降りようとする、鋭く群衆の中から叫ぶ者があつた。

『君は一體何者だ』

すると其肥大漢はも一度立上つて群衆に向つて叫んだ。

『私は労働團體たる友愛會の鈴木と云ふものだ。諸君意を安んぜよ。全國の労働者は我々の味方であり、其背後から吉野博士を護つてゐるのである。』

其叫びを聞くと群衆は又異常なる熱狂を以て歡呼の叫びを擧げた。

『労働者萬歳！ 友愛會萬歳！』

その夜立合演説會が終つたのは最早十時過ぎる頃であつた。場内の異常などよめきと共に熱狂した會衆の雪崩れ出る中に交つて、吉野博士の姿が場外に現はれた時に



は、何處からともなく集つて来た友人知己は直ぐに其周圍を取りかこんだ。其身邊を氣遣ひながらも場内に入る事の出来なかつた者達は博士の無事な姿を見ると感極まつて其手を握り其肩を叩いた。

『よかつた』

『よかつた』

『有がたう』

と云ふ言葉は次ぎから次ぎへと交はされた。

『どうだ。此偉大な群衆は皆君の味方だよ』

吉野博士と同郷の親友の内ヶ崎氏は、その肥大な體軀を揺るがせ、其手を握りしめながら感極まつて叫んだ。

蒼白だつた吉野博士の顔には眞紅の血潮が湧き上つて、恰も焰の燃えさかつてゐるかの様に見えた。そして此自分を護る幾千とも知らぬ民衆の熱狂と、自分を氣遣つて呉れるこの友人達を自分の周圍に見出した時には、其雙眼から、何か知ら云ひ知れぬ感激の涙がこぼれ落ちる様に思はれた。

けれ共吉野博士等は長くちつと立止つてゐるわけには行かなかつた。群衆は博士の姿を見出すと忽ちにして其

周圍に押掛けて来た。そしてひつきりなく吉野博士の萬歳を連呼した。その密集の度は刻々に増して、博士に近づかうとする群衆の熱望は、押しに押し、押されに押されて、見る間に博士の身體は押寄する群衆の手に依つて、波の如き頭の上に持上げられた。昂奮と熱狂と歡呼との大渦卷の間に博士の身體は次第に電車道りの方に運ばれて行つた。

『道を開ける』

『道を開ける』

『吉野博士だ』

友人達は一團になつて博士を群衆に奪れまいとして狂氣の様になつて其後にくつついて行つた。警官等は必死になつて群衆を解散せしめようとして至るところに衝突を起した。博士が電車通りまで擔ぎ出されると友人等は又必死になつて奪ひ返して、その周圍をかこみながら波の中から逃れようと努めたけれ共それは不可能な事であつた。群衆はワツシヨイ〜と偉大な掛け聲を擧げながら黒山の様になつて背後に押寄せて来た。

『これはたまらない。とても駄目だ。これぢやあ、皆本

郷までついて来る』

吉野博士を抱く様にしてその側にくつついてゐた麻生が叫んだ。その麻生はもうとつとに帽子は何處かに飛ばし、羽織は引裂かれて足袋はだしになつてゐた。吉野博士も外套はとつとに何處かに飛ばし、頭髮は無茶苦茶に亂れてゐた。十一月半ばだと云ふのに太つた例の鈴木氏の額からは玉の様な汗がにじみ出て頻りにそれを拭つてゐた。

『どうだ此群衆は、皆んな俺達の味方だ。同志だ』

鈴木氏は其額の汗を拭ひながらも背後に迫る大群衆を見やりながら悦しさに堪へられぬ様に叫んだ。

群衆は此時にも絶えず、萬歳を叫びつゝけてゐた。

吉野博士等が辛じて駿河臺下に来た時にも其後方には延々たる黒山の如き大群衆が續いてゐた。その時駿河臺の方に向つて走る電車が行列の前を、けた、ましい警鈴を鳴らしながら横切らうとした。麻生はそれを見るときなり叫んだ。

『電車だ、電車だ』

そして、吉野博士を奪ふ様にして、石火の間に徐行す

る電車の踏臺に押上げた。

群衆の行列は其先頭に立つ吉野博士の奪はれたのも知らずに、相變らず萬歳を連呼しながら眞直ぐに其行進をつけて行つた。そして長い間、群衆の擧ぐる歡呼の聲は遠雷の響くが如くに、吉野博士の乗つてゐる電車の窓をうつつであつた。

## 二

此光景は、あの有名な吉野博士對浪人會の立合演説會の光景であつた。そして、其夜の光景は日本に於ける一般的社會運動の誕生的な光景であつた。

大正七年八月に起つた米騒動は、さらでだに世界戦争に依つて其土を耕されて居た日本の社會に極度の刺戟を與へて、民衆運動の上には高くデモクラシーの大旗が翻り、其全國を風靡して行く勢は燎原を焼く野火の如き有様であつたのである。

我々は人類の生活が織りなして来たところの歴史を繙く時、そこには幾つかの時代の轉換期のある事を知るであらう。そこには現在を守る人々の一群がある。又未來



を創造しようとする人々の一群がある。現在を守る人々は現在を以て人類至上の生活なりとする。何故ならば是等の人々は概ね、富を有し権力を有する人々であるからである。併しながら未來を創らうとする人々の頭には、現在の不合理と缺陷と、そしてよりよき未來の人類の生活の姿が其眼に映じてゐるのである。何故ならば是等の人々は概ね富を奪はれて貧しく、権力を奪はれて自由を失へる人々であるからである。或る一群の人々は保守派と名づけられる。他の一群の人々は進歩派と稱せられ又革命派と稱せられる。

社會主義の理論は、人類の歴史を階級闘争の歴史なりと説明する。その説明はとも角として、人類に運命づけられた宿命は、此二つの群れが現在と云ふ舞臺の上で、お互ひに相争ひながら其定められた進化の方向に向つて押し流されて行くところにあるのである。

我々が佛蘭西革命史を讀む。そこには様々な人間が其舞臺に上つて来る。王あり、僧侶あり、貴族あり、そして是等の人々に附屬してゐる主義者の一團がある。これを保守派と名づける。又他の一方には飢ゑたる人民があ

る。そして其飢ゑたる人民を導くところの主義者の一團がある。これを革命派と名づける。かくて是等の二派の人々は其當時に於て激烈なる闘争を演じて、人類の生活を血潮に染めた。併しながら我々は今日に至つて、佛蘭西には既に専制を恣のままにした王と貴族とを見ない。人類の生活は其進むべき方向に進み來つたのである。相争つた人々は何時の間にか墳墓の下に消え去つて、僅かに文字の上に其名残りを止めるのみであるが、併しそこには今日の佛蘭西が生れ残つてゐる。人間の運命付けられた生活は、是等の保守派の人々の激しい反抗と壓制に拘らず、其進むべき方向に向つて水の低きに流れ去るが如く流れ去るのである。けれ共、人類は未だ保守と革命派との激烈な闘争なしには、其行くところに行きつけないのである。そこに悲劇が起り又喜劇が起る。悲劇と喜劇とを取交せて、芝居を演じて行くのが人間の歴史であらう。

浪人會の人々に依つて代表さる、思想は保守的であると云ふべきであらう。吉野博士に依つて代表さる、思想は進歩的と云ふべきであらう。浪人會の人々はデモクラ

シーの思想を以て團體破壊の思想なりとし、外來の思想なりとして之に攻撃を加へたのである。

併しながら、滑稽な事にはそれ等の人々の中には外國輸入の洋服を着てゐる人々もあり、チヨンマゲを結つた人も見受けなかつたのである。恐らく徳川時代の人間から今日の保守國粹黨と稱する人々を見たならば、共に歸すべからざるチャコピン黨乃至はボルシエビストと見える事であらう。抑も國粹とは何ぞや、と云ふ事になれば、日本人現在の生活の大部分はこれを破壊しなければならぬであらう。そして今日の人類學は、や、もすると我々の祖先を遠く南洋の土人の生活の中に持つて行かうとする。併しながら、所謂國粹黨と稱する人々と雖も我々の生活を南洋の土人の中に還元する事には賛成しないであらう。それどころか我々の生活を僅か五六十年昔のチヨン鬻時代に持返すことすら肯んじないであらう。けれ共世の中と云ふものは妙なものである。既に軍人は鎧兜を脱ぎ棄て、軍帽軍服を身に纏ひ、日本刀を棄て、洋刀を腰にさげ、弓矢を棄て、鐵砲を肩に擔ぐやうになつても、國粹の絶對が唱へられ、外來の思想なる言葉が排

斥せられるのである。

高く揚げられた浪人會の旗には明かに國粹なる文字が記されてあつた。當時、是等の人々はデモクラシーの思想は國體を破壊し、日本を滅亡するの思想であると叫んだ。尤もそれから數年後の今日に於ては、浪人會に屬してゐた人の中にもデモクラシーの骨子であるところの普通選挙を熱心に主張する者も生れたのであるが――

憂國の至誠を抱くと云ふ是等の人々の戦ひは、先づ第一に、當時新思想鼓吹の急先鋒と目せられたところの大坂朝日新聞に向つて開かれた。全く其當時に於ける朝日新聞の勢は旭日昇天の勢であつた。京都帝國大學を始めとして、東京に於ける新思想家の人々も競つて生氣に満ちた論文を朝日新聞に掲載した。是等の社外の執筆者は兎も角として、其社内における人々にも錚々たる新思想家が勢ぞろひをしてゐた。主筆の鳥井氏を首班として、其所謂鳥井内閣の下には、急進的な論客として、將又深淵な哲學の所有者として當代に重きをなしてゐた長谷川氏もゐた。早稻田大學に於て青年の人氣を奮負つて立ちながら、デモクラシーの旗色の下に吉野博士と轡を並べ



て論壇に雄飛してゐた大山氏も亦、斷然其教職を棄て、其内閣の一員となつてゐたのであつた。其他若い有爲な青年思想家は雲の如くにそこに集つてゐた。そして鋭い論陣を張りながら、天下に向つて旭日の如く新思想を鼓吹したのである。

浪人會の人々は暗黙の裡に策戦をめぐらしながら、虎視眈々として機會の至るのを待つた。恰もよし、或る日の論說中に、『白虹日を貫く』なる一句を發見するや、彼等は猛然として起上り、天下に向つて、朝日新聞は明かに我國體を破壊して謀反を企つるものであるとの宣言を發して、猛烈なる朝日新聞破壊運動を開始した。朝日新聞社の社長が白晝大道に於て其老軀を縛せられ、『大不忠漢』の立札を立てられたのはそれから間もなくの事であつた。そしてさしにも旺盛を極めてゐた鳥井内閣が倒壊して、鳥井氏長谷川氏大山氏を始めとして、其下に集まつた新人等が朝日社を放逐されたのはそれから間もなくの事であつた。かくて昨日までデモクラシイの旗を高く掲げて民衆のために虹の如き氣を吐いて天下に呼號してゐたところの朝日新聞も、今日は忽ちにして保守派のた

めに奪還せられて、其旗色は黄色と變じて仕舞つたのである。

門出の一戦に其最大の強敵とする朝日新聞を物の見事に破壊したところの是等の諸君は、意氣揚々として東京に引揚げ、其餘威に乗じて、東京に於ける急進的な思想を抱く學者思想家に向つて其鋒を向けたのである。風評は風評を生んだ。暴力を以て是等の學者や思想家が制裁され威嚇されるとの噂は頻々として傳へられた。今までは堂々と急進的な思想を筆に口に燦に鼓吹してゐた學者や思想家の中には、急にその影をひそむる者も出て來た。そして、今宵たうとする一つの新しい時代の幹も枝も、突如として現れ來つたところの暴風に依つて吹きぢぎられやうとする形勢を示して來た。黒い暗い恐しい無残な雲が偉大な壓力を以て、突如として行人の前にたち塞がった様に思はれた。その暗雲はたゞに浪人會の影のみではなかつた。憲兵や警察官等が頻々として是等の新思想家の家を訪れると云ふ風評は、人々の口から口へと傳へられて行つた。憤怒と反抗と臆病と恐怖とが入亂れて、二つの力が相搏つたの日が切迫して近づいて來た様に

思はれた。

此時突如として、『吉野博士對浪人會の立會演說』の報道が傳へられたのであつた。

當時に於ける啓蒙運動の急先鋒は何と云つても吉野博士であつた。浪人會は朝日新聞の攻撃に勝利を博すると、第二に其目標としたのは吉野博士であつた。

浪人會の一人が帝國大學に吉野博士を訪問して其攻撃を開始したとの報道が傳へられた。東京の新聞紙は吉野博士對浪人會の論戰を社會部の面に業々しく報道した。吉野博士は又其頃中央公論の誌上に於て、浪人會對朝日新聞事件を論評して其攻撃の矢を浪人會に放つてゐたのである。吉野博士對浪人會の間は日毎に切迫して行つた。そして果然浪人會は吉野博士に向つて立合演說を申込んだ。博士が或夜、例の根津の麻生の家を尋ねて其決意をもらしたのはそれから間もなくであつた。麻生は勿論それに賛成した。そして動もすれば、博士に對して不利な記事を掲載しがちであつた日日新聞に對し兩者の意思の疎通をはかるに努めたのであつた。時代は何時の間にか變つてゐた。吉野博士對浪人會の

立合演說會の開かれた夜の光景は既に述べた通りである。朝日新聞を攻撃して凱歌を奏した浪人會の人々も、東京に於ては吉野博士を倒す事は出來なかつた。そこには吉野博士を守らうとするところの民衆が潮の寄するが如くに押寄せて來た。抵抗する事の出來ぬ新しい時代の潮は何時とも知れず、社會のどん底から湧き上つて古い時代を置きざりにしてゐたのである。會場にゐた浪人會の一人は、高い窓から黒山の如くに押寄せてゐる夜の民衆を見おろして叫んだ。

『見よ力を以て威嚇するのは我々ではなくして、吉野博士である。博士は多數の民衆を引連れて我々を威嚇してゐる』

眞に其夜會場に押し寄せた民衆は、それ程吉野博士を、新しき時代を守らんとして熱狂してゐたのである。浪人會の人々も無限の威嚇力を有する此民衆に對して施す術を知らなかつた。立合演說の内容は如何であつたにせよ、其夜の勝利は明かに吉野博士側にあつた。換言すれば、新しき時代に棹さしたところの舟は、其行手をさへぎつたところの暗礁を物の見事に突破つて、洋々た



る大海に出たのである。

新しき時代の潮は、この立合演説をきっかけにして、大正七年末から八年にかけて日本全国に湧き立つた。將に新時代の黎明がそこに現れたのである。知識階級の新人等は更に勇を起して新しき時代の招來に今一步を踏み出した。此意味に於て、新しき時代の來るを防ぎ止めようとしたところの浪人會は、過去の總ての歴史の記録が我々に證明して呉れると同じやうに、現れ來つた新しき時代の流れに一石を投じて、其流れを更に明瞭に更に急激ならしむるの役目を演じたのであつた。春秋の筆法を以てすれば、『浪人會黎明會を建設せしめ、新時代の招來を援く』と云ふ事になるであらう。黎明會とは、吉野博士對浪人會の立合演説會の後、それに刺戟された學者思想家の人々が、痛切に團結の必要を感じて、大正七年も將に暮れやうとする頃、其建設に着手し、翌八年の正月に其生ぶ聲を擧げ、其後燎原を燒く野火の如き勢を以て全国的に啓蒙運動に従事したところの會の名である。其中には、殆ど全国の各大學の學者の中で新人を以て目せらるゝ人々を網羅してゐた。黎明會の名は、獨逸語のデ

ンメルングに相當する言葉で民衆の將にめざめやうとする黎明期の運動を意味してゐるのであつた。そして此黎明會は、先駆した所謂社會主義運動を別にすれば、日本に於ける社會運動的色彩を帯びた一般的な而も有力な團體の先驅者であつた。此團體は大正八年度に於ては旭日の勢を以て發展し非常な活動を續けた。そして日本の社會運動の夜が明けて、太陽が天空に其眞晝の白光を放つに及んで次第に其光を失ひ其姿を没したのである。けれども共啓蒙的な功績に至つては社會運動史上に第一の地位を占むべきであらう。黎明會の事に就ては次に詳しく紹介しなければならぬ。

三

神田の南明俱樂部で吉野博士對浪人會の立合演説があつてから半月ばかり経つた或る夜の事であつた。これもあの神田の高等商業學校の前通りにある學士會館のとある一室で、二人の中年の紳士と二人の青年とが卓を圍んで熱心に何事かを相談し合つてゐた。中年の紳士の一人は吉野博士であつた。相變らず蒼白な顔に穏やかな微笑として第一人者の稱ある福田博士であつた。そして今一人福田博士の側に腰掛けてゐる丈の高い青年は、其當時福田博士が殆ど立てこもつた様にして其主張を發表してゐた中外と云ふ新しい大雜誌の主筆であつた。

を湛へて彼の隣りに腰掛けて何か頻りに説明してゐる一人の青年の云ふ事に耳を傾けてゐた。吉野博士の様子の中には何處となく氣安で善良で、餘り物ごとくにこだはらぬ、すらくとしたところがあつた。謂はゞ非官僚的なデモクラチックなところがあると云ふのであらう。勿體振ると云ふ様なところは藥にしたくもなかつた。彼の隣りにゐて、彼の眞向ひに腰掛けてゐる一人の紳士に何事かを説明してゐるのは麻生であつた。その話しかけられてゐる紳士は耳が遠いのであらう。片つ方の掌を一方にあてがつて、顔を少し横向けながら、首を前にかしげて麻生の説明を熱心に聞いてゐた。そして時々納得するかの様に、ひよくり／＼と首肯いた。其様子の中には一種云ふに云はれぬ親しみがあつた。身體はどちらか云へば小柄の方で、顔は童顔に近く、眼の上には強度の近眼鏡が光つてゐた。容貌のどこかには、如何にもやんちゃな、きかぬ氣らしい處がある様であるが、併し又極く親しみ安いざつくばらん、むき出しな性格が、ちよいちよいと其表情の中に現れてゐた。此紳士こそは高等商業の教授で、日本に於ける經濟學者として又マルクス學者

の教授で、日本に於ける經濟學者として又マルクス學者

吉野博士對浪人會の立合演説會があつてから此二人の博士が一室に顔を合せるまでには色々ないきさつがあつた。經濟學者として、又マルクス學者として透徹した頭腦を有する福田博士は、どちらかと云へば、英米流の人道主義、英米流のデモクラシイの主張者である吉野博士とは著しく其説を異にしてゐた。それで彼は其發表する論文の中で折々吉野博士の説を嘲笑したり攻撃してゐたのであつた。ところが、一度例の浪人會の事件が持上ると、彼は持つて生れた反抗癖やら義俠癖やらがむらく／＼と起つて彼の吉野博士に對する態度は一變して非常な同情に變つたのであつた。

麻生は浪人會が次第に勢力を延ばして、大阪に於ける朝日新聞を屠り其餘波は東京にまで及んで東京の新聞にも大動搖が起り、新しい思想に味方する連中が連袂して



辭職するに至り、續いて吉野博士が其槍玉に擧げらるゝに及んでは痛切にこちら側の無力な事を感じざるを得なかつた。それで此反動的な勢力に當るためには、どうしてもこちら側にも一つの團體をつくらねばならぬと考へてゐた。けれ共未だ其機が熟さなかつた。併し吉野博士對浪人會の事件があつた後には漸くさう云つた様な氣運が動いて來たのを感じた。

彼は次の新しい時代を創つて行くには其運動を經濟的と政治的の兩方面から進めて行かねばならぬと考へてゐた。そこで新しい團體を作る上にも出來得るならば、此兩方面の人々を集めたいと考へた。其考へは纏て吉野博士と福田博士の提携と云ふ事に落ちて行つた。恰もよし彼は福田博士が例の立會演說會の事からして吉野博士に對して非常な同情を寄せてゐると云ふ事を聞いたので、好機逸すべからずと思つて或る日吉野博士を訪れたのであつた。當時既に吉野博士にも何等かの形で一つの團體を作らうとする意思が動いてゐた。そこで麻生は熱心に福田博士との提携を勧めた。物にこだはらぬ、淡白な性質の所有者である吉野博士は、悦こんで麻生の提議に賛

成した。

『なめに君福田博士はね、非常にざつくばらんない、人なんだが少しやんちゃだから、どうかすると人と喧嘩をして嫌はれたりするんだが併し僕とならば博士も喧嘩なんかしないでせう。僕は福田博士を尊敬してゐるし、福田博士さへよければ僕は悦んで一緒にやります』

『ちや先生は福田博士に會つて呉れますか』  
『會ひますとも』

『ちやあ僕が一度福田博士に會つてどんな具合だか福田博士の氣持を聞いて見ませう。何時でも我々の方の弱點は力を有たないと云ふ事です。平常は非常に賑かて皆こつちの味方の様に思はれるが、其勢力がまとまつてゐないので一つ押されると直ぐにへとくになる。どうしても早く勢力を纏めて力を作らなければ駄目です。福田博士が少し位喧嘩早くたつて先生が其調和をとつて行かれる心算なら大丈夫でせう。矢張り先生だけで團體を組織されるよりも福田博士と提携されて二人が主となつてやられた方が有力だ……』

そこで麻生は其翌日中外社を訪問して其社長の内藤氏

や主筆と會見した。當時雜誌社は米國流の編輯法をと

り、福田博士を筆頭にして、久しく埋もれてゐた日本に於ける社會主義者の人々を集めて、潮の如く寄せ來つた新しい時代の勢に乗じながら旭日の如き勢力を示してゐたのであつた。小柄な社長の内藤氏は才氣に満ちた物分りのいゝ人であつた。そして其風貌の中には可成りに大きい事を考へ得る山氣的な態度があつた。吉野博士と福田博士とを提携せしめて一つの團體を創らうとする麻生の提議に對しては雙手を擧げて賛成した。

『君我々は小さな事は云つて居られん。我々の時代を創るためには先づ力を創る事が必要だ。福田博士は吉野博士と提携するでせう。中央公論の瀧田君はどうですかね。博士の關係上……』

『大丈夫です。先日吉野博士のところに行つた時に、丁度來合はせてゐて瀧田君も賛成でした。流石は中央公論をあれだけにした人だけあつて何處かに優れたところがある様です。雜誌を作るのには随分熱心で、その時にも原稿を山の様に風呂敷に包んでゐましたよハ、ハ、』  
『成程ねえ。さうでせう』

『あなたの方も盛な様ですな』

『ハ、ハ、ハ、まあ御覽の通りです。未だ始めて間がないのでねえ。併し皆よく働きますよ。福田博士や、社會主義の堺氏や何かも時々見えられます。家が狭いので裏の方を新築中です』

新興の中外社は内藤氏の云ふ通り、家の中はこつた返してゐた。そして其こつた返してゐるのが如何にも新興的な氣分を漲らしてゐた。支關には絶えず人々が忙がし氣に出入し、其出入する人達の様子は何處かに常人と異つたところがあつて、ハイカラであつた。皆頭髪を長く延してゐた。其態度の中には一種妙な誇りと云つた様なものがあつた。世の中を睥睨してゐる様なところがあつた。所謂社會主義者型とでも云ふのであらう。麻生は始めて見る是等の人々の珍奇な様子に内心驚かされて別な世界を見せられた様に感じたのであつた。

内藤氏は齒切れのいゝ言葉で云つた。  
『福田博士の事や新しく創らうとする會の事に就ては、主筆の中目君に萬事を委せますからどうぞ宜しく。どうかあなたもこれから遊びに來て下さい』



『ありがたう』

一麻生は其翌日主筆の中目君と福田博士を高等商業に訪問する約束をして中外社を出たのであった。

その翌日の晝頃、二人の青年が高等商業學校のある一室で福田博士を待つてゐた。二人の青年は麻生と雑誌中外の主筆の中目であるのは云ふまでもない。

麻生は世間からむづかし者の様に云はれてゐる福田博士との初めての會見を心の中に氣遣つてゐた。

纏て扉が開いて餘り風采のあがらない、併し其全體の風貌の中に何處か特異なところのある一人のプロフェツサーが現れた。そして氣輕な親しみのある聲で、

『どうも御待せしました』

と云ひながら、前かゞみになつた身體を無雜作にちよこくと運ばせて二人の前に腰をおろした。そして、テーブルに腕をつき掌で頸を支へ乍ら眼鏡越しにじろりと二人の青年を眺めた。

麻生と中目とは立上つて挨拶をした。それから麻生は熱心に吉野博士の事、福田博士の吉野博士に對する同情の事を云つて、二人の會見の事を依頼した。福田博士は

『踊り出すつて、ハ、ハ、ハ、そりや愉快だ。大いに野性があるんだなあ、ちや女も好きだらうハ、ハ、ハ、……』

麻生は福田博士の馬鹿にすました様な、おどけた様な顔の表情を思ひ出して高く笑ひながら云つた。中目は又快活な調子で云つた。

『そりや勿論嫌ひぢやないだらう。何時だつたか、吉野博士も少し藝者買ひでもしたら、もつと世の中の事も分り、人間も開けるだらうと云つてましたよハ、ハ、ハ、』

『随分口の悪い事を云ひますねえ。そこいらが喧嘩好きな所以なんだらう。併し學者としては珍しい大膽な人だ』

『大膽と云へば僕の社には社會主義者の堺さん達も關係があるんだが福田博士は社會主義者の人達に非常な同情を拂つてゐて、その人達を助けるつもりらしいですよ』

『は、うそれは偉い。だが吉野博士とは大丈夫でせうねえ』

麻生は幾分氣遣ふ様に云つた。

『それは大丈夫でせう』

中目は自分で請合ふ様にはつきりした口調で云つた。

黙つて首肯した。そして、『近頃は憲兵があつちこつち廻

つてゐると云ふ事だが怪しからん、僕の家にも来たよ』と云つた。そして度の強い眼鏡の奥に光つてゐる兩眼に、無邪氣な幾分彌次氣のある微笑を湛へて、二人の青年を見た。其様子の中には少しの氣むづかしいところもなかつた。そして何處かにむき出しなざつくばらんな處があつた。

二人の青年は愉快的な氣持になつて外に出た。麻生が云つた。

『福田博士つて君愉快的な人ぢやありませんか。何もむづかしい事はない……』

中目が答へた。

『まあさうですがね、あれで非常に彌次性を持つてゐるから、所謂紳士とはそりが合はないんでせう』

『さう云へばさうかも知れない。少くとも偽善者ぢやないらしいハ、ハ、ハ、併し何處かに滑稽なところがありますねえ』

『ハ、ハ、君、非常な酒好きでね、呑むと踊り出すんですよ』

そして又それにつけ足した。

『あの立會演説以來非常に吉野博士に同情して好感を持つてゐるんだから』

『もう我々の方でも鞏固な團結を作らなければいけない。一般の民衆は其據るべきところを求めてゐるんだ。あの立會演説の夜の光景でも分る。僕等はどうしても二人を提携させて會を組織しなければいけない』

麻生は何かを決心し又夢見る様な顔をして熱心にさう云つた。

四人が學士會館に集まつて福田博士と吉野博士が改め顔を含せるまでにはこんな順序があつたのであつた。

其夜福田博士と吉野博士との會見は極めて平和に行はれ、色々の相談はすらくと運んで行つた。そして次に會合すべき日を十二月の四日の夜と定めた。

その夜に福田博士と吉野博士を中心にして七名の會會が同場所で行はれた。其夜には二人の博士に代議士で普通選舉の主張者である今井博士も發起人の一人に加はつた。中外社からは社長の内藤氏と主筆の中目氏がやつて



來た。そして中央公論社からは主筆の瀧田氏がやつて來た。瀧田氏は博士を擁して其主幹する中央公論で熾にデモクラシイの宣傳をやつてゐた。其どつしりした體軀の中には勢力が漲つてゐる様で、雑誌を創る上には天性の優れた技術を持つてゐるのであつた。一度其柱の傾きかゝつた中央公論も此人の手に移つてからは頽勢を盛返して其頃は旭日の勢であつた。

其夜は此六人に麻生を加へて七人であつた。其夜には次の様な大綱三則が定められた。

- 一、日本の國本を學理的に闡明し、世界人文の發達に於ける日本の使命を發揮すること。
- 二、世界の趨勢に逆行する危険なる頑冥思想を撲滅すること。
- 三、戦後世界の趨勢に順應して、國民生活の安固充實を促進すること。

そして先づ第一着手として左の様な手紙を、各大學の教授並びに在野の思想家で、此主旨に賛成しさうな人々十數氏を選んで送る事になつた。

謹啓

世界大戦も漸く終結と相成り御同様慶賀祝福に存じます。申すまでもなく今回の戦争は、専制主義、保守主義、軍國主義に對する、自由主義、進歩主義、民本主義の戦争でありまして、今後に於ける全世界の諸國民は、此光輝ある戦捷と平和とに依つて、初めて眞正なる文明的生活に入るの希望を有してゐる次第であります。

然るに此希望に充ちたる、而かも同時に種々なる危険を包蔵せる講和時機に於て、我國社會の一部に在つては、却つて此世界的の大勢に逆行する危険なる、保守頑冥なる、専制主義讚美者軍國主義の渴仰者がありまして、多數國民の切實に要求する言論思想の自由を蔑視し、敢て不合法なる壓迫を試みんとするの徴候が歴然としてゐることは各位の間に看取せらるる處であらうと存じます。

然るに世の識者と雖も、或ものは之を一笑に附して深く意に介せざるも可なりと爲す者も有るかに見受けられますが、小生等の觀る處に依りますれば、若し彼等を放任して其の暴狀を看過し窮鼠をして屢々猫を噛まし

むるが如き變態を生ぜしめますならば、我國は不幸にして此文明的進運の急轉期に際し、假令一時的なりとは云へ却つて國民生活の逆轉を來し、世界の趨勢に對して見苦しき後を取り、従つて人類の向上進歩に對する、國民的貢獻を空しうするの虞がある事を痛感致します。

此處に於いて、生等は微力ながら大綱三則を定め、自ら進んで主唱の地位に立ち、平素共鳴欣仰措く能はざる各位の御來會を乞ひ、一夕懇談を盡して此當面の大問題に對する御研究を仰ぎたいと存する次第であります。各位御研究御熟議の結果、何等かの形式に於て、一箇の新運動を生ずるとしましたならば、生等は只各位に伍して、最善の努力を致す覺悟を有するのみであります。時機は一日も早きを要するを思ひ、誠意と熱情との溢るゝに任せ、取急ぎ此一書を呈するに至りました。寛厚なる各位、何卒此意を諒とせられ、十二月十六日午後五時三十分神田一つ橋學士會館まで御來臨下さらば、生等の光榮と感謝と之に過ぐるものがあります。

其夜假りに會名を「黎明會」と名づくる事として、其

大綱と共に次に創立會の時に正式に確定する事とした。

黎明會の名は、恰も當時に於ける日本の社會が、社會運動途上の黎明期に遭遇して居り、そして此會の運動の目的も啓蒙的な使命を帯びてゐるところから生れたのであつた。

次いで創立會は、手紙に指定した日よりも後れて、大正七年も將に暮れやうとする十二月二十三日の夜に同じ場所で開催された。

其夜は、二人の博士の外に勸誘を受けた人々も集つた。そして其勸誘は非常な好成绩で殆ど全部の人達が之に賛成したのであつた。

その校集つた人々の中には、高等商業の教授で經濟哲學の學者として屈指の一人であり、又横濱に於ける富豪である左右田博士の温厚な學者らしい姿も交つてゐた。今から一二年前露國に入つてモスコウで監獄に投ぜられ、今はもう死んだであらうと噂されてゐる大庭氏の小さな然し元氣なにくくした顔も交つてゐた。その大庭氏は當時例の浪人會の事件で東京の朝日新聞を退いて浪



人生活をしてゐたのであつた。其後ボルシェヴィキに關する不穩の宣傳をしたと云ふので牢獄に投ぜられた、早稲田大學教授の木村文學士もゐた。そして又これも其後無政府主義の論文を書いたかどで、牢獄に投ぜられた法科大學助教授の森戸氏もゐた。都市問題に關する造詣が深いと云はれてゐる大學教授の渡邊博士もゐた。

其夜の會合は全く生き／＼した會合であつた。總ての相談はすらくと運んで行つた。先づ黎明會と云ふ會名が正式に決定された。

獨逸に長年居て其事情に詳しい左右田博士は、『黎明とは獨逸語のデンメルングと云ふ文字にあてはまるやうだ。獨逸にも以前に丁度此會と同じやうな會が出来た事がある。黎明、黎明、デンメルング全くだ、名前だ』

と幾度もそれを繰返して賛成した。そして假りに定められた大綱三則も正式に承認された。其他の細則もすらすらと決定した。今後の入會者の諸否は總ての會員の無記名投票に依つて決する事に定めた。當分毎月一回懇談會を開く事も定められた。又毎月一回講演會を開く事も定められ、聴講料十錢宛を取る事も決められた。(今こそ

大抵な講演會は有料であるけれ共當時は大抵無料であつた。講演はパンフレットとして之を公刊發賣する事も決められた。そして其の事は一切大庭氏に一任する事となつた。(これは後に大鏡閣から黎明講演集として發行される様になつた)最後に第一回の講演會を大正八年一月十八日に神田の青年會館で開く事を決めて、其講演者は、福田博士、吉野博士、左右田博士、今井博士、木村文學士と云ふ事になり、大庭氏が司會者たる事も定められた。

こんなにして、新しく生れて來ようとする新時代の黎明の扉を破つた黎明會は生れたのであつた。

斯くて、大正八年一月十八日の夜、神田の青年會館で第一回の烽火を擧げ、一般社會に對して其誕生を告げ、併せて其目的を宣言してからの黎明會は、異常な熱度を以て民衆の歡迎を受けた。何か知ら待ち望まれてゐたものがそこに、明かな姿を民衆の前に現したのである。講演會のある度ごとに聽衆は潮の如く會場に押寄せて來た。之に響應する叫びは、全國至る處に擧げられて其旗を歡迎した。會員も次第に其數を増し、其質を整へた。

そして何の内紛も起る事なく會の仕事はすらくと運んで行つた。

けれ共大正八年も半ばを過ぎて、深い眠りに閉ざされてゐた民衆も次第に其眠りからさめて起上り、纏て、社會運動の眞晝の太陽が天空に輝くに及んで、黎明會の姿も何時の間にか其影を失つて行つたのであつた。けれ共その有してゐた使命は立派に果したのである。

#### 四

黎明會が生れると同じ頃に、帝國大學の法科を中心として一つの學生の會が生れた。其會は名を新人會と命名された。そして其會の目的や内容は其名の示す通りに、新思想を抱く新人達が新しい運動をしようとするのであつた。

帝國大學も一、二年の間に著しい變化を遂げてゐた。思想的にも制度の上にも色々な變化が見られた。先づ第一に學生を固い鎖に繋いでゐた試験制度が改正せられた、そして其一點の點數に依つて人間の價値の上下が決定された點數萬能の制度も何時の間にか崩壊して行つ

た。自由を奪はれて一つの鑄型の中にはめられてゐた學生の生活の中にも何處からともなく延び延びした春の風が訪づれて來たのであつた。古臭い官僚式な講義は次第に其影をひそめて、生き生きした自由な學問が教室の窓からもれる様になつた。

大學は長い間官僚の養成所であつた。特權階級の屬附物であつた。こゝを卒業したものは争つて高等文官の試験を受け外交官の試験を受けて官吏となつた。然らざる者も金持に抱へられて所謂實業家となつた。大學の目的とし學生の理想とするところは、此登壇門たる大學を好成績に卒業して、如何にして特權階級の寵兒となつて立身出世するかと云ふ事であつた。大學のいかめしい正門は特權階級の裏門には通じてゐたけれ共、民衆の前にはびたりと閉ざされてゐたのであつた。

けれ共時代の新しい潮は嚴然として聳え立つたクラシツクの殿堂の扉にも押寄せずにはゐなかつた。その押寄せた潮は高らかに聲をあげた。

『大學よ、學問は特權階級の奴隸ではない。眞理の探求が學問の目的ではないか。眞理の前に其閉ざされた扉を開



け。民衆が眞理を求めてゐる。眞理が民衆の上にあるならば、學問の扉は先づその方に開かれねばならぬ。民衆の前に閉された大學の門を開け。新しい時代がそれを要求してゐる。眞理がさう命じてゐるのだ』

大學の門をくゞる學生の眼は次第に民衆の方に開けて行つた。長い間の奴隸的な生活から脱して眞理の學問の中に甦へつた若い學生の純な心は、特權階級の裏門に足を運ぶ事よりも棄てられ踏み躪られてゐた民衆の中に自己を投ずる事の方に正義と眞理とを見出したのである。彼等の生活の内容は次第に變化して行つた。彼等にとつて人生の目的は立身出世する事ではなくなつた。社會の形式の中に自分を當てはめる生活は最早彼等にとつては空虚なものとなつた。彼等の前には新しい生活が開けて來た。それは自分の生活を眞理の前に又正義の前に捧げる事であつた。不合理な社會を改造して理想の社會をうちたてるために一人の革命家となる事であつた。磨げられた民衆に自己を捧げる事であつた。

學生の生活は其古い大學の因習から脱け出して漸く動き始めたのである。

斯くて長い間、民衆の前に固く閉されてゐた大學の門は、漸くにして其扉を民衆の前に開き始めたのである。新入會は閉された其扉を内から開くために生れたのであつた。特權階級の裏門に通じた大學の正門を眞一文字に民衆に向つて開くために生れたのであつた。

『我々は不合理なる今日の特權階級の社會を改造して民衆それ自身の新しい理想の社會を創らなければならぬ』

『我々は社會改造の世界思潮に逆行して其運動に妨害を加へるものに對しては、徹底的に之を擊破して進まなければならぬ』

彼等は純眞にして燃ゆるが如き熱情を抱きながら、面天の意氣を以て高らかに斯く叫んだのであつた。そして次の様な綱領を掲げたのである。

一、吾徒は世界の文化大勢たる人類解放の新氣運に協調し之が促進に努む。

一、吾徒は現代日本の正當なる改造運動に従ふ。

彼等は又青年の情熱と氣持とを歌にして聲高らかに歌つた。

### 一、東方の眠り久しき國の兒等

今燦爛の新たなる

光明に覺む嬉しからずや。

### 二、閩族と阿權と利己と曲學の

力合せて塞ぎたる

世界思潮の濤ほとばしる。

### 三、空ひたす世界思潮に身を乗せて

立てる姿を今見よや

至高學府の青年の意氣。

### 四、權勢の前に土下座を強ひられし

時を去ること五十年

奴隸の夢は今ぞ昔ぞ。

### 五、世は移り時は過ぎ行く何時までか

意氣の青年閩族の

奴隸となりて身をせばむべき。

### 六、閩族の垣と呼ばれし不祥の名

今ぞ雪がん赤門の

健兒の意氣を人々よ見よ。

その頃新入會の創立者として會の牛耳を握つて活動してゐる二人の青年があつた。その一人は、丈のすらりとした何處ともなく新時代のインテリゲンチアらしいところのある青年であつた。其生き／＼とした眼、調子の高い話振りの中には潑刺たる才氣と伶俐さとが漲つてゐた。

そして其輕快な身振りの中には獨特の態度があつて人を魅し去るのであつた。此青年の名は赤松と云つて、棚橋や山名や麻生と同じやうに三高の出身で彼等より三級ばかり下であつた。も一人の青年は宮崎と云つて一高出の青年で彼の父は今亡き有名な支那浪人の宮崎滔天氏であつた。大正八年の四月に新入會が其本部を、目白にある支那の革命家黃興の家に移したのは宮崎滔天氏のおかげであつた。此青年は赤松とは反對に、理智的と云ふよりも感情的な、ロマンチックなところがあつた。彼の父

が支那の革命家の人々と深い關係があるためであるからであらう、其大まかな風貌の中には何處となく革命家らしいところがあつた。彼は一高の出身でありながら、何處かに所謂一高型にはまらぬ粗野な、野性的な、明けつ放しのところがあつた。一見物馴れた、悪く云へば世馴



れたところがある様であつたが其實極めて正直な初ぶな青年であつた。彼は赤裸々に思ふが儘に大膽に物事を行ふ性格を持つてゐた。そして彼はそれから數年後に、天下を聳動せしめる様な戀愛事件を惹き起したのであつた。

だが其頃の二人は青年の純粹な熱情を新人會の仕事に捧げて新しい社會の實現を夢見ながら學生らしい活動を續けてゐた。

新しい思想を抱いて其頃生れた學生の團體は、たゞに新人會ばかりではなかつた。何時も民衆運動の魁けをする早稲田大學にも、新思想の潮は其門を乗り越え教室の扉を破つて其中に流れ入つた。そして新人會の生れる頃にはそこにも新人の團體が生ぶ聲を擧げてゐたのであつた。

長い間眠つてゐた東洋の孤島に押寄せて來た世界思潮の波は、何時の間にか深くも其土の中にしみ入つて、大正七年の暮から大正八年の春にかけて、其若い芽を土の上にもたげ始めたのであつた。

日本の社會は急に其深い眠りからめざめた様に其新し

い潮の上に乗せられて動き出した。壓しひしがれて居た民衆の姿が、むく／＼と地平線上に其巨軀を現し始めたのである。

## 五

疾風の如くに數限りなき問題を巻き起しながら大正七年と云ふ年も惶しく過ぎ去つた。そして大正八年といふ年が、其懷に幾多の問題の蕾を抱きながらやつて來た。

大正七年に其若々しい芽を吹いた幾多の新しい運動は、新しい年を迎へると共に、東の空に輝く元旦の旭日の如くに、其輝しい光を添へて來た。

一月も終らうとする水曜の夜に、例の本郷根津の麻生の家で例の様に彼等の同志の會合が催された。彼等は昨年の春から此水曜會は斷ゆる事なく續けて來てゐるのであつた。

その頃には野坂はもう英吉利の方に旅立つてゐた。そして途中から幾度か彼の同志に宛て、手紙を寄越してゐた。

其手紙の中には當分は英吉利に居て、労働組合の中に

も出来るだけ入つて、實際の運動の仕事にも携はりたいたいと書いてあつた。併しそこで充分研究が出来たら、佛蘭西にも渡り獨逸にも行き、出来る事ならば露西亞にも入つて其實情を見たいものだとも書いて寄越した。

同志の者達は、か弱さうに見える野坂の健康を氣遣ひながら彼の手紙を奪ふ様にして見合つた。

野坂の代りに友愛會の本部に入つた棚橋は其頃もう月島の労働者町の方に居を移してゐた。居を移すと云つたところで、組合の幹部の者の二階を借りてそこに住んでゐたのである。

そうでなくても野性的な彼の風貌は、労働者の仲間に入つてきたはれるに従つて愈々其野性を發揮して來た。そして又さらでだに樸朴粗野な彼の性格は労働者と交はるに従つて愈々直截簡明になつて來た。恐らく此頃の彼に最初に會つたものは、彼を大學出の法學士と思ふものはないであらう。彼は見るからに労働者らしくなつて行つた。

その月島には例の山名も、移り住んでゐた。そして高野博士の下で労働の保健調査に従事してゐた。けれ共彼

は兎角其調査の方は怠け勝ちであつた。それで彼の餘りの怠惰に對しては高野博士も持て餘したと見えて、麻生の方に小言が廻つて來た。麻生と棚橋とはそのことに就て笑ひながら話し合つた。

『おい奴さんの事に就て高野博士から小言を云つて來たぜ』

麻生は棚橋にさう云つた。

『ふ、何て云つて來たい。山名の奴め近頃労働者と一緒に酒ばかりのんでるぜ。困つた奴さ。あれなりちや今にお拂箱になるかも知れんぜハ、ハ、』

棚橋は面白さうにさう云つて吐き出す様に笑つた。

『オイ、貴様傍についてゐる癖にしようがないぢやないか。あ奴が御拂箱になつたら月島の運動はおぢやんだぜ。貴様もその實一緒に飲んでるんだらう、ハ、』  
『まあそんなもんさ。なあに大丈夫だ。高野博士だつて山名の家に来ちや飲んでゐるんだ。その位にしなくちや労働者の事なんか分るもんかい。お前今度會つたら、さう云つてやれや。そんなにケチ／＼するなつて』  
『なんだ。人を馬鹿にしてらあ。大きな事を云ふない。』



だが皆集るやうぢやないか』

『うむ大分集まるやうだ。絶えず研究会を開いて眞實の事を宣傳しなくちや駄目だ。處がね、そら例の婆さんさ。』

『うむ、あいつの監督に來てるつて云ふ小さい時の乳母だらう』

『うむ、あれさ』

『あれがどうしたんだい』

『あれが俺と貴様を痛快に罵倒してゐるぜハ、ハ、』

『ハ、ハ、何て云つてるんだい』

『麻生や棚橋の平民共が、うちの若様を飛んでもないものにして仕舞ふつてわけさハ、ハ、ハ、笑はせやがるがねえ。ところが近頃先生、本郷の例の一件を知つた様だぜ。それでねえ先生、そいつも俺達のせいにしてるんだ。飛んだ迷惑さ。何でも一二度月島に訪ねて行つたらいいんだ。それで御家の一大事が出來ましたと云ふわけで、奴さんを泣いて諫言した擧句にその八つあたりが又貴様と俺に來たわけさ、貴様はまだ離れてるから我慢が出来るが、みじめなのは俺だよ。俺はあ奴の家で飯を食

つてるんだからなあ』

『ハ、ハ、そ奴あ痛快だ。だが貴様だつて平民と違つて士族の片割れぢやないか、威張つてやれよ』

『馬鹿にするな。全くあの婆さんは始末が悪いよ』

『むかうだつてさう思つてるだらう』

『まあそりやさうだらうがね。まるで眼玉の中に入れたい程奴さんが可愛い、んだ。それに又あ奴も悪いんだ。馬鹿々々しく甘つたれてやがるんだ。箸を持つて飯を食はして貰ひ兼ねないんだ。胸糞が悪くなるよ』

『ハ、ハ、馬鹿に憤慨するぢやないか。餘程手きびしくやられてゐるねえ』

それでも山名が月島に移つてからは、そこに多數の労働者が集まつて來て、種々運動に關する事が相談されたり宣傳されたりした。労働者達は、山名のかまはぬ投げやりな態度に親しんで、そこを自分の家の様にして無遠慮に出たり入つたりして、例の婆さんの肩をしかめさせた。労働者の中からも早幾人かのすぐれた人物が出來始めた。棚橋の居る家の増田と云ふ労働者は、もう中年の労働者であつたが、頭がはつきりして議論好きであつ

た。彼は最早幾度かストライキをやつた経験もあり長い間磨げられて來た者に特有の反逆に燃える熱情を持つてゐた。

米騒動の時に、日比谷で演説をして未決に投ぜられた山本も、その頃はもう出て來て、月島の工場に働きながら、猛烈に運動してゐた。一度監獄の門をくゞつて來た彼は、著しく他の者に傑出して見えた。彼はもうその頃、其風貌の中に何處となく革命家らしい態度が生れかけてゐた。彼は一見すると如何にも思慮深い様に見えるのであつたが、然し猛烈な熱情漢であつた。彼はその年の秋には更に日立鑛山のストライキに加はつて監獄の門をくゞり其後ボルシェヴィキの露西亞に入つて歸つて來てからは所謂共産黨事件に連座して、今は遠く西比利亞を放浪してゐるとの噂である。

月島の労働運動はその頃此二人の手に依つて纏められながら非常な勢で發展して行つた。

棚橋が友愛會に入つてからは、例の岡上の居る滿鐵の調査部の三階は著しく活躍した。色んな宣傳ビラは岡上の手でタイプライターにうたれて、運動に使用された。

何事かあると、麻生も棚橋もそこに駆つけて岡上に相談した。其頃岡上は未だ例の上野の獨逸人の家の中に引込んで、せつせと勉強してゐた。そして頻りに露西亞の歴史を研究してゐた。彼は又時折は好きな小説などを書いて見たりしてゐた。

あの米騒動と共に彼の務めてゐた會社を棄て去つて、彼等の仲間に加つた大川も元氣であつた。辯護士としてゐる河井も相變らず元氣で大きな事を考へては憤慨してゐた。彼は其頑丈な體軀、力に満ちた頑固な容貌に似合はず熱情的なロマンチックなところがあつた。彼はその頃は郷里の彼の家や親族の猛烈な反對に拘らず、彼の戀女房を東京に連れて來て、そのためにはあらゆる苦勞を盡くしてゐた。彼には説明しがたい大膽さと野性味と、その中に包まれたロマンチックな情味とがあつた。

その夜は、英吉利に旅立つた野坂を除いては是等の同志達は殆ど悉く集つた。

其夜は正月になつてから初めての事でもあり、別にあらたまつた研究の發表などはせずに、色々の相談や雑談に花を咲かせた。



『おい棚橋どうだ。もう様子が大分わかつたか』

河井は錯びた其の太い力強い聲で棚橋の顔をのぞき込みながら云つた。

『うむ一生懸命に駆け廻つてゐるがね。未だよく様子が分らん。中に入つて見ると外で考へてゐたとは大分様子が違ふぜ。色んな面倒な事がある様だ。殊に本部なんて云ふところにはくだらん事情がごて／＼あるよ。知識階級排斥なんて事もあるやうだ。なあに勢力争ひさ。つまらんこつた。併し、實際工場に働いてゐる労働者の中にはそんな事はない。その中に飛込んで行くのは愉快だ。全く知識階級の世界とは世界が違ふ。ざつくばらんで赤裸々で愉快だぜ』

棚橋は何時に似合はずしんみりした口調でさう云つた。

『俺も今の生活は不愉快でたまらん。何か思ひ切つた事がやりたいんだ。大きなストライキでもあれや何時だつて飛込んで行くんだがなあ』

河井は、自分の身體にくつついてゐる小面倒なむしやくしやをふるひ落してもしたい様に肩を揺すつて唸る様うだよ』

『うむ學者には珍らしい彌次氣分の横溢した男さ。書物を持つてゐる事と讀んでゐる事とは大したもんだ相だ。喧嘩早い事も大したもんださうだが、なあに會つて見りや面白いざつくばらんな人間さ。所謂學者と云ふ連中が妙に紳士氣取りの偽善者が多いから、あの先生のむき出しな本能主義を厭がるんだらう。酒をのむと踊り出すさうだよ』

『ハ、ハ、そりや痛快だ』

『俺は此間の講演會に行つて先生のやつを聞いたんだが實際大膽で熱があるよ。それに随分茶目氣分もあるぢやないかハ、ハ、』

棚橋が愉快さうに云つた。

『うむその茶目氣分があるんで、誰の前でも何でもかまはずに踊り出すんだらう』

『この間も随分英米のデモクラシイにかこつけて、人道主義者を槍玉にあげてゐたぜ。あれちや吉野博士と具合が悪いだらう』

『なあに今度は喧嘩なんかしないよ。それに吉野博士が相手にならんし、萬事呑み込んでゐるから大丈夫だ』

に云つた。

『ハ、ハ、君の飛行機はどうしたい』

『飛行機？ハ、ハ、そ奴あ痛快だがねえ。そ奴をやるにや先づ第一に金だ。かう貧乏しちや全くやり切れんハ、ハ、』

皆は河井の顔を見て愉快に笑つた。

『麻生の黎明會もこの間は大分盛んだつた相ぢやないか。君の活動を感謝するよ。今の日本にやあんな連中の活動が必要だよ。我々のほんとに働くのはもう暫く後だ。今は準備時代だ』

岡上は、確信を以て何事かを斷定する様な調子でさう云つた。

『うむ黎明會も出来る事は出来たわけだ。この間は全く盛だつた。講演會のパンフレットも出すわけになつてゐるんだ』

『黎明……黎明會、い、名だ。あの福田と云ふ博士はどんな男だ。随分學問は偉さうぢやないか』

『何んでも知つてるやうだぜ。思ひきつた議論もやるぢやないか』

『まあうまくやれよ。吉野博士もあの立合演説で生き上つたよ。併しよく思ひ切つてやつたさ。あの夜はすばらしい勢だつたぢやないか』

『うむまあ、革命だとか暴動だとか云ふ奴はあんな時に起るのかも知れんよ』

『全く日本も動いて來た。去年の正月とは大違ひさ』

『俺も、もうそろ／＼飛出したくなつて來た。新聞社も飽き／＼して來たぜ』

『まあそんなに、あわてるなよ』

岡上は、たしなめる様にさう云つて笑ひながら麻生の方を見た。そして付け足した。

『近頃大學にも新人會つて會が出来た相ぢやないか。君は關係はないのかい』

『うむそんな會が出来た様だ。今のところ別に關係はないがね、そら君の方を出た宮崎と云ふ男ね、宮崎滔天氏の息子の……』

『うむ、あの男か』

『あの男にそら高等學校の時に僕等より二三級下だつた赤松さ、その二人が主になつてやつてゐるんだ』



麻生は棚橋と山名の方を見やりながら云つた。

『うむ、うむ、あの赤松か、あ奴は元氣で才氣のある男だつたが』

棚橋は思ひ出した様に首肯した。

『僕にも出て来て呉れと云つてるんだ。何でも近頃講演會をやるんだ相だ。その後で皆をあつめて飯を食ひながら宣傳するんだ相だ』

『そ奴はい、今はインテリゲンチアが社會運動にどんどん飛込んで来ねばならん時だ。露西亞だつてさうだつた。今こそ、所謂千八百年代の露西亞の社會が日本にも生れかけて来たんだ。それが先驅しなければいけない。僕等はずと我々の周圍を耕して仲間を作らなければいけないよ。そんな會が出来たら、それを育て上げなくちゃあいけない。その會は何時講演會をやるんだ。是非君は出るよ。僕等もどしどし應援するよ』

岡上は、眞面目な口調で、彼の抱いてゐる考へを熱心に主張した。そして心の底からその會の出来た事を悦んだ。それから又思ひ出した様につけ足した。

『おい俺のところにも一人同志になり得る可能性のある

男がゐるんだがねえ。未だ思想ははつきりしてゐない様

だが傾向は僕等と同じ方に向いてるんだ。多分麻生やなんかと同期の卒業だらう、佐野と云ふんだ。頭のいい、眞直な男で、非常に熱情を持つてる……』

『佐野？佐野？あ奴の事だらう。七高出身で僕等と同じだ。今君の社にゐる』

河井は岡上の話を聞くと直ぐに合榷をうつた。そして麻生の方に向いて云つた。

『そら何時だつたか君に云つたらう。君と同じ國の男で俺達の仲間に入れる人間があるつて、今岡上の云ふ男がその男さ。そ奴はい、岡上も知つてるんなら、是非さうしよう』

『ちや麻生、君明日の晝頃でも僕の社に来ないか。そしてたら君に紹介しよう。そして色んな事を話して見ようぢやないか。萬事はそれから後の事だ。あの男が眞實に入つて来たなら、得難い同志だよ』

『うむよからう。それぢや明日の晝頃君のところに行く事にしよう。待つてゐて呉れ』

『よし朝のうちに佐野に話して置かう』

じことだつた』

麻生は河井に同感する様に云つた。

『岡上の結婚は何時だい。君のラバーは君より丈が高いと云ふぢやないか。それぢや結婚しても一緒にや歩けないねえハ、ハ、』

とかく沈黙勝ちな山名も、もう心を浮き立たせながら、彼の傍に坐つてゐる岡上の尻を突つきながら、くすぐる様に云つた。

『ハ、ハ、麻生の奴が素つば抜いたんだな。怪しからん。なあに俺は結婚したら一緒に歩かない事に覺悟をきめてるんだから大丈夫さ』

岡上は、頭を掻きながら云ひわけをした。

『一緒に歩かなくなつて、二人つ切りでマンドリンは弾くんだらう』

麻生がすかさず口を出した。

『マンドリン？マンドリン？あれやあ……』

『おい、云ひわけは止せよ。い、ぢやないか。結婚前の甘いキッスをマンドリンか何かでせい、甘くしろよ。唇が溶けるぜ。ハ、ハ、溶けたら二人で呑み込んで。』

『兎に角大分氣運が動いて来たぢやないか。今年は面白いぜ。黎明がやつて来たのさ。獨逸も随分やつてるぢやないか。世界が動いてる。我々は生き甲斐のある時に生れたものさ』

麻生は快活な聲でさう云ふと、血潮が其胸の中に湧き返る様に身體を揺すつて愉快氣に笑つた。

それから皆は時間の經つのも忘れて長い間愉快的な雑談に花を咲かせた。河井の戀愛問題も話題にのぼつた。

『おい、河井の奮闘も無理はないぜ。素的な美人だもの。河井にや全く過ぎもんさハ、ハ、』

棚橋は相變らずのぶつきら棒な調子で皮肉な笑ひ聲を立てながら彌次つた。

『なんだ馬鹿にしてる。だが俺達はあらゆるものと戦はなきやならんさ。戀に悩みながらねえ。勇敢に戀をつかみながらねえハ、ハ、』

河井は、其頬を赤く染めながら、思ひ切つた様に叫んだ。

『おや、河井にも似合はん優しい事を云ふぜ。ハ、併し、それが我々の生活だ。露西亞の知識階級だつて同



だらい、。決して遠慮は要らん。大膽に蜜を吸ふさ。結婚すると今に其唇が鹽からくなるから。出来るなら永遠に結婚しないとい、ハ、、、さうすると女の唇から永遠に甘い蜜が滴るぜ』

『おや、麻生の奴め、今日はひどく大人振るぢやないか。貴様だつて未だ妻君の唇の蜜を吸つてるんだらう。馬鹿にしてらあ。さん、今までに蜜を吸つて置きながら』

皆は又聲を立て、笑つた。

『おい今日は岡上は大分旗色が悪い様だぜ』

山名は又岡上の肩を突きながら彌次つた。

『何だ今夜は山名の奴まで俺を彌次るな。よし、今に仇を討つてやる』

『何だ、ど奴もど奴もさかりのついた犬見たいな奴等ばかりだなあ。女の話ばかりしてハ、、、』

棚橋は、おつかぶせる様な調子でぶつきら棒にさう云ひながら高く笑つた。

『おや、棚橋の奴め、馬鹿に高飛車に出るぢやないか。ちやあ棚橋の一生の傑作事件を發表しようかね』

山名は、挑戦する様に棚橋の方を見やりながら云つた。

『ふむ、止せ、止せ、つまらない』

『おや、奴め自分の事になると急に白ばつくれるぜ』

『ハ、、、』

こんなにして彼等が愉快な一夜を過ごして別れて行つたのは、もう十二時近くであつた。

麻生は皆が歸つて行つてから何かしら昂奮した様な氣持になつて長い間只一人で二階に坐つてゐた。もう遅いので家族の者達は皆寝てゐたので家の中は森としてゐた。

彼は一人で煙草をのみながら暫くの間はぼんやりと、壁にかゝつてゐるマルクスの肖像とレーニンの肖像とを眺めてゐた。それを眺めてゐると次第に頭がはつきりとして來た。頭がはつきりして來ると、色々な事が走馬燈の様に意識の上のぼつて來た。

『日本も動いて來た。そして自分も今動いてゐる。押寄せて來た潮の上に自分も乗つてゐる。そして出来る限りの力で其押し寄せて來る潮を高めてゐる』

闇がある様であつた。

『我々の前には監獄があるのぢやないか。斷頭臺があるのぢやないか。未だくはかり知れぬ困難があるのぢやないか……………』

彼は、そこまで考へて來ると、又壁にかゝつてゐるレーニンの肖像の方に眼をやつた。其廣い額、其くぼんだ眼、その眼は、氷の様に冷く焔の様に燃えてゐる。一文字に結んだ其口、彼の相貌は鐵の様な意思を現はしてゐる。

『あの顔の中に露西亞の革命が現はれてゐる。あの顔の表情を創り上げるために、露西亞の革命史は陰慘な血潮を以て總ての頁が染められてゐるではないか』

彼の前には露西亞の革命史が現はれて來た。ツルゲネフの小説が現れて來た。民衆のために、民衆の中で、專制政府の手に依つて血に染みながら倒されて行つた數限りなき知識階級の姿が現れて來た。彼は何と云ふ事はなしに身ふるひした。

『自分等は今こそこんなにして愉快に同志が寄合つて一夜を過ごす事が出来るが、戀では露西亞のインテリゲン

彼は此頃の自分の生活を顧みながら判然とさう思つた。けれ共亦、彼の前には量り知る事の出来ない深い暗がある様に思はれた。

『理想！理想の社會！……………』

動いてゐるのは自分達だけぢやないか。民衆は未だ深い眠りに陥つて覺めようともしてゐないのぢやないか。町を歩き電車に乗る。けれ共、革命を欲する民衆の影は何處にも見えない。

『革命とは何だらう。理想の社會とは何だらう。自分達は今兎に角潮に乗つて進んでゐる。何か知ら或るものを待ち望み、これに憧憬れて、一生懸命に走つてゐる。そしてそこには何事が成されつ、ある。労働運動、黎明會、新人會、だがそれ等の事は何事を意味するのだらう。極めて易々として、それ等の運動は起りつ、ある。そして猛烈な勢でその運動が發展しつ、ある。こんな容易な事で、こんな難作のない事で、こんな愉快な事で、こんな手軽な事で、新しい理想の社會が生れるのであらうか』

彼の心の奥の方には何か知ら一つの不安な解きがない







と云つて、麻生の顔を見た。

『いや君の事は河井君からも聞いてみました。僕こそどうか宜しく』

麻生は彼の持前のなつかし氣な聲で親しみ深く言つた。

『僕は何も分らないんですがね。まあ今から勉強するつもりです。君等はもう随分やつてゐるんでせう。僕なんかはほんとに何も役に立たない』

彼は其持つて生れた謙遜な正直な心から、如何にも羞かし氣にさう云つた。そして又言葉を繼ぎ足した。

『僕も何かやらなければいけないんです。實際今の社會は間違つてゐる。不合理です。だから僕等はそれと戦はなければいけない。戦はないのは卑怯です。僕もこれから君等の仲間に入れて貰つて出来る限りの事をやります。出来るだけ利用して下さい』

彼は其正直な心を顔の表情にその儘現しながら、ひくいそしてたどくしい聲でさう云ふと淋し氣に微笑した。彼は表面には現はさなかつたが幾分昂奮してゐる様であつた。

麻生は彼の眞面目な態度に魅せられながら感謝する様に云つた。

『實際僕等の様にあちこちと飛んで廻つてゐると本も讀めないですから、その方は岡上君や君等にやつて貰はねば駄目です。水曜日の夜には皆僕の家に来りますからどうかやつて来て、色んな研究を発表して下さい。僕等の連中で棚橋と云ふのは友愛會に入つて働いてゐるし、山名も月島で労働者町の中に住んでゐます。それで、色んな事で君等の手を借りたい事があるから今から遠慮なく頼みます』

『出来るだけの事をしませう』

それから三人は長い間各人の抱く人生觀に就て、社會觀に就て、運動に就て話合つた。そして別れる時にはもう長い間知合つて来た同志の様に打解け合つてゐた。

佐野は別れようとする時には、其淋しい陰鬱な顔に微笑を浮べて、如何にも晴れくしい氣持を言葉にあらはすやうに、

『今日は愉快でした。僕は君等の仲間に入れて貰つて實に愉快です。今度の水曜の夜には又皆に紹介して貰ひま

せう。僕は今兄貴の家にあるんですがね、どちらかと云へば、幾分ブルジョアなんでね。いけないと思つてゐるんです。僕も月島か何處かの労働者の中に住みたいんですがね。おふくろが心配するんだが、併し今に實行しますよ』

彼は自分がどちらかと云へば貴族的な家に生れ今もそんな生活の中にゐる事を恥づるかの様に云つた。實際彼の様子は何處かには上品な貴族的なところがあつた。

この青年が後に社會運動者として有名になり、そして今度の所謂共産黨事件の首腦者と目せられ、今は妻子を残して日本を遠く逃れて西比利亚に放浪してゐると噂される佐野であつた。彼はそれから間もなく、月島の労働者町に彼の居を移して熱心に宣傳に従事した。

七

二月の初め頃の或る日の午後大學で新人會の演説會が催され、其夜は又學生の第二控所で有志が集まつて晚餐會が開かれた。その日は早稻田から、大山氏もやつて来た。今革新俱樂部の代議士になつて代議士中の新人と目

せられてゐる星島氏もやつて来た。晝の講演會は非常に盛で麻生も演説をした。そして其夜第二控所には四五十人の學生が集つた。それまでは未だそれ程の勢力をなさなかつた新人會も、其夜からは非常な勢で發展して行つた。其夜の空氣は全く素晴らしいものだった。成功した晝の演説會に昂奮した學生達は、夜の晚餐會の席上で若若しい感情に燃え立ちながら氣焔を擧げた。幾度となく新人會の歌が合唱されて、さらでだに湧き立つた生き生きした空氣はいやが上にも熱せられて行つた。迸ぼしる世界思潮の波が高鳴りながら若い新人等の胸に流れ入る様であつた。

宮崎や赤松は、昂奮しながら熱狂しながら皆の間を駆け廻つて世話役を努めた。

臆て皆立上つて自己紹介と五分間演説に其感想を述べる事が決議された。

『大學は閥族の奴隷ぢやない。大學は眞理に奉仕しなければならぬ』

と叫ぶ者もあつた。『社會改造の潮は今や地球の隅々にまで押寄せて来た。』



我々新人の起つべき秋は今こそ来たのだ』

と叫ぶ者もあつた。

『我々は暴虐なる資本主義を倒さなければならぬ』

と叫ぶ者もあつた。

『我々の理想はデモクラシーである。正義と人道のために戦はなければならない』

と叫ぶ者もあつた。

『人類を戦争に導いて、あらゆる非人道的な行爲をなさしむるものは軍國主義である。我々は人類の平和のために軍國主義を倒さなければならない』

と叫ぶ者もあつた。

早稲田の大山氏が其巨軀を起して起上つた時には割れる様な拍手が起つた。大山氏は謙遜な、そして又羞かんだ態度で、新人會の成立と發展とを祝した。そして未來の世界は青年の手に委ねられてあると結んだ。

麻生も起ち上つた。彼は力強い聲で赤裸々に大學を罵倒した。資本主義の奴隷たる大學を官僚の奴隷たる大學を、眞理を失へる大學を、そして又眞實に生きる事を忘れたる學生を。彼は、熱烈な眞摯な態度で叫んだ。

『我々は大學生の叛逆者である。併しながら我々は叛逆者たる事を心の底から誇る者である。何故なれば、叛逆者たればこそ眞實に生きてる生活をなし得るからである。眞實に人間として生きんと欲する者は、叛逆者たれ。眞理は叛逆者の頭上にある。眞實なる人間の生活は其叛逆者の生活の中にこそ發見されるのだ』

彼は火の様に熱して、そこにゐる者の肺腑を炙ぐらねば止まない様な深刻な句調で叫んだ。彼が坐つた時には何かしら強い酒が人々の胃の中に注ぎ込まれたかの様であつた。

會が散づる頃には會集は強い酒に酔つ拂つた様になつてゐた。皆は幾度となく若々しい聲で新人會の歌を合唱した。其歌聲は室をゆるがし渦巻きながら、暗い凍つた様な二月の夜の中に窓の隙間から迸ばしり出た。

皆は容易に會場を去らなかつた。テールに至る處で愉快な談論が始まつた。赤松や宮崎を捕へて入會を申込む者も少なくなかつた。新人會の雜誌を出したいとの希望が述べられた。そして十一時過ぐる頃、そこに集まつた者は新しい時代の思ひを其胸に抱き占めながら、歸つ

て行つた。永く閉ざされてゐた帝國大學の門の扉が破れたのである。破られたのである。

それから後は、麻生や佐野や棚橋や岡上等は屢々新人會の會合に出掛けて行つた。そして彼等の抱く思想を其中に植ゑつけて行つたのであつた。

何時も演説會のあつた後、理想の夢に燃ゆる新人達は、第二學生控所に集つた。そしてストロブを圍みながら其若い純な血潮を湧き立たせた。そして其夢を語り熱情を迸ばしらせてゐる間に何時とは知らず夜は更けて行つた。

佐野は學者らしい態度で、今日の國家を論じプロレタリアの新興を論じ、最後には不合理なる今日の社會に對する叛逆を力説した。棚橋は其頑強な一本調子で労働者の事を話した。山名は黙々たる間に彼の人格をそこいらのものにしみ込ませて行つた。麻生は彼の持前の熱情を學生の中に壓しつけた。

赤松や宮崎はその中に立つて新人會の會勢を巧みに伸ばして行つた。こんなにして閉ざされてゐた大學の庭に初めて生えた新運動の若芽はのびくと生長して行つたの

である。そして此新しい團體の背後には吉野博士の力が隠然として後楯となつてゐたのは云ふまでもない事であつた。

## 八

二月初めのとある雪の日であつた。朝早く一人の労働者が飄然と麻生を訪ねて來た。未だ廿歳の上を幾つも出まいと思はれる其労働者は、左の腕を根元から失つてゐた。頭には古びた防寒用の帽子を眞深にかぶり、身體には半ば破れかけてゐる汚れた洋服をまとひ、右の手には何か風呂敷包を持つてゐた。そして彼の帽子も服も雪だらけになつてゐた。彼には何處となしに元氣な其風采の中に野性味が溢れてゐた。彼には都會の労働者と異つた粗朴な自然味が満ち満ちてゐた。そして其動作の中には生き生きとした剛健なところがあつた。彼は玄關で麻生の姿を見ると、それでも幾らかきまり悪げに、帽子や服の雪を振り落しながら、

『私は足尾から出て來た坑夫ですが……』

と云つて心持ち顔を赤くした。麻生は坑夫と名乗る者



に會ふのは之が始めてであつた。麻生は好奇心に燃えながら一度其労働者の姿を見た。そして口早に云つた。

『足尾？足尾から……まあ上り給へ、どうぞ』

彼の耳には足尾と云ふ名前が異様な響を以て聞こえた。

『それでは御免なすつて……』

彼は又何處かに訛りのある口調でさう云ふと、そのほろ靴を脱いで上にあがつた。そして二人は例の二階の大机の前に對坐した。

坑夫！坑夫！麻生には彼の前にきちんと坐つてゐるその粗朴な、自然から脱けて來た様な、坑夫の姿が非常に尊く思はれた。そして彼の片腕がない。どうしたのだから？

彼は麻生と對坐すると、又かしくまつて挨拶した。

『これは始めまして。私は足尾銅山の坑夫で高島と申す者であります。突然上りまして無禮でありませうなれど御免なすつて下さい』

麻生は其改まつた武士の應待でもある様な物の言ひ振りにすつかり面喰つて仕舞つた。

『いやどうしまして、よく訊ねて來て呉れました。足尾から……銅山の……』

『え、足尾銅山の坑夫であります。今度少し思ふところがありまして、労働運動を始めたいと思ひまして、上京したのであります。銅山の労働者は實に悲惨であります。私も東京で勉強して運動を起さうと思ひますので、どうぞ何分宜しく……』

『さうですか、足尾では何時か大暴動がありましたねえ』

『え、あつたです。會社は實に横暴で我々を畜生と思つてゐるのです。その時には南先生が運動してゐられたのです。足尾の坑夫は皆南先生になづいてゐましたよ。先生は長屋を廻つて演説しては子供達にまで何か恵んで下さつた相で、子供達は先生の尻にぞろ／＼くつツいて行つた相です。坑夫は實際馬鹿正直で何にも知らないのです。それで怪我をしたり死んだりしても憐れなものです。十五圓か二十圓で追つ拂はれて、乞食の様になつて鑛山から鑛山を廻るのです……』

彼は話してゐる間に次第に昂奮して行く様に見えた。

『君の腕はどうしたんです』

『腕？腕はとられたのです』

『どうして？』

『落磐で……』

『落磐？』

『落磐と云ふのは坑内で岩が落ちるのです。それで怪我をしたり死んだりするのです。坑夫は幾百尺幾千尺の地の底で、ハツバをかけるのですからなあ』

『ハツバ？』

『ハツバてえのはダイナマイトの事です』

『さうですか、僕等には鑛山の事は分らないが、随分仕事は危険でせう。そして君の腕はそんなになつて會社ではどうですか』

『會社！會社は話にならねえ。わつしはどうしても響を討ちたいのです。わつし等だけちやあねえんです。みじめなめに會つてゐるなあ、どれだけあるか分りやしねえ。それでも自覺しねえから駄目だ。併し黙つちやゐられねえ』

『實際資本家と云ふ奴は横暴だから黙つてればどんな事

をするか分らん。金さえ自分等が儲ければいいんだから。人間だとか人道だとか云ふ事は全然分らないんだ。

そして今足尾には誰も運動するものはないんですかね。南と云ふ人は……』

『今は誰もねえんです。南先生は四十年の暴動からは餘り運動もしねえんです。だから會社の奴等いゝ氣になつて我々を壓迫するのです』

『坑夫の状態はどうですかね。運動が始まれば動き相ですかね』

『坑夫は眠つてますがね。眠つてると云つても少し八釜しい事を云やあ首を切られるから黙つて泣寝入りになつてゐるのです。心の中ちや皆思つてゐるんだが。だから誰か犠牲になつてやりやあ大丈夫起ち上るですよ』

彼は、如何にも脾肉の嘆に堪へない様に昂然としてさう云ふと、決心の色を眉に現はして麻生の顔を見詰めた。

麻生は何かしら力強いものが彼の前に迫つて來る様に感じた。そして此粗朴な併し力強い労働者の中に何とも云ひ難い昂奮と愉快とを感じた。そこで彼は元氣よく云



つた。

『僕等に出来るだけの事をしませう。僕と同じ氣持を持ち同じ運動をしてる友人も澤山ある。君を友人達に紹介しませう。よく訊ねて来て呉れましたねえ。労働者の中から君等の様なめざめた人達が澤山出て来れば、労働者の世界が近づくのです。未來を創るものは労働者だ。そして世の中で労働者が一番尊いのです。何故なら労働者が一番つらい仕事をしてゐるからだ。僕等は君等の手助けをして我々の理想とする社會を創らなければならぬ。僕も今に君と一緒に足尾に連れて行つて下さい。我は先づ第一に労働者の實際を知らなければならぬだ』

『ホー貴方が行つて呉れますか』

彼は、非常に愉快な希望に満ちた聲で意外さうに叫んだ。

『行きますとも。僕等はどしく君等の中に入つて行くつもりです。だが實際の運動するには色々の準備も必要だ。兎に角君も暫く東京にゐて、少し勉強したり準備をと、のへたりしてはどうですか。友人たちにも紹介し

よう。それに、矢張り僕等の同志の佐野と云ふ男が最近、月島の労働者の中に家を一軒持つ事になつてゐる。これは宣傳のためなんです。だから都合に依つては、君は暫く佐野のところゐて勉強してもよい』

『ほう宣傳の爲めに労働者の中に住む？それでなければ労働者の事はほんとに分らないですよ。そんな人はよいですねえ。私を置いて呉れませうかねえ』

彼は心の中に非常な喜びを感じながらも不安氣に云つた。

『なあに心配する事はない。大抵大丈夫だらう。兎に角今日これから佐野君のところ君と一緒に行つて見ませう』

そこで二人は早速麻生の家を出た。

外にはもう大分雪が積つて、四邊は眞白になつてゐた。そして二人が麻生の家を出た時には綿の様な雪が暗い空からひつきりなく落ちて来た。二人は雪の中を並んで歩いて行つた。

『君寒くはないですか』

外套も着ずにのつそくと歩いて行く労働者の姿を見

て麻生は氣の毒さうに云つた。

『なあに大丈夫ですよ。足尾はこんなもんぢやない』

彼は、微笑しながら元氣な聲で云つた。其高い力に満ちた聲の中には、何かしら壓倒する様な調子があつた。麻生は彼と歩いてゐるのが誇らしい様な氣がした。自分はこの様な労働者と知合つたのだ。そして運動の中に新しい而も非常に偉大な勢力を獲たのだ。足尾！足尾！足尾銅山！そこには數千人の坑夫が働いてゐる。それが今自分等に結ばれたのだ。我々の運動は一大勢力を得るだらう。坑夫と云ふのはどんな生活をしてゐるのだらう。彼等は暴動をやる。反逆兇である。そして非常に荒くれてゐて、いざとなれば生命がけの仕事をする。

麻生は坑夫と云ふものに就て色々な空想を描きながら歩いて行つた。彼は労働運動と云ふ事を口にしながらも、坑夫と云ふものに就ては何事も知らなかつた。坑夫どころではない。町の労働者に就てさへも未だ貧弱なる知識しか持つてはゐなかつた。けれ共彼等の目ざす寶庫は其未知の世界の中に埋められてゐて、掘出しさへすれば寶物がそこから湧き出て来る様に思はれてゐた。虐げ

られてゐる者、蹂み躪られてゐる者、彼等にとつてはそれ等の者に接觸し其力を得る事は偉大な仕事であつた。そして今彼は坑夫と知合ひになつたのだ。彼の心の中には何か誇らしい得意な氣持が往來してゐた。彼は彼と並んで歩いてゐる若者の姿をも一度見た。

丈の高いその坑夫は、帽子の上に降り積む雪をためながら、外套も着ない古洋服の上に白雪を浴びながら、彼の風呂敷を抱へて、平氣な様子で、のつそくと歩いてゐた。其の様子の中には如何にも自然其儘の粗朴と正直さがあつた。その中には屈するなき元氣と反抗とが溢れてゐた。其様子は又如何にも戰闘的であつた。

麻生は頭の中で直覺的に思つた。

『將來の世界の道徳は、此粗朴と正直と簡單と戰闘的な坑夫の中から生れなければならぬ』

で麻生は快活な讚美する様な口調で云つた。

『坑夫の生活はどうですか。其氣持ちは』

『坑夫ですか。坑夫は義理がたくて馬鹿正直ですよ。そして人情がありますよ』

『義理がたくて人情がある！』



『坑夫の生活は特別です。親分子分兄弟分と云ふのがあり、又坑夫になるのには「取立て」と云ふのがあり、又交際には山中友子交際と云ふのがあつて全国的に聯絡してゐるのです。怪我をしたり何かすると「奉願帳」と云ふ物を持つて全国の鑛山を廻つて寄附をして貰ふのです』

『ほう、親分に子分に兄弟分、取立て、山中友子交際、それから奉願帳ですか』

『え、奉願帳です。坑夫の生活は武士の格で、職に離れた者を浪人と云ふんです』

『浪人？』

麻生は彼の口から出る奇妙な言葉に一々吃驚りさせられた。

『浪人です。坑夫の生活は貴方たちには一寸分らない。何れよく説明しますよ。徳川家康の時に坑夫を武士待遇に取立てたのです。家康が坑夫に助けられた事があるからださうです。坑夫には五十三ヶ條の法律があるんですよ』

麻生は奇異な彼の言葉に全く驚かされて仕舞つた。そ

して未知な世界が彼の前に開けて来た様な愉快さを感じた。

纏て二人は満鐵の調査部で佐野に會つた。もう其頃には佐野も同志の一人として御互に遠慮のない仲になつてゐた。案内を乞ふと佐野は直ぐに出て来た。少しうつむき加減にしてこつ／＼と歩いて来る彼の姿は何處までも陰鬱で眞面目そのもの、様に思はれた。それでも麻生の姿を見ると微笑しながら、ひよいと首をうなづかせて

『やあ』

と云つた。麻生は快活に云つた。

『今日は珍しい人を連れて来た。君に紹介しようと思つて』

『さうか』

彼は靜かにさう云ふと、麻生の側に棒の様に突つ立つてゐる労働者の方に眼をやつた。

『此の人だ。足尾銅山の坑夫をしてゐる高島君だ。運動を起すつもりでやつて来たのだ』

『足尾の……』

さう云つた佐野の眼は急に生き／＼した表情を現はし

て、好奇心に燃えた眼をしながらその方を眺めた。

『うむ足尾の……そして片腕は落臂で奪はれたんだ相だ』

『さうかね、それは氣の毒だねえ。僕は佐野です』

彼はさう云ふと、心持ち顔を赤らめながら其労働者の方に挨拶した。

『わつしは高島と申す者です。今日麻生さんのところに参つたのです』

『ところで、實は君に御願ひがあるんだ』

麻生は二人の話を引取りながら云つた。

『何かね』

『君の移轉問題はもう決心がついたのか』

『うむ近日行くことにした。山名の家近くに家があるんだがね、昨日行つて定めて来た』

『さうか、そりやい、君が行つて呉れ、ば非常にいいだらう。非常な宣傳になる』

『まあ宣傳と云ふより僕自身の修業だがねハ、ハ、』

佐野は初めて、聲をあげて晴れ／＼と笑つた。その笑ひ聲の中には希望と決心とがあらはれてゐた。麻生もそ

の快活な佐野の笑ひ聲に釣込まれて更に愉快氣に云つた。

『それで君に頼みたいのは、此高島君を當分君のところにおいて勉強させて貰ひたいんだ。高島君も運動を起すに就ては少し勉強したいと云つてるんだし、僕等も處女地を耕すには充分な準備が必要だ。僕等は高島君から鑛山の事情を知る事が必要だ』

『それはいい、だらう。僕も一人では困るんだから。高島君さへよければ。高島君どうですかね』

『わつしはさうして貰へれば結構です』

『それちやあさう云ふ事にして貰はう。非常に好都合だつた。で引越しは何時なんだ』

麻生は又氣輕に二人の話を引取つて、さつさと話を進めた。

『何時でもいい、僕は明日でも』

『ほう、それやい、善は急げだ。高島君、君はどうですか』

『わつしは何時でも』

『それちやあ、君明日の朝佐野君の家に行つて引越しの



手傳ひをして呉れますか。佐野君の所謂「人民の中に入る門出だ」ハ、ハ、ハ、。そして日本のインテリゲンチアの門出には初めつから労働者が一緒だ。で高島君はこれからどうします」

『それぢやあ、わつしはこれから宿に行つて來ます』

『なんなら今夜僕の家泊つてもいい』

『え、ありがたう。今夜は一寸行くところもありますから、明日早く参りませう』

『それぢやあさうし給へ』

そこで、彼は一人で先に歸つて行つた。二人切りになると、佐野は、

『どうだ、もつと話して行かないか。ストープの方に行か』

と云つて先に立つた。麻生も彼の後に従ひながら聲をかけた。

『でもよく行く事に決めたねえ。お袋が心配しはしないか。家の方は』

『うむ、別にそんな事は話してないだがねえ。そんな事を云つたら心配するだらう。併し僕等は此運動をする

以上は、そんな事は仕方がない』

彼は、きつぱりとさう云ふと、又心持ち顔を赤らめながら麻生の方を振向いた。麻生もしんみりした調子で云つた。

『さうさ、それは致方がない事だ。棚橋や山名もその事では苦勞してゐるよ。だがそれは致方がない。時代に反逆する者にはそれはつきものだ。併しよく決心した。君が行くと月島も亦賑やかになるねえ。僕も一日も早く初めたい』

それから二人はストープの前に腰掛けて長い間話合つた。何か知ら若々しい、そして尊い生活が彼等の前にうち開けてゐて、そして彼等の飛込んで來るのを待つてゐる様であつた。

麻生は如何にも心の中の悦びを禁じ得ぬ様に云つた。

『君、僕等の運動も段々本物になつて行くぜ。さつき坑夫も屹度我々に何物かを齎すだらう。僕等は勇敢に人民の中に飛込み、そして大膽に宣傳し、適確に搦む事が必要だ』

もあそこに住んだんだ』

麻生は月島を眼の前に畫き出す様な眼付きをして、夢見る様さう云つてから又つけ足した。

『兎に角、君の決心を祝福しよう』

『有がたう。僕も出来るだけの事はするよ』

佐野は自分の決心をも一度確めでもする様に眞面目にそして嚴肅にさう云つた。

『ぢや今日は失敬しよう。又明日の晩君の家で』

『ぢやさよなら』

## 九

その次ぎの日佐野は月島に引越して行つた。坑夫の高島は本を除けば幾らでもないその荷物を車に積んで駿河臺から運んで行つた。

佐野は例の根津のグループの中に入つてからは非常な熱情を以て勉強を始めてゐた。元來が研究的に學者的に生れついてゐる彼は、一度其研究すべき目標が定まると、其方に向つて異常な能力を發揮しながら、猪の様に突進して行つた。彼は社會主義の理論に對する確信に正

『うむ、僕等はどうしても労働者の生活の中に入つて社會主義革命の原理を宣傳しなくちゃならん。そして僕自身も、もつと勉強しよう』

『それはいい、だがこれからはあらゆる犠牲が要求される。僕等インテリゲンチアはなか／＼それに堪へ切れな。鐵の様な意思と焔の様な熱情が必要だ。兎に角、君の人民の中への門出を祝福しよう。明日は僕も月島に行かう。さうして皆で一度集まる事にしよう。君に會つてから未だ幾らも経たなが、もう餘つ程前から知合つてるやうだ』

『さうだねえ。僕は君等のグループの事を岡上や河井から聞いてゐたんだがねえ。もつと早く入ればよかつたハハ、ハ、』

『いや僕も河井から君の事は早くに聞いてゐたんだ。だが併しよかつた。こんなにして知合つて。月島の生活はい、よ、渡しを渡つてねえ。夜などは殊にい、屹度君は氣に入るだらう。三河島の造船所もあるし、工場は澤山ある。島は鐵の響で満ち／＼してる。全く労働者の島だ。あそこはクロンスタットだよハ、ハ、。それで山名



比例して其憧憬の熱度を強めて行つた。眞直な純眞な彼の感情と其學者的な性格とは、彼をして、理論は直ちに現實であり、又感情そのものであると考へさせねば止まなかつた。

彼は彼の生活と労働者の生活とを比較してそこに非常に差のあるのを發見すると、それを非常に心苦しく感じた。そして何とかして自分の今の境遇を脱しなければならぬと考へた。彼は其頃古くはあつたが非常に質のよい外套を着てゐた。それで皆の前でそれを脱ぐ度に心苦し氣に云つた。

『こんな外套は贅澤なんだが、兄から貰つたから着てるんだ』

彼は又、彼の取つた金をよく運動の中に投げ出した。彼には、どちらかと云へば貴族的である彼の生活が苦しくて堪らなかつたのだ。彼は彼の始めやうとする運動を一つの仕事と考へて、それで心を安んじてゐるわけには行かなかつた。彼にとつては運動は彼の人生觀であり、人格でありそして又理想そのものでなければならなかつた。

意をして呉れた。

日暮方には麻生もやつて來た。棚橋もやつて來た。山名は晝間から、ちよいと覗いては家の片附けなどを手傳つてゐた。四人は次の六疊に陣取つて、一緒に夕飯を食つた。坑夫の高島は其不自由な粗野な恰好にも似合はず、何かと豆々しく立働いて、乳母の手傳ひをしながら夕飯の世話をした。

佐野の顔も、其日はいつもの陰鬱に似合はず心から悦し氣で晴れ々としてゐた。そして二間しかない其狭い二間をあつちに往つたりこつちに來たりして落つかかなかつた。彼の心は、何となく愉快な希望に満ち々としてゐる様で、暫くもじつとして居られぬ様に思はれた。

『俺もこれでやつと古い傳統の家から脱して、一人前の家の人間として、自分の良心の命ずるところと一致した生活が出来るのだ』

彼の行手には、勇敢なそして血に燃ゆる尊い戰士の生活が、彼を悦び迎へて抱いて呉れる様に思はれた。

『やあ、到頭君も、所謂人民の中に来たわけだねえ。これはい、全くだ』

今、彼は、彼の信ずる主義のために、先づ第一に自分の生れた家を棄てたのであつた。けれ共それから幾年か後には、自分の妻も子供も棄て去つて異國に孤獨の漂泊を續けねばならぬとは、未だその時には知る由もなかつたけれど。

彼の移つた家は餘り汚くもない六疊二間の小ぢんまりした家であつた。表の道路に向いた六疊の方には彼の机と本箱が置かれた。そして次ぎの六疊には、貧弱な而し新しい世帯道具が置かれた。片手の不自由な坑夫の高島はそれでも豆々しく立働いてそこいらを片附けた。女なしの家は何處かに間の抜けた殺風景なところがあつたが、その代りには又氣安な梁山伯式なところがあつた。何處かに此新しい運動者の住居に相應しい匂ひがあつた。佐野も一生懸命になつて、其本箱を整理し机の置き場に苦心した。

山名の家はその家からは一町とも離れてはゐなかつた。それで夕方には、例の山名の乳母がやつて來て、『まあ！まあ！』

と、嘆聲をあげながらも臺所の方を片附けて夕食の用

麻生は支關から上つて佐野の姿を見ると、そこいらを見廻しながら、心の底から悦し氣に叫んだ。彼の顔色の中には、佐野の此思ひ切つた行動を讚美する表情がありありと現はれた。佐野は、そのいつものむづかしい顔の表情の中にも包み切れぬ幸福さを現はしながら、麻生の顔を見るとすぐに彼を迎へて、『うむ、來て呉れたのか。有がたう。やつと今片附きかけたところだ』

と云つた。

『全くだ、家ぢやないか。だが随分思ひ切りよく引越したもんだねえ』

『一日でも早い方がいい、と思つてねえ。決心すれば、もうあんな處にゐるのは一刻も厭だからねえ』

『だが餘り勇敢過ぎるぞ。君と會つてから未だいくらも経たないのに、もう君はこんなにして労働者の中に生活まで飛込む様になつた。仕事はぐんぐん進んで行く。何だか夢の様だねえ……。併しよく君は決心した。家では變に思ひはしなかつたかね』

『うむ、別に何も云はなかつたからねえ。眞實の事を云



ふと、お袋が心配するから困る。ほかの者はかまはんがねえ。お袋は老年だからなあ』

彼の顔にはちらと曇が見えた。彼には人並すぐれて母を懐ふ情があつた。だが彼は直ぐ其考へを追ひ拂ふ様に云つた。

『併しそんな事は云つて居られん。そんな事を考へてゐたら何も出来ん。僕等には無情と勇氣と大膽とが必要だ』

彼のさう云つた小さな聲の中には自分で自分を鼓舞し勵ます様な悲痛な響きがこもつてゐた。

『全くだ。親達はどうせ僕等にこんな運動をさせるつもりで勉強させたわけぢやないんだからねえ。立身出世する様な事をしなくちや安心はせんよ。棚橋なんかもお袋には弱つてゐるよ。あ奴は學校を卒業したらお袋に京都見物をさせる約束をしたんだ相だがね。可哀さうにお袋はそれを眞に受けて樂しみにしてゐたところが、先生何時までたつても京都見物どころか、今に此通りだもんだから、すつかり見當を外して悄氣切つてゐる相だ。僕等は親不幸者さ。だが仕方ない』

麻生も何時もの快活に似ずしんみりした調子で云つた。

『だが僕は未だい、何しろ三百里も離れてゐるんだから、こつちで何をしたつて國までは聞こえない。そこになると家の近くにある者はうるさいね。だが棚橋も可哀相だねえ。何とかならんか知ら。少し位なら僕も出すがなあ』

『うむ、まあ今に何とかなるだらう。今日はそんな話は止めよう。君の運動の門出にさハ、ハ、』

『ハ、ハ、全く運動の門出だ。だがこんな事は何でもない。僕の家より餘程愉快だ。それに自由でい、よ』

『そりや自由な事は自由さ。僕も何だか君がうらやましくなつた。人間の生活なんて奴あ簡單で生きくしてゐる事が必要だ。その點になると、金持だとか貴族だとか云ふ奴は、金や地位で束縛されて、人間の初ぶな血の出る様な生活を知らない不幸な奴さ。それに知識階級なんて云ふ奴も、くだらない知識で頭がごみ溜の様になつてゐるから虚偽で、原始的な生々しい正直な生活を知らない奴さ。その點になると労働者の方が幸福だぜ』

『うむ、全くさうだねえ。僕等は先づ第一に知識階級の

生活と感情から脱して、もつと赤裸々な單純な生活と感情に還る必要がある』

『さうだ。それが何より先づ第一だ。知識階級の運動の失敗はそこから起きるんだ。僕等は労働者の生活も感情も知らないんだ。將來の社會の道徳は斷じて知識階級ではないけない。單純剛健粗朴な労働者階級の生活と感情とを基礎にしなくちやあ。その意味から云つても、我々は労働者と生活を共にし、苦勞を共にする必要がある』

『うむ。僕も全くさう思ふ』

佐野は全く同感する様に眞面目にさう云つて考へ深い様な表情をした。

夕食は賑やかだつた。

労働者の中に飛込んで行つた棚橋は、さうでなくてさへ粗野な其風采が又一段と際立つて粗野になつて來た。そして其様子が何處ともなしに労働者らしくなつて來た。物の云ひ振りも其言葉も簡單で直截になつた。山名は相變らず浪人の様な恰好をして黙々たる間に酒だけはちびりちびり際限なく飲んだ。彼の親切なそして距りのない氣安い性格は労働者の氣持とぴたりと合つた。多く

の労働者達はもう其頃は彼の家を集合場所にして自分の家の様にして出入りをしてゐた。彼は總ての事に對してきつぱりした判断を容易に與へなかつたが、それかと云つて決して判断を與へないわけではなかつた。何時か労働者達は彼の意見の様に動いてゐた。黙々たる間に深い注意と考案をめぐらして徐ろに方針を與へるのは彼の優れた特徴であつた。その點になると麻生や棚橋や佐野は物が餘りにはつきりし過ぎてゐた。四人の性格の中には非常な差があつたが、併し何處かに共通した離れがたい點がある様で、其間を温い友情でつなぎ合せてゐた。

『おい、世の中がぐんぐん動くぢやないか痛快だなあ』

酒が廻つて赤鬼の様に眞赤になつた顔を愈々昂奮させながら棚橋は、さらでだに棒の様な體軀を更に棒の様にしながら吐き出す様に云つた。彼の聲は錆びて太くて底力があつた。生一本な彼の性格は、彼の態度の中にも彼の言葉の中にも其儘現れた。彼はさう云ふと、少しうつむき加減にして相變らず盃をちびりくとなめる様にしてゐる山名の方を見て、今度はくすくすと笑ひながら、



『動かない奴は山名の戀愛問題ばかりさ』

『おい／＼馬鹿云ふな。今日は鬼門が來てるんだぞ』

山名は臺所の方を一寸見やりながら、にや／＼笑つて棚橋をたしなめる様に云つた。

『ハ、ハ、優柔不斷な奴だなあ。だから貴様は、婆になめられちまうんだ』

棚橋は又高い聲で笑ひながら愉快氣に云つた。

『ハ、ハ、優柔不斷は必ずしも山名ばかりに限らんさ。貴様が檢事を止めて友愛會に入る時の優柔振りはどうだ』

麻生は、棚橋の顔を見ながら素破抜く様に云つた。

『うむ、もう其話しは止めよう。つまらん』

棚橋は眞赤な顔に苦笑を浮べながら、專制的な聲でうち消す様に云つた。

『こ奴め。貴様は專制主義だ。自分の勝手な事ばかり云ひやがつて……』

山名は、いま／＼し氣にさう云ふと、彼の盃をぐつと飲み干した。

『併し到頭俺達の望みも達せられたなあ。かううまく行

くとは思はなかつた。どうだ。去年の暮に高野先生を一日中引摺り廻した時は、大分骨折つたぜ。此月島に根據地を定めるまでには』

麻生は數ヶ月前を思ひ出しでもする様な顔をして、懐し氣に云つた。

『うむ、あの時は高野先生にも氣の毒だつたさ。だがうまく分つたものさ』

山名も以前を懐古する様にゆつくり云つた。

『今度は佐野も飛込んだ。俺の番が愈々來たぞ。近頃ちや俺の事を新聞社で過激派と云つてるぜ。この鹽梅ちや今に首が危いだらうよ。俺も長くはない。もう飛込むべき秋だ』

麻生も、もうちつとしてゐられないと云つた様に、又三人を羨望する様に云つた。

『まあ貴様は狼狽する事はない。出來るだけ新聞にゐて働くさ。非常に便利だ。今に飛込まねばならん時が來るよ。それより、ちよい／＼労働者の會合に出て呉れ。俺は今一生懸命に支部の茶話會を廻つて出來るだけ皆と知合ひになつてるんだ。俺が茶話會の時を教へるから、こ

『さうだらう。併し我々は總てに堪へなくちやならん』

『さうだ。總てに堪へなくちやならん』

棚橋は、彼の元氣に似ず、深く考へ込む様な顔附きをして麻生の言葉を味はう様に繰返した。そして今度は靜かに云つた。

『俺達は實際運動に入るまでは運動を餘り神聖化して甘い蜜でもなめに行く様なつもりであるが、實際に入つて仕事をする段になるとそんなもんぢやないぞ。苦い毒藥を呑されるんだ。俺は支部を廻つて労働者と接觸して色々な事をしてゐる時は愉快だが、一度本部に行つて、その空氣に觸れるとうんざりして仕舞ふ。何かしら蟠まゝりがあつて自分の地位だとか勢力だとか云ふ奴が皆の頭の中にこびりついて抜けないんだ。俺なんかも排斥もんなさ。知識階級と云ふ名でねえ。だがまあそれが人間の仕事だらうよ。俺達はそれを改革する必要がある。俺なんかも一味で友愛會を盗みに來たと思つてる者もあるよ。だが、働いてゐる多くの労働者と直接に話合ふのは實に愉快だ』

『まあそれも仕方がないさ。知識階級を見て續にさはる

れから段々出て來い。何よりそれをやらなくちやあ駄目だ。本部の役員なんて奴あ、なんつたつてからきし駄目だがね、直接働いてゐる労働者に接する事は非常に爲になる。俺は本部は嫌ひだからど／＼直接労働者の中に入つて行つてるんだ。處女地は純な心で底の方から耕やす必要があるよ。労働者は待つてるよ。佐野なんかもこれからど／＼労働者に接して仲間になる事が必要だ』

棚橋は確信そのもの、様な口調で力強く云つた。

『さうだ。労働者とほんとの友人となる事が先づ第一だ。そりやい、本部の役員なんかになつたつて眞實の運動なんか出來やしない。勢力争ひ位が落ちた。俺もどしどし行くよ。何日に何處であるか知らして呉れ。貴様と一緒に掛けて行く』

『それがい、労働者にはい、處が残つてゐる。さつくばらんで愉快だ。たゞ友愛會の本部と云ふ奴は厭な處だよ。まるで魚の腐つた様な奴さ。變な勢力争ひでね。そして知識階級排斥と來るからねえ。まあ運動つて云ふ奴は無限の忍耐がなくちや出來ん』



のも無理はないだらう。我々は直接民衆の中に入つてそれを耕やせよ、んだ。そこに根を生やせよ、んだ。宣傳の目的物は本部ぢやない。働いてゐる労働者それ自身だ。排斥されたつてい、さ、本部でねえ。我々は眞直ぐに労働者の中に入つて行けばい、んだ」

麻生は慰める様にさう云ふと、彼の盃を棚橋の方に差出した。そして又云つた。

『まあ飲めや。處女地を耕やす者、虐げられたる者に宣傳する者は、撲られる事位は覺悟の前だ。愚圖々々云ふない、悲觀するな。ハ、ハ、ハ、』

『うむ、大丈夫だ。悲觀はせんよハ、ハ、ハ、』

『總ての困難よ來れ！我汝に打克たん。兎に角世の中は動いて行く。同志も増えて行く、佐野が又一人飛込んだ。ぐんぐん押して行けばい、んだ。目的に向つてねえ。猛烈な佐野の宣傳が始まるんだ。猛烈と云へば佐野君の何時かの新人會での夜の演説ねえ。あの演説で會員が六七人減つた相だぜハ、ハ、ハ、馬鹿にしてる。餘り過激で恐ろしくなつたわけさ』

『ほう、さうかね。ハ、ハ、ハ、そりや困つたねえ。僕あそ

んな過激な事を云つたつもりぢやなかつたんだがね。それあ氣の毒だつたなあ』

佐野も赤くなつた顔に微笑を湛へながら、快活に云つた。そして又つけ足した。

『だが大學も變つたねえ實際、我々のある時とは全で別世界になつた。もつとどん／＼宣傳してやらなくちやあ駄目だ。僕も、出来るだけ早く會社の方を止めて、もつと自由な身體にならなくちやあと思つてるんだ』

『いや／＼未だ止めるのは早い。あそこは未だ／＼充分利用が出来るぜ』

『いや、もう厭になつた。月給を貰つてると何だか厭な心持だ』

正直な佐野は自分の地位を恥づるかの様にさう云つた。

『おい／＼今度の議會にね、治安警察法十七條の撤廢の請願運動をしてやらうと思ふんだがどうだらう』

棚橋は不意にそして熱心に動議を提出した。

『うむ、それあい、だらう。どんな風にするんだ』

麻生も佐野も山名も直ぐに賛成した。

『なあと友愛會の名で、労働者の印を取つて議會に請願して問題にするだけでもい、んだ。ストライキや何かの時にあの治安警察法つて奴あ全く邪魔な奴さ。ブルジョアの城見たいなものだ。先づあ奴を打壊す必要がある』

『本部ぢやあ賛成なんかね』

『本部！本部の先生達あ駄目さ。勿論反對だよ。そんな事をすりやあ、友愛會は政府に睨まれて打壊されるつて騒いでるんだ。だが會員は皆大賛成だ。もう其位な事をしなくちやあ駄目さ』

『さうか、そ奴あい、だらう。なあとやつ、けるさ』

『でね、其宣言書を佐野君に頼みたいんだが書いて呉れないか』

『うむ、僕でよけりや書かう』

『よしそれぢやあ頼んだ。これからどし／＼色んなものを頼むからね』

『い、とも一生懸命にやるよ。出来るだけ役に立て、呉れ』

皆が佐野の家を出たのは十時過ぎであつた。晴れわたつた二月の夜の空には、凍つてゐる様な星が無數にまた

たいてゐた。昨日降り積んだ雪は未だ北側の屋根の上にも路傍にも残つてゐて白く闇の中に光つてゐた。少しの風もなく、靜寂たる島の夜の何處かには、底力のある工場の機械の呻めく様な音がしてゐた。そして又時折、遠いところで、隅田川を上下する蒸汽のけたたましい汽笛の吠える様な聲が聞こえて來た。

麻生も皆と一緒に家を出た。

『何て靜かな夜だ。併し何處となしに悲壯な感じがするねえ。島は全／＼』

麻生は空を仰ぎながら云つた。

『全／＼、ねえ。何處かに革命的な空氣が満ちてる。氣持が昂奮する。これで生活の第一が始まつた。愉快だ』

佐野は、何故ともなく身ふるひしながら昂奮に堪へない様に云つた。

『山名と棚橋が此島に來てからもう三ヶ月以上だねえ。』

早いもんだ。そして今日は又佐野も來た。渡しを渡つて歸るのは俺一人になつちやつた』

『さうだなあ、波止場まで行かう。島は生き／＼してゐる。鐵の音つて奴あ實に勇壯で革命的なもんさ。大分近



頃は此島も動いて来たぜ。追々聯合會も出来るよ」

『さうか、そ奴あい、。俺もこつちに引越して来たくなつた。だがまあもう暫く辛棒しよう。俺は皆を煽動して自分は一番後に残された』

『ハ、ハ、ハ、一人歸すのは可哀さうだねえ』

山名は酔つて赤くなつた頬を冷い夜の空氣に心持よくさらしながら、からかふ様に云つた。

『なに可哀相だ。馬鹿云へ。俺は本郷通りを通つて歸るんだぞ。貴様等行きたいだらう。連れてつてやらうか』

『おい、馬鹿にするなよ。俺は女なんか惚れる程甘黨ぢやないぞ』

『こ奴め馬鹿にしてらあハ、ハ、ハ』

皆は一緒に高く笑つた。

もう遅いので渡し船に乗る者も殆どなかつた。冬の夜の隅田川は闇の中にも其冷さを思はせながら悠々と流れてゐた。上流の川ぶちには無數に電氣の光がまた、いて其光を水に映じてゐた。

棚橋はその上流の方の、一ときは電氣の光が固つてゐる處を指さしながら、

『おいあれが石川島の造船所だ。あそこには幾千人かの労働者がゐるんだぞ』

と、吠える様に云つた。彼の様子は恰も敵城を臨む軍人か何かの様であつた。彼は又直ぐにつけ加へた。

『資本主義つて奴あ、何しろ偉大な怪物さ。其工場と機械の中に労働者を丸呑みにして仕舞ふんだ。中々ひつくりかへらないぞ。見ろ、あんなに機械も労働者も呻いてるぢやないか。資本主義の鐵鎖をた、つ切つて労働者の兩足を自由にするにや餘程ふんどしを締めてか、らんと駄目さ』

皆は棚橋の指さした方を一齊に眺めた。すつと其方から、寒夜の凍つた空氣をつんざく様な工場の時間を知らせる氣笛の音が響いて来た。其音は又闇に沈む黒色の川面をのたうちながら這ひ廻りでもするかの様に川面に長く反響した。

纏て、麻生は三人を残して渡し舟に飛び乗つた。其船の中には、石油罐の空箱の火鉢に赤い焰が燃えてゐた。それで、船頭の顔も麻生の顔も、其眞紅な焰に照らされて血潮を浴びた様に見えた。

『お前さん方乗るんぢやねえかね』

一人の老船頭は股火をしながら、岸の方に立つてゐる

三人の姿を見て、潮に錆びた聲で呟鳴つた。

『僕等は乗らないんだよ』

棚橋が元氣よく呟鳴り返した。そこで船は直ぐ岸を離れた。三人は岸の上から代るく、呟鳴つた。

『麻生さよなら』

『さよなら』

船の中から麻生は呟鳴り返した。三人の黒い影は、忽ちに闇の中に呑み込まれて分らなくなつた。

『何て愉快な晩だらう。佐野も到頭飛込んだ。仕事はぐんぐん進んで行く』

麻生は、燃え熾る石炭の焰に兩手をあた、めながら心の内に叫んだ。振返ると月島があらゆる力を其懐に抱いて夜の闇の中にふんわりと浮いてゐる。彼は自分の心が幸福に満ちく、てゐるのを感じた。

『人生とは何だ。人間の生活とは何だ。要するに此一瞬ではないか。何を待ち何を求めるのであらう。幸福とは何だ。要するに今かうして舟の中にゐて感じてゐる自分

の感情それ自身ではないか。形式の中に生活はない。形式の中に眞實の生活は求められない。人間の生活は眞實の命ずる處に自分を捧げる時にほんとに生きて來るのだ。此冬の夜も、此冬の川も、此みすばらしい渡し船も、悉く生き上つて今自分の幸福な生活を築き上げてゐるのだ。露西亞の青年達が、西比利亞の雪の中に佇む瞬間にも矢張り、自分が今感じてゐる様な人生の幸福を感じたらう。斷頭臺に立つた瞬間でも……さうだ其瞬間でさへも生活は生きくとして火華を散らしてゐたであらう。夢であらうか、それは夢でもよい。理想を追ひ求めて人間の完全な世界を築き上げようとする心、その心の中に眞實の人間は生きるのぢやないか。人間の眞實の生活と幸福とは理想を求むる心の中に生きてゐる。それにして佐野はよく飛込んだ。自分も纏て飛込むであらう。飛込まねばならぬ。それは自分にとつて唯一つの生きる道だ』

彼が限りなくこんな事を考へてゐる間に早くも渡し舟は向ふ岸に着いた。彼は立上つて岸に飛上ると、も一度後ろを振りかへつて島の方を見た。島は相變らず、黒く



晴れた空の下に沈みながらも、其の黒いかたまりの中には、何か知らず一種云ひがたい神秘的な底力がひそんでゐて、じつと磨げられた者の爆發を其懐に包み隠してゐる様に思はれた。

『俺達の生活は、あの懐に飛込む事にあるんだ。さうだそれが眞實の生活だ！』

## +

デモクラシー！デモクラシー！

これは新人會が生み出した最初の機關雜誌の名であつた。そしてそれが生れたのは大正八年の一月の終り頃の事であつた。其頃の日本の社會は未だ、勞働と云ふ文字を危険視してゐた。印刷された社會と云ふ文字の上には官憲の眼がざらりと光つた。發賣禁止！そして吉野博士の主張したデモクラシーと云ふ言葉は國體破壊の思想として排斥された。民本主義と云ふ言葉は其代りに生れたのであつた。今革新俱樂部の代議士をしてゐる星島氏が未だ學生時代に『大學評論』と云ふ雜誌を出してゐた。此雜誌には、若い新人たちが筆を執つてゐたが、麻生の

希望は、此雜誌を改革して、新人會の機關紙にする事であつた。けれ共それは容易に實現され相にもなかつた。

次第に其新しい勢力を増して行つた新人會の若い者達は、如何にして其事務所を設け其機關紙を出すかに就て、頭を悩まし初めた。二月の半ば頃には其事務所は兎も角大學の正門と赤門との間の半ば頃の少し引込んだ通りにある下宿屋の一室を借りる事に話がきまつた。若い者達は毎日そこに集まつた。宮崎は目白の家から毎日やつて来て皆を指揮した。赤松も毎日其下宿屋の一室にやつて来て氣焔を擧げた。その頃には、今京都の或る大學の教授をしてゐる波多野も熱心な會員になつてゐた。どちらかと云へば温厚で正直で、學者肌の此青年は、其反面に純眞な熱情の所有者でもあつた。そして其頃には會の仕事に熱中して麻生や會の連中と毎日事務所を探し歩いたりしてゐた。今は或る新聞の記者をしてゐる丸顔で元氣の満ち溢れてゐる門田と云ふ青年も熱心な會員の一人となつてゐた。これも今或る大學の教授をしてゐる平と云ふ青年も其頃には熱心な會員の一人となつてゐた。此青年は麻生等と同じ三高の出身で、美しい純な感情の

所有者で、幾分センチメンタルなところがあつた。彼は人間社會に闘争と云ふ事がなくなるのは何時であらうかと眞面目に考へて煩悶してゐた。そして或る日新人會の演説會の歸りに其煩悶を麻生に打明けた。彼はしんみりした口調で麻生に云つた。

『麻生さん貴方は人間の闘争の終局を信じますか。何時まで行つても人間は争ふのではないでせうか』

『恐らく人間は争ふ種のある間、或は種をつくつても闘争するでせう』

麻生は簡単にさう答へた。

『貴方はそれで人間に失望しませんか』

彼は絶望した様に麻生の顔を見上げて云つた。

『僕は決して失望しません。僕には絶對と云ふ事は分らんが、兎に角一步でも人間の世界をよりよい方に近づけて行く事が出来ればそれで満足です。そして我々はさう云ふ希望を抱いて、それに向つて努力する事そのものが人間の生きた生活だと思ふんです。僕はそれで満足です。絶對究極が分らないから、現在の生活に絶望すると云ふ事は無意味な事ぢやないですか。何故なら僕等は生

きてゐるんだし、又生きる事を欲してゐるんだから、僕等は生きて行かなければならんでせう。だが僕は眞實に人間に希望がないと確信する人の自殺する事は一向止めようとも思ひません。僕はそんな人を氣の毒に思ひます』

『さうですか。僕もよく考へて見ませう』

彼は深く思ひ見る様にさう云つて別れて行つたのであつた。さうしてそれから數年後の今日も彼は昔の儘の純な感情を抱いて勞働者の友となつてゐるのである。

その外に丈の高いそして非常に温厚な細野と云ふ青年もあつた。彼は皆の厭がる事務を自分で引受けて熱心にそれを整理した。彼も亦至純な感情の所有者で、いつも變る事なき態度を以て熱心に會の仕事を進めて行つた。

こんなにして、その頃には優れた素質を持つた青年が續々として會に投じて來たので、總ての仕事は面白い様に運んで行つた。新しい熱情を抱いて何事かを成さうとする意氣は、忽ちにして其機關雜誌を出す事の上にも成功したのであつた。

けれ共、此生れ上つた雜誌は其生立ちから無殘な壓迫



を蒙らずにはゐなかつた。

突如として嵐が襲つて来た！

待ちに待つた初號は無事に生れ上つて無事にパスした。若い者達は歡喜して其生れ上つた自分達の子供を抱きながら躍り上つた。『デモクラシイ』と云ふ字が表紙に赤く浮上つた其雑誌は、家にゐる時には其机上に、外に出る時には洋服のポケットに、會員の肌身を離れる事はなかつた。地方の支部にも發送された。大學の正門通りの書店には何處にも雑誌が高く積まれて異彩を放つてゐた。

『おい／＼、書物屋にも出てゐるぜ、どん／＼賣れると云つてるよ』

皆は、毎日本郷通りの書店を覗いて来てはにこ／＼しながら御互に報告し合つた。全く出来上つた雑誌には純眞な青年の意氣と情熱とが燃え上つてゐた。

二月の末には又待ちに待たれた第二號が出来上つた。其日には、本郷の下宿屋の事務所に六七人の者が集つて、印刷所から出来上つて来た雑誌を地方の會員に發送するの忙がしかつた。そして漸く發送を終つて、皆は

寝ころびながら、手ん手に雑誌を開いて、喰ひつく様にして讀んだり批評したり喜び合つたりしてゐる處に、宮崎が狼狽てふためいて飛込んで来た。そして、全く眞剣な顔をしながら呶鳴つた。

『おい大變だ／＼。もう雑誌は送つたか。今警察からやつて来る』

『警察から来る？どうしたんだ』

皆は宮崎の言葉を聞くと、何か知ら不安なショックを感じながら一齊に起上つて叫びながら宮崎の青い眞剣な顔を見つめた。宮崎は又直ぐに皆の顔を睨みながら不安な様子をして呶鳴つた。

『發賣禁止だ！』

『なに發賣禁止？』

『發賣禁止だ！』

『さうだ發賣禁止だ！今警官が押收に来るんだ』

宮崎は又激しく周圍を見廻しながら叫んだ。今度は皆何と云ふ事なしに一齊に立上つた。

『そりや大變だ！』

『どうしよう？』

『どうしよう？』

『發送はすんだのか？』

『今すんだ處だ』

『ちやあ大丈夫だ。なあに狼狽てるな。残つてる奴を別な室に持つて行け』

宮崎は昂奮しながらも、何處かにそんな事には馴れてゐると云つた様な態度を示しながら皆を指揮した。

『別な室に持つて行く？』

『どうするんだ』

まだそんな事には馴れない若い學生達には、今自分等は非常な危機に立つてゐる様に感ぜられた。

發賣禁止！警官！押收！

それには監獄がくつついて居るんぢやないか？一人が不安氣に宮崎の方を見ながら小さな聲で叫んだ。

『大丈夫だらうか？』

『なあに大丈夫だとも。一切は僕が責任を持つ』

宮崎は昂奮した聲で叱咤する様に叫んだ。そして皆をせき立てた。

『さあ早く。そして皆出来るだけ洋服の下に入れる。僕

は一寸下の女將に話して来る』彼はさう云ふと、室を飛出して下に降りて行つた。

皆は宮崎が下に降りて行くと、何かしら今にも悪魔から襲はれでもするかの様な顔つきをして、幾冊宛かをシヤツの下に入れようとしたり背に脊負はうとしたりした。そして自分のふくれた洋服を見ては、不安氣な聲で

『おい大丈夫かい』

『おい大丈夫かい』

と云ひ合つた。と又一人が、

『未だ來ないか窓の外を見ろ』

すると一人が、こは／＼窓のガラス戸を開いた。

『どうだ』

一人が尋ねた。すると、一人は狼狽て、窓をぴしやりと閉じた。彼の皆を見た顔は眞青になつてゐた。彼は死んだ様な聲でひく、叫んだ。

『來た！』

『なに來た？』

皆は又しても何物かにひどく、どやしつけられでもしたかの様に不安な顔をして互に顔を見合はせた。すると



階段を上がる足音がして宮崎が狼狽ながら室に飛込んで来た。そして低い併し鋭どい聲で命令した。

『其雑誌を』

一人が未だ残つてゐる二三十部の雑誌を宮崎に渡した。其時、玄關の戸が、がらりと開く音がして、二三人の者が入つて来た氣配がした。宮崎は其音を聞くと、又低い而し鋭どい聲で云つた。

『皆寝ころんで話をしろ。責任は僕が引受ける。大丈夫だ』

彼はさう云ふと、其残つた雑誌を抱へて、急いで出て行つた。

皆は直ぐに寝ころんで、無理に笑ひ聲を立てようとして、何か高い聲で話さうとしたが、なかく甘く行かなかつた。そして皆の耳は兎角、玄關の話聲の方に集中された。そして、お互に不安相な顔を見合せては、自分の洋服や着物のふくらみを氣にし合つてゐた。

宮崎は直ぐに又室の中に入つて来た。そして、彼は手に十部ばかりの雑誌を持つてゐた。彼は低い聲で、  
『大丈夫だ。上つて来たならこれをやればいゝんだ。まあ』

皆煙草でも吸つたらどうだ』

と云つて、自分はわざと悠々煙草を取出してそれらに火をつけた。皆も思ひ出した様に一齊に煙草の袋を取出してそれに火をつけて吸ひ出した。煙は忽ちにして室の中をたて込めた。

警官達は容易に上つて来なかつた。女將のはきくした聲が時々聞こえて来た。その應待は男性的で頑強に何かを云ひ張つてゐる様であつた。宮崎はそれを聞くと細い聲で、

『頑強にやつてる。君達こゝの女將は全く偉いぜ。非常に義侠的などころがあるんだ。今頑強に抵抗してゐるんだ。我々も、もつと度胸を定めなくちや駄目だ。狼狽てちやいかん、狼狽てちやあいかん』

宮崎がさう云ひ終るか終らないうちに、誰かとんくとんくと階段を上つて来る足音が聞こえた。皆は思はず顔を見合せて、

『来た！』

とつぶやいた。すると、障子が開いてそこから肥つた微笑を帯びた女將の顔が現れた。其顔は皆の顔を一通

そこで一人がそつと、硝子戸を上持上げて、外を眺めた。

『歸つた！歸つた！』

『なに歸つた？』

『歸つたのか、ほんとに』

『ほんとに歸つた』

すると其時下で宮崎と女將の高い愉快な笑ひ聲が聞こえた。それを聞くと皆は思はず起き上つて、安心した顔に笑ひ聲を立てた。宮崎は直ぐ凱旋將軍の様な態度で上つて来た。

『もう歸つちやつた。大丈夫だ。こんな事は平氣だ』

彼の鼻からは馬の息の様に荒い息が出た。皆は、くすくす笑ひながら、洋服や着物の間から少しばかり宛の雑誌を取出して、そこに並べた。皆は又顔を見合はせては高く笑ひ合つた。

こんなにして、『デモクラシイ』は生れ立てから發賣禁止の厄に罹つてひどいめに會つたのであつたが、そんな壓迫は、却つて若い學生達の熱情を湧かせ其運動を眞剣にして行つたのであつた。そして幾度かの禁止に罹りな

り見廻すと、更に深い笑顔に變つて行つた。そして其笑顔の中から赤い舌がべろりと出て直ぐ引込んで、今度は微かな笑聲が滑り出た。そして其笑ひ聲が直ぐに、  
『宮崎さん、警察の方が一寸貴方に會いたいんですつて』

と云ふ平氣な素知らぬ言葉に變つて行つた。

『よし来た』

宮崎は即座に立ち上つてさつき持つて来た十部ばかりの雑誌を手にして室の外に出た。すると女將は、障子を閉めがけに、

『皆さん大丈夫ですよ。安心していらつしやい』

と、平氣な聲で云つて降りて行つた。

玄關の方で今度は宮崎の大きな聲がし出した。皆はそれに又聞き耳を立てた。が暫く兩方の問答が續くと、廳で玄關の戸が開いて、中の者が出た様な氣配がした。

一人が小さな聲で叫んだ。

『歸つたんぢやないか』

『今玄關の戸があいたね』

『うむ一寸窓を少し開けて見る』



がらも雑誌は毫も屈する事なく、ぐんぐんと成長して行つた。

皆の熱が次第に高調して来るに従つて、何處かに合宿所を得て、そこを本部にしたいとの希望が次第に皆の頭の中に湧いて来た。そこで麻生も一緒になつて、合宿所に相應しい様な家をあちこちと探して歩いた。けれ共適當な家が容易に見當らなかつた。丁度其頃、宮崎が都合のいい話を持つて来た。それは、支那の革命家、黄興氏の目白にある家が今は空家になつてゐて、彼の父が管理して居るのであるが、それを貸して呉れてもい、と云ふ話であつた。そこで麻生が會を代表して、改めて、宮崎の家に彼の父を訪問して、それを依頼する事になつた。黄興の親友として、支那革命の援助者として有名であつた宮崎の父は、悦んで、此若い學生等の團體に、無條件で其家を貸す事を承諾した。そして、麻生と波多野とが先づ眞先に目白の黄興氏の大きな邸宅に引越したのは、櫻の咲く四月の初め頃であつた。

## 十一

出来なかつた。

『古い生活は棄て、仕舞へ。これから又新しい生活に入るんだ。俺達は何時でも隣隣なく未來に飛び込まねばならんよ』

彼はさう云つて彼の妻を勵ました。そして妻と其弟とを急ぎ立て、荷こしらへをした。そこには五六人の會員が引越して来る事になつてゐたけれ共、其日に引越す事の定まつてゐたのは、麻生と波多野とだけであつた。麻生等は荷物を車に積み終ると、幾度も門の外から空家になつて其戸の閉められた、懐かしい二階を振返つて別れを惜しみながら、根津の家に別れて目白の方に出掛けた。

波多野は只だ一人早くから来て麻生等の来るのを待つてゐた。麻生等が着くと、丁度そこに其直ぐ近所に家のある宮崎がやつて来た。

『まあ此家？随分大きくて立派なのねえ』

麻生の妻は、堂々たる門の前に来た時、驚異の眼を以て其門を眺めながら叫んだ。

『これちや大變だわ。まるで富豪か何かの邸宅だわ。中

目白の家に眞先に引越して行つたのは麻生の一家と波多野とであつた。麻生にとつては長く住み馴れた根津の家に別れるのは辛い事であつた。そこに彼は三年間も住んでゐた。今はもう彼の同志達はそれぐの持ち場に據つて實際の運動に着手してゐるので、水曜の夜も滅多に集る様な事はなくなつてゐたが、其二階は長い間彼の同志達が集つては、研究したり、相談したり、又お互の間の交はりを深くしたりした思ひ出の深い二階であつた。其二階で始めて顔を合せて同志に加はつた者も少なくはなかつたのである。其二階の欄干には藤の枝がからまつて、もう青い芽を吹きかけてゐるのであつた。麻生の妻も此家を去るのを厭がつた。それでも其家が麻生を引止める力よりも、新しく開けて来た目白の家が彼を誘ふ力の方が遙かに強かつた。

『今から新しい運動の中に飛込むのだ。其生活の中からはずや何ものか、生れ上るだらう。若い日本のインテリゲンチアが社會運動に赴かうとする第一の門出ぢやないか』

彼は心の中に満ちく／＼て来る希望と悦びとを隠す事は

も賈いでせうねえ』

『奥さん、中はそりや大變ですよ。幾つ間敷があるか分らないんですよ』

柔しい波多野は悦し相ににく／＼しながら、門を開いた。そこには長い植込みを距て、堂々たる玄關が見えた。

『宮崎君、實に立派だねえ。我々にはちつと勿體ないぢやないか。こんな家にゐると何だかきまりが悪い様だ。闘争心も何もなくなるぜ』

麻生は門を入つて玄關の方に歩きながら快活に云つた。

『もつと立派でしたがねえ。全然手入れをしないもんだから汚なくなつちやつた』

宮崎は如何にも馴れ切つた様に玄關の戸を開けながら云つた。皆は宮崎の後ろについて未だ雨戸が開けてないので薄暗い家の中に入つて行つた。

長い間空家になつてゐた廣い家はがらんとして、雨戸の隙間から漏れてさし込む太陽の光に薄明るくなつてゐた。



『随分汚なくなつてる。今戸を開けて掃除をしよう。だが一應室を皆案内しようか』

宮崎は支關を上ると直ぐ左側の扉を開いて其中に入った。

『これが洋室だ』

皆は續いて其室に入った。そこは十疊位敷かれ相な立派な洋室であつた。

『まあ立派ねえ』

麻生の妻は又驚異の叫びを擧げた。波多野も悦んで叫んだ。

『こ奴あい、室だ。應接室だなあ』

宮崎は其次の室の扉を開いた。そこにも八疊位な日本間があつた。それから廣い廊下に出て、又次の室に入った。其室は十二疊もある立派な床付きの日本室であつた。その次は八疊其次は六疊、そして其十二疊と八疊とは廣い縁側がついてゐた。

『まあ廣い事』

『こ奴あ素的だ。こ、だけで百人位は集れる。演説會が出来る』

皆はがらんとした堂々たる三つの室の中に立つて薄暗い室の中を見廻しながら感嘆の叫び聲を擧げた。

『出来るとも。百五十人は入れる。縁が廣いから』

宮崎は又平氣な馴れ切つた聲で云つた。それから皆は、又もとの廊下に出た。そして廊下を進んで行くと、そこに突然奇妙な廣い洋館とも何ともつかぬ室を見出した。

『まあ。此室は變な室ねえ。どうしたんでせう』

『これは支那式の室ですよ』

宮崎は又たやすく室を説明した。麻生の妻は又驚嘆の聲を擧げた。

『まあ支那式つて随分奇妙な室だわねえ。波多野さん御覽なさい。此室は何に使つたらいいんでせう』

『面白い室ですわねえ。随分廣い二十疊位あるでせう。』

さあ何に使つたらいい、だらう』

波多野はたまげた様に其室の光景を見廻しながら當惑した様に云つた。

『宮崎さん臺所は』

『臺所はこつちです』

宮崎は又廊下を傳つて少し離れたところにある廣い臺所に連れて行つた。

『まあ廣い事、これちやあ大變だわ。四人や五人ちやこんな臺所は使へやしないわ』

麻生の妻は女だけに念入りに臺所を見廻しながら叫んだ。

『未だこつちに女中部屋が二間あるんだ』

宮崎は臺所の一方から廊下になつてゐる方を覗きながら云つた。

『まあほんとに。いつたい室は幾つあるんでせう。何だかそつちの方は恐ろしい様ねえ』

『こんな室は使はなくつたつてい、んです』

宮崎はさう云ひながら又もとの方に引つ返して、

『今度は二階だ』

と叫んだ。二階には又廣い室が四つもあつた。そして皆が又階下の廣い三つの室に歸つて來た時にはがっかりして草臥れて仕舞つた。麻生の妻は女だけに疊の上に坐りながら云つた。

『まあ大變な家なのねえ。これちやあとても妾一人ちや

お掃除も何も出來やしないわ。雨戸を開けるだけでも大變ですもの。それに妾一人こんな家に残されたら、こはくて居られやしないわ』

『ハ、奥さん大丈夫ですよ。僕たちが掃除や雨戸開けはやりですよ。誰か一人位は家に居るから大丈夫だ』

『さう、でも妾何だか心配だわ』

『奥さん、大丈夫々々々、まあ今雨戸を開けるから庭を御覽なさい。こはい事なんぞはちつともない』

宮崎は、又馴れ切つた様にさう云つて縁側に出て雨戸を開き始めた。

春のやはらかな太陽の光は、忽ちに室の中に流れ込んで、今まで薄暗く陰氣だつた室は急に明るく陽氣になつた。

『奥さん、御覽なさい、芝生と櫻が非常に綺麗だ』

雨戸を一枚々々繰つてゐる宮崎が叫んだ。

『ほんと』

皆は立上つて宮崎の方に行つて庭を眺めると一齊に叫んだ。

『あらまあ綺麗なこと』



『やあ随分広い庭だねえ』

『この芝生はどうだ』

『全くい、庭だ』

皆が一齊に驚異の叫びを擧げるのに無理はなかつた。庭は住む人を失つて何となく荒れてはゐたけれど、其廣とした庭一面には今芽を吹き出さうとしてゐる美しい芝生が一面に生えてゐた。遅咲きの大きな櫻の大木の幾本かには今を盛りと花が咲亂れて、其白い花瓣を芝生の上にひらくと散らしてゐた。芝生のあちこちに植ゑられた庭木には、春の暖な太陽の光と熱とが心行くまでそがれて、其枯れた様な枝からは青々とした若芽が吹き出しかけてゐた。白椿の花も其大きな花瓣を重たげに其厚い青い葉の間にのぞかせ、赤い萌える様な、楓の若葉が青くなりか、つた芝生の上に垂れ下つてゐた。

雨戸を皆あけて仕舞ふと室の中は明るみ渡つて、南を受けた廣いゆつたりした縁側には四月のぼか／＼した太陽の光が明るく映じた。薄暗い、がらんとした廣い室を廻つて陰氣になつてゐた皆の頭は、急にからりと晴れて何となく陽氣になつた。

宮崎は笑ひながら無難作に云つた。

『どうです奥さん。雨戸を開けるとちつとも淋しい事はないでせう』

『さうねえ。これならそんなに淋しい事はないわ。でも夜になつたら矢張り淋しいわ。それにあの臺所の向ふの室の方は何だか恐いねえ。だけど随分立派な家ねえ。一體幾つ室があるんでせう』

『一、二、三四五、六七、八九、十、十一、十二、十三、さうだ臺所を入れないで十三ある』

『まあ十三、それも皆廣いんですもの』

『全くい、家だ。黄興のゐた家と云ふだけでも氣持がいい。僕等には適當した家ぢやないか。此家なら、どんな會合でも、どんな相談でも、どんな秘密な事でも出来るぞ』

麻生は又しても廣い家の中を見廻しながら悦し氣に云つた。

『ほんとだ。これは新入會には勿體ない様だ。餘程用心せんと、こんな家に住んでゐると好い氣持になつてプロレタリアの事なんぞ忘れて仕舞ふ』

波多野も立派な天井や立派な床の間の方を眺め廻しながら、ほんとに氣遣はし氣に云つた。

『ほんとに用心せんと駄目だ』

こんなにして四月初めには皆の希望が達せられて、思ひ設けぬ立派な家が、而も、人格の優れた支那革命の志士黄興の家が、新入會の本部兼合宿所になつたのであつた。

それから四五日すると、例の眞面目な平も引越して來た。元氣で多感な丸顔の門田も引越して來た。鹿兒島の青年で平と仲のいい、村上堯と云ふ青年も引越して來た。此青年は頑丈な體格の所有者で如何にも粗朴な飾り氣のない様子をしてゐて、どちらかと云へば、多辯な者の多い會員の中では珍らしく無口で、深く考へると云つた風なところがあつた。そして又性格には見るからに正義そのものと云つた様な正しいところがあり非常に純な感情を持つてゐた。頭もよく勉強にも熱心であつた。彼は輕薄な事が非常に嫌ひであつた。けれ共悲しい事には彼の頑丈な性格に拘らず、目白に引越して來ると間もなく胸の病氣に罹つて、目白で暫く寝ついて郷里に歸つて又暫

くして此世を去つて仕舞つた。彼は其若い純な血に燃ゆる胸の中に、人類の正しい未來の社會の現實を夢見ながら、空しく其熱情と理想とを其病める胸の奥に抱いた儘此世を去つたのであつた。

今神戸の或る大學の教授をしてゐる新明と云ふ青年もやつて來た。此青年は金澤の出身で、其家庭には何かしら暗い影があるらしく、どちらかと云へば貧窮の中に勉強してゐたのであつた。彼は熱心な勉強家で學者肌なところがあつたが、其頃には郷里の方の或る女と惱しい口一マンスを持つてゐた。

初ぶな彼は女から來た手紙などを眞面目な顔をして皆の前で讀んだりなどした。皆は黙つてその手紙を讀ませたり、眞面目な顔をして、二人の様子などを話させたりして置いては、しまひに手を拍つて、冷かしたり、からかつたりした。けれ共戀愛の神聖と眞面目を飽くまで自信してゐる彼は、そんな事には少しも凹まなかつた。そして其甘つたるい處を手ばなしで披露し續けたので、流石の連中もしまひには手を焼いて、もうからはなくなつて仕舞つた。



そこに泊つてゐない者も毎日の様にやつて来た。宮崎は直ぐ近所なので朝つかからやつて来た。ロマンチックな彼はマンドリン等を持つて来て賑やかにそれを弾いた。會の仕事に熱心な細野も、家が直ぐ近所なので其細長い身體を毎日運ばせて来ては事務用の机の前に腰掛けて熱心に事務をとつた。

赤松がやつて来ると殊に賑やかであつた。輕快な、議論好きで、至る處で議論の花を咲かせた。細い眼に愛嬌を湛へて、兩方の手をひつきりなく上下させながら身體全體を縮めたり伸したりしてまくし立てる彼の様子の中には一種獨特な天才的ところがあつた。彼の議論の中には随分無理な詭辯があつたが、それでも何とか、彼とか、理窟をひねり出して相手をやり込ませねば置かなかつた。全く議論で彼に敵する者はなかつた。彼は風の如く現れて、何かしらそこいらに旋風を巻き起して置いて、皆がそれに熱中してゐる時には、早くも其姿を其場から消して、又何處かに其生きくした姿を現はして熾に論じ立て、ゐるのであつた。彼は又全く美しい聲の持主で、よく其美しい聲で、其頃はやつたロマンチック

なオペラの歌を歌つて、若い者の心を惱ましい戀の憧憬れの方に引張つて行つた。彼の歌ふ美しい情緒的な聲は、廣いがらんとした室の中を隅から隅まで傳つて行つた。

戀はやさし野邊の花よ  
熱い思ひを胸に罩めて

疑ひの霜を冬にもおかせまい

我が心のたゞ一人よ。

戀にまことの露がなけりや

戀は直ぐしほむ花の生命

熱い思ひを胸に罩めて

疑ひの霜を冬にもおかせまい

我が心のたゞ一人よ。

皆は彼を取巻いて、其歌に聞き惚れた。そして其の胸の中に燃え立つてゐる青年の戀に憧憬れる心を愈々燃え立たせた。愉快な感情的な門田は其歌を聞くと、『あ、堪らん』と叫びながら自分の室に駆け込んで其机の抽出しから、彼が、何處かに残して来た戀人の寫眞を取出して、其唇に接吻した。皆はどつと笑ひながら手を叩いて

彌次つた。すると彼は顔を眞赤にしながら、昂奮して祈りを捧げる様な口調で演説をおつ始めた。彼はクリスチヤンだつたのである。

『あ、俺の生命よ！尊き俺の生命よ！俺はお前を革命のために、正義のために、人道のために捧げてゐるのだ。けれ共許して呉れ。俺の生命は、其正義のために、燃え立つてゐると同じ様に、戀のために、甘いそして純な戀のためにも焰の如くに燃え立つてゐるのだ。戀が欲しい。戀が欲しい。俺の生命は若いんだ。俺の生命は戀に飢えてゐるんだ』

彼は狂氣した様になつて叫んで、はては其兩方の眼から涙をぼろ／＼とこぼして泣いた。

赤松も其の頃はロマンズを持つてゐる様であつた。だが、彼は容易に其眞相を告白しなかつた。彼には女學生が參ると云ふ評判であつた。彼には何處かに人の心を引つける知識的な若さと魅力とがあつた。彼は非常な熱を持つて突進しながらも、いざと云ふ時になると足踏みをする近代の知識階級の特徴が濃厚である様に見えた。

『赤松の戀は足踏みの戀だ』

と口の悪い麻生が云つた。赤松はそんな事はないと麻生の言葉を激しく否定した。

情熱的でロマンチックな宮崎も其頃、何處か遠いところへ遂げられざる戀人を持つてゐる様であつた。彼は其戀人を夢に見、現つに描いて、其遂げられざる戀に悩み憧憬れてゐる様であつた。

目白に引越して暫くして、もう庭の花も散つて樹木の枝々が深緑に蔽はれ、一面の芝生が青々として緑の色の濃くなる頃になつてから、今までは、どちらかと云へば引込み勝ちで、勉強ばかりしてゐた、温しい波多野の姿がちよ／＼見えなくなる事が多くなつた。夕飯の時などにもよく彼は歸つて来なかつた。彼の机の上にも兎角塵が溜り勝ちになつた。そして夜遅くなつて、ちよ／＼よこと歸つて来て、蒲團の中にもぐる事が多くなつた。

夕飯の時など彼の姿が見えないと、

『波多野は何處に行つたらう』

『近頃あ奴あ變だぜ』

と皆は噂し合つた。けれ共結局は、

『だがあんなをとなし男だから大丈夫だらう』



と云ふ事になつてゐた。處が或る夜麻生の妻が飛報を齎した。それは麻生の妻が活動寫眞を見に行つたら、波多野が非常な美人と一緒に活動寫眞を見てゐたと云ふのであつた。其話を聞くと輿論が沸騰した。そして其夜波多野が例の様に遅く歸つて來ると、皆は寄つてたかつて彼のローマンスを白狀させて仕舞つた。

彼は細野の妹と戀し合つてゐたのであつた。それでも正直な彼は、社會革命に志す者が戀に酔つたりなんかする事は非常な罪惡の様に考へて心を苦しめてゐた。

未だ女の味を知らない若い青年達にとつては、運動は一つの憧憬であり夢であつた。又理想でもあつた。そしてその憧憬と夢の中には現實味と云ふものが缺けてゐた。彼等の現實は、そんな仕事に行く前に先づ戀を得る事の方が急務であつた。

戀と革命とが渦を巻きながら彼等の眼の前に、高い空に、夢の様に幻の様に、ちらつてゐたのであつた。何と無邪氣な事である事よ!

麻生は其頃にはもう餘り戀の話には加はらなかつた。その時代は彼には過ぎ去つてゐた。彼の眼の前にはもう

其時には現實が迫つてゐた。仕事が彼の生活を占領してゐた。彼は家庭の事もかまつてはゐられなかつた。若い學生達と彼との間には幾分の時代の相違があつた。

麻生等が學校を出る時代には未だ時代は暗かつた。新しい時代の黎明は來らんとして來らず、夜明前の暗さは陰鬱でそして希望がなかつた。彼等は、その舊時代の末期の闇の中にさ迷ひながらそれに反逆したのであつた。併し彼等の一足後の時代はもう、新しい時代の潮が此島國の中に非常な勢で流れ込んで來た時代であつた。社會運動の黎明は其鐘をすさまじい勢でつき始めた。潮は矢の様な急流をなして流れをつくつた。新人會の若い者達は其潮の流れに棹さしたのである。麻生等の時代と宮崎や赤松等の時代の間にはそれだけの差があつた。さうして其差は戀で、又麻生や棚橋や山名や岡上や佐野等と、宮崎や赤松等の相違であつた。

目白の家に集まつた者達は、何とはなしに麻生に遠慮があつた。現實の中から歸つて來る麻生の顔の中には、何處かに陰鬱と深刻とがあつて、戀に憧憬れ、夢の様な理論に酔ふ若い者達の心にはそぐはぬ様に思はれた。

それでも目白の生活は大きな悦びを以て、色々な仕事も抱え込みながらどん／＼進展して行つた。

其家の境遇上政治運動にいくらかの経験のある宮崎は、もう其頃に幾人かの労働者を知つてゐた。その労働者達は、龜戸の方に住んでゐるセルロイド工場の職工であつた。彼等は、よく目白の方にもやつて來て組合を作る相談をした。其労働者の一人は、後に南葛労働協會と云ふ労働組合を作つて働いた主腦者の一人で、渡邊と云ふ青年であつた。彼は昨年の所謂共產黨事件に連座して投獄せられた。そして彼は入獄中彼の組織した組合の幹部達の多くは、昨年の震災の當時、警察に檢束せられ、臆て軍隊の手に渡され、何の理由もなく只だ舉動不穩と云ふ名目で虐殺せられて、其骨さへも闇から闇へと葬り去られて仕舞つたのである。

## 十二

龜戸の労働者達をよく知つてゐる宮崎や赤松は渡邊達と一緒になつて、龜戸の方に労働組合を作るのに熱中した。そして其出來上つた組合を、新人セルロイド工組合

と命名したのであつた。その組合は非常な勢で發達して行つた。

或る夜龜戸の或る寺で講演會が催されて、宮崎や赤松や波多野や門田達は皆出掛けて行つた。其の中に麻生も交つてゐた。彼等は其道々組合の出來上つた成功の悦びに酔つてゐた。そして彼等の世界がもう愈々近づいて來た様な氣持になつて昂奮しながら叫び合つた。世の中と云ふもの、社會と云ふものを知らないで、若い氣持の上に、又彼等の讀んだ幾冊かの書物の知識の上に、容易に、彼等の革命と新社會の建設を夢見てゐる彼等にとつては、龜戸の一角に一つの組合を作り得た事は、將に彼等の天下がもう眼の前に近づいて來た證據に外ならなかつた。

彼等は、電車の中で、道を歩きながら革命の酒に酔拂つた様な氣持であらん限りの聲を張上げて、新人會の歌を歌つて行つた。

電車の停留場には、幾人かの労働者達が出迎ひに來てゐた。渡邊は學生達の一行を見ると、張切つた元氣の中に心からな悦びを顔に表はしながら、急いでやつて來て



『御苦勞様』

と云つた。すると、彼と一緒に來てゐた労働者達は恐縮した様な恰好をして彼等の方に頭を下げて、口々に『御苦勞様』

と云つた。元氣な彌次氣分の横溢してゐる丸顔の門田は、それを見るときも非常な昂奮に達しながら、皆の手を順々に握手して叫んだ。

『やあ實に恐縮ですな。皆さん迎ひに來て下さつて、我々は皆兄弟だ。そして我々は諸君を尊敬する者です。我々を指導して下さい』

彼は、何處かにクリスチャンらしい口調でさう叫ぶと、彼の帽子を取つて今度は熱狂した聲で、

『労働者萬歳』

と叫んだ。労働者達は暫く飽氣にとられてそれを眺めてゐたが、臆て皆はくすくすと笑ひ出した。彼は圖に乗つて又叫んだ。

『さあ行かう。人民の中に』

そして、どら聲を張上げながら歩き出した。

『会場は？』

宮崎も昂奮した聲で渡邊に尋ねた。

『会場は大丈夫です。狭い寺ですがね。警察が干渉して廣いところではやらせないんです。それで今夜も演説會でなく茶話會と云ふ形式なんです。どうもしようがないんです』

渡邊は口をとんがらせながら憤慨に堪へないもの、様に云つた。彼はどちらかと云へば瘠せ型の方で身なり等は少しもかまはずに汚い着物を着てゐたが、見るからに熱心で労働者特有の反逆性に燃えてゐると云ふ風なところがあつた。

会場は餘り廣くない寺の本堂で、もうそこには七八十人の労働者達が集まつてゐた。

臆て會の順序書がはり出されて、幾人かの労働者が演壇に立つて短い演説をした。未だ演説に馴れない其頃の労働者達の演説はたどくしいものであつた。それでも彼等の腹の中にたまつてゐる虐げられた者の憤憤が言葉の中に迸り出た。續いて目白から繰出して來た若者達は代るく起つて昂奮しながら叫び續けた。

多くの労働者達は、其意味はよく分らないが何か知ら

昂奮し泣いて叫んでゐる様な學生達の演説を半ば飽氣に取られながら、半ば嘔鳴りつけられる様な壓迫を感じながら熱心に聞いてゐた。そして樂屋の方で拍手すると、

それに誘はれて皆は激しく拍手した。労働者達はほんやりながら恐ろしく狂氣じみた元氣のい、學生達から其尻をひつばたかれて、何でも彼でも突進せねばならない様な氣がしてゐた。

演説者の一人が手を前に突出して顔を眞赤にしながらか叫んだ。

『掴めよ！ 然らば與へられん！ 未來は労働者の天下だ！ 労働者諸君は奮起せねばならない』

労働者の一人の酔拂ひらしいのがそれを聞くと、手を激しく拍きながら恐ろしく元氣な聲で合槌を打つた。

『さうだく掴むんだ。何だつてかまうもんか。嬢のふんどしだつてかまやしねえ』

皆はそれを聞くとどつと笑つた。

又一人は叫んだ。

『労働者は搾取されてゐるのであります。資本主義經濟組織のために』

すると、隅の方にゐる労働者の一人がそつと隣りの者につぶやいた。

『サクシユ？サクシユつて何だい。資本主義ケイサイソシキつて何のこつたい』

學生達は、自分等の讀んだ書物から得た概念に、非常な昂奮の衣を着せて、労働者達に投げつけた。彼等は軍國主義と資本主義との關係も説いて、ひどく軍國主義を攻撃した。

自由—平等—正義—人道—社會主義—無政府主義—人類の理想—非人道的資本主義—労働者の世界—革命—サンチカリズム—IWW—

是等の言葉が、兎に角非常な速度を以て學生達の口から迸り出た。それを聞いてゐる労働者達は、それが正確に何を意味してゐるかは、演壇で叫んでゐる學生達と同じやうに分らなかつたが、それでも何しろ元氣だけは非常に熾になつた。そして資本家が怪しからんと云ふ事ははつきり分つた。

演説が終ると、渡邊は歸らうとする聴衆に叫んだ。

『まだゆつくり話の聞きたい人達はあとに残つて下さ



い。そしてどしどし組合に加入して下さい。」

労働者のいくらかは後に残つてあちこちに車座になつた。學生達はその車座の中に入り込んで熾に宣傳した。そして最早、一時にもならうとする頃そこを引揚げて目白の方に歸つて行つた。彼等は来る時よりも歸る時の方がもつと昂奮してゐた。何かしら自分等が労働者の中に直接入つて宣傳したと云ふ事は非常に偉大な事のように思はれた。彼等は凱旋將軍の様な心持を抱きながら歸つて行つた。彼等の心は潮の様に高鳴つて、其唇からは、元氣のいゝ歌が迸り出た。

こんなにして目白の本部からは度々學生達が労働者の中に出掛けて行く一方には又労働者達も熾に目白に入出し出した。そして労働組合もあちこちに生れ始めたのであつた。

目白の家が世間に知れ渡ると、日を追うてそこを訪れて来る者が數を増した。支那の若い革命家達も澤山やつて來た。それは宮崎や宮崎の家との關係からであつた。彼等は北京に於ける學生達の運動の事や、上海に於ける社會主義の運動の事や、支那の革命の話等をして行つ

た。朝鮮の學生達もやつて來た。

地方の支部も次第に増えて行つた。機關紙のデモクラシーは度々發賣禁止を食つた。それでも最早最初の時の様に狼狽しなくなつた。印刷が出来上ると、皆は手早く地方へ發送の準備をしてを送つた。労働者達は奮ふ様にしてそれを持つて歸つた。

何か知ら若々しい青春の革命的な氣持が目白の大きな家の中に渦巻いてゐた。新しい時代の潮がそこに満ち溢れてゐた。そしてそこを中心として動いてゐる一つの社會的な空氣は、其當時に勃興して來た日本の黎明期の縮圖の様なものであつた。あらゆる物が、駈け足で、其儘目的地に行き着きでもするかの様に、何の苦勞もなく、何の障害もなく、揚々として進んでゐたのであつた。

彼等の前には只一つ人類の理想の社會があつた。そしてそれは手を延ばしさへすれば——然り只だ手を延ばしさへすれば直ぐに届くのであつた。彼等の前には革命があつた。そして其革命は彼等が叫びさへすれば——然り只だ叫びさへすれば、直ぐにそれに應え彼等の手に掴めるのであつた。

革命！理想の社會！

まあそれは何と美しい名前であらう。

自由！平等！正義！

まあそれは何と云ふ好ましい名前であらう。人類の生活は正にしかあらねばならぬ筈である。

若い、新しい者達は、その美しい言葉を、甘い酒でも飲む様に丸呑みに呑み込んで昂奮したり歡喜したりしてゐたのである。

### 十三

黎明會は大正七年の暮に其創立總會を開いて會の成立を告げてから八年正月の十八日には神田の青年會館で第一回の講演會を開いた。講演者の顔振れは、吉野博士の開會の辭、左右田博士の『文化主義の論理』木村氏の『新國民心理の創造』今井博士の『頑冥思想より見たる普通選舉』福田博士の『國本は動かす』等で大庭氏が其司會者を務めた。會の人氣は素晴らしいものであつた。聴衆はさしにも廣い會場に溢れて、どの講演者にも潮の如き拍手を送つた。そこに集まつた會衆の顔は素晴らしい元氣に

満ちて、新しく開けて來た時代が、其暗い夜明の闇から飛出して、生き／＼した黎明の空に羽ばたきを始めた様に思はれた。福田博士も吉野博士も湧き立つ様な場内の空氣の中に酔はされた様に、辯士の控室から會場を覗いては満足の笑みをもらしてゐた。そして十時過ぐる頃講演會を終へてから、講演者や關係者達は、此夜の素晴らしい勝利を祝するためにカフェーに集つてコーヒーをすすり合つた。

重苦しい反動的な壓力が消え去つて、民衆の希望と力とが黎明の空に高く凱歌を奏したのである。

次で、二月十二日には第三回の例會が學士會館で開かれて講演集を書店から發行して廣く發賣する事が定められ大鑑閣書店の支配人の面家氏が皆に紹介せられた。次で二月の十六日には又神田の青年會館で第二回の講演會が開かれ其講演者は次の様な顔振れで相變らずの大盛會、聴衆千七百名を算した。『世界を欺むく者は誰ぞ』福田博士、『經濟生活の改善と政治の力』渡邊博士、『新聞紙の民衆化』大庭氏、『人種差別の撤廢』阿部慶大教授、『新國家主義より見たる國際聯盟規約』大山早大教授、



『デモクラシーに關する我黨の見解』吉野博士。其日の司會者は木村氏であつた。それから引續いて例會やら講演會やらが催されて、推薦に従つて會員の數も次第に増して、其當時新しい思想を有する知名の學者思想家達は殆ど此會の會員となつたのであつて、二月の末には其會員は三十名に及んだのである。

大鏡閣書店の面家支配人は黎明會の講演集を發行する様になつてからは、黎明會の者達とも次第に接近する様になつて、麻生や野坂は會の事務を取扱つてゐた關係上殊に深く接近する様になつた。

彼はどちらかと云へば小柄な方で風采は餘り堂々たる方ではなかつたが、何ものにも屈しない素晴らしい元氣と大膽さとを以つて、向ふ見ずの計畫を立て、それをどしどし實行して行く上に於ては、説明しがたい性格を持つてゐた。彼は彼をモンスターと云つた。其情熱的な眼の中には何ものをも焼盡さねば止まない様な一種狂的な本能が閃めいてゐた。彼は店員の上におつかふさりながら極端な専制力を發揮して、狂的に其仕事を發展させて行つた。それでも彼のその専制的な性格の裏には極めて

無邪氣なざつくばらんところがあつて、其儲けた金を私する様なところは微塵もなかつた。云はゞ彼は仕事そのもの、蟲とでも云ふべきであらう。此男を黎明會に紹介したのは大庭氏であつた。彼は別に新しい時代の理論に就て深く理解する處があるわけではなかつたが、彼の進取的な性格が無條件に新しい運動に共鳴せしめたのである。彼は最初黎明會に非常に大きな積極的な希望を抱いてゐた。彼はそこからは當然月刊の雑誌が出されねばならぬと思惟した。そこで、彼は初めて學士會館に出て來て、皆に紹介されると、非常な勢で、恰かも黎明會は自分が創立でもしたかの様な態度で、月刊雑誌を出す事を力説し出した。そして、黎明會に月刊雑誌を出す意思がないのを知ると、非常に輕蔑した態度で黎明會の軟弱な態度を罵倒し出した。

『雑誌を出す元氣もない様な事で黎明會に何が出来るのですか。私はそんな腰抜けの會とは思はなかつた。そんな會なら止めて仕舞つた方が増した』

彼は眼を血走らして、さも輕蔑に堪へない様な顔付で皆の顔を眺め廻した。それを聞くと麻生も顔の色を變へ

て呶鳴つた。

『君は一體何だ』

『私は大鏡閣書店の支配人面家です』

『君は商賣人ぢやないか。會員でもないのに何を云つてるんだ』

『商賣人？商賣人だつて同じですよ。黎明會とか何とか云つたつて、そんな元氣のない者は私は嫌ひだ』

『何、生意氣な……』

麻生は腹に据ゑ兼ねて立上らうとした。そこに集まつてゐる會員の者達も、此傍若無人な面家の態度に飽氣にとられて仕舞つた。すると大庭氏はちよこくとやつて來て、

『まあ、待ち給へ。面家君は何を云つてるんだ。會には會の色々の事情があるんだ。君の様に簡單には行かないよ。君ももつと冷靜にならなければいかん。君は餘り熱心過ぎて困るハ、』

それを聞くと元來惡氣も何もない、あつさりした彼は、急に悄氣返つて前言を取消して無邪氣に笑ひながらあやまつて仕舞つた。

そこで皆も此他愛のない元氣な面家と一緒に大笑ひをしたのであつた。

それでも彼には此漲り押寄せて來る新しい時代の潮に棹さして、一つの大きな月刊雑誌を出すと思ふ計畫を思ひ切るわけには行かなかつた。黎明會の講演集は講演集として出版して置いて、新たに黎明會を離れて、併しながら夫れを隠然たる背景として一つの月刊雑誌を創り出す計畫を立てたのであつた。

面家と麻生とは學士會館で一度呶鳴り合つてからは非常に親密になつた。二人の性格の中には非常に異つたところもあつたが、又その中には非常に似通つた共通點もあつた。新しい雑誌を出す計畫は、面家を中心とし、大庭氏や麻生等を援助者として、二月から三月にかけて次第に進行して行つた。そして四月號を創刊號とし其名前を『解放』と名付くる事に定まつた。京橋の桶町にある大鏡閣書店の二階では度々大庭氏や麻生等も集まつて創刊號を創る事に熱中した。面家は麻生に新しく生れる雑誌の主筆の事を一切委せたので、麻生は大庭氏と相談して、其の四月に大學を卒業する、新人會の赤松にそれを



やらせる事に定めた。其雑誌に力を入れたのは、大庭氏や麻生ばかりではなかつた。それまでは中央公論にたてこもつて長く社會から埋れてゐた古い社會主義者の人々を社會の表面に救ひ出さうとしてゐた福田博士も熱心に其成立を助けたのであつた。それで此新しい雑誌の出來上らうとする頃には、福田博士の關係から、社會主義者の人々も面家の方に接近して來た。中には生き残つてゐる社會主義者の元老である堺氏を筆頭に、マルクスの資本論の翻譯者として、又國家社會主義の信奉者として世間に聞こえてゐた高島氏等もあつた。其他高島氏と一緒に仕事をしてゐた北原氏等もゐた。

三月の初め頃には福田博士や堺氏を中心として面家の世話で上野の伊藤松坂屋の裏のとある癡つたテンブラ屋で、鰻のテンブラ會なる會合が催された。日本に於けるマルクス學に就ての第一人者である福田博士は其頃は餘程古い社會主義者の人々に接近して、長く迫害と戦ひながら社會の裏面に押込められてゐた是等の人々を其表面に立たせたいと云ふ一つの希望を持つてゐた。又不當な壓迫と誤解との下に長く社會の裏面に埋れてゐた是等の

人々も、新しく開けて來た潮に乗つて、社會主義の勢力をつくるためには、福田博士の如き知名の士と接近する事は非常に便利な事であつた。

夕方から皆は松坂屋の裏の『清新』と云ふテンブラ屋に集つた。そのテンブラ屋は小さな狭い店で入口には繩ノレンが下つて、狭い店の中には粗末な長い臺があつて、其兩側の板の腰掛けで食ふ様になつてゐた。此店の親父はもと屋臺を出して居たのであつたが、其處のテンブラのうまさには天金に勝るとの評判で、其日に適當な魚がなければ『今日は魚がなくて駄目だ』と云つて平然として店を閉めて客が來ても斷つて仕舞つた。

集つて來た者は、その狭い腰掛けに腰掛けて、愉快に飲んだり話したり食つたりした。

福田博士も狭い板の腰掛けで、熾に飲んで氣焔をあげた。何處かに冷靜なところのある堺氏は絶えず眼鏡の下に光る兩眼に微笑を湛へて福田博士に話しかけた。彼の微笑を湛へた兩眼には又何處かに淋しい鋭い處が見えた。長い暗い孤壘を守つて來た社會主義者としての生活が彼の顔の表情の中にはまさしくと現はれて、物をしつ

て、何となく落ちつかぬ様子をしながら、時々じろりじろりとこつちの方を眺めてゐるのであつた。

『可哀相に……』

と、吉野博士は盃をとりながら云つた。

『テンブラを食つたり、酒を飲んだりするのを立番してゐるのもつらいねえ』

と、これも絶えずにくくして幾分滑稽な様子に見える小柄な大庭氏が、ちよいと首をうなづかせながら云つた。

度の厚い近眼鏡、其下に光つてゐるきかぬ氣らしい鋭い感情的な眼、きは立つて太い眉、それ等のはつきりした特徴を持つてゐる高島氏はカスリの筒袖を着てゐて何處かに若い元氣が溢れて、其頃の社會主義らしいタイプを現はしてゐた。其頃彼と一緒に仕事をしてゐた北原氏は何處かに初ぶくしい様子をして、其素材質素な風采

の中に見るから革命家らしいところがあつた。彼には又其風貌の中に何とはなく東洋の豪傑風なところがある様に思はれた。其頃滑稽新聞と云つた様な雑誌を出して、滿々たる不平を、諷刺と皮肉の中に託してゐた宮武氏

かりと見つめる様などころがあつた。そして又其表情の中には、云ひ盡くせない苦勞の中をこぎ抜けて來た者へのみ見出せる、容易に動じないと云つた様などころもあつた。それでも其日には伸びくした様な笑ひ聲を立てて話し合つた。彼は福田博士の方に向いて笑ひながら云つた。

『福田君も、もう少し飛出して何とかしないと、折角君のところ集まつた麻生君達の様な有望な青年も君を離れて仕舞ふだらうハ、ハ、ハ』

その聲の中には、何處かにくすぐる様な又煽動する様などころがあつた。熾に飲んでゐた福田博士は、其遠い耳に手をあてがつて、ちよつと堺氏の方を見やると、言葉を出さずに幾度となく其首をうなづかせた。そして、それとは離れた事の様には、眞面目な顔で云つた。

『今日も御供はついてゐるかね』

『御供ハ、ハ、ハ。それ、あそこに』

堺氏はノレンからすかして見える道の向ふ側に立つてゐる三人ばかりの、烏打帽子を被つてゐる男を顎でさしながら云つた。その男たちは手持ち無沙汰な恰好をし



は、酒を飲みながら、熾に御手の物の皮肉を飛ばして皆を笑はせた。

鰻のテンブラ會は、ほんとの鰻のテンブラ會で別にまとまつた何事もなくして別れたのであつたが、こんなにして、大鑑閣はそこを中心にして、其支配人の面家の面白い性格とからみ合ひながら、堺氏や高島氏も加はつて、黎明會や新人會とは異つた一つの空氣とグループとを造り始めたのであつた。そして又そこは是等の總てのグループを繋ぎ合はせる一つの鎖ともなつて行つた。こんな空氣の中に、雜誌解放は三月の終りに其創刊號の産聲を擧げたのであつた。其頃には赤松がもう其雜誌の中に入つて主筆になつてゐた。そして麻生は新聞社にゐる傍らその編輯を助ける事になつたのである。

#### 十四

目白の生活は、酣な春の太陽の光と熱とを浴びた廣い庭の青葉がぐんぐ伸びて行く様に伸びて行つた。一日一日は夢の様に又矢の様に過ぎ去つた。五月になつて庭の青葉が其緑の色を愈々濃くする頃には、又二三人の者

がそこにやつて来て一緒に暮らす様になつた。それでさしにも廣い其家も、そこに住んでゐる者や、毎日外からやつて来る者達で非常に賑やかになつた。

西洋館の二階の奥の室には、大きな長方形のテーブルが据ゑられ、大鑑閣の面家から引越し祝ひに貰つた美しいテーブル掛が其上にかけられた。皆は又めい／＼の本箱や何かを持寄つて、その室を書齋らしく飾り立て、悦んだ。そして夜になると時間を定めて熱心に勉強を始めた。

其室は又、會員の會合にも當てられた。運動に對する方針や計畫や、其他一切の事も、一週間に一度宛開かれその室の會議で定められた。

『おい／＼此家なら何を相談したつて大丈夫だぜ、秘密な相談だつて此二階なら大丈夫だよ。全くえらい家が我が手に入つたもんだねえ』

皆は會議の度毎に廣い室、廣い家を見廻しながら云ひ合つた。

『黄興は我々にとつて大恩人だ。我々は大いに感謝しなきゃならん』

五月の始めに龜戸のセルロイドの工場でストライキが起つた頃には、皆は非常な緊張した氣持に支配せられて昂奮し合つた。廣い食堂には大きな紙が出された。

そのはり紙には次の様な文句が書かれた。

『時至れり。龜戸の一角にストライキ勃發す。我々は決死の覺悟をなさざるべからず！』

此無邪氣な若者達にとつては、龜戸の一角に起つたセルロイド工の小さなストライキも、一つの革命であり、感激そのものであつた。忽ちに寄附金が集められ宮崎や門田等は決死の戦場にでも赴く様な氣持を抱きながら、揚々として龜戸の空を望んで駆けて行つた。そして數日の間其ストライキの終るまでは目白の家は異常な昂奮の中に、ひつくりかへる様な騒動が續けられた。その頃には此家にも警察から刑事が訪ねて来る様になつた。皆はそれを非常に重大な事として、何か知ら非常な危機と危険とが各自の身邊に迫つてゐる様な不安を感じ合つた。それで何事を相談するにも眼の色を變へて家の周圍を警戒し合つた。そのストライキが勝利に歸した日には、皆な亂舞して祝盃を擧げた。彼等の前にはもう新しい理想

の社會が飛出しでもしたのかの様に狂喜して飲んだり躍つたりした。

其頃には、又、遠くから目白の家を訪れて来る者も澤山あつた。或る日、神戸の貧民窟に長く生活してゐて、關西の友愛會の運動を援助してゐる賀川がやつて來た。

宗教的な併し又普通の宗教家とは異つた思想の所有者である彼は、若々しい學生達の生き／＼した生活を見て心の底からそれを悦ぶ様に麻生に云つた。彼は麻生とはもう以前から知合ひであつた。

『麻生君、之は君偉大な事だよ。非常に意義のある生活だ。若い學生達がこんなにして勉強したり共同の生活をしたりすると云ふ事は今から非常に重要な事だ。君確かりやり給へな。僕も出来るだけ援助するよ』

彼は其夜遅くまで學生達と語り合つてから麻生と枕を並べて長い間語り合つた。二人の話題は『革命』と云ふ事に落ちて行つた。彼は麻生と暫く話合つてから到頭斷乎とした然し心の底から麻生の思想を悲しむ様な口調で云つた。

『それは君罪悪ぢやないかね。そんな事をしたつて眞實



の世界は来やしない。血を流して新しい世界を造る。僕は反対だよ。僕はさうは思はない」

麻生は此激しい彼の反対を聞くと、それを憐れみ悲しむ様に云つた。麻生は彼とは此の事に對しては反対な意見を持つてゐた。麻生は靜かに云つた。

『だが君、自然界にだつて暴風雨と云ふものがあつて、宇宙の塵芥を綺麗に洗ひ落すぢやないかね。暴風雨のあらひ去つた後の自然は君實に清々して氣持がよくて、生き生きしてゐるぢやないかね。暴風雨と云ふ奴は自然界には必要なだらう。いや或ひは必要でないかも知れん。併し君、それが必要であらうとあるまいと、好むまいと、好きな事は兎も角として自然界に暴風雨と云ふものが存在してゐると云ふ事は事實ぢやないかね。それと同じやうに、人間の世界にも、僕等が好むまいと、好きな事に關係なく革命と云ふものが起る。僕等が歴史の上でそれを知るばかりでなく、僕等の生きてゐる現在世界の此處彼處で起つてゐる。それはどうする事も出来ない現實ぢやないか』

『それでは君達は革命の讚美者ぢやないか』

うぢやないか。それは君行詰まつた社會の大掃除だよ』

『君の思想は危険だ』

『僕の思想が危険だ。ハ、ハ、それは君間違つてゐるよ』

『どうして』

『どうしてつて君、僕の思想が危険だと云ふ前に、何故君は人間そのものが、又社會其ものが危険だと云はないかね。僕は唯人間の愚しいそして又悲しい宿命を是認するだけぢやないか。若しも人間が革命を要しなくて進化して行く方法が現實的に存在してそれがほんとに可能であるなら、僕は悦んでそれに従ふよ』

『君は、それを信じないかね』

『どう信するんだ。たゞそれが悪い事であると云ふだけでは、信じられんぢやないか。革命と云ふ事は悲惨な事だらうが、併し今日の社會では、この悲惨な革命なしには人間を完全に救ふ道はないのだ。僕は慈善と云ふ事は、よい事を幾人かの人間を不完全に救つて、それを施す者の良心を満足させる事にはなるかも知れんが、人間の社會を慈善家の良心的満足の對照として保存して置く』

彼は悲し氣に憐れむ様に麻生に云つた。

『いや、そりや君違ふ。僕は讚美しやしない。僕はそれは愚劣な人間と云ふ動物の背にかついでゐる悲しむべき悲劇的運命だと思つてゐるよ。僕は元來人間を心の底から愛してゐるが、併し僕は人間と云ふものを少しも尊敬してはゐない。ちつとも偉いなんて思つてやしない。自分の當然行かねばならぬ進化の目標に近づいて行くのに自分で自分の血を流さなければ行けないんだ。皆エゴイストだからねえ。僕等自身だつて皆さうぢやないか。それでも或る個人々々に就て見れば、自分の意志で、合理的に進み得る人があるかも知れないが、社會全體としてはそんなわけには行かない。力が總ての事を決するんだ。正義と云ふ事も力が伴はなければ實現出来はしない。慈善と云ふ事は個人的な事で、それでは君社會の塵芥は吹き拂はれせんよ。僕は、革命と云ふものは、愚かな人間の本能が社會の中に自分自身で生み出す、止むを得ざる悲劇的な現象だと思つてゐるんだ。そして罪惡のために行詰まつた社會が、その暴風雨に依つて洗はれたら、そこには清新な生きくした社會が生れ上るだらう』

のには反対だ』

『君こゝにある人達は皆君と同じ思想かね』

『さうだ、慈善や宗教はごまかしたと信じてゐるよ』

『さうかねえ。僕は神を信するよ』

彼は心から悲しみに堪へない様に沈んだ、敬虔な口調でさう云つて黙つた。麻生はそれを慰める様に云つた。

『お互の思想の相違は仕方がない。僕は君の氣持にも同感が出来るとし、又君を尊敬もする。まあお互に、何かしら正しい事を考へ、人間の理想に向つて進まうとしてゐるんだ。出来るだけ力になつて進まうぢやないか。何だか馬鹿に議論しちやつたねえ。君の貧民窟もよく長い間やつて来たねえ。僕等には眞似も出来ない事だ』

『ありがたう。僕は僕の信するところを一人になつてもやつて行くよ』

彼は、彼の心の中に深く信する處がある様にさう云つた。

彼は其次ぎの日の晝頃、皆と握手して此家を祝福しながら歸つて行つた。

こんなにして目を尋ねて来る者は屹度そこで議論を



し合つたり、夜を語り明かしたりして、其心の中に何ごとかを深くも印象しながら歸つて行くのであつた。

其頃には又、目白の家で福田博士と吉野博士の招待會が催された。其の日には朝から神田の支那料理人がやつて来て、御馳走の支度に忙しく、大鐘閣書店の面家も早くから、そのにこくした顔をあらはして何かと世話をやいた。皆は其日は朝からはしやぎ切つて、西洋館の下の廣い室にテーブルを並べたり花を生けたりして招待の準備を整へた。若い學生達にとつては知名の士である福田博士や吉野博士が彼等の家にやつて来ると云ふ事は、何かしら光榮な事であつた。會員達は晝頃にはもう二十人近く集つて、廣い家の中を、落ちついてゐるに、あちこちと賑やかに騒ぎ廻つた。

日暮方に先づ吉野博士が、其すらりとした姿と、優しみにこくした顔とを玄關に現した。世間からもさう見られ、又實際上にも其當時に於ける此會の背景でもあり、後見役でもあり、而も其會員は皆自分の弟子達である此會の本部に來る事は彼にとつても他人の家に來た様な心持はしなかつた。廣い堂々たる其家の玄關に、平常から

見馴れた學生達の顔が澤山並んで、彼の來たのを喜び迎へて呉れると云ふ事は、彼にとつても禁じ得ない悦びであつた。

纏て福田博士の無難作なそして又何處かに無邪氣な滑稽味のある姿が玄關に現れた。學生達は又此どちらかと云へば彼等とは畑違ひである珍客を迎へて無性に悦んだ。當時日本では未だ、天下知名の士である博士達が、こんな風に學生達の家に無難作にやつて来て、一緒に飯を食つたり酒を飲んだりすると云ふ事は珍らしい事の一つであつた。二人の博士は學生達に案内されながら、其廣い家の内の共同生活の有様を見て廻つた。

夜の食卓は非常に賑やかなものであつた。三十人近くの者達が二人を主賓にして、テーブルを圍んだ。雑談に花が咲いて夜の更けて行くのも忘れた。福田博士もテーブルスビーチをやつた。殊に福田博士の腹の底をぶちまけたテーブルスビーチには皆が非常に感激した。福田博士は立上つて、其特徴のはつきりしたこなれた口調で云つた。

『私は最初一高に入るつもりであつたが、大學と云ふと

ころが世間で巾をきかして、特權階級的にのさばつてゐるのが續にさはつて遂々高商に入つたのであるが、高商に入つてから私はどうかしてポートルースで大學を負かしてやりたいと考へてゐた。同じ理由で私は一生懸命に勉強したのであつた……』

その話の中には福田博士のきかぬ氣な氣象が其儘迸り出てゐた。

夜遅くなつて二人の博士が歸つてから後は、そこに残つた學生達の間には一種云ふべからざる昂奮状態が襲來した。何かしら悲壯な決心と決意とが皆の間に漲りわたつた。皆は實際酒にも酔拂らつて、どの顔もく火の様に眞赤にほてつてゐた。皆は交々立上つては演説をおつ始めた。彼等は即座に民衆の中に飛込んで暴動でも始める様な勢を示した。酒に酔つて狂氣した様に昂奮した河井は不意に立上つて叫んだ。

『我々は戀も棄てなければならん。あらゆる自己の快樂を振棄てなければならん。それなのに我々の今日の態度は何だ。神よ！許して下さい。僕は實際なさけない。僕は戀を欲してゐるんだ。神よ僕を罰して下さい……』

彼はさう叫ぶと倒れる様に坐つて、おいくと泣始めた。それを見ると、正直な皆は笑ひもせず異常に緊張して、何故ともなく身につまされた様になつて一緒に聲を立て、泣始めた。

『實際我々知識階級は何事をもなし得ない臆病者だ。卑怯者なんだ。そして其享樂的な生活を棄てる事が出來ないんだ。呪ふべき運命の所有者だ！』

『兄弟よ！民衆が俺達を待つてゐる。何を愚圖々々してゐるんだ。俺達は即刻に總てを棄てなければいけない』  
『呪ふべき此家よ。先づ第一に我々は此ブルジョアの本部を棄てろ！』

彼等は泣きながら、昂奮しながら、酔拂ひながら、長い間そんな事を叫び續けた。彼等にとつては、叫ぶ事、昂奮する事、議論する事、憧憬る、事、それそのものが運動であり革命的でもあつた。そして其揚句は草臥れて寝て仕舞つた。

此家を中心とした彼等の生活には、時々昂奮と狂氣の狀態が颯風の様に見舞つて來た。或る夜麻生や宮崎や赤松やの十人ばかりの者が玄關わきの西洋間に集まつて實



際運動に對する議論を戦はせてゐた。彼等は激しく議論してゐる間に何時の間にか例の通りな昂奮状態に陥つて行つた。そしてそれをつくる使命は彼等を措いて存在しないし、もし今夜計畫を立て、明日から直に實行に着手しなければ、永遠に時機を失すると云ふ結論に達して仕舞つた。

其夜の昂奮は又泣いたり笑つたり叫んだりする昂奮とは違つて、非常に慎重な秘密的な物々しい重苦しい昂奮であつた。彼等の顔は妙に眞面目くさつて眼は血走つて何處かに不安らしい影が動いてゐた。彼等は即座に二人の者を選んで、スパイを警戒する役目を命令した。そしてその二人に對しては次の様な事が宣告された。

『今後我々の運動は非常なる犠牲を要する。今後我々は如何なるつまらぬ役目でも命ぜられた以上悦んで之を務めねばならない』

そこで即座に二人の者は外に飛出してスパイを警戒の任務に當つた。

彼等は何か知ら非常に重要な而も極めて現実的な事を相談してゐる様に思はれた。けれ共其綱領に就ても組織

に就ても空漠たる事より外考へてはあなかつた。そして彼等は結局根氣よく、

『我々は出來得る限り現実的に大衆を包擁しなければならぬ』

だとか、  
『我々は何時でも學校なんか放棄するつもりでかゝらなければならぬ』

だとか、さう云つた様な概念的な決心と豫想と計畫と言葉の羅列を次から次へととり止めもなく繰返へして行つた。そして、しまひには皆すつかり草臥れて仕舞つて、外に立たせた重要な使命を帯びた二人の立番の事も忘れて、總ての事は明日と云ふ事になつて、めい／＼の室に歸つて寝て仕舞つた。だが其明日が來た時には、最早昨夜の非常な決意は何處にか煙の様に消え去つて皆はけろりとした顔を見合はせた。

こんなにして目白を中心とした若い新人達の中には夢の様な計畫が昂奮の潮に乗つては次から次へと姿を現はして、又次から次へと夢の様に其姿を消して行つた。

其頃には又、各學校の新しい思想を有する團體を糾合

して、一つの大きな團體を組織しようとする計畫も立てられた。其頃早稻田大學には、友愛會の留守會長をしてゐた北澤教授を中心として民人同盟會と云ふ一つの團體が出來てゐた。その他の學校にもそれ／＼こんな團體の芽生えがあつた。或る日、是等の團體の者達が目白に集つて、大きな政治的團體をつくる事を計畫して、其名を『六月同盟』と命名する事になつた。だが此同盟も、ただその名を生んだだけで何時の間にか其姿を消して仕舞つた。

目白の廣い家の中には、こんなにして何かしら、あわただしい、せき立てられる様な空氣が隅から隅まで漲り溢れて、矢の様に月日が流れて行つた。皆はたゞ新しいと云ふ事に酔つてゐた。理想の社會と云ふ文字に酔拂らつてゐた。そして又、革命と云ふ言葉が彼等の全生命であつた。彼等は只だ概念に生きてゐた。其概念から生れる單純な感激の中にひたつてゐた。彼等は少しも現實の世界に就て知るところはなかつた。たゞ一步でも、彼等の足が其現實の中に入るならば、即座に其幻影が破壊される様な事も、彼等にとつては絶対に眞理であつたの

だ。だが併し、此單純な幼稚な生活の中にも何かしら燃え上らうとする焰の様な強い熱はこもつてゐた。一つの生き／＼した空氣は漲つて居た。そして其熱と空氣とは、決して無意味なものではないのである。古い時代が壞れて新しい時代の黎明が始まらうとする時、其過渡期の社會は、先づ自分の生れ出ようとする姿を、知識階級の青年の心の中に現すのである。その姿は、單純で空想的で幼稚ではあるが、一つの眞直ぐな方向と非常に高い熱度とを持つてゐる。そして幼稚ではあるが、眞直ぐな空想に向つて羽ばたきする者こそ、新しき時代の眞晝を此世に齎らすところの第一番目の先驅者である。彼等が空想の翼を擴げ、理想の夢に憧憬れて、限りもなく高い熱に煽られながら、夜明け前の暗い闇から飛出して、若しい聲をはりあげた後に、新時代の眞晝が其全き姿を社會の表面に現すのである。

## 十五

六月の半ば頃になつて、月島の佐野は其月島の住居から目白の方に引越して行く事になつた。それは、彼が目



白に集つて来る學生達の中心になつて、其學問的な研究を指導する事になつたからであつた。

愈々引越すと云ふ日には、朝早くから彼の荷物の片附けが始められた。それでも彼と一緒に暮してゐた鑛夫の高島は、當分其儘その家に残る事になつたので、片附けられる物は彼の荷物ばかりであつた。その荷物の大部分は書物と本棚とテーブルと椅子とで、簡単な荷造りは晝頃にはもう出来上つて、玄關に持出された。目白までは道が遠いので、労働者達は、先にそれを荷車に載せて引つぽつて行つた。そして、彼は御名残りに山名の家で夕飯を食つてから目白の方に行く事になつた。

荷物が運び出された後の室の中は、がらんとして、如何にも淋しく寂寥に見えた。主を失つた家は、靈を失つた人間の様に、ぼんやりして頼りなく思はれた。けれ共淋しく頼りないのは主を失はうとする此家ばかりではなかつた。今去らうとする其主の心も同じやうに淋しく頼りなく暗い思ひにとざされた。彼には、住み馴れて親しくなつた此月島と此家と、そして又深くも知合ひになつた労働者達と別れて行く事は、何となく悲しい様な名残

り惜しい様な相濟まぬ様な氣がしてならなかつた。がらんとした室の中に坐つてゐると、彼の眼の前には、此數ヶ月間の思ひ出多い生活が走馬燈の様に浮んで行つた。

彼は非常な決心と昂奮と希望とを持つて此月島に渡つて来た。彼にとつては此島の労働者の中に移り住むと云ふ事は、生活上の一つの革命であつた。彼は自分の心が社會運動の上をめざめてからは、比較的富裕で上品な生活を送つて来た自分を恥ぢた。彼の正直な心は、彼に其生活を棄て、労働者の生活の中に浸入して行く事を命じたのである。そして彼は自分の良心の命令に従つて、自分の舊い生活を勇敢に棄て去つた。棄て去つて、鑛夫の高島と一緒に不自由な自炊生活を始めたのである。彼の心は始めて秋の澄切つた高い空の様に晴れくした。

彼はそこで、初めて、労働者と云ふものを知つた。もとより彼は書物の上で、労働者と云ふ言葉を知り、又労働者階級と云ふ概念は知つてゐた。けれ共、鐵の音の轟き響く汚い工場の中で、朝は早くから夕方は遅くまで酷き使はれながら、人間としての生活らしい生活もしてゐない、生きた實物の労働者を知つたのはこゝに來てから

であつた。彼は、眞に資本主義の奴隷として此世に存在してゐる労働者の實際の生活を見た時、今更の様に、資本主義の害悪と不合理と、資本家の非人道な事とを痛切

に感ぜざるを得なかつた。

彼の反動的な心持は、労働者達の飾らない粗雑な併し生きくとした憤慨の中に燃え上つた。彼は自分が未だ會社に務めて、そこから比較的に多額な金を貰つてゐる事が恥づかしい様にさへ思はれた。彼は熱心に、又燒盡す様な感情を以て、毎夜彼の家を訪れて来る労働者達に、資本主義の不合理な事、今日の社會の組織の事、労働者革命の合理的な事、そして又それが歴史的に可能な事を講義して、労働者達の中に確然たる思想を植ゑつける事に努めたのであつた。

彼は又、そこで多くの労働者達に接してゐる間に、労働者階級の單純と勇敢と素材とを發見して、心の底からそれを讚美し信頼した。そして未來の理想社會を創り出すために、ほんとに戦ひ得るものは、たゞ一人労働者階級のみである事をも痛感した。そして彼の心は無上の悦びを感じた。

彼の正直な單純な心の中には革命的な情熱と憧憬とが焰の様に燃え上つたのであつた。

彼が鑛山の運動を思ひ立つて、色々な計畫を立てたのもその家であつた。そして其運動は既に着手されて、近いうちに其旗があげられやうとしてゐる。足尾銅山から出て來て彼と一緒に暮してゐる坑夫の高島は、鑛山の事情や坑夫の生活の有様を彼に詳しく訴へた。そして、一度そこに手が下されさへすれば、鑛山労働者の偉大な革命的勢力が出現する事を豫言した。彼の心は鑛山の坑夫の上にも飛んで行つた。そして其革命的な一大勢力が出來上る日の事を考へると、胸が躍り上つて、おつとしてはあられない様に思はれるのであつた。

數ヶ月の此島の生活は數へ切れない幾多の尊い經驗を彼に與へ、彼の社會運動に對する熱と希望とを煽つたのである。そして動かす事の出來ない確信を彼に與へたのである。

今日を限りに此島と此家を去つて行く事は彼にとつて非常に心苦しい事であつた。彼はたゞ一人荷物を送り出してがらんとした室の中に坐つて長い間色々な事を思ひ



出したり考へたりしてゐた。彼の心は荷物を送り出した後になつても、引越さうか引越すまいかと迷つてゐた。彼には其家と鳥とを棄て、目白に移つて行く事は罪惡の様に思はれた。彼にはそれが労働者を棄て、行く様に思はれたのであつた。彼は長い間只一人で室の中に坐つてゐた。

日暮方になつて麻生がひよつこり支關から顔を出した。そして、薄暗くなつた室の中で電氣もとぼさずに、只一人で坐つてゐる彼の姿を見ると、吃驚りした様に聲をかけた。

『おいどうしたんだ。たつた一人で』

すると佐野は深い夢からでも醒めた様に吃驚りして支關の方を眺めながら云つた。

『お、麻生かね』

『うむ僕だ。どうしてるんだ。馬鹿に暗いぢやないか』

『うむ、もう電氣が來てるんかね』

『ハ、君はどうかしてるぜ。何をしてるんだ』

『うむ、何だか僕は目白に行くのが厭になつたんでね』

『何だ目白に行くのが厭になつた？だつて最早荷物も送

つたんぢやないか。目白ぢやあ君の來るのを皆待つてるんだ』

麻生は意外な様な顔をして笑ひながら佐野の方を見て云つた。

『うむ、荷物はもう送つたんだがね。何だかこゝを引揚げるのは悪い様な氣がするんだ。それにもう大分長く住んで皆と馴染になつたからね』

佐野は、しんみりした口調で自分の心を攻める様に云つた。それを聞くと麻生も半ばその氣持に同感する様に云つた。

『そりやさうさ。折角こゝまで築きあげたんだから、君が此處を去る事は全く惜しいがね。併し今更仕方がないさ。それに山名が此處にはゐるんだし、君もどうせ此家は此儘にして置くんだから、始終來られるんだし、まあ一應目白の方に行くさ。それだつて決して無意義な事ぢやないんだからねえ。兎も角山名の家に行かう。僕も今夜は君のお別れのおつき合ひによばれたんだ。待つてるよ』

それから二人はお別れの夕飯を一緒にするために山名

の家の方に行つた。

佐野と山名と麻生とが山名の家を出た頃はもう夏の夜も大分更けてゐた。山名も渡し場まで送らうと云つて出て來たのであつた。三人は又佐野が別れて行かうとする其家の前に立止つた。その貧弱な併し佐野にとつては思ひ出深い家は靜かに淋しく暗の中に佇んでゐた。三人は支關から、暗い室の中を覗き込んだ。鑛夫の高島も車を押して目白に行つてゐたので、家の中には誰もゐなかつた。家の中は主人を失ひ、其中に飾られてゐた道具を失つて、全く靈を失つた様になつたとしてゐた。

『何だか馬鹿に淋しくなつたねえ』

山名は家の中を見廻しながら、淋し氣にさう云つて又云ひ足した。

『懃々今度は俺一人になつちまつた。君は行つて仕舞ふし、高島の奴はゐないし……』

『さうだなあ、僕も行くのは厭なんだがね』

佐野も自分のゐた室を覗込み乍ら陰鬱にさう云つた。『君がこゝに來てから何ヶ月になる。でもまあよくやつて來たねえ。君の生活もこれからは放浪だよ。あつちこ

つちとねえ』

麻生も佐野の顔を見ながら感慨深げに云つた。

『もう何ヶ月になるかねえ。未だ寒い頃だつた、もう四ヶ月以上だよ。併しこゝではいゝ經驗をした。僕等は労働者から揉れなくては駄目だ。僕等は犠牲的精神を養ふ必要があるからねえ』

佐野は又その黙々とした言葉の中に力を籠めて云つた。

聽て三人はそこを去つて築地の方に渡る渡し舟のある方に話しながら歩いて行つた。

星の降る様に散らばつた夏の夜の川は心地よいものであつた。夜が更けてゐるので渡し場に舟を待つ者も少く、夜の川は靜かに黒い大きな帯の様な形をして悠々と流れて行つた。舟は未だ向岸からやつて來ないので、三人は岸邊に立つて川を眺めた。兩岸に連りとぼつてゐる無数の電氣の光は、快活な明るい氣持を川面に漾はせた。そして靜かになつた四邊の空氣の中には、此島特有な、何となく底力のある唸り聲が響いてゐた。其唸り聲は、此島にある大きな工場の機械の音であつた。一種重



苦しい戰闘的なその唸り聲は何となく、三人の心を浮き  
浮きさせた。

『此渡しは何時來てもいゝなあ』

麻生は夜の川を見詰めながら、又そのそゝり立てる様  
な底力のある唸り聲に心をそゝられながら思はず感嘆の  
聲を放った。

『こゝに來ると何となく戰闘的な氣持にそゝられるぢや  
ないか』

『さうだねえ。全くいゝねえ』

山名も合槌を打った。彼はもうこゝに移り住んでから  
半年以上になるのであつた。

『佐野もちよいゝやつて來いよ』

『うむ來るよ。どうせ家もあるんだから。僕は行きたく  
はないんだがね』

佐野は、幾度もそれを繰返した。彼は労働者の中を去  
りたくはなかつたのである。彼の心は何となく暗く淋し  
かつた。彼の正直な心には、此處を去つて行くのが深い  
罪惡の様に思はれた。

『まあいゝさ。これから學生達に宣傳して行く事も必要

だよ。僕等はずとく同志をつくらなくつちや駄目  
だ。色んな方に烽火を擧げる必要がある。まあ、あつち  
に行つてしつかりやるさ』

麻生は佐野を勵す様にさう云つた。そして今度は又何  
かを思ひ出した様に山名に云つた。

『おい、棚橋から何とか云つて來たかい。俺の方には手  
紙も來ないが』

彼のさう云つた言葉の中には何かしら一種の暗さがあ  
つた。

『いや俺の方にも何とも云つて來ない。もう信州に歸つ  
てから一ヶ月以上になるねえ。困つたもんだ。奴さんも  
一本調子だからねえ』

さう答へた山名の言葉の中にも何か知らし一種の暗さが  
あつた。麻生は暫く考へる様に黙つてから今度はしんみ  
りとした調子で云つた。

『あ奴も苦しいんだらうよ。たつた一人だからねえ。知  
識階級排斥つて事も考へべき事さ。實際の運動になると  
色んな事が起つて來て、外で思つてゐたのとは様子が違  
ふから、あ奴も幻滅の悲哀を感じたんだらう。兎に角出

て來るやうに手紙を出さう。そして俺も飛込むよ』

『うむ兎に角出て來る方がいゝねえ』

『さうだねえ。出て來た方がいゝだらう。そして友愛會  
の方でそんなに排斥するなら、俺達は皆一緒に鑛山の運  
動を始めてもいゝぢやないかね』

佐野も棚橋の事を心配する様にさう云つた。その頃友  
愛會に入つて運動をやつてゐた棚橋は、突然其運動を止  
めて、國の方に歸つてゐたのであつた。彼が運動を止め  
て國に歸つたに就ては或る重大な理由があつた。だがそ  
れに就てはあとで話す事にしよう。

躰て向岸から渡し舟が着いた。

『まあ棚橋の事は何時がゆつくり話をしよう。舟が着い  
た。俺達は何處までも眞直ぐに進んで行けばいゝのさ。

時には大波も小波も俺達をゆするだらうよ。だがそんな  
事は何でもない。揺られながら進んで行くのさ』

麻生は元氣にさう云ひながら岸から下りて舟の中に飛  
込んだ。佐野も續いて飛込んだ。

『さよなら』

『さよなら。お前も目白の方に遊びに來いよ』

『うむ、今に行くよ』

渡し舟は直ぐに岸を離れた。

『僕も此渡しを随分渡つた』

佐野は舟が中流に出ると闇の中にうすれて行く月島を  
見やりながら名残り惜し氣に云つた。

『さうだねえ。君の生活も一變したねえ。どうせ僕等の  
一生は放浪者だ。お互にこんなにしてゐても何時別れ  
別れになるか知れやしない。運動が激しくなれば監獄に  
も行くだらうし、殺されないと限らないし。併しまあ  
どうだつていゝさ。御互にやれるまでやるんだ。波のま  
にまに漂ひながらねえハ、ハ、』

二人は何か知ら云ひ表し難い感情に駆られながら互に  
顔を見合はせて微笑し合つた。

佐野が月島から目白に引越したので、月島の生活は淋  
しくなつたが、その代り目白の生活は又一段と賑やかに  
なり、緊張した。

佐野の机や本棚は、應接室に當てられてゐた支關わき  
の西洋間に、麻生の机や本棚と一緒に入れられた。そと



て其室は主として麻生と佐野の室に當てられた。二人の書物を集めると、可成り澤山の書物があつた。其書物が二つの大きな本棚に入れられて、一方の壁付きに並べられると、未だ貧弱なものしか持たない皆の目には非常に偉觀の様に思はれた。室は急に堂々たる書齋になつたのである。皆はその室に集つて如何にも書齋らしくなつた有様を眺め廻し、本棚から書物を取り出して、高い机の上に擴げては悦んだ。

『さあこれで愈々勉強の準備が整つたぞ』

『全く此室はよくなつたなあ』

『マルクスの寫眞を掛けたいなあ』

『お、僕んここに、寫眞がある』

一人はその室から飛んで出て、大きなマルクスの寫眞を持つて来て、眞正面の壁にはりつけた。

『これはいい。これで我々の室になつた』

月島の生活に名残りの惜しまれた佐野も、今こゝに来て、皆の元氣な様子を見、さてかうして立派な書齋が出来上つて見れば、そこには又何か知ら新しい生活が芽生えて行く様で、何となく愉快であつた。

間もなく、組織立つた勉強の方法が定められた。そして、皆は夜の一時までも二時までも熱心に研究に従事し始めた。

だが目白の佐野や學生を中心とする生活がこんなにして統一され充實して行く一方に、麻生の生活には又違つた方向が開けかけてゐた。それは、麻生自身が労働團體である友愛會の中に飛込んで行かねばならぬ時期が切迫して来た事であつた。その時期がそんなに早く切迫して来た原因は、佐野が月島から、目白に移つて来る夜の渡し場で、麻生と山名との間に取交はされた會話の中の事柄であつた。そして其事柄は、五月の初めに、友愛會に入つてゐる棚橋が突然運動を中止して信州の山奥に引込んで出て来ない事であつた。

## 十六

虐げられたる者の味方たれ。暴虐なる者を打碎け。そして人類の世界に理想の社會を打建てよ。

理想の社會！理想の社會！

それを建設するためにのみ、我々に眞の尊い生活があ

るのだ！

何處の國の歴史を見ても、其國の社會運動の黎明期には若い青年知識階級の間、こんな叫び聲が高らかに響けられる。

彼等の眼の前には、萬民平等に嬉々として楽しめる理想の社會の模様がちらついてゐる。萬民自由に其生活を樂しめる理想の社會がちらついてゐる。

眞實の尊い人生は、只それを求むる事の上にあるのではないか。何と云ふ偉大な、そして又美しい生活であらう！虐げられたる者が兩手を擴げて彼等の來るのを待つてゐる。彼等が一寸でもそこに飛込みさへすれば、虐げられたる者は、雀躍して彼等を迎へるであらう。そして彼等の説くところの眞理を渴したる者が水を求むる様に求め聞くであらう。

彼等の純な血潮は其憧憬れに向つて、焰の様に燃え立つのである。彼等は非常な誇りを以て又偉大な使命を帯びて、まつしぐらに、運動の中に飛込んで行く。

だが彼等は、現實、その色はどす黒く、其形は醜く、其力は無限に重いその現實と云ふものに對しては少しも

知るところのない盲目者である。

彼等は忽ちにして、其どす黒く、重苦しく、押せども動かぬ現實の壁にぶちあたる。

虐げられたる者は容易に此外來者を信じないであらう。彼等は自分達より立派な着物を着てゐるではないか。白い柔かな手を持つてゐるではないか。何か野心を持つてゐるのであらう。要心しろく。又彼等の説く高遠なる眞理は理解せられないであらう。彼等は容易に立ち上らないであらう。ストライキは破れるであらう。官憲の非道なる壓迫は容赦もなく彼等の頭を鷲掴みにするであらう。斯くて暴虐者の城は鐵の壁よりも厚く、不合理的な社會は山の様に動かない。そこには無限の犠牲が要求されるであらう。けれ共、彼等が出會すどす黒い現實は更に思ひ設けぬところに現はれて行くのである。

知識階級排斥！運動者の勢力争ひ！

彼等が人類の理想社會を胸に描いて、その建設に自分の心と身體とを捧げようとする時、そこに想像される生活の光景は、聊も私心のない同志のあた、かに相抱く美しい尊い生活であつたであらう。どうして理想の實現に



身命を捧げる者が、私心を抱いたり、勢力の争ひに浮身をやつす様な事があり得るであらうか。彼等は單純にもさう考へ、さう信じてゐるのである。けれ共、生存競争の哲理は、此理想のために生きようとする運動者の群にも除外例は設けないのである。

知識階級を排斥せよ！そしてその知識階級がなくなつた時には、今度は労働者同志！

そこには色々な理論が付けられるであらう。争ひの看板は堂々と理論付けられてゐるであらう。併しながら其掲げられた堂々たる看板の下には、醜い人間の心が動いてゐるのぢやないか。悲しい事には人間と云ふものにはさう云ふ事が運命付けられてゐるのである。

彼等は最初、自分の心の無私にして純潔な事を信じてゐる。恐らく又純潔であるのであらう。たゞ彼等は一つの自己を持つてゐる。一つの思想を持つてゐる。そしてそれが正しいと考へてゐる。そして自己と同一でない者は眞實でないと考へてゐる。彼等は自己をそこに植ゑ附けようとする。そこに争ひが起りそこに他人を押しつけようとする事實が生れて来る。醜い人間の心がそこに頭

をもたげるのである。

彼等の純潔な、若しくは純潔であると信ずる心が、此のどす黒く醜い現實の壁にぶつかつた時、彼等は嫌悪し幻滅して深い失望の谷の底に墜落して行くのである。

彼等は忽ちに次の様な疑問に出會す。

『俺は一體何をしようとしてゐるのだらう。俺の求めるものは美しい理想ではなかつたか。唾み合ひ排斥し合つて、争はねばならぬなら、俺達の仕事は矢張り醜い勢力争ひの生活に過ぎんぢやないか。俺は一體何を求め、何をしようとしてゐるのだらう』

麻生や佐野や山名に先んじて只一人労働運動の中に身を投じて行つた棚橋が、五月の初めになつて不意に運動を中止して、信州の山奥に引込んで仕舞つたのも、要するに此の現實のどす黒い壁にぶつかつて幻滅の悲哀に堪へ兼ねたからに外ならなかつた。

もう六月も終りに近い或る夜の事、麻生は只だ一人例の書齋の中にたてこもつて非常に熱心に手紙を書いてゐた。その手紙は棚橋宛のものであつた。その夜は佐野も

外出して居らず、學生達も外出して家に残つて居る者はいくらもなかつたので、家の中は珍らしく静であつた。

手紙を書いてゐる麻生の顔の表情は非常に緊張して居た。彼は何もかも忘れ果て、只だ手紙を書く事に全心を奪はれてゐる様であつた。彼は用紙の上に暫くペンを走らせると、書くのを止めて深く考へ込んでゐる様であつた。そして又暫くすると熱心に一気にペンを走らせた。彼は非常に長い間かゝつて非常に長い手紙を書き上げた。そして最後に宛名を書くと、ほつとした様にペンを机の上に投げた。そして今度は細かな文字で書かれた非常に澤山な紙を丁寧にそろへて、もう一度それを讀み始めた。その非常に長い手紙には、次の様な事が書かれてあつた。

棚橋よ、山の中に引込んで毎日何を考へてゐるのか。もうお前が姿を消してから殆んど二ヶ月になる。皆はお前の事を心配し早く出て来る事を希つてゐる。もう大抵考へもついたらう。佐野は半月ばかり前に月島から目白の方に引越して来た。引越しの日に月島で山名に會つ

て、お前の事を色々話したが、山名も非常に心配して、早く出て来る事を希つてゐる。兎に角一日も早く出て来て呉れ。

お前が突然山の中に引込んだ心持はよく分つてゐる。お前の煩悶に就ては少しも無理のない事だと思つてゐる。で、俺も今度は新聞を止めて、お前が歸つて來次第友愛會に入る事に決心した。お前一人に苦勞をかけた事は相濟まなかつたが、それは仕方がない。荒い浮世の風は一人で受けると辛い、二人で一緒に受ければ、いくらかいゝだらう。

だが、俺達もよく考へねばなるまい。俺達が労働者から排斥されたからつて、それを餘り氣にかけたり、心持を悪くしたり、失望したりする事は、慎しまなければならぬ。俺達は兎に角大學を出た所謂知識階級だ。労働者から見れば白い手の所有者だ。特權階級の一人だ。今までは樂をして來た人間だ。それが突然會の中に入つて行つて何事かをしようとするのだ。疑ぐられ信ぜられないのも決して理由のない事ぢやない。況んや、本部にゐる者は、兎に角其本部を築き上げて來た努力者だ。それ



を横合から行つて兎や角云ふのだから、其中には自ら面白くない感情の働くのも無理ぢやない。それは人情であらう。そして又大體から云つて知識階級と云ふものは、淺薄で何も出来ない癖に一人よがりて頭の中に自分の王國を築いて威張りたがるものだ。要するに俺達は思ひ切つて労働者の奴隷になる事が必要だ。そしてそこから築きあげて行かなければ眞實の仕事は出来ないだらう。俺達は本部の役員である必要は毛頭ない。働いてゐる労働者の中に頭を下げて入つて行つて眞實の友達になればそれでいゝのだし又それが何より必要だ。そしてそこから俺達の信ずる眞實の運動を起して行けばいゝ。正直に眞面目に熱心に、それ等の人たちの中に入つて宣傳すれば、決して排斥もされないだらうし、又そこからは屹度新しい芽が生え出すだらう。

現實の世の中は俺達が考へる様に單純に行かないだらう。實際となれば醜い事も澤山ある。正直な眞面目な氣持でやつてもさうばかりはとられない。舊いものには又其立場があつてそれを守らうとする。そこには自ら勢力の争ひが起る。排斥と云ふ事もそこから湧いて来るだらう。

ながら、それでもついで行くところに俺達の眞實の運動があるのぢやあないか。

何時だつたか、お前がやつて来て、涙をこぼしながら俺に訴へた時の事を俺はよく覚えてゐる。その時にお前は云つた。

『おい麻生、俺達は、こんなにまで罵倒され、排斥されても、矢つ張り頭を下げて労働運動をしなきやあならんのか』

俺はその時、お前に對して何とも云ふ事が出来なかつたが、今は判然と云ふ事が出来る。

『さうだ。やらねばならんのだ。そしてそれが正しい事だ』

俺の心は今はずきり俺にさう答へる。

だが、又俺達を排斥する者もあるだらうが、待つてゐる者もあるだらう。そればかりぢやない。今日の労働運動には未だ俺達を必要とする場所が多い。或る者が来るなど云つたからとて、それを直ぐにさうだとして引込むのは決して眞實ぢやない。親切な事では毛頭ない。未だ日本には今こそ労働運動が生れようとしてゐるんぢやな

う。それは仕方のない事だ。自ら時の来るのを待つより仕方がない。時がそれを解決するだらう。俺達は排斥されるならそれも仕方がない。排斥し盡されるまで信ずる事をやつたらいいのだ。

幻滅の悲哀と云ふ事があるが、これは人間の世界を餘り美しく見過ぎるから起る事だ。俺達は出来る限り美しくないければならんが、それかと云つて俺達自身だつて人間だ。矢つ張り醜いものさ。併し醜いからと云つて其運動を放り出すと云ふ事は無意味な事で又弱い事だ。俺達は、その醜さと戦ひながら進んで行かねばならん。それが人間の生活だ。

俺達は排斥されながら、労働者にくつついて行くところによい處があるのぢやないか。持てはやされたらそれは却つて危険で、俺達の悪い缺點を暴露して運動のためによくないかも知れない。知識階級と云ふ者は、それだけでなくともいゝ氣になつて、輕薄な事をやるばかりでなく、直ぐに卑怯な事をやり勝ちだからなあ。サンチカリズムの知識階級排斥と云ふ事には、俺達の注意すべき大きな眞理が含まれてゐるよ。排斥されながら、罵詈雑言

いか。よきにせよ、悪しきにせよ、今日は未だ俺達の働く場所が澤山ある。俺達はうんと働かねばならん時だ。

俺達は無位無冠の人間として、もつと深くそしてまつしぐらに工場の中に入つて行く必要がある。未だ耕されざる處女地が無限にある。民衆は屹度俺達を待つてゐるだらう。

棚橋よ、お前は近頃の新聞を見ないか。労働者は物價の騰貴に堪へ兼ねて、至るところにストライキを起しかけてゐる。巴里の講和會議では、第一回の國際労働會議を此秋に、ワシントンに開く事に決定した。これを機會に組合の萌芽は至る處に現れてゐる。けれ共、政府は國際労働會議の精神を無視して、組合の存在を否定しようとしてゐる。

最近労働者の起ち上らうとする機運が著しく動いて来た。戦ひは至る處に開けようとしてゐる。今度は労働者階級の黎明だ。知識階級の黎明に次で起るべきものは必然に労働者階級の黎明ぢやないか。そしてその黎明が今將に生れやうとしてゐるのだ。

今度の黎明は筆の先の黎明ぢやない。單なる言論の上



の黎明ぢやない。思想の上の黎明ぢやない。労働階級の黎明は、其工場から起るのだ。其鑛山から起るのだ。猛烈な戦闘が開かれるだらう。大きな闘争の渦巻きが日本中をころげ廻るだらう。

棚橋よ、此すさまじい黎明の潮は、必ずや友愛會の空気を一變せしめるだらう。協調の衣は脱ぎ棄てられて、眞に労働者階級の先頭に立つて男々しく戦ふ闘争的な組合となるだらう。さうして俺達は是非さうする事に努めねばならぬのだ。

俺も最早、一切の今迄の仕事は片を附けた。新聞社の方も昨日事情を打明けて辭職した。今はもうお前の歸つて来るのを待つて運動の中に飛込むばかりになつてゐる。一切の準備は出来上つた。たゞ必要なのはお前の歸つて来る事ばかりだ。

今度はお前ばかりに苦勞はかけない。荒い波には俺も一緒にあたるよ。此手紙を見たら直ぐ出て来い。

今夜は佐野もゐない。學生達も皆出て行つた。廣い家の中はがらんとして實に靜かだ。久し振りに廣い室の中に只だ一人居て此手紙を書いてゐる。

昨日新聞社の方もおさらばをしたので、身も心も軽くなつた。氣が清々する。去年の秋お前が檢事を止めた日の事を思ひ出す。

『今辭職して来たところだ』

さう云ひながら根津のあの家にやつて来た時のお前の顔は、實に小氣味のい、痛快な顔をしてゐたぜ。

俺達も學校を出てから、まる二年の上だ。月日が夢の様に過ぎ去つた。色々な事があつた。京都で御互が知合つてからもう何年になるだらう。まさか其當時はこんなにならうとは思はなかつたが、併し又今日の様になるのも極めて自然の成行きだ。

まあ俺達は倒れるまで勇敢に突進して行く事にしよう。倒れたら又手をひき合つて起ちあがつたらそれでいい。道は眞直ぐに開けてゐる。障害や困難は蹴散らして進めばいい。やられたらそれまでの事だ。

ちやあさよなら、一日も早く出て来い。

八年六月廿日

麻生

棚橋 兄

それを讀み終つた時の麻生の顔には、如何にも心地よ

げな微笑が満面に溢れてゐた。彼はそれを丁寧にそろへて疊むと、大きな状態を机の抽出しから取出してそれに入れ、丁寧に表書を書いて仕舞ふと、今度は目方をはかるやうに、ちよつとそれを持つて見て、二枚の三錢切手をはつた。そして明日まで待切れないらしく、其手紙を投函するために外に出て行つた。

頭には、雨や塵芥にまみれて汚くなつた黒の中折帽をかぶり、身には古ぼけて皺くちやになつた脊廣を着、手には粗末なバスケットをぶら下げた、如何にも田舎者臭い恰好をした、棚橋が、突然目白にやつて来たのは其夜から間もなくの事であつた。麻生は棚橋が来たと聞くと、飛ぶ様にして奥から玄關に出て来た。麻生は、相變らず素朴な様子をして、棒の様に突立つてゐる棚橋と顔を見合はせると、

『やあ、よく出て来た』

と、云つた。その聲の中には包み切れぬ悦ばしさと懐しさが溢れてゐた。

『うむ遅くなつた。えらく心配をかけて濟まんかつた』

さう答へた棚橋のぶつきら棒な言葉の中にも、云ひ表はしがたい懐しさが含まれてゐた。

『さあ上れ』

『うむありがたう』

棚橋はさう云ふと、バスケットを縁に置いて靴を脱ぎ始めた。

『随分待つたよ』

『さうだらう。全く濟まんかつたよ。お前も新聞社を止めたつてなあ』

『うむ遂々止めたよ。まあ今度俺もお前の尻にくつついて行くよハ、、、』

『ハ、、、』

棚橋が靴を脱ぎ終ると、二人は肩を並べて奥の方に入つて行つた。

其翌日二人は連立つて友愛會の本部に出掛けて行つた。一人は再び運動の中に生きかへるために、一人は新しくその運動の中に飛び込むために。

二人は道々話して行つた。



『おい、お前が歸つてゐる間に世の中は又大分變つて來たぞ。此秋にはワシントンで國際労働會議が開けるし、ストライキは非常な勢で起りかけてゐる。今度は労働者階級の黎明だ』

『うむ大分動いて來たなあ。兎に角やれるだけやらう。俺も最早歸らないよハ、、、』

『ハ、、、。さう度々歸られちゃ大變だ』

さうして、大正八年の下半期には、二人が話合つてゐた様に、労働者階級の黎明期が嵐の様なすさまじい勢で、日本の社會に擡頭して來たのであつた。

## 「黎明」解説

亡友麻生久君は私が交りを結んだ生涯の友のうちもつとも忘れがたい人である。私の同君との因縁はこの書物の中にも出てゐるが、大正七・八年頃の日本の社會運動のあけぼのの時代に、無垢の心持で一緒に働いた記憶は昨日のやうにあざやかである。

私と同君とは後に日本の革命や運動の方針についてだん／＼一致しがたい立場になつて、私の方が派閥主義者らしくなつていつたのに、麻生君がいつまでもあたたかい友情をもちつゞけてくれ、私の長い牢獄生活のうち同君が時々突然面會所にはられて私を慰めたり、はげましたりしてくれたことなど、今でもうれしくも悲しく思ひ出す。今、日本はどこをむいても悲惨な光景にみち、人々はとげとげしい氣持のなかにあるが、かやうな時に麻生君のやうな、おほらかな、あたくさい、なつかしい人格の人が指導者の中にあるたらどんなによいことだらう。

この「黎明」は小説でなく真正正銘の實録である。書中に出てくる人物はみな實在してゐる。大正七年の夏に米騒動が勃發した。これは日本の社會を暗い封建的反動にとちこめてゐた鐵の扉をうちやぶる第一の出來事であつた。第一次世界大戰とロシア革命後に世界をおほうた革命の波が日本自身からもま



きおこつたのであつた。實際それ以前の日本社會の封建的構成はひどいもので、人民の自由は無をい  
 はさず窒息せしめられてゐた。ひとたび勇しく鐵の扉にぶつかつていつた民衆の運動はストライキ、  
 小作争議、普通選挙要求等々に全くすさまじい勢ひで續發した。この状態にもつとも敏感に立ち上つた  
 のは労働者とインテリであつた。この「黎明」一巻はこの時代の重要な出来事の記録であるばかりでな  
 く、時代の空氣や知識階級の自覺を克明に描寫する。

この書の冒頭にはロシア革命が如何に當年の若い日本インテリ達を興奮させたかが描いてある。つい  
 で大正七年の暮に佐々木蒙古王と自稱する反動男の指導する浪人會といふ右翼團體が、當時民間にデモ  
 クラシー理論を展開してをられた吉野博士に立會演説を要求し、見たところ弱々しい吉野博士を公衆の  
 面前で大いにいぢめつける計畫をしたところ、博士は勇敢に單身その會場の神田小川町の南明クラブに  
 出席した。新聞でそれを知つた群衆がぞくぞく會場に押しよせ、小川町から駿ヶ臺下まで一ぱいになつ  
 て博士を應援した。會場では博士は決死のまなじりをあげて、頭腦粗笨なる浪人共を徹底的にやつつけ  
 た。誰から動員されたのでもなく自然に集つてきた群衆のデモはすごいものであつた。この事件は日本  
 の民主々義運動に重大な意義をもつのであるが、これも本書にくはしく記録されてゐる。それから間も  
 なく黎明會といふ啓蒙的團體が吉野博士と福田博士を中心として成立した。そのことも本書に描かれて  
 る。

しかしかやうな學者グループの運動よりもつと社會史的意義のあるのは帝大新人會の創立であつ

た。この創立に参加した人達は丁度人民の中にゆくといふロシアのインテリゲンツェアのやうな熱情や  
 純情をもち、いままで禁斷の理論であつた社會主義理論を非常な熱情をもつて研究したばかりでなく、  
 たゞちに労働運動と結びついて少くない貢献をした。それは學生の赤松克麿、宮崎龍介、石渡春雄の諸  
 君に、前年の卒業生の麻生久、山名義鶴、棚橋小虎、それに私及び大正五年卒業の黒田禮二君等が参畫  
 して大正七年十二月に出来たのである。同會は昭和三年四月文部省の反動政策によつて解散を命ぜられ  
 るまで、理論的活動ばかりでなく種々の實踐的活動をしたのは人の知る如くである。この書物には新人  
 會初期の生き生きした記録がある。

この書物に出てくる人物をはなしてみよう。第一篇の最初に出てくる岡上守道即ち黒田禮二君はコス  
 モポリタンを以て任ずるニヒリスト的人物で、最初滿鐵東亞經濟調査局にをり後に朝日新聞のベルリン  
 通信員として十年位滞獨し、最後には戦争中によせばよいのに何か軍需會社の重役になつてマニラか何  
 處かにゆく途中潜水艦に船を沈められて死んだ。同君らしい最後であつた。池之端附近の下宿に夜おそ  
 くまで勉強を續けてゐたといふ野坂参三君は、積極的でないが當時純潔な人だつた。麻生君の根津の家  
 に集つてゐた青年の中で山名義鶴君と棚橋小虎君のことはこの本の最後まで出てくるが、山名君のおち  
 ついた性格や棚橋君の素材なまじめな性格は當時から自分の尊敬するところであつた。此二人は麻生君  
 の三高時代からの親友である。

第二篇は吉野博士の立會演説からはじまつてゐるが、その立會演説の會場に入れない場外の群衆に向